

大倉燁子短編集

大倉燁子



目次

| | |
|---------|-----|
| あの顔 | 6 |
| 青い風呂敷包み | 30 |
| 消えた霊媒女 | 61 |
| 機密の魅惑 | 92 |
| 恐怖の幻兵団員 | 129 |
| 黒猫十三 | 159 |
| 鷺娘 | 190 |
| 蛇性の執念 | 215 |
| 情鬼 | 255 |

深夜の客 291

心霊の抱く金塊 321

素晴らしい記念品 328

魂の喘ぎ 332

鉄の処女 354

鳩つかひ 399

美人鷹匠 434

梟の眼 462

魔性の女 488

耳香水 512

むかでの登音 544

| | | |
|-----------|-------|-----|
| 妖影 | | 569 |
| 和製椿姫 | | 592 |
| 最初の印象 | | 612 |
| 蘭郁二郎氏の処女作 | | 616 |
| アンケート | | 618 |
| 今年の抱負 | | 624 |

あ
の
顔

刑事弁護士の尾形博士は法廷から戻ると、久しぶりにゆっくりとした気分になって晩酌の膳にむかった。庭の新緑はいつか青葉になって、月は中空にかかっていた。うっすらと化粧をした夫人が静かに入ってきて来て、葡萄酒の瓶をとりあげ、

「ずいぶん、お疲れになったでしょう？」と上眼使いに夫を見上げながら、ワイン・グラスになみなみと酒を注いだ。

「うむ。だが、——長い間の責任をすましたので、肩の荷を下したように楽々した」
「そうでしょう？ 今日弁論、とても素晴らしかったんですね。私、傍聴したかった。霜山弁護士さんが先刻おいでになって、褒めていらしたわ、あんな熱のこもった弁論を聴くのは全く珍しい事だ、あれじゃたとえ被告が死刑の判決を下されたって、満足して、尾形君に感謝を捧げながら冥土へ行くだろうって、仰しやっていますわ」

「霜山君はお世辞がいいからなアハ……。しかし、少しでも被告の罪が軽くなってくればねえ、僕はそればかり祈っている」

「あなたに救われた被告は今日までに随分おおぜいあるんでしょうねえ。刑事弁護

士なんて云うと恐い人のように世間では思っらしいけれど、ほんとは人を助ける仕事で、仏様のようなものなんですからね」

「その代り金にならないよ。だから、いつでもピイピイさ」と笑った。

「殺人犯だの、強盗だのなんかにはあんまりお金持ちはいないんですものねえ、でも、あなたは金銭にかえがたい喜びがあるから、と、いつも仰しやいますが、減刑になつたなんて聞くと私まで胸がすうつとしますわ。その人のために弁護なさるあなたの身になつたらどんなに愉快だろうと思ひますのよ」と云つているところに、玄閔のベルが臆病らしくチリツと鳴つた、まるで爪か、指先でもちよつと触れたように。「おやッ」と夫人は口の中でつぶやいた。

ふたりは何という事なしに眼を見合せたのだった。すると、こんどはややしつかりしたベルの音がした。

夫人は小首を傾げて、

「普通のお客様のようじゃないわね、きつと何かまた」と、云いながら席を起つて行つたが、間もなく引返して来ると、まるでおびえたような顔をして、

「何んだか、気味が悪いのよ。まるで幽霊のような女の人が、しょんぼりと立っていてね、薄暗い蔭の方へ顔を向けているので、年頃も何もまるで分らないけれど、みなりは逆も立派なの。正面に私の顔も見ないで、先生に折入つてお願いしたい事

がありまして夜中伺いましたって、この御紹介状を差出したんですが、その手がまたぶるぶると震るえて、その声つたらまるで泣いているよう、——」

博士はその紹介状を受取って、封をきり、眼を通していたが、

「不思議な人からの紹介だな」と云って、ぽいと夫人の手へ投げた。

「まあ、ミシエル神父様からの御紹介状ですのねえ、あなた、神父様御存じなの？」
「うむ。僕は若い頃熱心な天主教徒だったんだよ。いまは大なまけだが——、しかし、形式的のつとめこそ怠っているが、心は昔と少しも変わらない信者なんだ。二十何年前僕はミシエル神父様の手で洗礼をさずけて頂いた。しかし、よくまあ神父様は覚えていられたものだなあ」と、博士は愉快そうに起って、自ら玄関に訪問客を迎え、横手の応接室に通した。

「どんな御用件なんでしょうか？」と、ゆったりと煙草に火を点けた。

女は夫人の言葉通りに小刻みに体を震わせながら、暗い隅に腰かけて顔も上げ得ないのだった。三十か、あるいは四五にもなっているかも知れないが、瘦せた青い顔に憂慮と不安のいろが漂い、神経質らしい太い眉を深く寄せている。紹介状には川島浪子とだけ書いてあって、人妻か未亡人か、どういう身分の婦人であるかがまるでわからなかった。夜中、殊に突然飛び込んで来る客には何かしら深い事情のある人が多かったので、彼は心の中で仔細があるなとうなずいた。

ややしばらくしてから、婦人は低い声で、

「お願いがあつて、突然上りまして」と云つて、面を伏せた。

「神父様の御紹介状にはただお名前だけしか書いてありません、委しい事は御当人から直接訊いてくれ、と、ありますが——」

「はい。私はある小さな会社の重役をつとめている者の妻でございます。思いあまつたことがありまして、教会へ告白にまいりましたところ、神父様が、先生にお頼りしてみよと仰しやいましたので、恥を忍んでまいりました」と、割合にはつきりした口調で云つて、はじめて顔を上げ、正面から彼を見た。その顔をじいと感じていた博士は、

「あッ、あなたは——」思わず愕おどろきの叫び声をあげて、

「秋田さん秋田浪子さんじゃありませんか？」

「先生、よく覚えていて下さいました」と、彼女は淋しくほほ笑んだ。

「随分変られましたな、すっかりお見それしてしまつた、川島さんなどと仰しやるもんだから、なおわからなかつたんです」

「でも、私、川島へ再婚したんですの」

「秋田さんなら、何も御紹介状をお持ちになる必要もなかつた」

「だって、もうお忘れになつたらうと思つて、——先生と御交際させて頂いていた

のはもう二十年も音の事ですもの」

「何十年たったって、あなたを忘れるなんて——」そんなことがあって、どうするものかと、つい口の先まで出かかったのをぐつと呑み込んで、

「いくら健忘症の僕でも、あの頃のことだけは忘れませんよ」

「じゃあ、いまでも怒っていらっしやる？ 私結婚したことを——」

博士は烈しく首を振って、

「いいや。決して、——あなたは僕のような貧乏書生と結婚しては幸福になれないからいやだとはつきり云ってくれたから、僕は反って思い切れたんですよ。間もなく浪子さんが金持の後妻になったと聞いた時、その方があなたのためには幸福なんだろうと思って、祝福していた位ですもの、そのかたとは？」

「死別しました。先妻の息子が相続人だったので、私は離婚して川島と再婚しました」

「それで、——あなたは幸福に暮らしていられるんでしょうな」と云ったが、みなりこそ立派だが、見違えるほど面癩れした彼女を見ては幸福な生活をしている者とはどうしたって思われなかった。

彼女は悲しげに少時しよんぼりとうなだれていたが、

「先生は、今朝の新聞を御らんになりましたか？」

と、きつと顔を上げて訊いた。

「見ましたが？」

「あの、——ある青年が、あやまって赤ん坊を殺した記事をお読みになったでしょう？」

博士はうなずいて、

「無意識のうちに殺したという、あの事件ですか？」

「私、その事で先生にお継りに上ったんですの」

「すると、あの青年は？」

「私の従弟ですの」

「なるほど、あなたの旧姓と同じですね、秋田弘とか云いましたね」

「父の弟の息子です。秀才だったのですが、大学を出る一年前に応召して、戦争に行つてからすっかり人間が變つてしまいました。終戦と同時に帰還しましたが、もう大学へかえる気持ちもなく、それかと云つて就職もせず、働く気もないという風で、前途に希望を全く失つてしまい、毎日ただぶらぶらと遊んでその日その日を送っているというようなので、親も段々愛想をつかし、最近では小遣錢にも不自由しておりましてね、度々私のところへ無心を云いに来るようになりました」

「ちよいと待つて下さい」

博士はベルを鳴らして、夫人に今朝の新聞を持って来させ、もう一度その記事に眼を通してから、びっくりしたように、

「殺人はあなたの家で行われたんですか？」

「そうなんです」

「ふうむ」

彼は始めてこの訪問の容易ならぬことを知ったのだった。

「して、その赤ん坊は？」

「私の子なんですの」

「えッ？ あなたのお子さんが殺されたんだと仰しやるんですか？」

「ええ。ですけど、——先生、弘さんは可哀想な青年なんですのよ。私、自分の赤ん坊が殺されたんですけど、弘さんを恨む気にはなれません、それで、——それで実は私、先生にお願いするんです。どうぞ、あのひとを救ってやって下さいませ」と云って、手を合せ、

「あの、先生、弘さんは死刑になるんでございませう？」とおろおろ声で訊くのだった。

「さあ」

「もしも、弘さんが死刑にでもなるようでしたら、——私は生きていられませんの。」

あんまり可哀想で、——どうぞ、お願いです、助けてやって——」

と、婦人は縫りつかないばかりに嘆願するのだった。

「と、いつて、僕がどうしようもないじゃありませんか。犯行がこうはつきりしていて、あなたの家を訪問し、あなたの赤ん坊を殺した、それをあなたは目撃していたが、どうにもとめようがなかった、というのでしょう?」

「新聞に書いてあるのはそれだけです、が、それにはいろいろとわけがありました——」

「そのわけというのをすっかり話してみして下さい。その上で、僕の力に及ぶことなら何んとでもして上げますから」

「ほんとお願ひします。恐らく私が先生にお願ひすることの、これが最初で最後だろうと思います。先生、私の涙の願ひ、きいて下さいね」と云つて、婦人はむせび泣くのだつた。

「よろしい。その代り何もかもあるのままを云つて下さい。少しでもかくしたりしてはいけませんよ。嘘が交じると困ることになりますからね」

「決して、誓つて嘘は申しません、かくしだてもいたしません、すっかり洗いざらいお話しいたしてまいりますわ」

2

浪子は興奮した心を鎮めるように、胸に手を当てて、瞑目やや久しゆうしてから、静かに口をきった。

「何から申上げていいかわかりませんが、まず私共の家庭の状態を一通り聞いて頂きます。川島は先刻も云ったように会社の重役で、極く派手好きで道楽者なのでございませぬ。親譲りの財産があるところから会社の株を買い、そのおかげで重役の椅子についているのですが、手腕があるというわけではありません。金使いは至って綺麗な方ですから、私は金銭の苦勞をしたことはありませんが、人間の幸福は決して金のあるなしではない、という事をしみじみ感じたのは再婚した翌年だったのでございませぬ」

博士は微笑して、

「金持ちを撰んだあなただっただじやありませんか？」

「若かったんですわ。考えが浅かったんです。夫は道楽者で、私と結婚する前から一人の女がありました、その女はカフェのマダムだったんだそうですが、夫は会社

の近くに家を持たせ、会社への往復には必ず立ちよるといふ風で、その事を知らなかったのは私ばかり、会社の人達をはじめ誰一人知らない者はありませんでした。みんなは私よりもその妾の方へおべつかをつかい、奥様々と云っていました」

「とかくそんなものですよ。金持ちというものは、——実際には正妻より妾の方が勢力があるものと定っていますからね」

「私はまるで床の間の置物で、世間へ体裁をつくるための妻だったのです。私は面白くない月日を送るようになりました。恰度昨年は今頃ですわ、ふとした機会から妾が妊娠したことを聞き込みました」

「あなたのお子さんは？」

「私には子どもはありません。妾に妊娠までされてはもう私は手も足も出ない、どうしたものか、一層身を退いて夫と別れようかとも思いましたが、考えてみるとそれは妾に負けたことになり、損をするのは私ばかり、私がいなくなれば、もっけの幸いと家へ乗り込み正妻になおるのは火を見るより明らかです。厭でもここは頑張らなくつちや、妾なんか家へ入れてたまるものか、と私は思い返しましたのです

——

「それが当然ですよ」

「やはり夫の愛が私から去っているのを感じないわけにはゆきません。彼の外泊は

近頃ではあたりまえの事のようになつてしまいました。夫は最初私に妾のある事をひしがくしにしていたものです、私が利口者か、世間を知っている者かだったら、ひしがくしにしているのをほじくりもしなかつたでしょうし、素知らぬ顔で見えて見ぬふりもしていたでしょうが、私は嫉妬にかられて何の考えもなく、何もかも知っているぞ、と、云つて、夫が閉口しているのを見て痛快がつていたものです」

「一時は胸がせいせいして愉快だつたでしょうが、結果はよくなかつたでしょう？」
「悪るかつたことを後に知りました。濡れぬうちこそ露をもいとえで、男は知れたとなると開き直る者だということを私は知りませんでした。夫はもう平気で私の前で妾ののろけも云うし、私と比較して妾の事を褒めたりするので、私はひどく侮辱されたような気がして、その度に夫と喧嘩をし、口論の絶え間がなかつたんです。そのうちに玉のような女の子が生れたとききました。気に入っている女に出来た自分の子です、彼はもう殆ど家へは帰らず、妾の処に入り浸つてしまいました」
「川島さんもそれではあまりにあなたを踏みつけにした仕方です。一家の主婦としての立場も考えて上げなければ、それでは召使などの手前あなたの面目が立ちませんなあ」と博士は同情に堪えないという風だつた、見違えるほど瘦れてしまつたといい、憂いに沈む眼差しといい、苦境に喘いでいるのがありありと見えて、彼は痛ましく思つたのだつた。

「赤ン坊が生れてから間もなくの事でしたが私に取っては偶然に湧いた幸運、夫にとっては悲運とでも申しましようか、妾に若い男があるという噂がたったのです。夫が詰問したところ事実であることがわかり、それが原因でふたりの仲が気拙くなり、夫の熱もだんだん冷めてゆくように見えました。ある日夫は云い辛そうに、赤ン坊を引き取ってくれるならば妾と手を切ると申しました。この機会を逃がしては、私は早速承知いたしました。すると、妾はただ引取ってもらうだけでは困る、入籍して相続人にしてほしいと申出たのです」

「なかなかのしつかり者ですね。勿論それもあなたは承知されたのでしよう？」

「はい。そして妾と手を切らせました。どうせ道楽者の事ですから、妻一人を守るといふわけにはまいりませんが、私としてはその妾と別れてくれるということが嬉しかったんです。妾の方は手切金をたんまり貰えば、という位のところだったんでしようが、夫の方はとても未練があつたのです。しかし、二度と夫に会わないといふことと、赤ン坊に会わないという条件で話が纏まりました。吉日を撰んで赤ン坊を私が引き取りにまいつたのです」

「その赤ン坊ですね？ 殺されたのは？」

「そうです。私の子ではありませんが、十ヶ月も育てたのですから、実子と変りはありません、とても可愛かつたのですよ」

「御主人の方は？」

「眼の中へ入れても痛くないというほどの可愛がり方なのです。愛子と名づけまして、夫は愛子のあるために女道楽も大分下火になりましたので、私も安心して、いい事をしたと喜んでおりましたが、夫は別れた妻がよほど気に入っていたものと見えて、何とかしてよしが戻したいらしかったのです。実は妾の心をいつまでも惹きつけておく手段に愛子を手許に引き取ったのだという事が、私にも段々わかるようになりました。会わない約束の妾とも時々内緒で会っているらしい様子もあります」

「それじゃまんまとあなたは一杯喰った、欺されたようなものではありませんか」

「うまく相続人の地位にまで据えたりして、と、思うと腸が煮えくりかえるほど腹が立ちました。赤ん坊一人育てるといふことは、先生、容易ならぬ苦勞でございます。その苦勞を私一人に背負わせて、——ほんとに口惜しくなります」

「そして将来妾が公然と現われて来たとしても、自分の生んだ子が相続人になっているんですから強いですよ」

「ほんとに私はつまらない立ちばになってしまったのです。私は快々として楽しんでぬ日を送るようになりました。それに同情してくれたのが従弟の弘さんなのでございます」と云って、溜め息を吐き、

「弘さんの事を少し申上げなければなりません、新聞にもあります通り精神異常者

なのでしよう。幼さい時から頭もよく学校の成績もよくつて利口者だったので、両親に非常に可愛がられ氣儘に育ちましたが、ひどい疝癪かんしゃくも持ちで、自分の思うことが通らないと氣狂いのように暴れ狂うという癖がありましたの」

「我儘なんですね」

「弘さんが怒ったとなると、みんな逃げ出したものです。怒るとまるで人が変わったようになり、眼を釣り上げ、顔は蒼白というよりはむしろはくぼくでも塗ったように白っちゃけてしまうのです。烈しい一時の発作のようなもので、発作中にやったことは後で何を訊いてみても覚えていません。ある時のこと弘さんがひどく怒りまして、庭に遊んでいた鶏の首をひねって殺したんですが、意識を取り戻してから鶏の死んでいるのを見て、誰が殺したんだと云って大変悲しがりました、犬の子を絞め殺したこともありました。一時の発作ですから、氣が鎮まるとけろりとして、平常と少しも違わぬ優しい弘さんになるんですの」

「恥しいから、記憶がないように云っているではありませんか？」

「いいえ、発作中の事は全く知らないらしゅうございます。二重人格とも違いますし、ジキルとハイドのようなものとも違います。余り変なので私の懇意な精神科の医者にもその話をしましたら、それは意識喪失症状で、精神病の一種なのだと言われました。そう申せば弘さんの母方の親類には発狂して座敷牢で死んだ婦人もあります

し、彼の母親もひどいヒステリーで、いく度も自殺しかけたことがありました」

「精神病の血統なんですか」

「弘さんは戦争に行つてからは一層気が荒くなり、発作を起す数も多くなりました。将来に希望もなく、何も信じる事の出来なくなつた弘さんが、毎日遊び暮らしているのですから忽ちお金に窮してしまい、私へ無心を云いに来るようになりました。私は自分の愚痴を聞いてもらえりし、同情してもくれるので、主人には内緒で小遣を与えておりました。が、段々無心が烈しくなり、額も多くなるので私も少し困り始めました」

「働けるのに働かない、という人が一番困りますよ」

「主人に云えばなまけ者に小遣なんかやるナと申されます。私が与えなければどこからお金の出どころがないのを知っていますから仕方なく、お金の代りに衣類を渡して、これ売りなさい、と申すような事も度々ありました。弘さんはその度に浪子姉さんにすまない、と云つて、眼に涙を浮べるのです。心はほんとにやさしい人なのですが、何かひどいショックを受けたり、激怒したりすると発作を起してしまふのです。何という可哀な情けない病氣を持つているのでしょうか、これだけお話ししたら、弘さんの性格もほぼ御想像がつくことと存じます」

3

彼女は言葉を続けて、

「愛子は日一日と可愛くなります。夫は家へ帰るのは赤ん坊を見るためで、愛子をあやしたり、抱いたりしています。愛子を中心としての話ばかりで、赤ん坊を離しては私達の夫婦関係というものは全く水のような冷めたものになってしまうのです。それもまた私にとつては淋しい、つまらないものだったのです」

「しかし、赤ん坊がいるからまだいいのですよ」

「そうかも知れませんが、ある日、夫は縁側に出て愛子をあやしていましたが、突然ぎゅっと抱きしめ、頬ずりしながら、妾の名をよんだのです。私はハツとして、眼がくらくらとしました。ああ、夫は赤ん坊を通して彼女を愛撫している、と思うとむらむらとして、いきなり愛子を引つたくつてしまいました。夫は不機嫌な顔をしてむうつと黙り込んでいました」¹

¹ 「いました」は底本では「いました。」

「あまりが悪かったんでしようよ」

「私はそういう雰囲気にいるのが辛く、何とかして夫の心を和げようと思い、この子のおかげで毎日が楽しい、子どものない夫婦なんてつまらないでしょうねえ、と申すと、ふふん、子どものない妻なんか他人と同じだ、と、ぶつんと云って外へ出てしまいました。私はその言葉が頭にこびりついて離れませんでした。何年連れ添っても子どものない私は彼から見たら他人なのだ、そこへゆくと妾の方は別れても他人ではないのだろう、と口惜しくって、胸が燃えるようでした」²

「男という者は勝手な事を云いますからね」

「それに愛子の顔が妾にそっくりで、眼つきだの、笑う口許だの、実に生き写しなのです。あの憎い妾に似ていると思うと、可愛さよりも憎らしくなるものですからね。愛くるしい眼をじいツと見詰めていると、いつかそれが赤ん坊でなくほんもの妾の顔に見えたりして、この眼で夫を惑わせたか、蕾のような赤い唇を見ると、夫の心を吸い寄せた憎い唇——と、思わず口尻を捻り上げて泣かせたりしました」と云って、彼女は虚のような声で笑った。

博士はいかにも興味深くその話に聞き入っていたが、

「愛子さんをいじめたりしては、なお御主人との間が拙くなるじゃありませんか」

² 「ようでした」は底本では「ようでした。」

「でもあんまりよく似ているんで、憎らしくなってしまうすわ。そして、恰度昨日の事なんですが」と云いかけて、身震るいしながら「夫と愛子の事で喧嘩したあとで、私はまだ興奮からさめきらず、むしゃくしゃ腹を立てているところへ弘さんがやって来たんです。また無心だな、この男も私に同情するような顔をして痛めつけに来るんだ、と癪にさわり——」

「無理もないな」

「で、私は突つかかるような調子で、またお金を貰いに来たの？ と云うと、弘さんは恥しそうに顔をぱつと赤くしました。今日は駄目よ。そういつもいつも柳の下に泥鰯はいないわよ、ちつと河岸を変えたらどう？ ときめつけてやりました」

博士は口許にちよつと笑いを浮べた。

「弘さんは何か口の中でぶつぶつ云っていました、丁寧に頭を下げて、すみませんが、今日は退つぴきならない事で金が要るのです。その金がないと僕は詐欺になるんです、どうぞもう一度だけ助けて下さい。拝みます。としおれ返つて頼むのです。私は威丈高になつて、何の真似？ 拝んだりして乞食みたいだわ。あんたが詐欺になろうと烏になろうと私の知つた事つちやない。同情してやればつけ上つて、来る度にお金々々なんだから、ほんとにいやんなつちまう。帰つて頂戴よ。と呶鳴りつけてやりました」

「驚いたでしょう？ あなたの権幕に——」

「弘さんはベそを搔くような顔をして部屋を出ました。襖を閉めるか閉めないに、私はまた声を張り上げて、お金が出ないと分つたらもう来まいよ、あの乞食は、——と、悪口を浴びせて、やつと、溜飲を下げたものです。すると、ガタンと何か襖に打つかる音がしました。振り向いて見ると、襖を蹴倒した弘さんが仁王立ちになって私を見下している、両の拳を握りしめ、歯をきりきりと鳴らし、眼を釣り上げているんです。発作だ！ これから暴れ始めるんだな、狂った牡牛のように、——と、思うとぞつと頭から水をかけられたように総毛立ちました」その有様をまのあたりに見るように震るえて、

「弘さんの顔はまるでお面を被ぶつたように無表情になっているのを見ると、思わず私は愛子を抱いて身を退きました。同時に自分の云い過ぎを後悔したのです。弘さん、私が悪るかった、堪忍して頂戴、お金を上げるから、と云いました、が、金という言葉が一層彼の憤りの火に油をそそいだ結果になりました。金が欲しさに戻つたと思うのか、と云うや、いきなりそこにあつた人形を叩きつけ、力を込めて手足をばらばらに引きちぎりました。その凄まじい権幕に私は夢中で庭へ飛び降りて逃げ出しました」

「愛子さんをどうしました」

「残して来た事に気がついて、引返したのです、が、ああ、先生、その時の私の驚きと恐怖はとても御想像がつかずまい。私は縁側に両手を突いたまま、釘づけになったように身動きも出来なかったのです。弘さんは赤ン坊の首を両手でしめつけていたんです、それから人形と同じように手足をちぎろうとしているのを見て、私は狂気のように彼に武者振りつき愛子を奪い近しましたが、その時はもう赤ン坊はぐったりとなつて、死んでいました。その物音に駆け込んで来た女中は直ぐに派出所へ走つたのです。そして、先生、弘さんは殺人犯としてその場からひかれて行つたのです」

博士はたまりかねたように、

「浪子さん、よくわかりました。が、どうぞほんとの話をして下さい」と云つた。

「え？ 何を仰しやるの？ 先生、これが嘘偽わりのないほんとの話なんですわ」

「あなたは何故抱いていた赤ン坊を残して、一人で庭へ逃げたんです？」

「？」

「正直な話を聞かないと、助けたいと思つても助けられなくなる場合が沢山あるんです」

浪子は黙つて、うつむいた。

「引返して来て、あなたは赤ン坊を奪つたと仰しやる。そんな馬鹿なことはあり得

ませんよ。あなたは弘さんの狂暴になるのを承知している、故意に赤ン坊を残して逃げたと云われても文句ありませんね」

「飛んでもない。私はあんまり恐しかったので、気が転倒してしまつて——」

「僕から云わせると、あなたは赤ン坊の顔が妾にそっくりで、それを見ていると憎くなるよ仰しやつた、その時已にあなたは手こそ下さないが、心には充分殺意を生じていたのだ、と、私は見ているんです」

「ああ恐しい、そんなこと、——先生、もう何も仰しやらないで下さい。私はそんな悪い女じゃありません」

「なら何故ほんとの話をなさらないんです。せめて僕にだけ、——僕を信用して僕にだけ真実を語つて下さるならば、僕は誓つてそれを漏らしもしないし、永久の秘密として葬ると同時に、弘さんのために極力尽力もしましょうし、また、あなたをも救つて上げます。あなたをも、但し、——あなたが強情を張つて、飽くまで自分に都合のよいような創作話をされるならば、この弁護はお断りいたすほかありません」ときつぱりと云つた。

浪子は憤然としていたが、やがて、彼の足許にひれ伏すように両手をついて、

「すみません。先生まで欺こうとした私は何というお馬鹿さんでしょう。先生、私は神父様へは真実の告白をしました。赤ン坊を殺したのは私です。にっこりと笑つ

たあの顔、——あああの顔が、こんな罪をつくってしまったのです。あまりにも妾に似ていたので憎悪の念がむらむらと湧き、その羽二重のような柔かい頸に手が触れると、あとはもう何もわからなくなってしまうました。気がついた時、赤ん坊は死んでいたのです、そこへ弘さんがやって来たので私は愛子を戸棚にかくしました。極度に興奮していたのと、弘さんに見られなかったかという不安とで、私は気狂いのようになり、無茶苦茶に悪口を彼に浴びせかけたのです。すると果して彼は怒り、意識喪失になったので、これ幸いと赤ん坊を弘さんの傍へ置いて、彼が夢中の裡にしめ殺したものとしましたのです。ところが、警官に連行される時、弘さんが私の耳にささやいたのです。僕は浪子姉さんの境遇に心から同情してるんだ、姉さんがあんまり可哀想だから罪は僕が背負って行く、僕の好意を無にしてはいけませんよ。僕は最初から廊下で、すっかり見ていた。今日だけは僕は正気だった、意識喪失症状なんか起しちやいなかった、あれは僕の芝居です。浪子姉さん、どうぞ幸福に暮らして下さい。と申したのです。私の罪をきて裁かれる彼の事を思いますと、私は一層自首しようかとも考えますが、それでは弘さんの心に反く事にもなりますし、あ、どうしたらよろしいのでございましょう」浪子は身をもだえて泣き伏した。

「約束通り、僕はいまの話は聞き流して永久に忘れてしまいますよ。ね？　そして、極力弘さんを救う事に努力しましょう。意識喪失者は精神病患者ですからね。なあ

に、気狂いは何をするか知れませんかよアハ……」

青い風呂敷包み

ゴリラ

江川初子がカフェー・ドラゴンからアパートへ帰ったのはかれこれ朝の五時頃であつた。

彼女はハンド・バッグから室へやの合鍵を出し、扉ドアを開けると、冷めたい朝風がサツと顔を撫でた、オヤと思つて見ると往来に面した窓あけはなが開放あけはなになつてゐる。

たしかに閉めて出た積りだつたのに——、と思ひながら、室内を見廻したが別に變つたこともない。

初子は窓を閉め、ついでにブラインドを降し、これからぐっすりひと寝入りしよう、戸棚に手をかけたがなかなか開かない、何か支つかえてでもいるのだろうか？ と、ぐツと力を入れて引いた拍子に、どしん！ 重そうな音がして、大きな荷物が、赤い夜具と一緒に転ころがり出た。

彼女はハツと身を退ひいた。見るとそれは唐草模様を染め出した青い大きな風呂敷づつみであつた。誰がこんなものを戸棚の中に入れたのだろうか？ 何が入つてゐるのか知らず？ 初子は好奇心の眼を輝やかせて、風呂敷の上からソツと触つてみたが分らない、蒲団にしては少し手ざわりが堅い、破れ目から中を覗いてみようと、右

眼を押し当てるや、

「キヤツ！」と魂消るたまげような悲鳴を揚げ、廊下へ飛び出して、バタバタと馳け出したかと思うと氣を失つて倒れた。

そのただならぬ物音に方々のドアが一時に開き、寝巻姿の男女がドヤドヤと出て来て彼女のぐるりを取り巻いた。

管理人が馳け付けた時には初子はもう正氣に返っていたが、怖しそうに自分の室の方を指差したまま、唇をワナワナと震わせ、容易に物が言えなかつた。

「どうしたんです？」と、管理人は初子へというよりはむしろ周囲の人々に説明を求めると言つた。

そこへ仲好しのダンサーが、芥子粒けしつぶのように小さい丸薬を掌に載せ、片手にコップを持って来て、

「初ちゃん、しっかりおしよ。さア、この六神丸しんがんを呑んで、——氣を鎮めて、——どんな事があつたんだか、みんなに話して頂戴」と言つて、コップを唇にあてがつてやった。

初子はゴクリと咽喉のどを鳴らして、水を飲んだ。

「ちつたア、はつきりした？」

彼女は黙つて首肯うなずいた。しばらくすると大きな溜息つを吐いて、

「ああ、怖かった！」と吐き出すように呟いた。

「どうしたのさ、何がそんなに怖かったのよ」

初子はダンサーの手に掴まって、ふらふらと起ち上りながら、皺しわられた声で言った。

「あおう、——風呂敷の中に変なものが入っているんですよ。早く、開けて見て下さい」

管理人を先に立てて一同は彼女の部屋へ入った。なるほど青い風呂敷づつみは室の真中に放り出されてある。

「江川さんの荷物じゃないんですか？」

初子は烈しく首を振って、

「私のなもんですか。——私のいない留守の間に、誰かが戸棚しまの中に納しまったんですよ、早く——、どなたか、ちよいと、中を覗いてもらなさい」

言われるままに管理人が真先に破れ目に眼を当てたが、

「アッ！」と仰天し、

「人間が——、人間が入ってる。ヤッ、これや大変だ！」

その声に若い女連は逃げ出した。怖いもの見度さで居残ったものは交る交る風呂敷の中を覗いては顔色を変えた。

「頭はあるが、——顔が見えないな」

「男か、女か、——断髪だ」

「ウム、素敵な美人らしいぞ！」

「開けて見ようじゃないか」

荷物を囲んでガヤガヤ騒いでいるところへ、二十七八の青年が入って来て、一同を制し、

「駄目だ、駄目だ、触っちゃいけない。警官が来るまで、手をつけちゃいけないだから——」と云った。見るとそれは止宿人の一人で、私立探偵として評判のいい山本桂一という初子のパトロンであった。彼は旅行先から今帰ったばかり、玄関を上るとこの騒ぎだ。

「誰か早く、——交番へ行つて、訴えて来てくれませんか」

パジャマを着た一人の学生は、交番へ宙を飛んだ。

急報に接して、警視庁からは係長が若手の敏腕家杉村刑事を伴って馳せ付け、そこにいた山本桂一に事の顛末を聞いてから、杉村を顧みて、

「君、風呂敷を開けてくれ給え」と云った。

青い風呂敷づつみは四隅をまとめ、それを一本の強い麻縄で嚴重に括つてあつた。

杉村は最初ナイフでその縄を断ろうとしたが、何を思ったのかそれを止めて、丹念

に結び目を調べながら、十分間もかかって漸と解いた。中からは血だらけの男が現われた。手足を縮め、俯伏せに丸くなっている、体をひき起してみると、短刀が、グザと胸に突き刺してあった。折り曲げた左手に桃色のリボンをしつかりと握り、それをまるで抱きしめてでもいるように胸に押し当てている、リボンは一尺余りの繻子地であった。

杉村は頭を、山本は足を、二人で持ち上げ死体を赤い友禅の蒲団の上に横えた。それはいかにも醜い顔の二十五六の男であった。

「アツ！ ゴリラ——」

小さい叫び声と共に初子はよろよろと倒れかかり、管理人の腕に獅噛みついた。人々の眼は彼女に集った。

「この男、君、知ってるの？」と管理人が訊いた。初子は真青になり、恐しそうに面を反向けながら、震え声で答えた。

「知ってますとも、この男は——、ゴリラのニックネームで通っているツバメ・タクシーの運転手で、吉川さんツて人ですわ」

ツバメ・タクシーの主人は直ちに召喚された、彼は一目見ると確かに吉川であると承認した。

致命傷は無論心臓を刺したこのひと突きであり、死後数時間を経過したものであ

ると警察医は言った。

死体は解剖に付すことになり、初子は容疑者としてその場から本庁へ連行された。その後姿を見送っている山本の顔には不安のいろがあった、彼は、飽くまでも事件を調査し、彼女の嫌疑を晴らさなくてはならない、と、心に誓ったのだった。

女優江川百合子

初子は厳しい訊問を受けたが、吉川運転手殺害については何等の関係もないと云い張った。彼女は興奮して、

「そんなに疑^{うたぐ}るんなら山本さんに訊いて下さい。あの方はほんとの私という人間を知っています、私はそんな悪いことの出来るような大胆な女ではありません」と口惜しそうに云った。杉村は少し言葉を和げた。

「どうして、吉川を知っているんだ？」

彼女はちよつと躊躇した後、

「妹がほんのちよいとの間、あの人と同棲していたことがあるんです。それも無理

やりに——、強制的に同棲させられたんですが——」

「ご亭主だツたのか？」

「おお、いやだ、ご亭主じゃありません」

「君の妹は何しているんだ？ やはり、女給さんかね？」

初子は少し得意らしく言った。

「女優ですわ」

「女優？ 何んて名だ？」

「江川百合子」

それを聞いてから、杉村は始めて彼女の顔をよく見た。なるほどどこか江川百合子に似ている、妹も美しいが、カフエー・ドラゴンのナンバー・ワンだけあって、姉の初子も非常な美人だ。

「吉川と百合子とはどこで知合ったんだ？」

「私と一緒に横浜で女給をしていた時です。吉川さんは妹を大変鼻^{ひいき}尻にしてくれました。その頃、あの人はまだ学生さんでしたが、いろんな嘘を吐いてはお父さんからお金をせびり取り、そのお金を湯水のように使つて妹の歡心を買っていました。が、^{とうとう}遂々それがお父さんに知れ、学資を断れてしまいました。吉川さんはすっかり悲觀^{しほやく}して、少時姿を見せませんでした。が、^{やが}臆て学校も止めてしまい、運転手になつたと

云つて、また来はじめました」

「すると二人は恋仲だったんだな」

「ご冗談でしょう。まさか——、あんな醜男ひと、妹が好くわけないじゃありませんか」
「しかし、同棲までしていたんだからね」

「それや抛よんどころない事情があったから——、ほんの申訳ばかりに、一緒の家で暮らしていたというだけのことですわ」

「どういう事情？」

「百合子は相当容色きりように自信があつたもんですから、女優になりたい、と、口癖のように言つていたんですよ。すると吉川さんがそれを聞いて、いくら美人でも、立派な人の紹介がなくなつては女優にはなれない、仮りになれたところで一生下積みで、スターなんかにはなれっこないんだ。そこへゆくと紹介人のいい人はどんどん出世する、幸い自分の伯父さんに映画会社の重役があるから、頼んでやろう、と云うんです。その代り、女優にしてやったら僕と結婚するんだよ、と冗談のように云つたんです。女優になりたい、という事しか考えていない妹は深い考えもなく、うかうかと約束してしまいました。ですが——、私の口から云うと可笑おかしいけれど、百合子はほんとに美しい顔をしていますし、姿もいいから、吉川さんに頼まなくなつたつて、充分採用される価値はあると思うんですわ。それなのに、吉川さんツたら、僕

が女優にしてやったんだ、と恩に被せて、遂々無理やりに約束を履行させちゃったんですの。妹はもともとあの人を嫌っていたので、ほんの二三日で逃げ出しちゃって、隠れていました。

ところが最近いいパトロンが出来たんですの、それをまあどうして嗅ぎつけたか、吉川さんが知って憤慨し、血眼になって探し廻っているんです。それだけならまだいいけれど、そのパトロンの処へ手紙を出して、百合子は吉川という立派な夫があるんだ、などと脅迫めいたことを言っちゃったんですって」

「パトロンは百合子にご亭主のあることを知らなかったのか？」

「無論知りませんでしたわ。一生懸命に隠していたんですもの——、だって、あんないいパトロンを逃がしちゃ詰りませんから、第一家柄は立派だし、金離れはいいし、またとない結構な人なんです。——それや、世間では不良なんて悪口いう人もありますわ。——百合子に夢中になっていて、親類中の反対を押しきって、正式に結婚しようとして話が進んでいるところへ、そんな打ちこわしの手紙なんか出されたくれ、と、パトロンは頻りに妹を責めるので、已むなく吉川さんとの関係を白状してしまっただけですわ。」

半信半疑のうちはよかったが、事実であると分つてみるとやはり気持ちが悪くな

いのでしよう。さっぱりした人だったのに、急に気難しくなり、大変に疑りっぽく
なつて、百合子が外出から帰れば吉川に逢いに行つたんだらうと誤解するし、お客
が来たと言えば、吉川か、という風に邪推を廻しては怒るんです。それで今、二人
の間もごたごたしていますの、吉川さんは吉川さんで、パトロンの出来たのを怒つ
て、昨夜も私のところへ文句をつけに来ました」

と云つて、ハツとしたように口を噤ぐんだ。杉村はそれを聞き逃がさず、畳かけ
るように詰問した。

「君のところへ？ 昨夜？ 何時頃だ？」

初子はうっかり口を辻へらせて余計な事を饒舌しゃべつてしまったと後悔したが、仕方
なく、

「十時頃だつたと思います。百合ちゃんとの仲を割いたのは初ちゃんお前だねつて、
恨めしそうな顔をするんですよ。それでなくつてさえあの人の顔、気味が悪いの
に——、私、ゾツとして、お店の方へ逃げて行きました。そしたら、吉川さんプ
ン憤つて帰つたそうですのよ」

「それから吉川がまた引返して来たんだらう？」

「否いいえ、それっきりお店へは来ませんでした」

「じゃ、アパートへやつて来たのか？」

「いいえ、そんなことはありません。私は昨夜お店にいて夜を明かし、今朝アパートへ帰って来たんですから——」

杉村は少時考えていたが、

「パトロンの名は？」と訊いた。

「川口譲ゆずるさん」

「川口譲？ ウム、あの有名な川口博士の息子か」

「ええ、そうですね。お父さんは昨年お亡くなりになりましたが、大変なお金持ちで、譲さんはその一人息子ですわ。商船学校を今年卒業し、就職口もきまりかけているんですの。柔道四段の強い人のようでもなく可愛い顔をしていて、とてもモダンですわ。スマートな服装なりで、立派な家用を自分で運転して時々ドラゴンへ来るんです。女給さん達は皆大騒ぎします、百合子を羨しがらない人はありません。その幸福も吉川さんのためにめちやめちやにされてしまうのかと思うと、百合子が可哀想でなりません。あんな人に付き纏われちやあお終いですからね、とても執念深くって——」

そこへ一人の刑事が入って来て、

「江川百合子は昨夕姉のところへ行くと云って出たがり、まだ帰って来ないそうです。心当りの処をきいて、探してみましたが、どこにもいないんです」と云った。

杉村は川口讓を召喚した、が、彼は意外にも病気で、築地のある病院へ入院しているので出頭出来かねるといふ答へであつた。

病院へ問い合せると、急性盲腸炎で今朝手術したばかりだから面会謝絶だという、彼は病院にいて、しかも絶対安静を必要とする病氣であるとすれば、この事件に係あるものとは考えられない、と杉村は思つた。

棄てられた死美人

初子の訊問を終つたところへ、彼はまた一つの訴えを聞いた。

丸ノ内のある大きなビルディングの北側に、乗り棄てられた一台の自動車があつた。そこには某銀行の出入口がある。掃除をしていた小使の一人が何気なく車内を覗いて見ると愕おどろいた。シートの上に青い顔をして仰向けに倒れている女がある、細い頸には純白のマフラを巻き着けられ、赤い絹糸のような一筋の血が唇から流れ出して、ゴムマットやシートを赤く染めている、彼は慌てて交番へ馳け込んで訴えた。取り調べの結果、死んでいるのは近頃売出しの映画女優江川百合子であることが

判明した。何者かが死体をここまで運んで来て、自動車ごと棄て去つたものと思われるが、運転手の姿が見えないところから、あるいは彼等の仕業ではないかと疑われた。間もなく自動車番号によつて所有者ツバメ・タクシーの主人が召喚された、その車は昨夕交代時間に吉川が運転してガレージを出たものであると彼は云つた。

一日に二つの殺人事件が続発したのに捜査課では狼狽し、全機関を総動員して犯人逮捕に努力したが、初子以外には一人の容疑者も挙らなかつた。

杉村はいらいらしながら本庁へ歸つて来ると、山本桂一が彼を待つていて、
「今、カフェー・ドラゴンの美佐子という女給に会つたら、昨夜十時頃、吉川がドラゴンの前から百合子と一緒に自動車に乗つて、どこへ行くのを見たと言うんですが、二人とも死んでしまつてゐるから分らないけれど——、まさか、初子が二人を殺したとは思われませんか、杉村さんは疑つていられるようですが——」

「犯人が挙らないうちは、僕は誰れにでも疑いの眼を向けているよ」

「美佐子は何か知つてゐるらしいんですが、僕には遠慮して話しません、なまじ 愁い隠しだ

てされるとやり難いんですが——、それはきつと初子に取つて不利な事なんでしよう、しかし、僕の主義として徹底的に調べたいんです。少しでも不審の点があればたとえ妻であつても容赦しません、が、僕はまだ初子を信じていますから——」
「美佐子の証言から、彼女の犯行だと決定しても？」

「必ず真犯人を挙げて、その証言を覆えして見せます」

杉村は微笑して、

「じゃ美佐子を召喚して、直ぐ調べよう」

「そう仰しやるだろうと思つて伴れて来ました。階下に待たせてありますから、喚んで来ます」

間もなく山本は美佐子を伴れて来た、二十一二位の、おとなしそうに見える女だった、彼は彼女を残して室を退いた。

「君は、昨夜ずっと初子と一緒にいたのか？」

と杉村が訊いた。

「ええ、いましたわ、暁方まで——」

「吉川と初子とは、——どんな関係だったんだ？」

「ゴリラとは別に何もなかったんでしよう」

「じゃ、川口とは？」

「川口さんは最初、姉の初子さんに夢中だったんですの。あの方利口者だから好い加減に待遇あしちつて搾しぼつていたんですが、私立探偵の山本さんツていうパトロンがある事が分つたもんだから、川口さん怒つて、欺されたつて一時大騒ぎをやってましたが、そのうちにどういふ風になつたんだか、妹の百合ちゃんと仲好くなつたんです。

無論初子さんが紹介したんですがね、百合ちゃんは姉さんのように手腕はないけれど、温和おとなしいものだから、川口さんすっかり気に入っちゃって、初子さんの事は断念あきらめたんですの。ところが、最近、百合ちゃんに吉川さんツて旦那様のあることが川口さんに知れ、またごたごたしているんです」

「川口は百合子を責めるそうだが、紹介者の初子には何にも言わないのかね？」

「言わないどころか、大変ですわ。この間もお店へ来て酔っぱらい、初子をのしちまうんだって暴れたんですよ。彼女あれは毒婦だ、悪党だって——」

「初子はどうしていた？」

「かくれていましたわ。初子さん、なかなか腕が凄いですからね、また直きにうまく丸めツちまうでしょう」

「吉川も怒っているって云うじゃないか？」

「ええ、逆とも怒っていますわ。昨夜も大喧嘩をして——」

「何？ 大喧嘩をした？ どこで？」

「お店ですわ」

「君はその場に居たのか？」と杉村は乗り出して、

「始めツから委しく話せ、どうして喧嘩になったのか、よく考えて、間違いのないように言うんだぞ」

美佐子は俯向いて、少時考えていたが、やがて徐ろおもむに口をきつた。

カフェー・ドラゴン

初子のはしやいだ声がボックスを賑わしていた。美佐子はラウンド達を連れて彼女のお客へ挨拶へ出た。

そこへ夢丸というラウンドの一人が長い袖をひらひらさせながらやって来て、初子の耳に唇を寄せ、何か囁いた。彼女は忽ち眉をよせ、舌打ちしながら、烈しく首を振った。夢丸は心得て引き退った、が、間もなくまたやって来て、

「駄目よ、おねえさん、どうしても帰んないわ。——だから、ちよいと来て頂戴な」と歎願した。初子はカツとして、

「放はなつちやつておきよ。ゴリラなんか——、構わないでおけば帰かえつちまうさ」と甲高い声で云い放はなつた。

「酷いことを云うなよ。僕は遠慮するでしょう」客は不快な顔をして起ち上ると、皆が止めるのもきかないで、さっさと表口の方へ行つた。初子は大分酔っていたの

で、足許も危ぶなかく後を追い馳けたが、ふと、入口のところに佇んでいる吉川を見ると、

「何だつて、商売の邪魔をするのさ、あんたなんか用はないよ」といきなり突掛つた。

「そっちになくつたつて、こっちにやあるんだ」

「執拗い男だわね、用があるなら台所口へ廻つて頂戴、表に立っていられちや縁起が悪くつて仕様がなない！」

美佐子は見兼ねて、吉川を三階の衣裳部屋へ案内して、

「初子さんを連れて来て上げるから、ここで待つていらつしやい」と言つて、マツチと灰皿を彼の前に置いてから、初子のところに戻り、「早く会つて、帰してしまつた方がいいわよ。余り怒らせると反つて損だから」と注意して、無理やりに彼女を衣裳部屋へ送り込んだ。

「一体どんな用があつて、こんな忙しい時間にやつて来るのさ」

吉川は黙つて青い顔をしていたが、恐い眼をして初子をぐツと睨みつけ、

「百合子をどこへかくした？」

「知らないわよ、そんなこと——」

「白状しろ、百合子はどこにいるんだ？」

「知らないもの、白状もくそもあるもんか」

「なにッ」

「嚇おびしたって驚きやしないよ。吉川さんが余りうるさく付き纏うから、百合子は厭いやがつて、逃げッちまったんでしょ」

「そうじゃない。君がかくしたんだ、君が——」

と込み上げる口惜しさをジツと耐えながら、眼を血走らせて、

「僕達の間を割いたのは君なんだから」と言つて、彼は唇を噛んだ。

「割いたんじゃないのか知ら、あんたが嫌われたんだよ。会うのが厭だから隠れてんうぬぼさ。それが分らないのか知ら、自惚うぬぼれッて恐いもんだなあ」

吉川は突然いきなり起ち上つて、灰皿を叩きつけた。

「オヤ、危ぶない！——私を女だと思つてなめるのかい？ さア帰つておくれ、それだから女に嫌われるんだよ。おまけに——オホホホ」

初子は殊更に彼の顔をしげしげと見上げて吹き出した。吉川は齒ぎしりしながら怒鳴つた。

「どうするか、覚えていろ！」

「忘れるわよ」

彼女は吸いかけのバットをポンと彼の顔に投げつけ、起ち上つて階段を降りよう

とすると、吉川は追い縋つて襟首を掴んだ。

「うるさいね、どこまでいやがられるように出来ているんだろう、帰ってくれって言ったら、——さっさと帰れ、お前さんなんかの来るところじゃないんだよ、このゴリラ」

「こん畜生！」

吉川は初子の頬を打擲なぐつた、力をこめて、立てつづけにぶん打擲なぐつた。彼女は彼の胸中に武者振りついて、大袈裟な悲鳴を揚げ、

「人殺し！ 人殺し！」と叫喚わめいた。

美佐子は夢中になって、

「大変だ——、誰か来て——」と叫んだ。バタバタと裏梯子を駆け昇る蹙音がしたので、吉川は彼女を突き退け、階段を飛ぶように駆け降りて、表へ逃げ出した。初子は気狂いのようになって口惜しがり、

「美佐ちゃん、早く——、ゴリラを掴まえておくれよ」と騒ぐので、美佐子は吉川の後を追った。

往来へ出ると吉川はぼったりと百合子に遇った。

「き、きみ——」と言って、彼は夢中で走り寄った、偶然のこの出会いを、百合子は喜んだのか愕おどろいたのか、立ち竦すくんだまま、少時は身動きもしなかったが、やがて、

咽喉から絞り出すような声で、

「しばらくでしたわねえ」とにつこり笑った。その一言で彼は有頂天になった。

「どこへ行くの？」と急せぎ込んで訊いた、百合子はもじもじしながら、

「姉さんのところへ、——ちよいと、あの急用が出来て——」と言いながら、救いを

求めるように美佐子へ、合図の眼を向けた。飛んだところで掴まってしまった、と

美佐子は心配して、初子を呼びに行こうと思つたが、この場を離れたら百合子が嘸さ

ぞ困るだろうと思ひ、思案にあまつて茫然ぼんやりしていると、吉川が、

「美佐ちゃん、邪魔すると承知しないぞ」恐い眼でじろりと睨んだ、美佐子は縮み上った。

「百合ちゃん、君に話したいことがあるんだ。ちよつと、一緒にそこまでつきあつてくれ」

「じゃ、ちよいと、姉さんのところへ行つて来て、それからいいでしょう？」

「いけない、いけない。こっちは急ぐんだから」

躊躇している彼女を引き摺るようにして連れて行った。美佐子はそれを見ていながら、引きとめることが出来なかつた。

「刑事さん、私の知っているのはそれだけです」

「それぎり百合子は姉さんのところへ来なかつたか？」

「来ませんでした。初子さんは大変待っていましたけれど——。私は叱られるのが恐かったので、百合ちゃんが吉川さんに連れて行かれたことは黙っていました」

死の直前に喧嘩したという不利な事実は彼女の身上を一層悪くした。嚴重追及したところ、最初は飽くまで知らぬと頑張っていたが遂いにかくし切れず、吉川と争うたこと及び桃色のリボンが彼女のものであること等を白状した。組みついた時、髪に結んでいたリボンが吉川のカフス・ボタンに引掛つてとれたのだと云った。しかし、何故彼はそれを最後の瞬間まで手離さず、握りしめていたのだろうか？ そこに何か意味がありそうに思われる。あるいは彼と初子との間にも秘密があったのではあるまいか、そのため一層彼女が二人の仲を厳しく云つて引割ひききこうとしたのかも知れない。杉村の初子に対する疑問はいよいよ深くなつた。

百合子を殺したのは誰だろう？ それもあるいは——、と考えた時、ふと彼の頭にあることが閃めいた。杉村は急に立ち上ると帽子を取つて、そそくさと出て行つた。

水兵結び

二時間後、杉村は元氣よく戻つて来た。

係長は彼の顔を見ると、待ち兼ねたように訊くのだった。

「どうだね？ 君、何か手がかりがあつたかい？」

「やつと謎が解けました」と彼は莞爾にっこりした。

係長は眼を瞠みはつて、

「何にツ？ 謎が解けた？ 犯人が分つたと云うのか？」

「分りました。百合子を殺したのは吉川です」

「吉川を殺したのは？」

「彼自身、即ち彼は他殺でなく、自殺です」

「死体を包んだのだけが、初子の仕業か？」

「否え、それも彼自身のやったことでした」

「しかし、自分を包んで、外から縛るといふ事が出来るかな？」

「出来ます。あれは水兵結びですから、少しその道に心得のあるものなら誰にだつて出来る。たつた今、彼が水兵だったことが分つたので、この謎がすっかり解けたわけなんです。僕の想像を話しますから聞いて下さい。吉川はドラゴンを出ると、偶然百合子に会い、彼女を無理やりに自動車に連れ込み、頻りに復縁を迫つたが拒絶された。いろいろ言葉を尽して頼んでみたがやはり駄目、手厳しく勿はね付けられた

のにカツとなり、嫉妬と怨恨とに燃えていた全身の血は、一時に頭に昇ったと思うと、夢中で彼女に飛びかかり、力をこめて細い首を絞めつけました。ハツと我に返った時には百合子はもうぐったりとなつて、彼の腕の中に倒れていたんです。その死顔をぼんやり見守りながら、今こそ、彼女は完全に自分のものだ、と思うと、何とも知れぬ嬉しさに胸が一杯になるのです。吉川はその場で直ぐ後を追う積りだった、が、こういう結果になるのもみんな初子が悪いからだ。憎いのは彼女だ。復讐してやる、それから死ぬことだ、と思つた。自惚れというものは恐しい、あれほど嫌われていたのが分らなかつたのだからな。彼のためには幸であるかも知れないが、——そこで彼は考えぬいた末、彼女の部屋で自殺して、それを他殺らしく装い、嫌疑をかけてやろうと思いつき、そのために桃色のリボンまで握つて死んだんです」

と言つて、杉村はリボンと麻縄と風呂敷とを持つて来て、

「水兵結びをやってみますから、見ていて下さい」

と、青い風呂敷を揚げ、その真中に坐つて、麻縄の一端にリボンを結びつけ、風呂敷の四隅を集めて縄で括り、リボンを握つてすっぽりと中に入り、中からぐいぐいと手繰つた、彼がリボンを引張る度に麻縄は段々と締つてゆき、最後にウンと一つ力を入れたので、縄は驚くほど強く締つた。同時にリボンはするりとぬけて、彼の掌の中に握られた。

「入ることは入ったが、出ることが出来ない。麻縄を断つて下さい」

係長はナイフで縄を断った。杉村は乱れた髪を撫で上げながら、

「吉川は風呂敷の中で、心臓を突き、自殺したのです」

「しかし、姉への復讐ならむしろ妹と情死したように見せた方がいいんじゃないか。

それに——、好きな女を自動車の中に棄てて、一人で初子の部屋へ行ったのも少し変じゃないか」

「ガソリンがなくなつたから、已むなくあそこへ置去りにしたんでしよう」と言つた時、後のドアが開いて、一人の刑事が係長へ解剖の報告をした。

「吉川と百合子の胃中には同じものが残っていました。消化の点から見て、吉川が先に死んだものと分りました」

その一言で杉村の想像は根本から覆えされてしまった。刑事はまた語をつぎ、

「それからもう一つ重大な発見がありました。それは吉川の口中から出た小さい肉塊です。その肉塊には皮がついていました。しかも、指紋のある——、手の指先らしいということですよ」と言つた。

小指の先

そこへ杉村の部下が慌ただしく入って来た。彼は川口の麻酔の醒めるのを待ち、訊問する積りで、部下を築地の病院へ詰めきらせておいたのだった。

「杉村さん、川口氏はまだ麻酔がさめないんです。昏々と眠りつづけていて、頗る憂慮すべき容態だそうです。医員達は非常に心配しています、家族の者も皆馳けつけて、病室に詰めきつていゝるんです」

杉村は驚いて椅子を離れ、係長に会釈して、

「では、ちよつと、行つて来ます」と云つて、室を出ようとする、出合頭であいがしらに山本桂一が顔を出して、

「川口氏は只今息を引取りました。杉村さん、これでこの事件もやつと片附きましたね」と晴々した顔で二人の方を見て、

「謎の鍵を掴んでいたのは、川口氏でしたから——」

係長と杉村は顔を見合せたまま、黙っていた。山本は言葉を続けて、

「杉村さん、川口さんは今朝未明に入院したのだそうですね」

「えッ、何だつて？」

杉村は吃驚して訊き返した。病院に問い合せた時、確かに入院している、今、手術を終わったばかりだから、面会謝絶であると答えたので、それなり電話を断り、何日に入院したかという事はたしかめなかった、何という失策だったのだろう。

「川口氏はこの春も盲腸炎で入院したことがあるそうです。その時、再発したら直ぐ手術してくれと院長に頼んであったのです。だから突然飛び込んで来ても、別に怪しみもせず、早速手術室に連れて行ったのでしよう。生憎院長はまだ来ていなかった、外科の若い医者が代理に手術を行ったのだそうです」

「院長と故川口博士とは非常に親しかつたそうだからね、その息子だ、それ位の我儘は許していたかも知れないな」と杉村が言った。

「我儘を通させるような親しい交際をしていたことが、結局一人息子の川口譲を殺してしまつたんですよ」

「君の云うことはよく分らん、もっと明瞭はつきりと言ひ給え」と係長が焦れつたように云つた。

「一口に云えば、川口氏は盲腸炎だと偽つて、嘘の容態を云い、医者を欺いて手術をさせたんです。彼は病院へ駆けつける前に、已すでに多量のカルモチンを嘔のんでいた。それを知らずに、医者は手術のための麻酔剤をかけた、それだけだつて危険なのに、腹まで割いたんだから堪りませんよ。つまり、川口氏は病院を死場所に選んで、自

殺したんです」

「何故自殺したんだ？」

「その理由は川口氏が院長へ残した遺書によつて明白となりました。彼は死場所に病院を使うことを非常にすまないと思つた。幼い頃から可愛がつてくれた院長や、その人の病院を傷つけることは実に忍びなかつたが、彼としては他に方法がなかつたのでしよう、それで自分の秘密を院長へだけ打ち明けて謝罪したのです。院長は川口氏の希望通り、遺書を焼き捨てたいのだが、世間へ知れないように、警察の方々だけで秘密に葬つて下さるならばお見せしたいと云つています。私は読みましたから、ざつとお話し致しましょう」

と、彼は手帳に控えておいた文字を見ながら言葉を続けるのだった。

「川口は百合子と吉川とが過去に関係があつたことを知つてから、日夜煩悶しつづけていたのです。昨日も余り憂鬱なのでドラゴンへでも遊びに行こうと思ひ、その近くまで来ると、向うから睦じそうに百合子と吉川がやつて来るんです」

「そこまでは美佐子という女給が申立てている」と杉村が言った。

「両人は間が悪るかつたと見え、頻りに一緒にドライブしようと思つたが、気が進まないで、僕が奢つてやるから何か食べようじゃないか、とレストランへ入り、食事をし、ビールを飲んだ。心中面白くない二人の男はやたらに飲んだのでかなり

酔払っていた。そこを出ると百合子がまたすすめるので、遂々三人一緒に自動車に乗ったが、運転台にいる吉川が自棄やけにハンドルをきり、無茶苦茶にスピードを出すので、車体は烈しく動揺し、危険だったので、乱暴な真似は止せ、そんな運転のしかたがあるか。と川口が罵ったのが機会きかひとなり、二人は口論を始め、遂いに恐しい格闘になりました。吉川は短刀をぬいて向って来たが、力の強い柔道四段の彼には迎も敵いません。忽ち短刀はもぎ取られ、それで心臓を突き刺されたのです。吉川は苦しまぎれに川口に噛みつき、小指の先を喰いちぎった、それは解剖した時、吉川の口中から出ました」

「確かに、それは川口の指先かね？」

「左の小指の腹です。川口は急性盲腸炎の苦しさに堪えかねて、指まで噛み切ったと医者は言っていました——」と言つて、話をもとへ戻し、

「余りにも恐しいその場の光景に、百合子は気を失つてしまいました。二三十分後、ぼっかりと眼を開いたが、その時はもう吉川は死んでいた。それを見ると彼女は急に可哀想になり、死体に取り縋じつて泣き出しました。それを凝じと川口は見ていた。やはり彼女は吉川を愛していたんだ、自分は欺された、と思うと口惜しさが一時に込み上げてきて、目の先が真暗になり、前後の考えもなく夢中で飛びかかって、百合子の首を締めつけました。ぐったりとなつた彼女を、彼の腕の中に見たが、少しも

可哀想だとは思わなかった、自分の心を裏切った女！ 彼は憤りの眼で美しい死顔を眺めた、百合子も憎いが、重ね重ね自分を欺いた初子は一層憎かった。川口はハンドルを握って、二つの死体を乗せた自動車を運転しながら、夜の街を当なく彷徨さまよいました。恰度その時、どこかの時計が午前二時を打ちました」

「すると、三人がドラゴンの前で一緒になってから三時間ほど経ちますね」と杉村が言った。

「正確に云えば三時間と何十分だ」

「そうです」と山本は首肯いて、

「それから川口は、死体の始末をどうしたものだろうと考えました。そのうちにふと頭に浮んだのは、吉川を初子の部屋に持ち込んで、彼女が殺したように見せかけることでした。一時にせよ、嫌疑がかかるのは痛快だ、彼女への復讐にはまたとないい、いい思いつきだ、面白い、嘸ぞ迷惑するだろうと思うと迎も愉快でした。そこで自動車をアパートへ乗りつけ、力の強い彼は吉川を引担いで、彼女が閉め忘れて出た窓から入りました。彼はまた考えた、自分への疑いを避けるためには他殺より自殺の方がいいと思い、風呂敷に包んで吉川も知っているはずですから水兵結びにしました。桃色のリボンは水兵結びに用いたように故意わざと握らせておいたんです。さて、今度は百合子の死体です、どこへ送りつけようかと運転しているうちに、

ガソリンがなくなり、已むなく丸ノ内で自動車ごと棄てたのでした。

彼も人間二人を殺害したのですから、生きている気持ちはありませんでした。しかし、なまなか自殺をして家名を汚すような事があつては申訳ない、彼は考えぬいた揚句、一つの名案を、——少なくとも彼自身はそれを名案だと思つたのですが、——思いつきました。それは偽盲腸炎になつて手術をして命をとつてもらふことでした。そこで予め多量のカルモチンを嚥んで入院しました。よもやカルモチンを嚥んで来たとは思いませんから、医者はそのうえに麻酔剤をかけて手術にかかった。川口のこの考えは美事に成功しました。彼は眠り続けたまま息を引き取つたのです。これだけ考えてやつたのに、ただ一つ大切なことを忘れていました。それは死者の口中に残した小指の先でした」

消えた霊媒女

1

「あなたは美人で有名だった小宮山麗子という霊媒女がある大家へ招よばれて行って、その帰りに煙のように消えてしまった不思議な事件を覚えていらっしやいませう？」

「はあ覚えております。もうあれから十年近くもなりはしません？ あの当時は大した評判でございましたわね。でも、あれは到頭判らずじまいになったんではございませんか？」

「ええ、あれつきりなんです。でも美人だったし、心靈研究者達からは宝物ほうぶつのように大切にかけてられてた女ですから、今でもその人達の間では時々話に出るようですね」

「そうでしょうね。霊媒者なんていうと、私達にはちよつと魔法使いか何んぞのように聞えて、まあ巫女みことでもいった風に考えられますわ。それが突然消えてしまうなんて、昔なら神隠しに逢ったとでもいうんでしょうけど、実際はどうしたんでございませうね？」

「実は、そのお話をしようと思うんですの。それも今日が、あの女ひとが行方不明になつてから恰度何年目の同じ日なんですの。亡くなられた六条松子夫人の命日に、夫

人を崇拜している人達が集つて、追悼会を開いたんです。その席上にあの小宮山麗子が招かれて、夫人の招霊をやり、すっかり松子夫人生き写しになって、和歌などを詠んで人達を感動させ、六条伯爵家を上首尾で辞し去つたまでは判っています。話はそれからなんですが、あの晩は霧が深くて街燈がぼうつと霞み、往来はまるで海のような感じでした。六条さんの御門を出ると、忽ち小宮山麗子の姿は霧の中に吸い込まれたように見えなくなり、それ限り消息が絶えてしまつたんです」

書齋の安楽椅子にふかぶかと身を投げかけながら、S夫人は、スリー・キャツスの煙の行方を心持ち目を細めて追いつつ、さも感慨深そうにいうのだった。

「どうして突然こんな話をはじめたか、あなたは変に思われるでしょうが、実はこの事件が抑私をこんな職業に導いた動機だと云つてもいいのですよ」

ある事件が一段落ついて、朗らかな気分になつていたS夫人は、自分が探偵に興味を持ち初めた最初の動機について、私にその思出を語ろうと云うのである。

2

それはもう大分過去に遡らねばならないことで、まだS夫人の夫の博士がシャム国政府の顧問官でいた時代で、その頃夫人も夫の任地へ赴いて、そこで二三年の月を送っていたことがあった。

「その当時のことなんですが」

夫人はそう云つて、デスクの前の壁に掲げてある大きな写真を指しながら、

「この写真が、その頃写したものなんですよ」

見ると剥げちよろけた塔のような建物を背にして、石段の上に五六人の男が立ったり蹲しゃんたりしている。

「真中に立っている肥った男は私の夫です。その傍にサン・ハットを持って立っているのがこれからお話しようという物語りの主人公なんですから、よく見といて頂戴」

三十五六、あるいは四十を大分出ているかも知れない。というのは、何だかこう干ひから乾びてしまったといった感じがするほど痩せ細っていて、ちよつと年格好の見当が付き兼ねたからであるが、よく見ると上品な細面の相当綺麗な顔立なのだ。しかし見た感じは頗るよくなかった。尖った鼻、恐しく神経質らしい凄惨な眼、その陰鬱な物悲しそうな表情をじつと見詰めていると、何となく私まで引き入れられて、心が寒くなるような人柄だった。

「このお方は何て仰しやる方？」

「勝田男爵の弟さん」

「まあ、大阪の？ あの有名な勝田男爵？」

「そうよ、勝田銀行を御存じでしょう？ でも、弟さんは東京にお住居すまいになっていましたの」

なるほどそう云われて見れば、新聞でよく見かける勝田男爵の顔に酷そく似りだった。そこでS夫人は静かに語り出した。

「今ではもうすっかり開けているでしょうが、その頃のシャム国は実に野蛮な未開地だったんですよ。私のような物好きな女には何もかも物珍らしくって面白い処だったんですけれど——。ある時こんな事がありました。支那街の無頼漢が、鰐わに寺の縁日に行つて喧嘩を始め、相手の男を鰐ぶのいる池に投なげ込んだというんです。投ほうり込まれた男はそれっきり出て来ません。さあそれが評判になつて鰐わに寺見物が多くなつたという始末、どこの国でも野次馬は絶えないわけね。それで私も見物に交つて早速出かけてみました。

かなり古いお寺で、その庭に大きな古池があつて、鰐わにが五六疋びきいるので、それで鰐寺などと呼んでいるんですが、本当の名は別にあるんです。水が泥のように濁つて、中なぞ何も見えませんが、少時しばらく立つて水面を眺めていますと、池の真中ごろの

処きよなみに小波こなみが立つて、臆おそてひよつこりと鰐わがが顔を出しました。いくら昼日中でもあの顔を出されては余り気味もよくないので、思わず飛び退きますと、いつの間に来ていたのか、私の後に一人の紳士が立っていて、その人に危あやく打ぶつかるころでした。見るから病人らしく痩せ細って、少し前屈みの肩が板のように薄く、背の高い、青い顔をした三十五六の日本人でしたが、どこかにその人の育ちを思わせる気品があり、誰の目にも出のいい人だという事が分るような物腰でした。私は自分のはしたない仕草と、日本人だという親しみもあって、何ということなしに微笑みながら頭を下げると、その人は暫くの間、無言のまま私の顔じを凝じと見ていましたが、急に気がついたように愛想のない挨拶をして、そのまま踵を返してゆつくりと向うの方へ行つてしまいました。

私は何だかこうひどく侮辱された気持でした。帰つて夫に訊きましたら、その人は公使の親友で大阪の勝田男爵の令弟だとのことでした。それも大変健康を害されて、保養のため歐洲へ遊びに行つていたのが、どうも思うようでなくひとまず帰朝きかたと定きまり、その帰り路にシンガポールまで来ると急に気が變つて、親友の公使を訪問かたがた旁かたがた、気分転換のためにもというのでシャム国に立ち寄られ、公使館のお客さまとして厚遇こうぐされているわけだったんです。それに来てみると、シャムという国が誠に気楽な処で、その暢のんき気きさが氣に入ったものか、すっかり腰を落ちつけているのだと、

夫はその身分を羨ましそうに云うのでした。

シヤムは世界無比の仏教国で、どんな高貴な方でも男は生涯に一度は必ず仏門に入り、僧侶になる習慣があります。罪亡つみほろぼしになる人もありましようし、中にはまた貴い身分のお方が有名な美人だったある公使夫人にお会いになりたい許ばかりに、坊さんに扮して公使館を訪ね、夫人の手からお布施を貰われたというような話も、いまだに一つの逸話として残っているくらいで、とにかく仏門に入るといふことは普通の習慣になっています。私が二度目に勝田さんに会ったのは鱒寺で逢いましてから、恰度十日目の夕方でした。玄関に一人の托鉢僧が黄色い布を身に巻きつけ、素足で立って居りました。私はお布施を手にとって出るとそれが勝田さんだったので、

『まあ！ 御奇特ごきとくでいらつしやいますこと！』

余り意外でしたので思わずこんな言葉が口をついて出てしまいました。すると勝田さんはちよつと面目ない、とでもいうような容ようす子をして、照れかくしに笑いながら、

『いやどうも恐縮です。余り退屈だもんで、ついこんな悪戯を思いついたわけで——』
退屈だ。退屈だ。と云って頻りに公使館へ遊びに来てくれと云われるのですが、公使は独身だし、館員も夫人連れは一人もなしという中へ、のこのこ行かれもせず、にいますと、ある日公使が主人たくに向つて、公使館のうちは野郎ばかりなので、勝田

君には刺戟が強過ぎるんだ。優しい慰めに飢えているんだから、君の奥さんには気の毒だけれど、時々話相手になってやってくれるように、君から一つ頼んでくれませんかと云われたそうで、

『では宅の方へどうぞお遊びに』

というわけでそれからはいちよい遊びに見えるようになりました。

勝田さんはひどい神経衰弱で、素人目にも何かこう体全体がもうすっかり弱っているように見受けられました。何でも大変愛していた夫人を亡くしてから、一時、傍の目には気が変になったのではないかと氣遣われたほどで、御自分もすっかり厭世家になってしまつて、この世に何の望みもなくなつたと云つていました。

夫人は非常に美しい方だつたそうですが、胸の病氣のために二十七歳の若さで逝かれたそうで、その当時は今も云うとおり落胆の余り、自分も跡を追つて死のうかとさえ思われ、その決心を実行されようとして家人に発見され、それ以来は絶えず監視付きの境遇に居られたそうです。

『私達の階級の者は、家名を汚すという事を極度に怖れています。何よりも第一に名誉ですからね。人間よりも家が第一位なんです。私が病気で死ぬ分には仕方がない。まあ極端に云えばですよ。しかし変死では困る。何故と云つて社会種として噂に上りますからね。それに精神に異状を呈して自殺なんて新聞に書かれた日には、

一族の血統にまで及ぼすという訳で、いわば家名保護のため監視をつけられたというわけですよ』

勝田さんは自分の言葉に昂奮していました。こんな話の聞き相手には私のような女がよかったのかも知れません。いつとなしに二人は親しい間柄になって行きました。

こういう熱帯国の常として、日中は皆昼寝をしますから、焼けつくような太陽の光が大地に輝いている午後の一時間二時間になると、まるで真夜中の静けさです。しかし不眠症の勝田さんが、この明るい真昼に眠れる訳がありません。で、午後になると必ず私のところへ訪ねて来るのを日課のようにしていました。

何事にも神経質な勝田さんは、天井から守宮ヤモリが落ちてくるのを怖れて、いつもヴェランダにあるモスキート・ハウスの中へ入って、そこで私を相手に雑談をするのでした。ところがその恐ろしい守宮がよくまた勝田さんの首筋に落ちかかったり、知らずに扉ドアのハンドルと一緒に守宮を握ったりして、その冷やりとした、柔かい感じが、何とも云えず心持が悪いと云って、夢中になって手を洗うものですから掌が真赤になってしまったことさえあります。その時、気の毒に思つて、

『ほんとに無気味な冷たさですわね。何だか死人にでも触つてるような感じでしょう？』

慰めるつもりで云つたのが、勝田さんにはどう響いたか、酷く不機嫌な顔付になつて、そのままぶいと挨拶もせずには帰って往きました。私はあんなに神経の尖つた人を今まで見たことがありません。

またある時、水牛の浸っている堀割の傍を一緒に散歩したことがありました。水際には名も知れぬ雑草が蔓はびこっていました。私達の靴音に驚いて、五六寸位の小蛇が草叢くさむらから逃げ出して、スルスルと堀割の中に飛び込みます。一度逃げ損なつた小蛇を踏んで、それが靴の先に絡みついたため思わず勝田さんに縋りついたことがありました。すると、勝田さんも何か怖ろしいものでも見たかのように、取縋つた私の両手を無理に振りほどいて、一散に駈け出しましたが、後で判つたことは、それは私が蛇を踏んだのを見て駭おどろいたためではなく、ただその叫び声に肝をつぶしたんで馳け出したのだそうです。

やっと気が落付いて見ると、勝田さんは両手で耳を押え、眼を閉じて真青になつて震えています。私の途方もない叫び声が、こんなにまで勝田さんの神経を鋭く突き刺したことかと、面目ない気がして、

『すみませんでした。余り怖かつたもんで思わずあんな声を出してしまつて』

と申訳のつもりで云いますと、勝田さんはまるで総毛立つたような顔をして、低い声で囁くように云うのでした。

『何て声をお出しになるんです。ああいやだ——』

勝田さんの恐怖が一通りでないので、つい可笑おかしくなつて、

『だってもう夢中でしたもの、ほんとうに死んでしまふか知らと思ひましたわ。きっと人が死ぬ時はあんな声を出すかも知れませんかよ』

冗談に云つた積りが、どう思い違いをされたものか勝田さんは身動きもせず、私を睨んでいましたが、急にぶるぶると身体を顫ふるわして、寒気がする、気分が悪くなつたからと云つて、一人でさつさと歸つて行きました。後に取り残された私は呆氣に取られて暫くの間その後姿を見送つていました。神経衰弱も甚しい、あれではまるで狂人だ。公使に頼まれていればこそのお相手なのに、余り手前勝手にもほどがある。と勝田さんのとつた態度に頗る不快を覚えて静かな往来を一人でコツコツと歸つて来たことでした。

やがてマンゴー・シャワーの季節も過ぎ、待ち焦こがれている雨期が近づいて来ました。それでなくてさえ健康を害している勝田さんにとっては、このしめつぽい季節は禁物だったのです。

永い雨期をこの国で過ごすことはどうにも健康がゆるしません。そこでいよいよ私共とも別れを告げなければならなくなりました。

いくら氣候が悪かろうと、不自由な土地だろうと、自分には何かこの国が自由なように気に入っているのだと、勝田さんは口癖のように云っていました。それだけに帰朝の日が定つてからというもの、勝田さんは暗い顔をして、暇さえあれば毎日のように宅へ来て、私の傍を離れませんでした。日が近づくとつれて段々口数も少くなり、憂鬱な眼顔をして絶えず何事か考え込んでいる様子が、私には、何かしら薄気味悪く思われるくらいでした。

勝田さんはフランス船で帰朝の途につく事になり、公使を始め主立った館員達や私共夫婦は船まで見送りに参りました。思ったよりも割合元気で、甲板でシャンペンを抜いて出発を祝つたことでした。その時勝田さんは自分の船室を見せて上げるからというので、従ついて行きますとスチーマー・トランクから小さい紫縮緬ちりめんの帛紗ふくさを出して、

『実は記念にあげたいものがあつてお連れしたんですよ』

と云われました。渡された包みを、私が開けて見ようとしますと、勝田さんは慌ててそれを押えつけて、口早やにいうのでした。

『いけません。いけません。今開けてはいけません』

そうしてやはり押えたまま、

『これはあなたを信用して私が差上げるものなのです。日本へ着いたら電報を上げ

ますから、その電報が届いたら直ぐ開けてみて下さい』

『では——。それまではお言葉通りにいたしましたでしょう。その代り直ぐ電報を打って下さいましね。開けるなど仰しやると何ですか余計見たくなるものね、一体何が入ってるんでしょう?』

私は勝田さんへの最後の好意を示すため、わざと子供らしく悦びを誇張して、それを彼の目の前で振って見せたりしました。その様子を心なしか、勝田さんは淋しい微笑で眺めながら、何も答えませんでした。人を送るといふものは、殊にそれが船の場合だといつまでもその人の姿が目の底に残っていて淋しいものです。私の目からはあの細い手で振られた帽子が消え去りませんでした。

家へ持つて帰った包みを、云われたとおり開けないで二十日余の日が経ちました。と、船はシンガポールに着き、そこから郵船会社の欧州航路の船に乗り換えた勝田さんが、香港へ着く前夜、遺書も残さず、謎の投身自殺を遂げたという報導がありました。

新聞にはただ極度の神経衰弱の結果とだけで、何事も書いてありませんでしたが、私共は予期していた事に当然出遇ったような思いがしました。勝田さんから送られた帛紗包みは早速開けられました。中には私へ宛てた長い手紙と、ダイヤの指輪が一個入っていました。その手紙はまだその儘大切に保存していますから、随分くしゃ

くしゃやして分り難いけど読んでごらんになりませんか」
そう云つて夫人は私に、長い手紙を渡した。

3

——S夫人、

鰐寺で偶然あなたにお目にかかった時から、何とかしてお近づきになりたいと非常に苦心いたしました。

私の目の迷い、心の迷いと幾度も冷静になつて、見直し、考え直したのですけれど、私の迷いではありません。ほんとにあなたは私の妻によく似ていらつしやる。あなたのお傍にいてお話していると、妻が甦いきかえつてきて私と話をしているように思われてならないのです。あなたとお別れするのがいやだった。いつまでもお傍にいたかつたんです。離れたくなかつたんです。しかし到頭お別れしなければならぬ時が来てしまいました。お別れする前に私はあなたに私の秘密をすっかり告白してしまいました。あなただけは私という人間の善い事、悪い事、すべてを知つて頂きたかつた。恐ろしいこの秘密は、私の体をこんなにまで疲らせ、責め

苛んでもなお足らず、生命^{いのち}までも奪おうとしています。悩み通してきた二年間のこの苦しみは、私をこんな廃人同様の病人に仕上げてしまいました。

いつ死ぬか分らない私です。死ぬ前にあなたにだけ、ほんとうの私という男をお目にかけていたいと思います。どうぞ愛想をつかさ終りまで読んで頂きたい。

ほんとの事を白状すると大変女々しいようですが、私はどうしても、妻の死んだことが諦め切れませんでした。話は大分遡りますが、妻の学生時代を知っている私が、あらゆる障^{しょうがい}碍を排して、懇望して貰った女でした。あなたは、男が女を愛するということがいかに深いものかお考えになったことがありませんか。

静養したら全快とまでは行かなくとも、まだまだ生きられるものと固く信じて、まさかに死ぬとは思って居りませんでした。

咳が出るので話をする事を禁じられていたのですが、その夜は気分も大分よかったです、少し位話をして熱は昇らなかつたので私は妻の枕許で、この分ならもう一月もしたら行かれそうな熱海での静かな生活について話しました。妻は悦んで耳を傾けていました。傍^{はため}目には恋人同士のように見えたかも知れません。実際これから熱海で静養させる妻と二人きりの生活のことを考えると、新婚当時の悦びをまた繰り返している気持でした。が、後で考えると熱が昇らないというのも、もう体力が衰えて、病に抵抗するだけの力さえなくなっていたのです。何も知らない私はそれ

を善い方へ解釈していました。医者も少し位なら話をしてもいいと珍らしく許してくれたのでした。が、その時はもう医者は匙を投げていて、まあ私に後々心残りのないようにして呉れた、云わば投げ与えられた一片のパンだったのです。それとも知らずに悦んでいたのは何という無智だったことでしょう。久振りでゆっくり妻と話が出来てそれこそ軽い足取りで家へと急ぎました。家の玄関で靴を脱いでいると病院からの電話です、危篤だということで、夢中でまたもや飛び出して行きましたが、もう間には合いませんでした。

妻は寝返りを打とうとして急に心臓麻痺を起し、枯木が倒れるようにそのまま息が絶えたのです。

一時間ほど前までにはあんなに瞭然はつきりとして、楽しそうに話していたのに、それで突然、出しぬげに魂を奪われてしまうなんて、どう考えても信じられません。

悲しむとか、泣くとか人はよく云いますが、余りの悲しさの時は却って泪など出ないものだという事を始めて知りました。私の場合は、茫然自失したという言葉が一番あてはまっていると思います。全く私は余りの事にどうしていいか、自分の心の置場に迷いました。親類の人達は皆慰めてくれました。ある人は妻を讚美したり、また私に同情してくれたりしましたが、そんなお座なりなど聞いている気持はありませんでした。自分の身にもなってみる、この世の何物にも替え難い最愛の妻を死

の手に奪われてしまったんだ。もう再び妻と逢う機会は永久にないんだ。私は一人後に取り残されたんだ。死んで行く者よりも、後に取り残された者のいかに惨めだかを少しは考えてみる、それなのにああして笑いながら話をしている。私はお通夜に来た従妹達いとこが笑いながら世間話をして中へ入って行って、怒鳴りつけてやりたいとまで思いました。ですから自分は一人で書齋に入ったきり食事も碌にせず、長椅子の上で二日も三日も夜を明したりしたほどでした。

『ほんとにあんなにお心もお顔もお綺麗なお方だったらないわ。あんなお方こそ神様におなりになれるわ』

従姉いとこの一人が慰めのために云った言葉を、私は舌打ちしながら睨み返してやりました。

『黙ってる。貴様なんぞに妻の批評をする権利がどこにある』とこう云ってやりたかった。

全く死んだ妻の事をあれこれと批評されるほど腹の立つことはなかった。妻は私の者なんだ、誰の者でもない。今はもう頭の中でしか逢えない妻を、そつと抱くようにいつも労いたわっていてやりたかった。私は毎朝起きるのが物憂かった。夢の中の妻、それはいつまでも変らない優しい美しさだった。私にとって夜は楽しいものとなつて行きました。夜中に私はよくおびえました。目が覚めて枕の濡れていること

もしばしばありました。死にたい、そうだ私も死んで行こう。

こうした容子が家人の注意を惹いたと見え、家の者は私が妻の後を追いはしまいかと絶えず注意し初めた。それがために死にもならず、生き存ながらえてきましたが、しかし今になって考えるとあの時に自殺していた方がどんなによかったか知れません。あの時、死んでいたら、こんな大罪を犯さなくてすんだのです。

私の悲嘆に大変同情してくれた一人の友人がありました。その人は学生時代から心靈研究に興味を持ちいつも不思議な話ばかり聞かせてくれるんです。平常いつもの私でしたら嘲笑しながら冷かし半分になぜっ返して聞くのが落ちですが、今は到底そんな気にはなれませんでした。何故と云って、その人の話ぐらい私の胸を打ったものはなかったからです。『人は死なないんだ。肉体は失われても、霊は残っている』彼はそう言つて私を励まし慰めてくれるのでした。『科学者サー・ウイリアム・クルックスをあえて信ぜしめた力を考えて見給え』——力強い自信のある彼の声は、私の耳の底に残つていつまでも忘れられませんでした。彼の話によると霊媒者を介して、亡き人と語ることも出来る。霊眼が開けば目のあたりに亡き人の姿さえ見ることもあるとのことでした。何という素晴らしい救いではありませんか。私に取つてこれ以上の喜びは他にありませんでした。

しかしまだ半信半疑の点もありましたので、友人から送つてくれた霊に関する本

を貪るように読みました。どういふ処へ行けばその霊媒者とやらがいるかという事も調べました。

で、早速出かけてみたんです。仮令目的は達しられないでもいい。しかし万一そういう事が行われるなら、それに越した喜びはない——。そう思うと一時もじつとしていられず誰にも知らせずに、そつと教えられた通り、青山北町のその家に行きました。

想像では緋の袴でも穿いた巫女のような女でもいるのかと思っていましたら、大違いで神棚などはどこにもなく、ただ普通の座敷に普通の服装の婦人が髪を七三に分けて端然と座っていました。その横に小机を扣ひかえて上品な白髪の老人が一人坐っています。その人の事をさにわというのだと聞きました。いわば審判官みたいな役だろうと思いました。

私は霊媒女の顔を見てまず驚きました。それは品の好いしかも非常に美しい、それでいて私の死なくなった妻に酷そっくりなのです。笑う時にちよつと口を曲げるところから理智的に輝いている眼、口尻に小さい黒ほくろ子のあるところまでほんとによく似ています。

私は妻の招霊をさにわから頼んでもらいました。霊媒女は眼を閉じ、姿勢を正して合掌していましたが、少時するとすつかり態度が變つて、妻に似た容子になり、

懐しそうに摺り寄つて来ました。霊媒女の体に妻の霊が乗り移つたとでもいうのでしょうか。身の態度ごなしから声音こわねまで妻の生前そのままです。妻の霊は私の手を握つて喜んでくれました。その手が大変に冷たく、妙にひやりとした感じが、後になつても忘れられませんでした。

私はいろいろ話かけてみましたが、他人という感じはなく全く妻と会っているような気持がして、嬉しさのあまりすっかり夢中になつてしまいました。聴て妻の霊は去つてしまいましたが、私は呆然として暫時しばらくは全く夢を見ているような気持でした。

『お話がお出来になりましたか？』

霊媒女はそう云つて、にっこりと笑いました。ああその顔！ 夢から覚めてもその顔は全く妻の顔でした。私は嬉しくつて胸が一杯になり、ただこの不思議な霊媒女に対して深い感謝の意を表しました。

往来へ出ても私は足も宙に歩いていました。あそこへ行きさえすればいつでも妻に逢えるという新しい希望に一切を忘れて、幾分朗かな気分になつていたのです、それで家へ帰つてからも、今日の不思議な出来事が、絶えず頭の中で往来していました。書齋にいてじっと目を閉じると、美しい霊媒女の顔が私の目に焼きつくように残っていました。その翌日もまた出かけました。

その翌日も、その次ぎの日も、私は毎日霊媒所へ通いました。

『度々お招きして霊を慰めて上げますと早く浄化なさいます。霊のために大変結構なことでございます』

と云われるので、自分も喜び、霊も慰められる。こんな有難いことはないと思つたのです。そうして通いつづけているうちに妻を失つた寂しさも段々と薄らいで行くかと思いました。

私の日課は毎日霊媒所へ通うことでした。外へ出るのはそこへ行くだけで、あとは書齋にいて何人にも面会しませんでした。

今までは夢想だもしなかつたこの不思議な楽しみに入り浸っているのは、私にとつては大きな喜びでしたが、これは他人には決して語りませんでした。もし人がこれを聞いたら何というでしょう。勝田は気が狂つたのだと、いい笑話を提供するだけでしよう。實際気が狂っているのかも知れません。迷わされているのかも知れませんが。

しかし迷わされているのでも構いません。妻に酷似の人の口から妻の言葉を聞くのですから、これ以上何を求めましょう。

独りで書齋にいる時もそうですが、時々心中で霊媒女と交した問答を繰り返しておさらいをしながら、思わず独りで笑つたりする事がありました。それを家人はま

た変に氣を廻して疑惑の眼を絶えず私の身边にそそいでいるようでした。

しかしそんなことはどうでもよかったです。私はただ妻と会える、ただそれだけで満足でしたがそれも日を経るにつれて段々と欲が出てきて、ただ逢つて、他人を仲介として話しているだけでは、どうにも満足出来なくなりました。せめて霊媒女（名は二三日目に知りました。小宮山麗子と書くことにいたします）と二人限りで直接話してみたいんです。出来る事なら始終傍に置いて好き自由に話したかったです。

処が偶然の機会から、その希望が達せられることになりました。私は家の体面をやかましく云われるもので麗子のところへ通う時は変名を用いていましたから、家へ直接来てもらうわけには行きません。しかし麗子も独身なり、私も妻を失つていたので、いざとなれば、結婚してもいいと思つていました。ただ周囲まわりの者の反対を怖れて、どういう風に承諾させたものかと絶えず考へている中に、聽て亡妻の形見分の時がまいり、私は妻の筆筒やら、手廻りの道具に一通り目を通さねばなりませんでした。今更妻が死くなった当時の記憶を再び繰り返しているような、寂しい氣持に襲われながら私はその一つ一つを開けて行きました。妻が好んで着ていたお召の小袖、あの艶やかな黒髪に挿された翡翠ひすいの飾ピンなどが、みな思い出のたねとなつて、深い離れがたない氣持をそそります。こんなに早く形見分などしなく

とも、せめて一年も置いても差支はなさそうに思われるのに、何故こう周囲の人達は物事を早く形付けてしまいたがるんだろう。などと幾分愚痴も出て、私は一つずつ丁寧に見て行きますと、ふと帯の間に挟んだ白いものが目につきました。何気なく引き出すとそれは白の角封筒にかかれた妻宛の一通の手紙でした。差出人の名はありませんが明かに男の手蹟です。それもかなり古いらしく処々に汚点しみがあります。私は何か見るべからざるものを見たような思いがしまして、それを手に持った儘迷いました。見ようか見まいか、何事も無い清浄な妻として考えていたい。という思いと、何かしら凡てを知りたいという欲望とで思い迷った揚句、遂に内容なかにを出しました。それは妻の従兄いとこに当る海軍々人から来た手紙でした。別に大して怪しむべき文句は書いてないんです。誰に見せてもこれで直ちにどうこう云えることは少しもありません。どこかで一緒にお茶でも喫んだらいいだけです。しかし妻は彼に会ったことは秘かくしていましたから、私は少しも知りませんでした。ただそれだけなんです。私には何と云つたらいいかこの文句以外に何かある物がひそんでいるような気がしてならない。この白いレターペーパーから、文字以上の文字を読もうと焦りました。嘗かつてこの人との間に縁談があつたと妻が云っていたことを思い出して、聞いた時はそのままに流してしまつた事柄を、急に大事件のように記憶から呼び起しました。すると一度逢つたことのあるその男らしい顔付までが私を悩ませます。こう

して帯の間に秘して納しまつてあることが、普通の人から来た普通の手紙として破くに忍びなかつた妻の心を色々と想像して、私は煩悶しました。何か二人の間に云えない秘密があつたのではないかと疑いました。私がこんなに熱愛していたのに、こうして鍵のある抽出しに秘しておく、女の周到な用意を憎みました。そこで残酷だとは思ひながら私は麗子を通して妻の霊を招び出し、そのことを詰問してみようと思ひ付きました。処が生憎その日は六条伯爵家に招かれて行つて不在だということです。会えないとなるとなおさら会い度くなるのが私の性質です。殊に妙な疑いを抱いているので、一刻も早くその真相を知りたい、それなのに居ないという、これはてつきり逃げたなと思ひました。私は妻と麗子とを混同してしまつていたんです。さあそうなるともう落付いてなんかいられません。遂々麗子の帰りを待ち受けて、時間も大分遅かつたので私の家へ連れて行きました。

麗子は前々から一度私の家へ行つてみたいと申していましたから、悦んで従いて参りました。もうその頃私と彼女との間には一種の親しきがありました。

麗子だつて満更私の考えが分らないはずはありません。私の家は小人数の割に大きくて、殊に庭が広く、池の向う側には茶席があつて、私はよく親しい友人を招いたりしたものです。茶席に行くには門を入つて玄関の傍にある紫折戸しおりどを開いてすぐ庭伝いで行かれるので、誰にも顔を合せずに行く事が出来ます。私は彼女をそこへ

案内しました。もうその頃はすっかり変人になりきっておりましたから、家人とは没交渉で、夜更けて帰って来て、そのまま母屋には帰らず、茶席で夜を明すような事があつても、家の者は別に怪しみませんでした。呼ばなければ女中も来てはならないことになつていたので、こういう場合にはまことに好都合でした。

翌日は風を引いたと云つて、母屋から女中に食事を運ばせ、麗子と二人ぎりの楽しい世界を作つて終日閉じ籠つて居りました。私は度々妻の招霊を頼みましたが、どういふわけか嫌がつて、

『あなたは私が霊媒女で奥様をお招び出しするから私がお好きなんで、私という者には何の興味もお有りにならないでしょう。私はあなたに霊媒女として取り扱われるんなら何もこうしてあなたとご一緒にいる必要はないから帰りますわ』

と駄々を云つてなかなかやつて呉れません。しかしそれではせつかくこうして連れて来たのに何の役にも立たない、それでは困る。結局いろいろと宥めすかして、やつと招霊を承知して呉れた時はもう夜も大分更けていました。

夕方から降り出した雨に風が加つて、板戸へ打つかる雨の音に言葉を奪われながら、私は一生懸命になつて妻と話しました。第一の質問は無論手紙です。詰問に対して妻は何の躊躇する容子もなく、すらすらと手紙の男と自分との関係を云つてしまいました。

世の中に疑惑ということほどねばり強く、恐ろしい力をもっているものはありません。私はその恐ろしい力に心を掻き乱され、半狂乱のようになって、事実をたしかめようと焦りました。何という愚しい考えだったのでしょうか。もう妻はこの世の人ではありません。それなのに、嘗てはその人の心身共に自分がすっかり握っていたのだという安心を得ようと悶える。何という浅間しい事でしたでしょうか。池の蛙が鳴いているのが風の合い間に聞えます。山の手も市外に近いこの辺は静かなものです。私の目の前にいる麗子は細面の下膨れで、その長い睫毛に被われた夢みるような両眼を軽く閉じて口許に可愛らしい微笑さえ浮べながら、昔の恋人との話を楽しそうに語り出すのを聞いて、ぬらぬらとした汗が額から流れました。私は段々興奮してきて、いよいよ執念く根掘り葉掘り訊きただしました。しかしどうも肝心の私の知りたいことは恐ろしくて訊けませんでした。ただ遠巻きに探りを入れてくれるだけで、どうもそこへは話が入って行きません。こんなにも真実のことは怖ろしいものかとつくづく思いました。それなのに、麗子は平気でもなげに自分の方から喋舌しゃべってしまいました。私はハツと思うと一瞬間自分の息が止ったかと思いましたが、するとこう全身の血が皆頭へでも上ってしまったものか、体中が急に寒く、明るくなったり、灯火が渦巻いているようでした。夢中で立ち上るといきなり麗子

に掴みかかりました。麗子の柔かい肉に私の両手が力一杯働いたとしか覚えていません。それと同時に彼女の悲鳴をききました。恰度あなたが堀割の傍で小蛇にからまれた時のような悲鳴。今でも耳にこびりついて離れません。

気がついた時は私は実に怖るべき大罪を犯していたのです。白日の下に罪の裁きを受けねばならぬ身となりました。麗子はもうぐったりと倒れて、息は絶えて居りました。

私は茫然として少時の間は無意識状態に陥ってしまったって悲しくもなく、恐怖もなく、まるで空洞うつつの心で目の前の死体を眺めていました。

一時止んでいた雨がまた降り出しました。遠くの方でまた蛙が鳴いています。私はこの蛙の声を今だに忘れません。気が落ちつくと急に怖ろしくなりました。

最初は自首して出る決心で、夜の明けるのを待つておりましたが、その時ふと頭に浮んだのは娘の事でした。申遅れましたが私に一人の娘があるのです。その娘は本家の勝田男爵の家を継ぐ事になっています。勝田家には子供がないので、娘は生れると直ぐに養女に貰われて本家に育っているのです。手許ふだんにいないので、平常は大して気にならないのが、急に心配になりました。母に似て美しく生れた上に、養父母に非常に愛せられ、聽てあの巨万の富を受け継いで男爵夫人となる輝かしい前途を有もつ身なのです。それが私の自首一つですっかり覆えさってしまうのだと気

がつきました。幸福の絶頂から不幸のどん底に突き落される娘の身を考えました時、私はすっかり迷いの夢から醒めました。馬鹿々々しい、狂気染みたこの頃の行い、ましてや今犯した恐ろしい罪——。私は、迎もオメオメと生きてはいられません。机の抽出しにはモルヒネのアンブレも入っています。カルモチンもある。

しかし今私が死んだら世間の人は何というでしょう。美人霊媒女と情死、ああそれは堪えられません。

悶えると云いますか、悩むと云いますか、世のあらゆる言葉を以てしてもまだこの心は云い切れません。私は一夜にして百年の年をとったように思いました。その揚句一つの考えが頭に閃きました。それをこの上ない名案として今日まで実行してきたのです。

その考えというのは、この死体を秘密にどこかに隠して一二年生き延び、世間の噂の絶えた頃に自殺してしまうということです。

私は四五年前からある信託会社の地下室の保護金庫を借りて居りました。一間四方位の大きさのものです。その金庫は、当人と会社とが有っている合鍵を同時に用いなければ開けることの出来ない、非常に嚴重に出来たものです。私は麗子の死体をトランクに入れて、その金庫の奥へ秘したのです。そうして二ケ年間先払いで預け、病氣保養の名の下に海外へ旅出たびだちました。

信託会社では私共は信用されて居りますし、長い間の得意ですから、決して疑うような事はありません。それに私の神経衰弱は随分久しいことなので、外国へ行って気を変えて来ようという考えが出たのを、親類の人達は大賛成で喜んでいるので、すから、これまた好都合でした。

私はフランス、イギリスと遊び歩いていましたが、始終その不安が附き纏って、誠に生ける屍そのものです。何の興味どころか、ただこうして時の経つのを待つているその苦しさ。自分から求めたこととは云え、何という愚かしいことでしょう。何か妻の事を考えると引いて麗子の事が必ず頭に浮び、それからまた苦しみます。

嘗ては優しい思い出となっていた妻の事さえ、もう考えられない気持になつて、私を憐れんで下さい。一時の感情とはいえ讒言うわごとのような言葉に興奮して、殺人罪まで犯すようになった自分の愚さに思い至ると、全身恥と悔のために冷汗をかきま

す。
私の昼夜は煩悶の連続です。ああ心から笑い、心から語れる幸福は何と尊いものでしょう。

自殺、もうそれより自分を救う途はないと思えます。もう生きていることが苦しい。

この頃は死ぬことを考えて、そこに一道の光りを見ます。もう心の苛責に堪えな

がら生きつづけることが、私には出来なくなりました。この上自分を苦しめるのは我身ながらも余りに可哀想です。あなたにだけお打ち開けしたこの偽いつわらない告白をあなたがどういう風に所置なさろうと、それはあなたの御自由ですが、一人の娘の幸福を守つてやるために、苦しい二年をやつと過して、あなたがごらんになったような、精も根も尽き果てたこの生きながらの死体の私にご同情下さるなら、娘の幸福を打ち砕いてしまうような事は決してなさるまいと信じて疑いません。

4

私は読み終つて夫人に手紙を返した。彼女は手箱の中にそれを納いながらいうのだった。

「後になつて勝田夫人の写真を見ましたが、私は勿論のこと小宮山麗子だつて少しも似ては居りませんのよ。これは全くあの方の錯覚で、相手になつてゐる女の顔は、皆夫人に似ているように思えたらしいんですの。しかしこの手紙で云つてゐるのが事実だとしたら、日本の警察へ送つて上げなければなりませんまい。と、夫に相談い

たしましたら、夫は笑つて『精神病者の創作だろう』と申しましたので、その儘放つておきました。

すると一ヶ月ほどして内地から来た新聞に、

『某信託会社の保護金庫内よりミイラ現わる』おおみだしという大標題で、勝田家の借りていた大金庫内のトランクからミイラが出たということが出ていました。聽てまたそのミイラは勝田夫人であつたと報じてありました。私は夫と顔を見合せて苦笑いたしました」

機密の魅惑

1

「ある夫人——それは私の旧友なのですが——からこうした手紙を度々受取らなかつたら、恐らくこの事件には携らなかつたろうと思います」

S夫人は一束の手紙の中から一つを抜き出して渡してくれた。それは藤色のレター紙に細かく書かれたものであった。

S夫人！

私はもうすっかり疲れてしまいました。

こんどの任地では徹頭徹尾失敗です。夫の愛は彼女に奪われ、在留民からは異端者のように白い眼で睨まれ、私のすることは、善かれ悪しかれ悪評の種になってしまっています。つまり猫かぶりではなくては成功しない土地で、心にもないお世辞を云い、見え透いたお上手をやらなければいけないかったです。自分の信ずるところを卒直に云いあらわしては駄目なのだということに早く気がつかなかつたのは、全く不明の致すところで、今更悔んでも追つきませんが、それも一つには私を陥れようと計画たくらんでいる彼女が、遠くから糸をひいていたことに原因するとも思います。私の運命の綱を彼女が握っていて、思うままに振り動かしているような気がします。夫

は彼女なしでは一日もいられません。

彼女、即ち笹屋の有喜子はどんな女だということをおちよつと申上げましょう。笹屋というのは当地では一流の茶屋でございます。有喜子はその内芸者で、去年夫が赴任いたしましたのと殆ど同じ頃にハルピンから流れてまいった女でございます。素性はよく分りませんが、妖婦型の凄腕を有っていると専ら評判をいたして居ります。

背が五尺四寸もあるので洋装がよく似合います。睫毛が長いせいか、それだけでなく黒眼勝の大きな眼が一層真黒に見えるのです。青味がかかった皮膚に真黒い眼だけでも何となくひやりとした感じがいたすものですわね。それに肉のないすうツとした高い鼻というものはまた温味にとほしいものでしょう。西洋人のようではない格好と云えば云えますが、そういう眼鼻だちのせいか、口許などの可愛らしい割にどうも顔全体の感じは冷たさを通り越して、残忍性を帯びているようにさえ見えるのです。しかしこの位整った顔はまずちよつとないでしょう。彼女は確に美人には違ひありません。少なくとも外形だけは非常に美しいのですから。

御承知の通り、私は子供の学校の都合で一年ばかり遅れて夫の任地へまいりましたでしょう。その間に夫の魂はすっかり有喜子に浚われてしまっていたんです。女手がなくて不自由だという事もあったのでしようが、彼女は段々と入り込んで寔

会などのある場合には先立ちになって何かと指図をしていたそうです。館員達にもうまく取り入り、まるで奥様気どりでいた処へ何も知らない私があとから参つたのでございます。

かげでは毒婦だの妖婦だのと悪口云っている人でも、有喜子に一度会うと好きになつて皆味方になつてしまいます。とにかく不思議な魅力を有っている女で、普通の人とは大分違つている点が沢山ございます。第一夫を盗まれて敵のように恨んでいる私の処へだつて、平気な顔をして遊びにやつて来るんです。それだけだつて變つて居りましょう。

失礼な女だ、厚かましい奴だと最初は玄関払いで面会を拒絶した私が、いつの間にか根負けして渋々ながらでも会つたり、話したりするようになってしまいました。そして大抵の女なら秘かくしたがるような事までもずばずばと平気で先方からきり出すという風なのです。

『奥様は旦那様と私との關係をどう思つていらつしやるでしょう？』などと申します。何だかこちらが照れて横を向きたくなるじやありませんか。

『疑つていらつしやるでしょうね。またお疑うたぐりになるのが当然なんです。私が故意わざと皆にそう思わせるように仕向けているのだ、という事をご存じないんですから御無理はございませんが、でも正直な処を白状しますと、二人の間は何でもないんで

すのよ。ただそう申上げただけじゃあお信じになりますまいから、一つ今日は私の秘密をお打ち開けいたしましょう。極く内密なお話なんですけれど、奥様にだけは申上げておく必要がありそうですから、それに世間の人はどう誤解しようと構いませんが、せめて奥様にだけは私の本当の心、否いなえまあ、旦那様とそんないやな関係がないという証拠を知っていらして頂きたいんでございますの。

実は旦那様と私とは敵同士なんです。随分古いお話ですが、旦那様の下役のある男が官金費消罪で刑務所へ入れられ自殺したという話をご存じでございましょう。あの当時はまだ領事裁判がありましたから、あの人は旦那様のお裁きを受けたのでございます。

ある男、その人こそは私の大切な許嫁いいなすけの夫だったのでございますのよ。私は未来の外交官夫人という華やかな生活を夢みながら、私と結婚するために賜暇しかきちよう帰朝する彼を待つて居りました。処がまあどうでございましょう。彼はそういう罪で入獄する、つづいて縊死を遂げたという悲報に接しました時の私の心持ち、まあどんなだと思いにになりますか？　まるで天国から地獄の底へ逆落さかおとしにされたようなものではございませんか。

私はあの男の犯した罪を考えるより先に、何とかして助けて下すつてもよさそうなものだ。御自分の部下だったのじゃないかと却って逆恨みに、裁判した方を蔭で

はお恨みして居りましたんです。許婚の夫に自殺されたんで私の心はすっかり變つてしまいました。夫に官金費消罪を犯させた土地にまず第一に乗り込んでまいり、そこをふり出しに転々と流れ歩いて居りますのですが、そういう事情があるので、いくら御鼻屑にして頂いていても敵の旦那様とどうこういう関係にはなれません。ですからその点はどうぞ私を御信じ下すつて御安心遊ばして頂き度うございます』

私は早速主人に話しますと、そういう事實はあつたそうですが、それが果してあの女の許嫁の夫であつたかどうかは分らないと申します、もしそれが實際なら気持ちのいい話ではございません。

有喜子はまた平気で『旦那様も敵なら、奥様だつて敵の片割ですよ。だから敵を狙う私の名が有喜大尽うきだいじんで笹屋と申す茶屋にいますのさ』つて笑つてしまいます。

またこんなことも申します。

『私位復讐心の強い女はまあございませぬ。しかしいくら相手が敵でも闇打ちにするような卑怯な真似はしません。正々堂々と名乗りを上げて果し合うんでなくつちや面白くありませんですから、私はちゃんと予告をいたしますよ。まあ御安心なさいませ』と半分冗談のように云うのですが、そういう話をする時の有喜子の態度も真剣なら、真黒い眼が底光りがしてきて何とも云えず凄いのです。私は何となく薄気味が悪くてなりません。もう会うまいと思つて一度面会を避けたのです、す

ると私の心を直ぐ察して申しました。

『奥様は私に会うのが不愉快で避けたいと思つていらつしやるのでございましょうが、それは大間違いです。大抵の奥様方というものは、御自分の御主人と関係でも出来た女は寄せつけまいとなさる。それがいけないんです。怪しいなと思召おほしめしたらなお一層近づけるのでございますよ。大切にされ、心から親しまれ、可愛がられるといくら悪辣な女でも、そこは差控える氣になつて非道ひどいことは出来なくなるものなんです。尤も私の場合は違います。私は敵を打とうと思つて敵に付き纏つているんですから、しかし私を寄せつけまいようになさろうとすると危険ですよ。予告が出来ないから不意打ちを食う恐れがあります。御要心、御要心』

私は有喜子が厭で厭で仕方がないのですが、どうも逃げるわけにまいりません。敵だ敵だと云うのですが、それが冗談にいうのか本気で云つていいのか分らないんです。しかし彼女の云うことが果して本心から出ているものとする、夫はまるで爆弾を抱いているようで危険ですから注意しますと『あの女はいろんな創作をやるんで面白いんだ。本氣になつて心配している処をみると、大分今度は上手に出来たらしいな』と申して主人はてんで相手にもしないのでございます。

しかし私は何となく不安でなりません。先便でも申上げましたが、この土地へ着きました早々に怪我をしました話ね、あれも有喜子の計略に乗つたのだということ

が最近になって分りました。上地の様子を知らない私が、突然お祭礼の御神輿を館舎にかつぎ込まれて、どうしたらいいかと狼狽ろうたえているのを見て、彼女は私を後から押し出すようにしてヴェランダへ突き出したんです。すると御神輿を高い処から見下したというので若者達の怒いかりにふれ、私はヴェランダから地面に引きずり落され散々な目にあいました。その事が抑そもそもこの土地で不評判になった最初だったんですの。

その時しどけない寝間着姿だったと云い触らした者があって、一層人々の反感を買いました。私は寝間着など着ていたのではありません。咄嗟の場合で、しかも男の人の眼に寝間着だか、平常着ふだんぎだかそんな見分けがつかずがありません。それも有喜子がでたらめをしゃべったのです。

その時の若い人達の権幕に怯こえてしまつて、私は日本人が恐くなつてしまいました。その上何のかのと蔭口を云われ、逆ともうるさくて堪らないので、もうどこへも出まいと決心して西洋人以外の公の会合には一切顔を出さないことに定きめてしまひ、わずらわしい交際を避けてさばさばしていると、それがまた今度は婦人連の反感を買うものになつて、評判はますます悪くなるばかり、散々に味噌をつけてしまいました。もうほとほと厭いとになつたので、帰朝して静かに子供を教育しながら留守宅を守つていようかしらと思つて居ります。しかし私がいなくなつた後の有喜子

の事など考えますと、意地にも夫の傍を離れるのがいやになります。『いよいよ敵打ちの時期が近づきました』などと変に怯おびかすように申されますと余りいい気持ちいたしません。こんな女の申す事など本気で聞いても居りませんが、それでいて何となく底気味悪い不吉な予感に襲おわれるのでございます。

手紙を読み終るのを待つてS夫人が云った。

「こういふ音信を受け取る度に、いろいろと慰めの返事を出して居りました。そのうちに便りがふつとりと途絶えてしまい、一ヶ月ばかり過ぎますと突然直ぐ来てくれという電報を貰ったんです」

「覚えて居りますわ、でもせっかくあんなにお骨折りになったのに肝心の夫人はお亡くなりになってしまつて——、やっぱり自殺だったのでございますか？」

「さあ、それをこれからお話ししようと思つたのですの、もうあれから二ケ年も経ちましたから、お話ししてもいいだろうと思つたのですよ」

夫人はスクラップブックを開いて、当時の新聞記事を見せてくれた。

『淋しく残る荷物に死の予感——、宮地（仮名）夫人謎の死』という題で、

『四月二十五日午後零時三十分神戸発の急行列車が東京駅に着いて乗客は全部降車したが二等車の中に、パラソルとシヨール、鱔皮のハンドバッグ、小さいスーツケース一個が遺留されて居り、荷物の持主の姿がどこにもない。事によると途中で振り

落されたのではないかという疑いがあるので大騒ぎとなり、神戸東京間各駅に手配した結果、国府津附近に胴体を轢断され即死している婦人を発見、調査の結果宮地（仮名）夫人で夫の任地から上京の途中この奇禍にあったもので、自殺か、過失死か不明である。同列車の車掌伊藤春吉君は語る。

「列車が裾野駅近くを通過している際デッキに立っていた外国帰りらしい美しい夫人が『電報を打って頂きたいのですが』と云って電報用紙を私に渡し、そのまま食堂車の方へ行きました。小柄な方で、紫色のような服装をしていたのだけは覚えていますが、他には何も心当りはありません」

なお現場検視に立会った駅員曰く、

「遺書らしいものも発見されませんので、自殺らしいとも思われません。多分カーブの地点でデッキにでも立っていられた、その際振り落されたものではないかと思えます」

自殺か、過失死か、あるいは他殺か、遂に明らかにされなかった。まして私はS夫人がその謎の鍵を握っているとは少しも知らなかった。

2

夫人は冷えきった紅茶を一口飲んでから云った。

「どの新聞にも宮地（仮名）夫人とだけで本名は明かにされてなかったでしょう。少し差支えがありますから、残念ながら、地名も御主人の地位も本名も云うことは出来ません。従って大使館であるか公使館であるかまたは、総領事館であるかそれはすべてあなたの御想像に任せます。しかし名だけは仮に宮城野総領事夫人とでもいたしておきましょうか。某夫人では余りに漠然としてしまいますから。

私は電報を受取った夕方にはもう出発いたして居りました。かの地に着きますと宮城野夫人のお住居へ馳けつける前に、まず市内のあるホテルへ室へやをとりました。そのホテルは日本人経営のもので、土地の事情を知るには一番便利だからと紹介状まで貰って行ったのでございます。

私は夫人がもっと早く電報をよこすだろうと思っていたのです。というのはどういう事件が起ったかを知っていましたがからです。それは十日ほど前に例の妖婦笹屋の有喜子が何者かに殺害されたのです。しかも場所が宮城野夫人の邸の附近の往来だったので、それだけでなくも評判の悪い矢先ですから、とんだかかりあいにもな

るといけない、困ったことが出来たと人知れず心を痛めて居りました。何故なら有喜子は夫人の夫と関係のある女でしたから。

それで私がホテルに室をとった理由もお分りになりました。在留民間では彼女をどういふ風に見ているかを知りたかつたのです。ただ評判が悪いというだけの夫人の手紙では、はつきりしたことがわかりません。何故そんなに評判が悪いのか本当の処をよく調べてみなければならぬと思いました。

私は早速ホテルの女将おかみにいろいろ訊いてみました。総領事夫人とは一面識もないような顔をして云つたのですが、

『この前の総領事さんの奥様が余りお優しい、いいお方でしたので——』
と言葉を濁してしまいました、探りを入れているのだと感づいたのかも知れませんが、そこで私は少し夫人の悪口を云つて釣り出してみようかと思いました。

『宮城野さんは大分御評判がよくないじゃありませんか、威張つてるんですってね』
こういう女の社会で何より嫌われるのは威張つてるといふことなのです。私は故意と顔をしかめて、言葉に力をいれさもさも憎々しそうにいつてやりました。すると女将はすぐ同意して、

『そうなんでございますよ。ほんとに威張つてらして——、御自分だけは御身分が違ちがうんだなんて、容ようす子をなさるものですから、皆さんに憎まれていらつしやるんで

すの』

『総領事夫人を鼻にかけて、土地の古株の奥さまがたを立てないってわけなんですよ。お寄り合いだの会だので我儘をなさるんじやありませんか?』

『否え、そういう処へはちつともお顔出しなさらないでございませよ。いくら御招待してもお断りになるんでございませよ、その癖、西洋人の会ならさつさと先立ちになつてお出ましになりますから、皆さんが気持ちが悪くなすつて怒るのも無理はございませんの。日本人を馬鹿にしているんだ、生意気だ、などと蔭では皆さん悪口を仰しやるんでございませよ。それにまたそう云われても仕方のないようなことをなさいませもんですから』

『どんなことをなさるんですの?』

『一々は覚えて居りませんが、一度なんかこんなことがございましたよ。この土地の習慣をよく御存じなかつたんでございませよが——、恰度総領事さんの奥様が当地にお着になった頃は神社のお祭礼時でしてね、それに本祭りだったものですから大変な賑かさだったんでございませよ。吉例によつて第一番に御神輿様が総領事館に参つたんでございませよ』

『敬意を表しにですか?』

『左様なんでございませよ。御神輿様を総領事館へかつぎ込みますと、そこで一同へ

御酒のお饗応むかひがあつて後、奥様がお挨拶にお出ましになり御祝儀を下さる、それがまあ例なのでございます。そういう事を御存じなかつたのでしようが、恰度御神輿様があの坂をねりながら上つて総領事館の表お玄関に着きました時、奥様がふらふらとバルコニーへ最初お姿をお出しになつたそうですが、間もなく降りていらしてお玄関傍のヴェランダから黙つて見物していらしたんでございます。お邸が坂の上の小高い処にあるものですから、まるでお神輿様を見下していらつしやるような形だつたので、気の立つている若い者が怒つてしまい、そのうちに誰だか奥様は寢間着じやないかなどというものも出てまいり、神様を高い処から寢間着で見下すとは怪けしからん。引きずり落ちちまへつてわけで、気の早い者がヴェランダへ駈け上つて奥様を引きずり降り、散々な目におあわせしたんです。遂々とうとうお怪我までなすつて、書記生さんの白石さんが馳けつけて来なかつたら、どんな事になつたか分りませんでした。それでございます。皆酔つぱらつて居りましたことですし、誰が下手人だか分らず、奥様はお怪我のなされ損で、それがために御評判がすっかり悪くなつてしまつたんでございます』

『まあ珍らしい変なお話ですね。最初からそんな事があつちやあ、宮城野さんでなくつても怖気おしけがさしてしまひますわね』

私は在留民がいくら酒に酔つていても総領事夫人に怪我をさせるなんて馬鹿な話

はないと心では思つて居りました。

『それからもう町へはふつつりとお出ましにならなくなり、日本人の会合の席へも一切お出になりません。お顔をお出しにならないからなおいけないんで、奥様も嘸ぞお氣をくさらしていらつしやることでございましょう』

『お氣の毒ですわね、旦那様は笹屋の女とどうかいうんだそうですしね』

『有喜子、殺されましたよ、あの女は』

『まだ犯人は分らないんですか？』

『犯人なかなかなかなか分りやいたしません。こういう処はいろんな人が入込んで居りますから人殺しをやつても上手に逃しちまつたりしてね』

『総領事さんも相手の女が殺されたんじや氣持が悪ういでしょうね、非道い殺され方をしたとか新聞には出ていましたね』

『あの女も逃げようと思えば逃げられたんでしように、氣が強いから逃げなかつたのでございましょう。いろんな噂をいたして居りますよ。犯人は支那人だとか、殺し方が男のようではない、嫉妬でなければあんなむごたらしい殺しようは出来ないものだ、これは必ず恨みのある女の仕業だろうなんて——』

『女ですって？』

『顔をめちやめちやに切られたんだそうですの、有喜子はまた特別綺麗な顔をして居

りましたから——、あんな残忍な殺し方は男には出来ない。それに何のためにあんな時刻に淋しい総領事館あたり附近まであの女が出向いたんだろうというのが、不思議がられているのでございますよ。きつと誰かにおびき出されたに違いないなんて——』

『でも——、有喜子はふだん総領事館へ出入りしていたんでしよう？』

『まア、よく御存じで、奥様は表面ではそれは優しく有喜子を可愛がっていらしたそうでございますよ。でも有喜子は奥様の事を恐い方だ、恐い方だ、と申していつか私敵を打たれるワ、なんて笹屋の女将に云っていたそうでございます』

『まさかね。不評判もいけれど殺人嫌疑までかけられちゃかなわない』

『全くでございます。馬鹿な事を申す者があつて困ります』

『新聞にはあの晩、若い支那人とあの淋しい道を歩いているのを見た人があるとかいうじゃありませんか？』

『それが支那人でなくつて、書記生さんの白石さんに似ていたなんて云う人もございましてね、——新聞に出ているのとはまるで違ったことを噂して居りますよ。只今はもうどこへ参つてもこの話で持ちきりでございます。いやでございますね、こんなお話は早くおしまいにして、もつと面白い事が聞き度うございます』

3

宮城野夫人は想像していた以上に憔悴していて、まるで病人のように青い顔をしていました。私を見ると一言も云わないうちにもう涙ぐんでしまいました。

『よくいらして下さいました。ほんとによく来て下さったのねえ』

私は夫人の心中を察して何だか胸が一杯になりました。

『貴女のお部屋も定めておきましたから、どうぞしばらく御滞在なすって頂戴な。お力になって下さる方もないし、私独りぼっちでほんとにどうしていいか分からないんです』

すっかり意気地なくなっている夫人を私は励ますように云いました。

『あなたらしくもない、もっと元氣をお出しなさいよ』

『まあ少時しばらく御逗留下すって、私の日常生活を見て下すつたら、何もかも分りますわ。さあお部屋へ御案内いたしましょうか、お荷物は？』

『あの——、町のホテルに部屋だけは取っておきましたの』

『あら、ホテルに？ 日本人のでしょう？』

3 「どうぞ」は底本では「どうぞそ」

と直ぐ夫人は厭な顔をして、

『じゃもういろんな話を聞いていらしたんでしょう？ 私の評判、随分悪かったでしょうね、でも、もう仕方がないんですの、取り返しがつきませんもの。私つくづく厭になってしまったから、東京へ帰って静かに暮らしたいと思ってましたけれど、またこんないやな事件が突発したんで、帰るにも帰れなくなっちゃいました』

『だって御自分に疾やましい事がなければ構わないじゃありませんか、人の思惑なんか気にする事はないわ』

私は慰める積りで云ったんです。するとそれをどう聞いたのか、夫人は唇の色まで変えて険しい眼をして申しました。

『また何か私の事を云ってるんですか、きつとそんなことたろうと思つてました。じゃあ何んでしよう？ 有喜子を私が殺したと云つてるのね、悪い事は何でも皆私におつかぶせてしまふんだから非道いわ』

『否え、別に誰もあなただとは云つちやいせんよ』

『いいえ云ってるんですわ、きつとそうです、そうに違いないんです』

夫人はヒステリックな声で云いながら暗い顔をしているのです。私は何だか気の毒になつて、

『一体あなたにはこういう土地は不向きだったのね』

と申しますと彼女は苦笑してうなずいて居りました。

『そうなんですのよ。でも有喜子がいなかったら、こんなことにもならなかったと思うんですの、有喜子は私を追い出して、総領事夫人になろうという野心があったんだそうですから、あの女の計画たくはみでは私の評判を悪くして土地に居たたまれないようにさせ、この家に乗っ取る積りだったんだそうですよ』

『でも、まさか総領事さんともあろう人が、素性も分らない女を令夫人にはなさるまいじゃありませんか』

『否え、主人は私が退けば必ずあの女を妻に迎えたろうと思えますわ』

『仮にそうだったとしても、あの女は死んじまったから、もうその問題は消えたわけじゃありません？』

『その問題は消えても、他の事で私を苦しめているじゃありませんか。殺人嫌疑をかけさせるなんて、死んでからまでまだ私に仇をしようとしているんですわ。しかしその事は何と疑われたって私は平気ですが——』

宮城野夫人は急に眉を深く寄せ、声をひそめて云うのです。

『そんな事はどうだって構わない。今、実はもつと重大な問題に悩まされているんですの、あなたにいらして頂いたのもそのためなんですわ』

『殺人事件よりも重大？』

『大変な事なんですの。私達にとつてはね』

夫人は他聞を憚るからと云つて、寢室に続いた彼女の居間に私を案内いたしました。そこは小じんまりとしていて畳が敷いてあり、日本風に飾りつけてありました。聞けばその部屋は私のために空けておいてくれたのだそうです。

ふつくらしした紫縮緬ちりめんの坐蒲団の上に座ると急に寛いだようない気分になつて、落ついて話が出来るように思いました。薄暗い大きな応接室で見た時よりも、夫人の顔もいくらか明るく見えました。わざと召使達を退けて、夫人自身で紅茶を入れたり、お菓子を取つてくれたりしました。

私はそこで夫人から重大な話というのを聞きました。

『今から恰度十日ばかり前になります。有喜子が殺されたと同じ晩に、総領事館では大宴会があつたのでございます。その時、白石という若い書記生がすっかり忘れていたある急な用件を思い出し、宴会の席をこつそり脱け出して、オツフィスに入り急いで用事だけすませ、慌てて外へ出ようと扉ドアを開けますと、すうつとまるで風のような早さで出て行った黒い影みたいなものがあつたんです。自分の傍をすりぬけた時、ふうんといひ香水の香が四辺あたりに漂つたそうですが、とにかく白石が呆氣に取られてゐたすんで居る間に、その黒い影は忽ち門衛に捕まつてしまいました。

何者だろう？ オツフィスの中に忍び込んでいたものに違ひない、どうも女らし

い気がする。白石さんは好奇心にひかされて門衛の傍へ近づくと、黒いヴェールに包まれて、顔はよく見えなかつたようですが、背の高い女で、

「白石さん、私よ、何とかして頂戴な」と哀願するような調子で云つたそうです。白石さんは、好い気持にはなつていたし、女から自分の名を呼ばれたのでふらふらと助けてやろうという気になつたそうです。

「何んだ、君か、そこまで僕が送つて行つてやろう」と云つたので門衛は大変に恐縮し、自分の粗忽を詫びて二人を門の外へ出してくれました。するとその女は立ち止つて彼の耳もとへ口を寄せながら、

「お約束だつたから来たのですが、遂々お目にかかれませんでしたの。でも、内緒よ。でないと総領事さんに、叱られますから」

白石さんはその時始めてその女が有喜子だつたことを知りました。

門を出て少しばかり一緒に歩いたそうですが、女がしきりに、一人で帰るから送つてくれなくともいいと辞退するので、そこで別れることにして握手を求めたのだそうです。すると黙つて左の手を出したので、少しお酒に酔つていた彼はその手を払い退け、ポケットの中の右手を無理に引張り出して握つたら、有喜子が小さな声であつと云つて手を引込めようとするのを、ぐつと握つて、そのまま別れたのだそうです。

その時に何か変にねばっこいものが手についたが、暗くてよく分らないので、そのまま自分のポケットの中でハンケチを握りしめて拭いてしまったと申します。それから五六歩も歩いて、ふと振り返ってみると、いつの間はどこから飛び出したか、誰か男と肩を並べて歩いていたようですが、ああした女の事故、いろんな友達を持っているだろうし、ちよつと嫉ましい気持ちになつて、後姿を見送っていました。が、臆て二人は暗い横道へ曲つて行つてしまつたそうです。

さて宴会が済んで、自分の寢室へ退いてから、白石さんは握手した時、彼女の手が変にねばねばしていたことをふと思ひ出して、何心なく自分の掌を見ますと、処々に赤いものがついているというのです。

オヤと思つて見ると何だか血のような色をしているので、いつどこで怪我をしたのだろうとよく改めてみましたが、どこも怪我はして居りません。

怪しいなと思ひながら拭こうと思つてハンケチを出しますと、皺くちやになつたその白いハンケチにも処々血がこびりついているのです。変なこともあるものだと思ひながら、夜も更けていたし、そのまま眠つてしまつたと申します。

翌朝オツフィスに出た時は、もう昨夜の事など殆ど忘れて居りましたが、総領事の命で書類を金庫に出しに行つた時、金庫の扉の前に一滴ぼたりと血がたれているのを見て、はつと思ひ同時に昨夜のことが頭に浮んでまいりました。すると何とい

うことなしに不安な気持ちに襲われて、前後の考えもなく血を拭おうとしたが、血はもう乾いて床にこびりついていて拭きとるのに骨が折れたそうです。それから金庫の扉を開けようとすると、扉のところによれよれになった護謨ゴムのようなものはさまっついていて、開ける拍子にぼろりと落ちたので、それも拾って、ハンケチと一緒にポケットの中に入れてしまいました。

それから間もなく白石さんは確かに自分が総領事から預って、金庫の中へ納しまつておいたはずの秘密書類が全部紛失しているのを発見したのです。そのためいま騒ぎをしているのですが、世間へ知れると面倒なので極秘裡に取り調べているのでございませぬ。もしこれがいよいよ公になりますと主人もこのままではすまされませぬし、一大事件だということで皆青くなつて居ります。

その中でも白石さんは一層煩悶して見て見るも気の毒なほど弱つて居ります。時間から考えますと彼と別れてほどなく有喜子は殺されたことになるのです。それだけでもいい加減気持ちの悪い処へ、金庫の扉にはさまつていた護謨ゴムのようなものをよくよく見ると、どうやら人間の指の皮らしいのです。調べた結果、有喜子の食指ひとさしゆびの内側がそげていたということなども分つてまいりました。

しかし有喜子が何のためにオツフイスに入り込み、金庫の扉に指の皮まで残して去つたのかは分りませんでした。秘密書類が紛失している処を見ると彼女が盗んだ

ものとしか思われませんが、そんなら何故盗む必要があったのでしょうか、まるで見当がつかないのです。

白石さんが怪しいじゃないか、などと云い出すものが出て、段々彼の身边に疑惑の眼をそがれるようになりました。實際あの晩の彼は疑いを受けるに充分な過失ばかりをやって居ります。大切な用件を忘れていたからとはいえ、宴会中にぬけ出してオツフィスへ入っていたというのも考えようによつては少し変です。おまけに扉をよく閉めておかなかつた、だから有喜子に入られたというのですが、それも故意に扉を閉めなかつたとも考えられましょう。それから白石さんにとつてもう一つ最も不利なことは、有喜子を門衛が咎めたのに彼が口を利用して外へ連れ出したという点です。それ等の点から白石さんに変な疑惑がかけられているわけです。

処で本人はどうかと云うと、あの事件以来極度の神経衰弱にかかつて半病人のようになつています。しかも絶えず何かに怯かされてでもいるようで、少しも落ちつきがなく、命じられた用事も忘れてたり、間違えたりして、仕事がちつとも手につかないんです。オツフィスへ出てても面白くないのでしょう。それで毎日憂鬱な顔をして誰とも口を利かず、随分無茶なお酒など飲んでいるようですが、傍の者からみると、心配だし気味も悪いし、万一間違ひでもあつてはならないというので、近々帰朝させる手筈になつて居ります。私は白石さんが有喜子に利用されたのだとは考え

られますが、彼が手引きをして盗ませたとは考えられないのです。いずれにしても書類は紛失しているのですから、何人かの手にあるには違いない。それを発見して白石さんにかかる疑惑の雲をはらい退けて上げたいと思うのでございます』

4

有喜子の殺された淋しい往来に幽霊が出るといふ噂を耳にした翌日、朝のコーヒーを呑んでいる処へ女将が入って来て申しました。

『昨晩うちのお客さんが、その方は逆も臆病な質たちなんでございますけれど、夜更けて例のあすこを自動車でお通りになったら、すうツと白い陰が往来を横ぎって消えたそうです。もうあんな処通るもんじゃない、胆を冷しちやったというお話でございます。領事館にお遊びにいらしても、もうあすこはお通りにならない方がよろしゅうございます』

『まア！ 怖いこと！』

その晩、私はその淋しい往来に深更まで見張っていましたが、幽霊どころか人一

人にも会いませんでした。評判になつたのでお化も引込はきこんじまつたのか、と軽い失望を感じながら、踵を返して帰りかけようとした時、ふらりと路傍樹の蔭から出て来た一人の男を見ました。力のないまるで、浮いたような足どりで、ふらふらと歩いて行く容子は、見る人の目には全く幽霊とも映つたかも知れません。おまけに着ている洋服の色が、うす白いのです、昼間見たら鼠色か何かなのでしょう。

私は見えがくれに後を尾おけて行きました。横町を曲る時街灯の光りで男の顔を見て、私の想像していた通りだったので別に驚きもしませんでしたけれども、とにかく追いつがって声をかけました。

『白石さん、書記生さん』

吃驚びつくりして彼はハツと立ちすくみました。私の姿を見た瞬間、無意識に彼は逃げ出そうとしてまた思い返したらしく静かに立ち止まりましたが、その大きく見開いた眼からは狼狽の色がありありと読まれました。

『何か御用でしょうか？』

落ちて着いている積りですが、彼の声は震えて居りました。

『少しお訊きたい事があるんですけど往來じやお話も出来ません。とにかく領事館へ参りましょう』

時計を見ると午前一時です。こんな時間に私のホテルへ同道するわけにもまいり

ませんし、話を他人に聞かれる危険を避けるためには、やはり領事の館舎内でも撰ぶより仕方がありませんでした。

私は白石書記生と相對して坐りました。肉の落ちた頬は痙攣けいれんして引きつり、両手は震え、落ち着きのない不安な眼で、絶えず四辺に気を配っている容子は、逆も痛ましくて正視するに忍びませんでした。年の若い、人の善さそうなこの男を、こうまで恐怖のどん底に突き落したのは一体誰の罪でしょう。私はそれを考えると、無責任な世間の人達に對して憤りを感じずにはいられません。殊に白石さんの場合は私が人知れず苦心して調査しているのです、一層同情の念を深くしたわけです。

白石さんは最初ひたがくしにしていますが、私が調査した結果を少しばかりほのめかすと彼は已すでに私が何もかも知りつくしているものと思ひ込んで、有喜子殺害事件のあつた当夜、彼が見聞した事実を、私の問うままに包まず話してくれました。

『あの晩、途中まで送って行くと有喜子が頻りに辞退するので別れ、振り返ってみると後姿が二人になっていたところまでは、総領事や同僚に話したのと同じですが、それから後の話は違っているのです。というのは、そのまま領事館に引返したのではなく、相手の男が何者だか見てやろうという好奇心に駆られて、後を尾けて行ったのです。すると言葉はよく分らないのですが、二人は何かひどく云い争いをしながら、あの暗い淋しい処まで来て立止つたので、自分も二三間げんばかり離れ

た処で立ち止り、電柱の蔭に身を寄せてそつと覗いたのです。すると相手の男は恰度正面を向いていたのでよく分りましたが小造りで、細面の綺麗な顔が殺気を帯びて凄く見えました。日本人ではありません。確かに支那人です。有喜子には支那人の情人があるという噂を聞いていましたので、咄嗟に此奴だなと思いました。街燈の光りで見た有喜子は、もうすっかりおびえきっていて、顔の筋肉を顫わし、まるで死人の如く青褪めていました。何か云おうとしても声が咽喉にからんで云えないようでした。

長い間二人は睨み合っていました、そのうち二人は言三言烈しく云い合つたと思つたら、

「裏切ツたな！」

鋭い男の声と同時にきらりと光つたものが眼を射りました。きやツと怖しい叫び声、つづいて死者狂いで飛び付いてゆく女を見ました、私は恐ろしい光景を目前に見ながら、救いを求める悲しげな声を聞いても、どうすることも出来ませんでした。私の体はまるで麻痺したようにこわばっていたのです。意識も幾分ぼんやりしていたとみえて、はつと気がついた時は四辺はもうしんと静まり返つて居りました。ただどこか近いところで荒い息づかいをしているのを聞きました。それが自分の直ぐ傍からであることに気がついた時には、先刻の男から恐しい命令の言葉を聞かされ

ていたのです。男は血走つた両眼を見開いて、きつと私の顔を見詰め、底力のこもつた声で嚴重に申し渡したのです。つまり秘密書類を私に盗み出せというのです。

有喜子の情人の支那人というのは実はスパイだったのです。彼女はその手先に使われていたもので、秘密書類を盗む目的のために、有喜子は総領事に近づき、夫人に取り入るのに苦心していたのです。そしてやっと待つていた機会が来て、オツフィスに忍び込み金庫を開けたのですが、肝心の秘密書類はどうしても見当たらないというのです。それをこの男は有喜子の愛情が総領事に移つたために自分を裏切つたものと思つたのです。心が変れば彼女の口から秘密がもれないとも限らない、それを怖れて殺したのでしょう。

彼は有喜子の盗み損そこなつた書類をこんどは私に盗み出せ、その誓いをしろというのです。誓わないと云えば、その場で私も彼女と同じ運命にならなければなりません。意気地のないようですがどうしても彼の命令を拒めませんでした。私は毎夜あの淋しい、有喜子の殺された場所で彼と会わなければならぬのです。秘密書類が彼の手に入るまでは。

しかしその書類は私が金庫を開けた時已にもう失なかつたのです。有喜子もなかつたと云つたそうですから、そうすると誰か先に忍び込み、盗み去つた者があつたに違いありません。

已を得ない場合だったとは云え、ああいう恐しい人に係り合つた以上、帰朝してもしなくつても、私の身に迫っている危険から逃がれるということは出来そうもありません。私の運命ももう定まつているような気がいたします』
白石書記生はそう云つて淋しく笑いました。

5

ホテルに帰るには余り時間が遅いので、私はそのまま宮城野夫人の邸で泊りました。私にあてがわれている部屋に行くと、直ぐ、ベッドの中に入って眠ってしまいました。

何時間位眠つたでしょうか、ふと人の気配で眼を覚しました。厚い絨氈じゅうたんの上を静かに誰か歩いているらしいのです。絹のすれ合う音がしました。私は羽根蒲団を胸の上までずらせて、息を凝らして様子を覗っていました。目が覚めたと云つても半分眠つてでもいたのでしよう。最初盗賊でも忍び込んだのか知らと思つたのですが、よく見ると何のことはない宮城野夫人ではありませんか。恐しく背が高いように思つ

たのも、夫人が寝間着の裾をずるずる引きずっていたからでした。夫人は私の方へ気を配りながら、音がしないようにそろりそろりと室の隅の方へ行くのです。そこには大きな洋服戸棚があつて中が広いので納戸代りに用いているとのことでした。夫人はその扉に手をかけながら、薄暗がり立つて、また暫時私の寝息を覗つていゝる風でした。

窓硝子から差込む月の光が蒼白いためか、夫人の顔は幽霊みたいに蒼く見えるのです。そしてまるで夢遊病者のように、ふらふらと扉を開けて中に吸い込まれてしまいました。

私は急いでベッドを飛び降り、そうと扉に近づき、カーテンの隙間からのぞいてみました。すると夫人は懐中電灯を照らして頻りにトランクの中を見ていましたが、臆てさも安心したようにそのまま蓋をし鍵をかけるのでした。私は夫人のこうした挙動を訝しく思わずにはいられませんでした。何のためにこの真夜中にトランクの中を覗くのだろう。そんな大切なものが納つてあるのだろうか、と思うと同時に、私の頭にある事が閃きました。私はカーテンのかけに立つて夫人の出て来るのを待つていました。そんな事とは知らない彼女はまた忍び足で静かに出て来ましたが、そこにいる私の姿を見ると非常に狼狽した容子で、

『あなた、まア起きていらしたんですか？』

と咎めるような調子で云うのでした。

『トランクの中に納っているものを頂戴したいと思つて——。先刻からここでお待ちいたして居りました』

二人の間には緊張した長い沈黙がつづきました。夫人は私を見詰めながら苦しそうな呼吸いきづかいをしていましたが、低いうめくような声で云いました。

『じゃ何もかも御存じなんですね、あなたから云われない前にもっと早く私の方からお話したかったんです、でも——。どうしても云えなかったの。あなたにいらして頂いた最初の日、白状してしまう積りでいろいろ云い出してみたんですけれど云えなかったんです。どうしても、私には云うだけの勇氣がなかったのです——』

と云いながら夫人は急いで戸棚へ行きましたが、引返して来た時には一束の書類を手にして居りました。それを私に渡しながら、

『S夫人。あなたは嚙ぞ私を見下げ果てた女だとお蔑さげすみになっていらつしやるでしょうね、でもそうするより仕方がなかったんですよ』

『あなたは御自分が金庫から持ち出して秘しておいて、それを探し出させ、私の手で御主人に返させようとお思いになつて、私をここにお呼び寄せになつたのですね』
『すみません。本当に申訳ありません、それでもしなけりや返す方法がなかったんです』

『御主人にお話して、お詫びなすつたらいいじゃありませんか』

『主人に話して？ まあ恐しい、そんな事がどうして出来るもんですか、謝罪あやまつて許してくれるような人だったら、私はこんなにも心配はいたしませんわ、たとえ事情がどんなであろうとあの人は断じて宥ゆるしません。主人に知れたら、ああ、あの人の耳に入ったら、私はもうお終いです。どうぞ助けて下さい、S夫人、私を救って下さい、ねえ、お願いです』

夫人は泣きながら、哀れみを乞うように私を見上げていのです。私は黙つて考へて居りました。

『あなたが最初いらして下さった時、本当の事をお打ち開けして御相談もし、お願いもする積りでいたのでしたけれど、それなのに、あの時どうにも申上げられなかつたんです。あなたに叱られるだろうと思つて——。でもあなたにお継りするより助かる道はありません、どうぞ助けて下さいませ』

そう云われても、おいそれと安受やすうけあ合いに承知するわけにも参らないので、どうしたらいいかと思つて居りました。というのはどうも私には腑に落ちないことだらけだったからです。とにかく分からないことを訊きただしてみる必要はあろうかと思ひましたので、

『まず第一に不思議に思うのは、何故秘密書類をお盗みになつたんですか？』と云

いました。

『今になって、冷静に考えるとあの頃私は少しどうかしていたんじゃないかとも思うんですけど、どうも主人と有喜子が私を邪魔にするように思えてならなかったのです。その中に機会を狙って離婚しようかと計画していることが分かったので、私は命がけで戦っても主人を彼女から奪い返そうと決心したのです、それには並大抵のことではいけないので、非常手段をとらなければならぬと思つてまず大切な書類を盗み出しました。秘密書類が紛失したとなれば責任上主人も職を辞さなければなりません。そうすれば当然この地を引揚げることになります。しかし実際には紛失していませんので、そこは情実で何とかなるだろうと思ひましたの、ならないとしても有喜子を引離す目的は達し得られるだろうと思つて——。あの時には離婚を覚悟でやつたのですけれども——』

『相手の女が死んじまつたから、あなたの目的は自然に達せられたことになつたじやありませんか、それだのに何故早く御主人に書類をお返しにならなかつたのです？ こんなに館員達が騒がない内に何とか始末をなさればよかつた』

『有喜子が殺された翌朝は、もう書類の紛失したことが白石さんに発見されて、皆は有喜子が盗んだものと思つて憤慨しているんです、彼女の悪口を聞くのは決して厭な心持ちではありません、私は内心痛快だつたんです。ですから私は黙つて見て

いました。が、自分が盗み出したので、また誰かに盗み出されはしないかと心配で、心配でなりませんでした。私はなるべくこの部屋から離れないようにして、心の中で番をしていたのですが、それでも心配で毎夜人が寝静まるのを待って一応トランクの中を調べてみなければ眠れなかつたのでございます。それをあなたにみつかったのです』

『死んだ有喜子に罪をなすりつけて喜んでいらしたあなたが、どうして今度はまた私まで招いて、書類を探し出させようとなすつたの？』

『最初のうちは有喜子一人に疑いがかかつていましたから、見ても居られたんですの。あんな悪い女にはこの位の罰があたるのが当然だと思つていましたから、処が日が経つにつれ、あの夜の挙動に不審の点があつたというので、遂々白石さんにまで疑いがかかつてきましたのです。そして、あんなおとなしい善良な人に嫌疑がかかつてはすまないと思う一方、見ていると白石さんは日に日に瘦やせれて、心の苦悶が顔にあらわれ、極度の神経衰弱に陥つてゆく様子にもう黙つてはいられなくなりました。彼の嫌疑を晴らす途はただひとつ、書類を発見することよりありません。それで決心してあなたにおすがりしようと考えたのです。最初の考えのままであつたら自分で始末がつかまりましたけれども、相手の女がいなくなつたとすると、私は離婚するのがいやになりました。私独りならともかくも、私には子供がありますもの、

その子供の事を考えますとどうしても主人と別れる気がなくなりました。こんな悪いことをした私を助けるのでなく、子供を助けると思召して、どうぞ救って下さいませ』

旧い友達というものは不思議なものでございますね。いつもの私なら、そんな都合な事を仕出かして私を利用しようとするその心を憎みこそすれ、同情の念など微塵も起さないではねつけてしまいますのに、私は宮城野夫人の頼みをすっかり引き受けてしまったのです。

総領事館内には久し振りで朗らかな笑聲がもれ、館員達の顔からは憂鬱な影が消えてしまいました。宮城野夫人は私の手を握つては、ひそかに感謝して居りました。長い間の心労で疲れきつてしまい、健康を害している夫人は私という道づれが出来たのを幸いに、一緒に帰京して少時保養することになりました。その準備に忙しい時でした、白石書記生が帰京の途中、国府津駅附近で列車から飛び降り自殺の報を得たのは。

嫌疑が晴れて帰京したのでしたのに、気の毒な事をいたしました。彼の死はまた宮城野夫人を憂鬱にさせました。

神戸まで一緒に行つてそこで別れた宮城野夫人は親類へ立ち寄り、私は直ちに東

京へ向いました。帰京した翌日私は夫人がやはり国府津駅の附近で自殺されたことを知ったのでございます」

恐怖の幻兵団員

私立探偵社の客

遠くの方でベルが鳴ったと思つていると、忽ち寢室のドアがはげしく叩かれ、

「先生、先生お客様ですよ」

せつかちの家政婦に起された。

枕時計を見ると朝の六時だ。私立探偵なんて職業を持つていると、とんでもない時間に訪問を受けることがしばしばある。そういう人に限つて、厄介な用件を持ち込むものだ。私は舌打ちしながら、毛布をすつぽりと被ぶつたまま、

「やかましい！ これからもう一寝入りしようと思つてるんだ。用があるなら待たしておけ」

「だって、先生、大至急お目にかかりたいつて仰しやるんですよ」

「何んて人だ？」

「お名前は仰しやいませんですが、お目にかかればわかるつて、立派な方、凄いやうな美人で——、お若い方なんですよ」

私は毛布をはね退け、むつくりと起き上つて、

「しようがないなあ。客間に通しておけ」

私はいつの場合でも、身だしなみだけはきちんとしていた。安全剃刀かみそりを当てて、いそいで顔を洗うと、外出着に着換えて、客間に現われた。

「やッ。あなたでしたか。失礼しました。お名前を仰しやらぬものだから——」
朝陽のさし込んでいるウインドウの傍に、椅子を持って行って、

「さあ、こちらへいらっしやい」
とすすめた。

「まだ。おやすみになっていらしたんでしょう？ 申わけありません」

家政婦が云った通り、全く素晴らしく美しい。たしか二十九歳だと聞いていたが、見たところはせいぜい二十三、眼の覚めるような赤色ボックス型オーヴァを着ていた。彼女は松岡旧伯爵の世嗣よつぎ一雄夫人で、類稀れな美貌の持主として有名であった。

没落階級に属する旧伯爵が、いまもお昔ながらに依然として政界の影武者であり、相当の勢力を有するのは世間で知らぬ者もないが、彼はいつも黒幕であって、絶対に表面に立たない、それが彼を救ってくれたと云つてもよかつた。

口の悪い人は、狸爺だの、剣劇の名人だのと云つた。それはずるくつて、立ち廻わりが上手だという意味であるが、たしかに云われるだけのことはあつた。あの巨万の富も財産税だ、取得税だといって大部分を失っているはずなのに、なお昔のま

まの生活をつづけていられるということは、智慧者の彼なればこそ、と、私は思っているのだった。

家政婦が火種を持って来て、瀬戸の大火鉢に炭をついでから、各自の前にお茶を運んでいるのを、夫人はいらいらしながら見ていたが、彼女の退くのを待って、急に一膝乗り出し、

「先生、突然、こんな朝つばらから伺って、御無理をお願いしてはすみませんが、実は私、大変な心配事が出来たんですの。委しいことは途々みちみち申上げますが、いかがでしょう？　これから直ぐに宅へいらして頂けませんか知ら？」

よく見ると夫人は憔悴して、顔いろは青褪めているし、唇のあたりが微かではあるが痙攣している。何事かは知らず、少なくとも彼女にとって重大なことに直面していることだけはたしかであった。

私はオーヴァを着て、夫人と一緒に玄関へ出た。そこにはニューフォードが横付けになっていた。

シートに腰を下すと、私はわざとゆっくりと、落ちつき払って、シガレットに火を点じ、

「どうなすったんです？」

はじめて口を切った。

「すっかりお話ししなければお分りにならないでしょうが、主人が昨年の春シベリアから帰還したことは御存じでしたわね」

「麻布の御本邸で、一二度お目にかかりました」

「松岡の父が只今重態で、昨今、危篤状態であることも知っていらつしやいましたらう？」

「新聞で知っています」

「そのため、麻布の本邸は今、ひっくりかえるような騒ぎをしております。その最中に——、実は主人の一雄が、行方不明になってしまったんでございます」

「いつからですか？」

「今日で、一週間になります」

と云つて、ぶつりと口を噤み、涙ぐんだ。

私はそのあとを促がすように無言で夫人の顔を見た。一口に行方不明と云つても、彼女の場合にはいろいろなことが想像されるのだった。

一雄が出征する直前に、両親や親戚の反対を押し切つて娶めとつたこの夫人は、その当時売り出しの映画女優であった。結婚後は映画関係は勿論、派手な交際は一切縁を切つて、伯爵家の奥深く引込んでしまったので、いまはどう見ても真面目な貴婦人になっているが、彼女がそうなるまでには数知れぬ苦勞を重ねてきたことだろう。

私は一雄が行方不明になったという裏面には必ず複雑した事情がひそんでいるものと思つた。

やや少時しばらくして、夫人は唇をふるわしながら、

「御承知でしょうが、松岡家には一雄と弟の薫と二人しか子供はございません。薫は画家でおとなしい人なので、両親のお覚えもよく、また実によく気がついて、かゆいところに手が届くように父の看護をするので、両親には大変に気に入られておるのですが、一雄の方は到つて無口で、ぶつきら棒で、お世辞も云えないので、とかく薄情者だの、親不孝だのと申されて評判がよくないところへ、一週間近くも父の前に顔も出さず、看護もしないので、病人は行方不明になっているとも知らずに、ひどく私へ当てこすつたり、悪口を云つたりしているので、間に入って私は身を切られるように辛いんですの」

「一雄さんが行方不明になられたことは、伯爵は御存じないんですか？」

「秘かくしてあるんです。母だけは存じておりますが——」

「何故なげ、秘かくしていられるのです？」

「云つたら大変ですわ。重病人の親を捨てて姿を晦くろますような不埒な奴にはこの家の相続はさせられない、と、いうことになりますもの。それでなくつても、次男の薫さんに相続させたいという考えが、何かにつけて見えますんでねえ。たまらないん

ですの。姑が間に入って取りなしてくれております間に、どうしても一雄を探し出して、最後の看護をさせませんと、松岡家は薫さんにとられてしまいますネ。昨夜も親族会議でそういうように決議したらしいのでございます。ですから、どうあつても一雄を探し出して頂きたいんで――、ほんとに、先生、私一生のお願いでございますから、探して下さいましね」

「捜査願いは出されましたのですか？」

「ええ。出しましたが、次ぎ次ぎに大きな事件が出てくる昨今のことですから、家出位は大した問題にもされないとみえて、まだ何の手がかりもないのでございます。それで、私はもうそういう方面に実は見切りをつけまして、誰にも相談せずに、先生のところへ飛び込んで、お願いにまいったんでございます」

「私に御相談をされましたことは、当分の間、どなたにも秘密にしておいた方がいいだろうと思います」

「探し出されて、やっと父の危篤に間に合ったというよりも、自分から看護に帰つて来たという風にした方がよろしいでしょうね。それでないと一雄がつまらぬ誤解を受けて可哀想だと思えますのよ。いつも一雄と比較されては褒め者になつてゐる弟はこのところ、二日も三日、徹夜で付ききつておりますの。兄さまと二人分お父様のお世話をするんだと私には申しておられますが、それだけに総領の一雄の不行届

きが目に立つてね、六日も、七日も、まあ、どこをうろついていることでしょうか、父の重態は新聞にも出ているので、知っていそうなものなのに、情けなくなってしまうわ」

「あなたにはお心あたりがありませんか？」

「こんどというこんどは全くわかりませんの」

「と、仰しやると、前にも家を開けられたことがあるんですか？」

「幾晩もつづけて開けるといふことはありませんが、時々行く先も云わずに、ふらりと夕方から出かけて、翌朝ぼんやりと帰って来るようなことが一二度ありました」
「帰って来られてからも、どこへ行かれたのかお話しにならないのですか？」

「主人は至つて無口で、それが帰還してからは一層口数が少なくなりましてね、何か訊いてもろくに答ええないようなことが度々ございますの。詳しいことは宅へいらしてから申上げますが——」

「御主人のお部屋は家出なすつた時のまんまになっていのでしょうか？」

「ええ。捜査願いを出しました時、手をつけるなど仰しやったので、そのまんまにしてありますの。別に私が見ては変つたところはありますが、とにかく、先生にいらして頂いて一度部屋中を御らん願おうと存じておりますの」

枯れたカーネーション

自動車は、白い洋館の前に停った。あまり大きな建物ではないが、ぐるりが広くとってあって、庭は一面の芝生だった。まだ空襲のままになって取りかたづけもしてないところなどがあるために、隣家といつてもずっと離れているので、野中の一軒家というようになちよつと淋しい感じがした。

私は夫人のうしろに従って車から降りると、まず家の周囲を歩いてみた。

「御主人のお部屋は？」

夫人は立ち止って、半開きになっている窓を指差し、

「あの窓のある部屋ですの、ああして開け放しておくのは不用心ですから、廊下の方へ向いたドアに新らしく鍵をつけて、あすこだけを独立させたので戸締りだけは充分に出来ております。主人は大変に臆病になりましたね、以前は至って元気な人でしたが、シベリアから帰りましてからは、まるで人間が変ったように怖がりやになって、毎晩寝る前には自分で部屋の戸締りを一つ一つ見て歩き、これで大丈夫だと安心がゆかなければ眠れなかつたんですよ。それなのに、あの朝は窓を開けっ放

したまま、出かけたんですから、呆れますわ」と云いながら、

「さあ、どうぞ、お上り下さいませ」

玄関の方へ行きかけるので、

「私はお庭を一応しら検べてから、あとでまいりますから」

「ではお茶のお支度でもしておきますから先生、お調べがすんだら、直ぐいらして下さいね」

私は窓の下に立って注意深く地上を見た。一週間も過ぎているので、よくはわからないが、乱れた靴のあとがあつて、その中に小型のラバソールが交っているのはつきり見えた。足跡についてぐるりと廻わると建物のうしろの裏門へ出た。裏門の扉には嚴重な鍵がかかつていて、久しく開けないと見え、錠は錆ついていた。

門柱につづいた古い板扉はどころ破れて、犬でも出入りしたらしい大きな孔があつて、孔のまわりの羽目板はがばがばにゆるんでいる。手で押すとかなり大きく開いて、大人が屈んでくぐれる位に毀れていた。

私は体を屈め、肩を斜めにして外へ出ることが出来た。オーヴァが、破ぶれた羽目板にささつて、尖った板の先に一つまみ位の毛がちぎれて引つかかった。

裏門の外にはかたそうな土の上にタイヤのあとがいく筋もあった。人通りはあまり頻繁ではないらしいが、自動車が楽に通れる位の路はあつて、邸のはずれからは広

い往来になっていた。細かく調べてゆくうちにほかの羽目板にも一つ私のオーヴァ以外の小さい布地がささっているのを発見した。手にとつてみると、白っぽいしまの絹地であった。同時に扉の下の溝淵につき刺っている尖つたものを見た。拾い上げて泥を洗つてみると、美事な真珠のネクタイピンであった。

二つの獲物は私を非常に勇気づけた。

夫人はお茶をいれて待つていた。

私はまず絹地を出して見せた。

彼女は手にとつて見ていたが、急にサツと顔いろを変えて、

「どこにございましたの？　これはあの日着ていたワイシャツの布地です、ああ」夫人は両手で顔を覆うと、

「やッぱり！　私の想像した通りだったんですもの先生、一雄はきつと殺されたんです。きつとそうです、きつと——」

身をふるわして、しゃくり上げた。

この上彼女を悲しませるのに忍びなくて、私はネクタイピンはポケットに入れたままで見せなかったが。このワイシャツに似合ういろのネクタイをつけ、好きな真珠のピンをさしていた、と云つて、夫人は一雄の面影をしのぶように自分の方から語つた。

ややあつて、夫人は泣き濡れた顔を上げ、

「先生、一雄が帰還してからのこと、すっかりお話しいたしますから聞いて下さいね、そして御判断をして頂きますわ、先生も主人は殺されてしまったと思つていらつしやるんでしょう？」

「まだそんなに御心配なさることはないと思います。屍体が発見されたというわけではなし、ただ行方不明になつていてというだけのことでですから、どこかに無事でいられるかも知れません。まあ、何もかも秘さずに話して下さい。御主人のお部屋を見せて頂きましょうか」

夫人は嚴重な戸締りを開けて、私を彼の部屋に案内した。

八畳敷ばかりの洋間だった。大きなデスクには読みかけの洋書が開いてあつた。廻転椅子がぐるりと後ろ向きになつていて、急に見ると、急に起ち上つたものらしい。机の上の花瓶にはカーネーションの枯れたのが首を垂れてさしてあつた。四本だった。赤いペルシヤ絨氈じゅうたんの上に一本踏みにじつて、くちやくちやになつているのが落ちていた。

本を読んでいるところを、急に誰かによばれ、慌てて起ち上つた拍子にカーネーションの一本が袖に引つかかつて落ちた、彼はそれを拾い上げるひまもなく、踏みにじつてあの低い窓から飛び出したのだらうと私は想像した。

部屋中くまなく調べ終るのを待って、夫人は語りはじめた。

ピストルで誓約書を

「私達の結婚当時からお話ししなければおわかりにならないでしょうが、何分両親はじめ殆ど全部の親類が不賛成だったのですからね。つまり身分違い、映画女優なんかをこの由緒正しい松岡家の世嗣夫人には出来ないという——。それを押し切つて結婚するまでに運ぶのは大へんな努力でした。その間にあつて、私達に絶えず同情して、味方になってくれたのは弟の薫さんでした。彼はかげになり、ひなたになりして、私達に力づけてくれたのです。そういう無理な結婚でしたから、一雄が出征して後の私の立ち場は実に惨めなものでした。本邸に引き取られ、厳しい舅しゅうとにつかえ、何一つ自由というものは与えられず、毎日を泣いて暮らしながら、ただ夫の無事に帰る日ばかり待っていたのです。

薫さんは画家でしたから、アトリエの必要もあるので、麻布の本邸の一部に画室をかねた小さい家を建ててもらつて、そこに住んでいるのです。恰度空襲当時、模

範的な防空壕だと云われた壕を地下室に利用して、その上に建てたものなのです。本邸の一部と申しても、薫さんのアトリエまでは相当離れていて、囲いうちと云うだけのこと、随分遠いのです。が、私は用事にかこつけてはアトリエに行つて、薫さんに慰められ、うさをはらしておりました。薫さんという人は女性の気持ちに理解がありますので、女の人はみんな彼を好いていました。それなのに、降るような縁談を断つて、未だに独身生活をつづけておるのです。独身であるということがまた一層魅力があるものと見えて、薫さんのところには絶えず女客がありました。

ある時、薫さんは、兄さまはかの地で亡くなられたものではありますまいか、と申しました。友人が帰還してそんな噂をしていたと云うのです。内地で贅沢をしていたので、栄養失調で斃れたらしいということなのです。

私はそれを聞いてから、帰らぬ夫を待つているのがたまらなく悲しくつて、毎日のようにアトリエへ行つては泣いていました。

ところが、突然、それこそ一本の便りもなかった一雄が高砂丸で帰るといふ吉報が入ったのです。嬉しきで気が狂うということがあったら、あの時の私の場合だったろうと思います。その報らせをもたらしてくれたのも薫さんで、私は夢中ですがりつき、嬉しさのあまり気狂いのようになつて、薫さんの手を握ったり、抱きついたり、唇を彼の手に押しつけたりして、子供のよう喜び廻りました。薫さんは

黙って、じいと私のなすがままに任かせていましたが、私がやや落ちついたのを見て、

『こんなところを、人が見たら大変ですよ』

と、一言云うと外へ出て行つてしまいました。

あとで考えてみるとあまりの嬉しさからとはいえ、とんだはしたないことをしたと恥しくなりました。そんなに喜んで迎えた一雄はまあどうでしょう、出征前とはまるで別人のような、憂鬱な、暗い男になっておりました。いつも考え込んでいて、何かに脅えてでもいる風なのです。まるで恐怖病にでもとりつかれた人のようになつていたのです。

本邸は窮屈なので、早速この家に移りました、のびのびとした、それこそ新婚生活のような明け暮れを過せるものと、希望に輝いていた私は、帰還した日から、すっかり失望してしまつたのです。四年も、五年もの間、どうして暮らしていたのか、訊きたい話は山のようにあるのに、何を訊いても話してくれません。夫は妻の私でさえ気をゆるせないというような様子ばかりして、ほんとに変な男になつていました。医者は強度の神経衰弱だと云います。睡眠剤の力を借りなければ眠れぬ夜がつづきました。

真夜中にふいに飛び起きて、あたりをきよろきよろ見廻わすかと思うと、急に恐

ろしそうに身震るいして、机の下にかくれたりするんです。その時の顔の凄さったらありません。

たしかに一雄は普通の状態でないと思うようになりました。元来気の弱い、神経の細い男でしたから、出征中から故国の土を踏むまでには、恐い思いやら、命がけの辛い事もあったでしょうし、きつと、口には云えない、いろんな生活をしてきたのでしよう。彼の心を脅かすようなこともなかったとは云われません。

私は一雄の寡れた顔を見ながら、ひとりでに涙が頬を伝わるのをどうしようもありませんでした。私がこれほど苦労して待っていた夫が、こんな冷めたい、変な人になってしまったのかと思うと、悲しくってどんな秘密でも、私にだけ打ち開けてくれたら——と、しみじみ思うのでした。

彼自身も大変苦しそうなのがよくわかります。何を苦しんでいるのかは無論わかりません。ただ一人で煩悶しているのですから、私はたまらなくなつて、薫さんにその話をしました。

薫さんも暗い表情をして、

『兄さまは何か悪いことでもしているんじゃないか。かの地にいる間は随分乱暴な真似をしたという人もあるから、殊によつたら兄さまは人でも殺しているのかも知れませんが、犯罪の発覚を恐れているんじゃないのかなあ。気の弱い男は自分の犯

した罪に脅えて発狂するって話もあるから——』

『まさか、そんな大それたことをする方じゃありませんよ。きつと、何か恐いめにあったんでしよう』

『じゃ、あなたが訊いてみたらいいんだ』

『だって、仰しやらないんですもの』

『肉親だけです。ほんとの同情者は——、打ち開けてさえくれれば、僕は兄さまの苦しみを半分わけて背負って上げるがなあ』

薫さんは相変らず気持ちのいい人でした。私は遂々とうとう思い切つて、ある晩、一雄に云いました。妻としての資格がないから、何事も打ち開けて下さらないのでしよう。それなら已やむを得ませんから離縁して頂きますわ、と云つて、迫りました。

別れる気なんて毛頭ない夫の心を私はよく知っていたのです。また私自身にしてみても今まで辛棒してきたのに、今更別れようとは思わないのですが、夫婦の間に秘密があるということは何んとしても堪えられないのです。

人殺しだつて構いません。もっと悪い事をしていたつて、私は驚きません。それよりも打ち開けられないということは、私が信用されていないということになるので不愉快だったので。

一雄は何かよほどの決意をしたらしく、顔を上げるときつと私を見て、絶対他言

をしないという誓をせよと申しました。そしてかたい誓約をさせてから、始めて、心の苦悶を打ち開けてくれたのです。

主人が収容所にいました時、仲の好い名門の倅数名が集つて、研究会のようなものをつくり、徒然つれづれを慰め合つていた事がありました。その時、夫は小さく丸るめた紙屑が床に落ちていたのを見たのです。拾つて、ひろげて見ると、このグループの一人が書いたもので、それが上官への密告書であることを知りました。勿論、一雄の名も書いてあつたそうです。彼はびっくりして、信じ合つているこの僅かなグループの中にもスパイがいるのかと驚いたといひます。

身辺にこういう人がいては油断は出来ないと思ひましたが、どの人がスパイであるかわからず、また口に出すことのできないのでそのままにしていると、ある日、突然、エム中尉という人からよび出されました。

何事かと思ひながら、おずおずと彼のあとに着いて行くと、中尉はにこやかに一雄をもてなし、コニヤックだの、うまい菓子だのの珍らしい御馳走をしてくれ、狐につままれたようになってゐる夫に、自分は東京にいたこともあると云つて、松岡の父は政界の大立物だの、表面にはたたないが隠れたる勢力家の一人だの、と、しきりに褒めそやすので、少し気味悪るくなりましたが、それでもどうしてこんなによく知つてゐるのだろう、と不思議に思つてゐると、伝令が来て、中尉に耳打ちし

ました。

中尉は直ぐ席を起つて、一雄について来るように命じ、急にそこから出かけることになりました。どこへ行くのかまるでわかりません。

外には一台ジープが待っていました。中尉の命令で一雄は彼のあとから乗りました。ジープは超スピードで、シベリア大波状地帯のいくつかの丘を越え、かれこれ三十分近くも走りましたでしょうか、あんなにおしゃべりだった中尉はその間一言も口をきかないばかりか、行く先を訊いてもただ口許に微笑を浮べたぎり、何も答えないので。一雄は薄気味が悪るくなり、不安で堪らなかつたのですが、逃げるわけにもゆかず、運を天に任すより他はない、と、じつと眼を閉じ、どうにでもなるようになれと観念していると、ハタと車が停りました。

眼を開くとそれは実に奥の深い大森林に取り巻かれた、僅かの平地で、天幕テントが一つ張つてありました。あたりはしいんと静まり返つて物凄い静けさです。中尉は夫を従えてその天幕の中へ入つたのです。

中では酒宴の真最中で、丸太の脚のついた大テーブルの上には山海の珍味がうず高く盛られ、高価な洋酒の瓶が林のように立っていました。実に豪華な宴会ですが、テーブルを前にして盛んに酒を呷あおっているのは軍服の士官と背広服の青年、それに一人の美しい女性が交つた、たった三人きりでした。彼女は二十七八位のキビキビ

した態度で、麗わしい顔に理智的な眼が輝いていました。

中尉の紹介でその女性の隣の席につきましたが、一雄は何が何んだかわからず、夢のような気がしてぼんやりしていると、背広服をはじめ一同は夫のために乾杯をするやら、いかにも丁寧なこやかな態度で、ここでもまた松岡の父が話題にのぼり、父の交遊関係など根掘り葉掘り訊ねるのでした。よくもこんなに細かく調べているものだど驚くほどだったと云います。穏かに雑談しているのですが、腰のピストルがいつでも物を云うぞ、というような、油断の出来ない、何んだか凄味のある和やかさだったのです。それから内地にいた時の夫の仕事など委しく訊かれ、やがて改まったような口調で、彼等の国に忠誠を誓うだろうかと問われました。

一雄は返事が出来ませんでした。黙っていると、

『答えをしないのは承知を意味するのだ。紙を渡すから、こっちの云う通りのことを書き給え』

『何を書くのですか？』

『無論、誓約書だ。我国に忠誠を誓うという』

『そんなことは——』

『書けんと云うのか？』と、士官は腰のピストルを取り出すと、いきなり一雄に銃口を向けて、

『さあ、書き給え』

拒否することは死でした。夫は銃口をつきつけられたまま、ペンをとり、云われるままに誓約してしまつたのです。はつきりとは覚えていませんが、誓約書には住所、氏名、生年月日をしたため、次ぎにこんなことを書かせられました。

『私ハソビエト社会主義共和国連邦ノタメニ命ゼラレタコトハ何事デアツテモ行ウコトヲ誓イマス。コノコトハ絶対ニ誰ニモ話シマセン。内地ニ歸ツテカラモ親兄弟ハ勿論ドンナ親シイ人ニモ話サヌコトヲ誓イマス。モシ誓ヲ破ツタラ^{シヨケイ}処罰サレルコトヲ承知シマス』

一雄は日本に残っている妻のことを考えると拒むことが出来なかつたと云います。心で父に罪を謝しながら、誓約せずにはいられなかつたと云つて、ぽろぽろと涙を流しました。

美しい女性は起ち上つて、夫に握手を求め、魂をとるかすような微笑を浮べながら^{まっか}真紅な唇を彼の耳にあてて、

『あなたのお仕事は東京へ歸つてから後です。あちらで、またお目にかかりましょうね。それまでは——、さよなら』

親しげにささやくや、さつさと席を起つて出て行きました。ジープの走り出す音が聞え、やがてそれが次第に遠ざかつて、消えてしまいました。

『合言葉を教えておこう』と云つて、士官は一雄の耳に口を寄せました。

そのあとで、こんな注意を与えました。

『いつ、どこで、何国人であつても、それは日本人か中国人か朝鮮人か、あるいはインド人かも知れないが、今教えた合言葉をもつて現われる人物があつたら、その者の一切の命令に従わなければならぬ』と云うのです。

その日以来、一雄はよくよく注意していると、夫のように誓約書を書かされた人が、他にも大分あるらしいのですが、それはお互いの秘密として胸の奥に納めていたので、口に出す人は一人もありませんでした。従つて今までの親友も、もうお互いに信じ合うということが出来なくなりました。疑いの眼で見れば、誰も彼もみんな誓約書に署名したスパイのように見えまして、お互いがお互いに探り合うというようなことになつてしまふのです。

一雄への命令は、云わずと知れた父の地位を利用して、さまざまの事を探ぐるのにあるのは火を見るより明らかで、つまり夫はスパイの任務を背負されて、帰還したわけなのでした。

一つ間違えば死だと夫は云います。いつ殺されるかわからないとも云いました。

死の影を背負つた男、夫は絶えず死の恐怖と幻とに脅やかされつづけていて、あつた時は生きてゐることに苦しきから自分の手で死を撰ぼうと決心したこともありま

した。

人影に脅え、物音にいろを失い、訪問客に身構えするような彼でした。ある夕方、電車の中で、大森林の中で会った女性そっくりの横顔を見てから、また一層憂鬱になり、苦悶はますますひどくなりました。

『彼女が内地に來ている、いずれ連絡があるだろう』と、錠前屋をよんで、自分の部屋の戸締りを嚴重に直させたり、ピストルを磨いたり、恐ろしく神経質になつて、ちよつとした音にもびくツと肩を震るわせます。押し売りが來ても、眼鏡の底から眼を光らせるような始末でした。

恋の犯人

真面目で氣の弱い一雄は、責任感も人一倍強く、任務を遂行しなければ生命を奪われる。しかし、無理強いに負されたのだから、何とかしてそれを逃れたいと思う、この二つの悩みに悶えぬいていたので、時には正氣の人とは思えぬような振舞いをすることもありました。恐怖から氣が狂つたのではないかと思ひました。

私はどう慰めていいかわからなかったもので、絶対秘密を誓ったにかかわらず、薰さんにだけこのことを打ち開けて相談しました。が、彼にもいい智慧はなく、私と一緒にただ気をもむだけでした。

まだ合言葉をもって現われた者もなければ、何の命令もないのです。実際には何もしていませんでした。それなのに夫は誓約したからにはいつ命令を受けるかわからない、どこから、どんな人が出現するかわからない、と取越苦勞をして、心配しておりました。

父の重態が伝えられるようになった一週間前のこと、私共が本邸へ行っている不在中にこのカーネーションが見知らぬ一婦人によって届けられました。

夫は真青になって、震るえ上りました。カーネーションのしべの中に薄い紙が折り込んであった、それに細かく何か認めてあったようですが、夫は直ちにマツチをすって焼いてしまいましたので、私は見ませんでした。

それを始めとして深夜、どこからとなく電話がかかってまいりましたり、誓いを破った者の嚴罰を考えよ、などと差出人のない脅迫状が舞い込んだりしました。誓いを破ぶったというのは、一雄がその秘密を私に打ち開けたということでしょうが、それがどうして知れたのかわかりません。

夫は彼等と連絡のある者が身辺にいるのだと云い、二人の女中を急に追い出した

りました。

精神的の苦悶から、眼に見えて寝れ、このままでは発狂するか、自殺するか、悲惨な最後を遂げるに違いないと、憂慮しておりますと、ふいに姿が見えなくなってしまうのです。

恰度、その時私は父の看護に行っていて家を空けていました。女中の電話で馳けつけてみますと、あの通り窓が開いていて、

『旦那様は昨夜お電話で何かお話ししていらつしやいましたが、お部屋へお入りになつたぎり、朝になつても起きていらつしやらないので、ドアをノックいたしてみましたがお返事がございません。鍵穴からのぞくとベッドが空っぽでしたからびつくりして、御本邸へお知らせいたしました』

と、女中が申しました。

夫は玄関から出なかつたとみえ、玄関にも表門にも鍵がかかつたままだつたそうです。

本邸では父が重態だというのに何故一雄は来ないのだ、と、やかましく私が攻められていましたので、行方がわからないとも申せず、風邪で熱が高くて起きられぬと嘘を吐いて、その場、その場を胡麻化しているのですが、母にだけは胡麻化しきれず、母にだけ私は白状してしまつたんです。

親戚の者達はもともと私があの家の後継者の妻となる資格はない、と、反対しきつていのですから、夫のいないのをいいことにして、薫さんに家督相続をさせようとしておりますのです。

そういうわけですから父の息のあるうちに、何とかして探し出して頂きたいと思うのです。あれだけ脅やかされていたのですから、正気を失った人になっていかも知れませんが、生きてさえいてくれたら、と、そればかり念じているのですけれど、今日で一週間目になりますのに、どこからも便りがないので、あるいはもうこの世にはいないのではないか、などと思ったりして、私は生きた心地もございません。先生はどうお思いになりますか？ 今はもう先生のお力にお頼りするよりほか、私には手のつくしようがありませんの、どうぞ、先生、お願いですから——」

夫人は涙ぐみながら、私の前に手を合せて頼むのだった。

夫人の家を辞してから、翌日の夜の十時までの間、私は一睡もする暇がないほど忙しかった。私は夫人の言葉のうちに、あるヒントを掴んだのだった。それに自信を得たので、思い切った行動が出来た。実にその三十余時間の活動ぶりは自分ながら感心するほど目ざましいものであった。

松岡旧伯爵は危篤を伝えられながら、高齢にも似合わず、不思議な生命力があつ

て、臨終にはまだ間がありそうだと、主治医は語った。

枕許には伯爵夫人と一雄夫人が詰めきり、次男の薫が時折交代していた。次の間には近親者一同がぎっしりと詰めきっている。静かな病室からは咳一つ聞えなかつた。

女中から受取った銀盆の名刺を、看護婦は無言で、薫へ渡した。

無言で受取った薫は名刺の上にかかれた文字を見ると、サツと顔いろを変え、よろめくように病室を出た。

名刺には、

「あなたの監視中の病人が脱出しました。直ぐおいで下さい」と、あつた。

薫は眼が眩んで、そこにいた看護婦を突き飛ばし、一散にアトリエに走った。

アトリエの中は真暗だった。電球が切れていたのを、まだ取りかえる暇がなかったのだ。彼は手探りで、まず地下室の鍵を開け、階段を降りかけると、下から低い声で、

「一足違いでした。御病人は父君の御臨終に間に合わなければ、と、仰しやうて、飛んでおいでになりました」

「何んだと？」

薫は相手の男の腕をわし掴みにしてねじ上げた、と、思ったら、反対にもんどり打って地上に投げ出された。

打ちどころでも悪るかったか、彼は少時起き上ることも出来なかった。

「薫さん、あなたがながい間かかってやったせつかくの計画も、いま一步ということで、私立探偵の私のために、水泡に帰しました。お気の毒ですが仕方がありません。さあ、起ち上って、私の云うことをおききなさい。」

あなたは映画女優時代から人知れず恋していた嫂ねえさんに同情者のような顔をして、歡心を買ひ、あわよくば横取りしようと考えている時、運悪くシベリアからお兄さんが帰還された。無事で帰られたのを喜ぶはずであるあなたは、反対にすっかり失望してしまいました。

若夫人はお兄さんと同棲される、指をくわえてそれを見ているのは堪らなかつた。何んとかして二人の仲を割こうと思つているところへ、お兄さんの秘密の話を夫人から聞かされたので、急に恐ろしい計画をたてたのです。

暗い影を背負されたと信じきつて神経を尖らせている彼に、脅迫状を送つたり、偽電話をかけたりに脅かし、遂いに彼を半病人にしてしまいました。

お兄さんの精神の疾いみはますますはげしくなるのを、悪魔はほほ笑んで見ていたのです。カーネーションを送つておいて、次ぎの夜、覆面したあなたは、夫人から

聞いていた秘密の合言葉を使って、お兄さんを窓からおびき出し、わざと裏門からぬけ出して、いきなり彼の頭に風呂敷を被せ、外に待たせてあった自動車に乗せてアトリエの地下室に連れ込んで、監禁したのです。あなたのいつも穿はいている小型ラソールのあとを残したのも残念でしたね。

そして、あなたはひたすら父君の臨終の迫るのを待ち焦れていたのです。お兄さんが行方不明であれば、いやでもあの家を継ぐ者は薫さんです。あなたは名門とあの財産とを継ぎ、もう一つ美貌の若夫人を手に入れるつもりだったのですが、惜しいことをしました。シベリアからの命令だと思いついていたのが、実は弟の薫さんからだったと知って、お兄さんはすっかり元気になりましたよ」

そこへバタバタと登音がして、若夫人が地下室の降り口から声をかけた。

「薫さん、早くいらして下さい。お父さまの御臨終です。それから喜んで頂きたいのよ。お兄さまが帰っていらしたの、御臨終に間に合いました」

そこにいる私の手を握って、夫人は感謝の眼をむけた。一雄を誘拐した犯人が弟の薫であったことだけは私は云わなかった。

それは一雄と私との永久の秘密として、胸に納めておく約束をしてあったからである。

黒猫十三

1

本庄恒夫と辰馬久は篠突く雨の中を夢中で逃げた。体を二つにへし折り、風に追われながら、夜の市街をひた走りに走った。その時、一緒に馳けていた辰馬久が、ふいと身を転して横町へ折れた。続いて曲ろうとした途端、本庄は行手の暗がりから、ぬツと出て来た大男が、辰馬の後を飛ぶ如く追跡するのを見た。

「危い！ 捕りやしないか？」

ぎよツとして思わず心で叫びながら、立ち縮んだ。辰馬に誘われ、初めて行つてみた賭場に運悪く手入れがあつて、二人は命からがらここまで落ちのびて来たのである。

今夜に限つて、どうしたものか円タクはどれもこれも客が乗つていて、空車には一度もぶツからなかつた。

もうこうなつちや仕方がない、どんなに夜が更けようと、ずぶ濡れになろうと、いよいよ小山まで徒歩いて帰らなくてはならない、と思つてゐる処へ、有難い事に、一台の空車が通りかかつた。朦朧ランプに照らされた空車の二字が目に入った刹那、本庄は救われたような喜びに我を忘れて合図の手を高くさし挙げ、停るのを待ち兼

ねて、

「小山まで、——西小山だ！」と云うなりハンドルに右手をかけて、飛び乗った。

「あッ！」

忽ち何かに躓いて前へのめった。その拍子にぐにやりと柔かいが、しかし弾力のあるあたかも護謄ゴムの如きものの上に、両掌と膝頭とを突いたのだった。

「何だろう？」

手探りでそつと撫で廻してみると、異様な感じがする。冷ひやッこいがすべすべした、まるで人肌だ。

生憎ルームの電燈が消えているので、車内は暗くつて、硝子窓から、時折さし込む街燈の灯も、シートの下までは届かなかった。

「君、ちよつと、電気を点けてくれないか」

運転手は答えない。風雨に声を奪われて、聞えないものと見える。

「チヨツ」

本庄は舌打ちしながらポケットを探り、マッチを擦った。と同時に、彼はマッチを放り出し、シートの上に尻餅をついてしまった。

人形？ いや人だ、若い女だ。しかもそれが死んでいるのだ。余りの驚愕に全身凍ったようになって、叫び声すら咽喉のどを出なかった。ただ、はッと思っただけだっ

た。次の瞬間には眼がくらくらとして、何も分らなくなつた。体は妙に硬直こわばつて身動きさえ自由にならないのに、膝頭だけががくがくと震えて起たち上る力さえぬけてしまつた。血生臭い香がプンと鼻をうつ。

聴やがて、少しく気が落ち付いてくると、恐いもの見度さに、もう一度マツチを擦つて、蹲踞しゃがみ込み、今度はよく見た。

やつと十二三位だろうか、立派な服装をした少女だつた。顔は伏せているのはつきり分らないが、ウエーヴした断髪が襟足に乱れかかつて、何とも云えぬ美しさだ。桃色のドレスの肩から流れ出ている血汐は、細ほそりした白蠟のような腕を伝わり、赤い一筋の線を描きながら、白いゴム・マットの上に滴り落ちて、窪んだ処へ溜つている。抱き起してみようと思つて、ソツと体に手を触れたら、ぬらぬらとした赤いものが、ベツトリと掌に着いた。掌ばかりではない、よく見ると、ズボンの膝にも、ワイシャツの袖口にも血がねばりついている。血だらけだ。

本庄は考えた。これを人が見たとしたら、どう思うだろう。足許には死んだ女が転がつている、その傍には血に染んだ、ずぶ濡れの男が蹲うずくまつている、しかも興奮しい、こんな係り合いになつちや、それこそ大変だ。

彼は急に空恐しくなつて、逃げ出そうと思つた。走っている車から飛び降りる積

りで、扉に手を掛けた、が、また考え直して止めてしまった。

崩折れるように腰を下すと、ほうツと大きな溜息を吐いて、思わず心に呟いた。俺の知った事ツちやないんだ。ただ、この円タクに乗り合せたというだけじゃないか、犯罪直後に運悪く乗った、それだけの事だ。嫌疑がかかったっていいじゃないか、逃げ出す必要がどこにあるんだ。

それよりもだ。死美人と合乗りして深夜の街路を走る。こんな珍らしい廻り合せがめつたにあるもんじやない。この幸運をむざむざと見捨てて、逃げ出そうなんて、——勿体ない！ 何という愚かな考えを起したものだろう、と、彼の異常な好奇心はそろそろと頭を擡げてきた。

そうなるともう怖しいとも何とも思わなかった、むしろ与えられたこの絶好の機会を利用して、充分に日頃の猟奇的満足を得ようとさえ思うのであった。

その時、屍体が少し動いたように見えた。続いて、弱い、溜息に似た声を出した。「オヤ、蘇生よみがえったのかな」

本庄は慌てて唇に手をやった。慥たかにまだ息がある。手首を握ってみると、最初は殆ど分らないほど微かだった脈が、段々はつきりと指先に触れてきた。どうやら温味あたたかみも戻って来るようだ。

「まだ、死んじやいなかったんだ！」

有難い！ 息を吹き返したとなると益々面白いことになりそうだ。

運転手が何も知らないのを幸に、この少女を彼は自分のアパートへ連れて行こうと決心した。そうして介抱してやるのが、また発見者たる者の義務でもあるように思われる。

彼は少女を前にして考えた。運転手に知れないように運び出すとしたら、どういう方法を執つたものだろうか、下手をやつて感付かれたら事だぞ、きつと警察へ訴えようと云い出すに定きまっている、警察に。——冗談じゃない、そんな馬鹿な事が出来るものか。ヤツと逃げて来たばかりじゃないか。——

しかし、全然気付かれないという方法はあるまい。人間一人を担ぎ出すのに、いかに小さな女だつて、容易な事ではない。と彼は頻りにそれについて頭を悩ませていた。

車が花柳界の近くを通っている時、見番の灯を見て、ふとある名案を思いついた、そこで小山アパートまで乗り着けずに、途中で車を停めさせて、

「あすこの見番で、——これを崩して来てくれ」

と云つて、運転手に五円札を渡し、

「生憎、細かいのがなくなつて。——」と故意と独言わざとひとりごとのように附加えて云つた。

運転手が札を手にして、雨の中を馳け出して行くのを見定めてから、本庄は死ん

だ蛇のようにぐったりとなつてゐる少女を抱き上げた。小柄だが持ち重りがして、小脇に抱えているのはなかなか骨が折れる。気が急ぐので肩に引つ担いで歩いた。泥濘に靴が吸いついたり、辻べつたりしながら、漸ツとの思いでアパートの階段に辿り着き、自分の部屋まで運んで、取り敢えず壁際のベッドの上に横え、始めて電気の下で少女の顔を見た。

何という可愛らしさだろう、まるで眠つてゐる西洋人形だ、細面で、頤から首筋へかけての皮膚が滑べこそうで、東洋人には珍らしい濁りのない白さだ。睫毛に覆われた眼は切れが長いらしく、開いたらどんなに美しかろう、本庄は思わず低い歎声をもたらして見惚れてしまった。

可哀想に、——彼女の洋服は胸から肩へかけて、血のりで肌からねばり着いている。鋭利な短剣か何かで、グザと突刺したのだろうか、酷いことをしたもんだ、こんな天使のような少女を傷つけるなんて。——この出血の工合ではよほどの重傷を負っているに相違ないが、どこに傷口があるのかはよく分らなかつた、多分左の肩辺りらしいので、とにかくそこへ自分の半帕をふわりとかけてやった。

微かな呼吸はしているのだが、少女はなかなか意識を取り戻さない。少し心配になつてきた。

「医者招ばなくっちゃ、いけないかなあ」と思った。幸い今年医科を卒業したば

かりの親友が、近所に引越して来たのを思い出した。

「そうだ。彼奴あいつに頼もう」そう気が付くと慌てて外へ出た。外へ出てから先刻さっきの円タクの事を思い出したが、もう車はどこにも見えなかった。彼は雨に濡れながら、逸散に馳け出した。

ぐっすり眠込んでいる友人を叩き起して、

「君、危篤の病人なんだ。直ぐ来てくれないか？」

「危篤だつて？ 誰が？」と蒲団から首だけ出して、眼を閉ぶったまま、眠むような声で訊いた。

「誰でもいい。そんな事は後で話す」

「患者は男か？ 女か？ 俺や、夜中に叩き起されることを思うと、医者になるのを止めツちやいたくなるよ」

友人は渋々起きたが、よく眠っていたところを起されたので、頗る不機嫌だった。「後で委しい事は云うよ。まあ、早く来て診てくれ。こうやっているうちにも、——手遅れになって、死んじまつてるかも知れないんだ」

「君は非常に興奮してるね、——俺やちツとも知らなかったよ。君にそんな女があるたあ」

「俺の女じゃない」

「人の女を夜中に引張り込むのは怪しからんな」

「止せ。そんなくだらない事ツちやないんだ。一人の生命だ。冗談じゃない」

雨は小降りになったが、北風が少し寒かった。本庄は先に立って大跨で飛ぶように歩いた。

アパートの階段を駆け上り、自分の部屋に飛び込んで見ると驚いた。ベッドに寝ていたはずの重傷人は煙のように消え去っている。が、夢でない証拠には、真紅の花を撒き散らしたように、シーツの上に血の跡が点々と残っていた。

驚いたのはそればかりではない。室内は勿論、戸棚から本箱から悉く引掻き廻され、抽斗ひきだしという抽斗は全部開放しになっている。書類はあちこちに飛び散り、床の上に転がされてあるインキ壺からは、黒いインキが毒々しく流れ出して、床を汚している。本庄が出かけた後に何者かが忍び入り、家探しをした上に、少女を浚さらって去ったに違いない、それにしてもこの部屋の荒しようはどうだろう。足の踏み場もない。奮然として棒立ちになっているのを見て、友人は嘲笑を唇に浮べて云った。
 「怖おっそろしく散らかしたもんだな。——して、その危篤の女はどこに秘かくしてあるんだね？」
 彼はむツとして、ぶツきら棒に答えた。
 「畜生！ ご覧の通り逃げちゃった！」

「一体これやどうしたツてんだ？ 泥棒が入ったんじゃないか？ 金があるもんだから。——」

「金なんかあるもんか」と云つたが、今日は月給日だった。ふだんなら机の抽斗に入れておくのだが、運よく持つて出掛けたので助かった。

「だって君、泥棒に入られるなんて、景気がいいじゃないか」

本庄は苦笑して答えなかつた。

「よく注意して調べて見給え。きつと、何か盗まれてるぞ。帰りがけに俺が交番に寄つて、話しといてやろう。一応訴え出ておいた方がいいぜ」

彼は慌ててそれを制止した。

「大丈夫だ。盗まれるようなものは何もありませんから、放ほつといてくれ。面倒だから、——だがな、こうめちやめちやに掻き廻されちや、後片附が大変だなあ」

「引越したと思いやいやな。ところで、——と、もう俺の用事はなくなつたつて訳だね。じゃ、帰るよ」

大きな欠伸あくびをしながら、友人が立ち去るのを見送つてから、本庄はもう一度戸棚の中へ首を突込んで見た。ベッドの下をも覗いて見た。もし仮りにだ、自然に意識を取り戻し、この意外な場所に彼女が、彼女自身を発見したら、必ず逃げようとするに違いない、が、あの重体では歩けまいから、この室へやのどこかに隠れているので

はあるまいかと思つたのだが。――

「してみると、やはり、浚われたのかなあ」

彼は失望した。そうして理もなくむしゃくしゃと腹が立つて、運転手に渡した五円紙幣までが忌々しくなつた。――だが、あの半死の少女を浚つて行く泥棒もあるまいじゃないか。これは普通の泥棒ではない、きつと何か計画んでいるんだらう。殊によると今夜の行動を最初から見ている、僕の弱点に付け込み、金品を強請らうというのかも知れない。しかし、それにしても少し変だ。強迫するとしたらば、何故少女を浚つて去つた？ その理由が分らない。

だが、一体あの血だらけの少女は何者だらう？ 服装も立派だつた、容貌にもどこか犯し難い気品があつた、高貴の人である事は一目で分かる。これには確かに何か深い仔細があるに相違ない。犯罪の裏面に潜む秘密、それを探つてみたら、嘸ぞ面白い事だらう。

彼はベッドの端に腰かけて、考え続けているうちに疲労れてきて、その儘ごろりと横になつた、血の着いたシーツを取り代えるのももう億劫だつた、が、寝てみるとまた妙に頭が冴えて眠つかれなかつた。

2

それでもいつの間にか眠ったとみえて、アパートの主人に喚び起された時には、正午近い太陽がベッドの裾の上にまで差込んでいて、ちよつと睚まぶたが開けられない位眩しかった。明るいはずだ、昨夜はブラインドさえ降すのを忘れて眠ってしまったのだ。

主人は手にしていた茶色の封筒を渡しながら、じろりと変な眼付をして、彼の顔を見た。

「急ぎだそうですよ」

無愛想に云つて、部屋を出て行きながら、もう一度振り返つて、彼の様子を盗み見た。その眼には明白に侮蔑の色があつた。唇の辺りにも嘲笑が漂っているように思われたので、本庄は厭な気持がした。が、渡された封筒の裏を返して見ると、急に顔色を変えて魂消たまげた。

「しまった！」

彼は思わず心で叫んだ。

それは警視庁からの喚出よびだしであつた。見る見るうちに、小鼻の上につつと油

汗が染み出てきた。辰馬久が捕つたに相違ない、さもなければ、——少女を浚つた人が逃げる途中で捕つたか。何れにしても奇怪な事になったものだ。封をきる彼の指先は震えている。しかし事にも手紙は非公式の喚出状で、殊に差出人が有名な岡警部であつたのは意外の喜びであつた。警察官としては珍らしい温味のある人だとの評判も聞いている。それに都合の好い事には偶然にも同郷であつた、それ等を思い廻らしてそこに一抹の光明を発見して、彼は多少元気づいた。とにかく一刻も早く出頭しよう、遅刻して怪しまれては損だ、と思つて飛び起きた。宮岡警部の顔は新聞以外でも見ているので、何となく親しみを持てた、先方は知らなくても、こつちは顔馴染みなので、初対面の人に面会に行くような気はしなかつた。

本庄はなるべく好い印象を与える必要があると考へて、頭髮には油をこつてりとつつけて綺麗に撫でつけ、髯も念入りに剃つて、身だしなみには特に注意した。昨夜まで着ていた洋服はベッドの隅に投げ出してあつたが、広げて見るとズボンの折目もすつかり消え、泥や血の汚点が処々に着いていて、皺だらけの惨めさだ。このままクリーニングに出すのさえ憚られる。彼は血に染つたシートと一緒に、行李の底に納^{しま}い込み、戸棚の奥へ押し込んだ。それからプレツスをさせたばかりの外^{よそ}出着の茶色の背広を着込んで、悠然と、せいぜい心を落ち付けて出掛けたが、胸の心悸は容易に治まらなかつた。

桜田門で電車を降りたが、今日位警視庁が厳しく、恐しいものに見えたことはなかつた。俯向きながら石段に靴先をかけようとして、ふと、気忙しそうに階段を駆け降りて来る人を見た。それこそは紛う方なき宮岡警部の顔であつた。本庄ははつとして立ち停つた。帽子を脱り、急に烈しく鳴り出す心臓の鼓動を押えるようにして、頭を下げ、慇懃に云つた。

「遅刻致しまして。——お喚出しにあずかりました本庄恒夫でございます」と云つて、顔をぱつと赤くした。

宮岡警部は快闊な、齒切れのいい言葉で、

「やあ、ご苦勞様！ 今まで待つてたんですが、——急用が出来て、——ま、構わんから一緒に来て下さい」

案外くだけた調子なので、この分なら大した事もあるまい、と本庄は内心ほつとしました。

宮岡警部は本庄と並んで歩きながら、元氣よく話しかけた。

「君、——眠かつたでしょう？ 早くからたたき起されて。——」と澄んだ眼に意味ありそうな微笑を浮べて、じいつと見た。彼はひとたまりもなく恐縮してしまつた。

「実は君にお詫しようと思つて、——その他に少し話したい事もあるんだがね。——」と云いかけて、四辺を見廻し、誰かを待ち合せてでもいるような素振だったが、急

に通りかかった円タクを止めて、

「急用を思い出したから、ちよつと私宅へ寄ります。立ち話も出来ない。一緒にお出で下さい」

と本庄を顧みて云った。無論拒むことは出来なかつたので、已むなく宮岡警部と並んで腰をかけた。警察官と相乗りは余り愉快でなかつた。どんな訊問を受けるのか知らないが、内容が分らないので気が落ち付かなかつた。本庄は窓際に寄つて、体をかたくして坐つていた。運転手と話している会話に耳傾け、密かにまた彼の腹の中を探っているのか、どこを走っているのか、そんな事に注意する余裕もないうちに、ある小さな文化住宅の前で車が停つた。宮岡警部は先に降りると、木造の階段を駆け上つて、玄関の扉を開けた。本庄も続いて下を向きながら、悄然と彼のズボンに従つて屋内に入った。

応接室だろうか、日当りはいいが、窓掛カーテンも何も無い、頗る殺風景な部屋で、粗末な卓子テーブルと椅子が二三脚あるばかりだ。その一つの椅子の上に天鷲絨ビロードのような毛をした黒猫が丸くなって眠っていた。二人の足音に眼を覚まし、ひよいと首を擡あげたが見知らぬ客の顔を見ると、驚いて逃げて去つた。

改つて、向い合いに腰を下すと、本庄はまた急に不安になつた。何を云い出されるのかと思つて、ひやひやしながら、興奮した顔をほてらせて、彼の言葉を待つて

いた。

宮岡警部は相変らず軽い、朗らかな語調できり出した。

「本当にお気の毒なことをしましたね。君は、僕のおかげで、飛んだ非道いめに会ったんだ。僕は今日終日、悠然と眠らせておいて上げようと思つてたんだが。——実は、急にまた事件が突発してね、これからそっちへ行かなけりやならんのだが。——それにまあお詫は早い方がお互に気持ちがいいからね。君、昨夜は随分、疲れたでしょう?」

本庄ははツとして眼を落した。背中に冷汗がジツとりと染み出るのを感じた。宮岡警部は横目で彼を見て、隣室の扉の方へ笑いながら声をかけた。

「トミー、来いよ。——本庄君を紹介するから——」

声と同時に扉が開いて、一人の女が黒猫を抱いて、すうツと入つて来た。彼は慌てて椅子から立ち上り、顔を見合せた瞬間、息が止まるかと思うほど驚いた。それは前夜浚われたと思ひ込んでいたかの少女であつたから。いや、そればかりではない、彼は生れてから、これほど魅力をもつた顔を見たことがなかつたからだ。綺麗に剃りつけた細い眉、理智的に美しい顔は、パーマネント・ウェーブの真黒な髪の毛を背景にして、くつきりと輪廓を浮き出させている。柔軟な体を包んでいる黒天しなやか驚絨のワンピースが、細そりした姿に重そうで、ややもすると撫で肩から這べり落

ちそうだ、それがまた大変艶めかしく、彼の目に映じた。首筋にも、肩にも、殊に左の方は注意して見たが、傷らしい跡はどこにも残っていないかった。頗る元気で、全然別人のように朗らかだった。昨夜は十二三の少女だと思つたが、柄こそ小さいがもう立派な令嬢で、年も三つ四つ上らしく見えた。

本庄は呆氣に取りかれて、少時は口もきけなかつた。ぼかんとして、直立不動の姿勢を崩さないでいるのを、宮岡警部は見て、笑いながら云つた。

「まあ、掛け給え。君、僕の妹をご紹介しましょう。宮岡十三。昨夜は大変ご厄介になりました。——君、あの宿から一緒に逃げ出した男、あれ、何人だか知つてますか？」

「はい。あれは私の親友で、辰馬久という者でございます。有名な実業家辰馬増之助氏の長男で、京大を中途退学して、只今は親爺さんの辰馬銀行に勤めて居ます」といささか得意氣に答えたのだつた。

「ああ君は全然何も知らんのですね。あんな奴と君、——交際つちや危険ですよ。辰馬銀行頭取の息子には相違ないが、ありや君、——多分君は何も知らないんだらうとは思つていたが、××会の首領なんだよ。仲間うちでは変名で通つているので、余り本名は知られていないがね、実はこの度のギャング狩りに、総監から僕が内命を受けている訳なんだが、——彼を捕えるのは容易な事じゃないんだ。昨夜はトリツ

クで捕える計画を立て、僕は妹のトミーと円タクに乗って、君達二人が賭場から逃げるのをずうツと尾^つけていたんだ。兎が彼奴は途中で感付いて風を食って逃げちゃった。君もてツきり同類だと睨んだので、——仕方がない。君の方を一つ洗つてみようと思つて、まず家宅捜査をやつてみたのさ。あの時の運転手は僕ですよ。車内に大怪我して倒れている女があれば、誰だつて、君同様の手段に出るよ。何しろ警察は鬼門の連中なんだからね」とからからと笑つて、

「あれだけ苦心したのに、——遂々失敗しちゃつたよ」

と云つて、卓子の上に置いてあつた五円札を本庄の前に差出して、

「運転手、——いや僕に渡された、——これはお返し致します」

と云つた。

彼は思わず顔が赤くなつた。十三の前だけに一層恥しかったのだ。が、まだ狐につままれてゐるようで、何が何やらさっぱり解らなかつた。辰馬久が××会の首領であるということも初耳だ。そう云われてみれば最近彼の思想は大分變つてきてはいる。ひと頃は軟派の不良で鳴らしたものだ、辰馬の毒牙にかかつた女は数えきれない、いつでも女の事で問題ばかり起していたが、この頃はそういう噂も余り聞かなくなつたので喜んでいたので、——何という迂闊な事だつたのだろう。彼が親の家を出て、アパート住居すまいをしているのも、女出入に都合が好いたためだと聞いている

だが、実際はそればかりではなかったのかも知れない。考えれば疑わしい点はいくらでも出て来るのだろうか。

「すると、——辰馬は変名を用い、××会の首領として、活躍しているのですか？」
宮岡警部は底力の籠った声で、重々しく答えた。

「そうです。あの男は女の敵であると同時に我々の敵ですよ」と云って十三の方を見ながら、

「トミーも彼に誘惑されかけた一人なんです」

十三はちらりと宮岡警部の方を流し目で見た。それは美しく澄んだ空色だった、はてな？ 空色の眼——殊によると彼女は混血児かな、と心に思った。そう思つて見直すと鼻の恰好も、奇麗な唇も、クリーム色の皮膚も、どこやら違つている、それに第一この小柄なのに、洋装がしつくりとよく似合う処など、どうしたつて西洋人だ、見れば見るほど着附けも粋で、垢ぬけがしている。

彼女の空色の眼は、またいろいろな表情を現わした、訴えるような、悩ましげな、遣る瀬なさそうな視線は、絶えず動いて彼の頭の中を容赦なく掻き乱した。その一挙一動もまた不思議な力を持つて胸に迫つた。本庄は今までに、これほど怖しい魅力をもつた女に出会つた事はなかった。十三によつて彼の魂には生涯消すことのない、深い印象を与えられたと云つてもよかつた。

敏感な宮岡警部は彼の心を見透したのだろう、訊きもしないのに、彼女について語るのだった。

「トミーと僕は母を異にしているんです。妹の母は西班牙人スペインでした。もう亡くなりましたが。——複雑した家庭に産れたものですから、彼女も幼い時からいろいろ苦労しましてね、可哀想な女です。が、いつまでこんな生活もさせておけません、その内には良縁もあるだろうし。——」

と云いかけて、ふと気を変えて、

「しかし、トミーは逆も兄とて思いなんです。僕の仕事をよく助けてくれるんです。女は第六感の働くものですからね、随分役に立つ事があるんですよ。君もひとつ、妹と一緒に僕を助けて頂き度いんです」と改まった口調で云った後、急にまた嘲弄あざわらうように笑いかけて、

「その代り、特別を以って、昨夜の事は見逃して上げますよ。アハハハハハッ」
本庄はちよつと面喰つたが、何だか非道く馬鹿にされたような気がして、不愉快だった。しかし、こつちに充分の弱味があるので、何とも云うことは出来ず、ただ苦笑したばかりだった。

その時まで一言も云わず、膝の上の黒猫を撫でていた十三は、始めて口をきいた。「失礼だわ。私達の方こそ見逃して頂かなけりやならないのよ。あんな泥棒みたい

な真似をして、お部屋中を引掻き廻してさ。本庄さん、貴方、怒っていらつしやるでしよう？」

と云つた。いい声だなと思つて、その柔かい感じに聞惚れていたので、最後の言葉しか耳に入らなかつた。だから、

「いいえ」と云うより仕方がなかつた。

「しかし、そりや職務上、已を得ない事なんだから」と宮岡警部は弁解するように云つて、急に居住いを正し、

「冗談はとにかく、——これは真面目な大事な話だから、よく聞いておいて下さい。実は君を喚んだのはこういう理由わけなんだ。——辰馬久は身辺に危険の迫つたのを早くも感付いて、姿を暗ましそうな形勢が見えるんです。猶予してはいられないんだ。そこで昨夜は失敗したが、今夜こそは一つ上手うまくやつて、——実はね君」

と急に声を低めて、

「少し危険だが、彼のアパートを襲おうと計画してるんだ。証拠書類を押収しようという訳で、——就いては君に案内役を引受けてもらいたいんだよ。真向から部下を引連れて乗込むのは容易たやすい事だが、僕はそれを好まないんだ。というのは父親の辰馬増之助氏は人格者だし、国家の功労者でもあるから、——万事穩かにして、なるべく世間にはツと知れないように、秘密裡に始末をつけてやろうという訳なんだ」

本庄は辰馬が十三を誘惑しかけたと聞いた時から、彼に対する好感を失っていたが、それでもこの案内役を喜んで引受ける気にはなれなかった、と云つて、拒絶することは無論出来ない、何と云つても辰馬が悪いんだから仕方があるまいと心で考へていた。彼は××会の首領であるばかりでなく、この無邪気な、美しい十三をさえ毒牙にかけようとしたのだから、——好くないな、辰馬の奴、怪しからん男だ。しかし一体どこで、どういう機会に、彼女と知り合いになったものだろう、誘惑と一口に云つても、それほどの程度だか分らない、と肝心の問題よりもその方が気になった。そこで本庄は何気なく訊き出してみる積りで云つた。

「辰馬は、——貴方もご存じなんでしょう？」

「知っていますよ。顔だけはね」と即座に答えた。

「十三子さんも知っていられるのですね？」

「よく知っています。トミーはダンス・ホールで懇意になつて——」

「あら、お兄さん。そんな余計な事は云わないだつていいじゃないの」

と、頬を赤くして、

「私、辰馬さんの顔なんか、もう忘れちゃつたわよ」

と媚を含んだ眼で、本庄の顔を見ながら云つた。

「薄情な奴だなあ」

宮岡警部は起ち上つて、時計を眺め、急に慌て出して、

「話はそれだけなんだが、——ではちよつと僕は出掛けて来ます。本庄君、君にはお気の毒だが、一時留置するよ。今夜の任務を果すまで、——まあこの部屋でトミーと話でもして居給え、直きに帰つて来るから。——」

と云い終るか終らぬうちに、急いで扉の外へ出て行つた。

3

直ぐ帰ると云つて出たぎり、宮岡警部はなかなか戻つて来なかつた。その間に本庄と十三はすっかり親しくなつていた。話は多く黒猫ミミーについてであつた。

「刑事部長さんから、護身用に頂いたの。恐い人に出会つた時には、この猫を打ぶつけてやるのよ」

と云つた。ミミーは実によく馴されていた。十三が馳け出すとその後を追つて走り、立ち侍つて彼女が自分の胸を叩いて招ぶと、いきなり飛び上つて、襟元に縋かかりつき、真白い首筋に頭をこすりつけて甘えた。

日暮れ頃になると両方とも益々はしやぎ出した。その愉快そうに戯れ遊んでいるのを見てみると、大小の猫が纏れ狂っているとかしか思われなかった。薄暗い室内の壁には踊っているような影法師が映っていて、黒ずくめの装いで敏捷に跳ね廻る十三の姿は、まるで黒猫のような感じだった。本庄は好奇心の眼を輝かせて見惚れていた。

夜になった。宮岡警部はどうしたのだろう、二人を置きりにしたまま、まだ姿を見せなかった。

「きつと、いまに、自動車で迎えに来るんでしよう」と云つて、十三は別に気を揉む様子もなかった。

十一時近くなつて、彼女の云つた通り自動車が玄関に停つた。

運転台の窓から、宮岡警部は首だけ出して差招いた。

彼女はミミーを小脇に抱えて、自動車の窓に飛びついた。

「遅かつたのねえ。お兄さん」と甘たるい声を出して、

「昨夜、失敗したから、——今夜はミミーを伴^りれて行くのよ」と云いながら、黒猫の頭を叩いて、

「ミミーさえいりゃ、成功疑いなしだわ」

十三は両手でミミーの胸中を抱いて、高く差上げ、

「しつかり頼むよ。ミミー！」と頬ずりしながら云った、その眼は緊張して、鋭い光を帯びていた。

本庄は宮岡警部の前に進み出て、無言で丁寧な頭を下げた。

「や、遅くなつて。——」と云い、十三の方へ向いて、眉を寄せ、

「出掛けようとする処へ、生憎、捕物があつてね。——」と弁解らしく云った。

「私に運転させてよ」

彼女は運転台に飛び乗り、宮岡警部をルームの方へ追いやって、自分でハンドルを握った。

「十三子さん、豪いえらですね」と本庄は感心した。宮岡警部は苦笑して、

「男手で育てるとお転婆になつて困るよ。女らしい教育が出来ないから。——」

そんな事を話しているうちに、丸ノ内アパートへ着いた。

事務所には本庄の顔を知っている小使はいなかった。合鍵を貸せと云うと変な顔をして、

「辰馬さんはお部屋に在らっしゃるはずです。先刻まで食堂で、お友達とビールを飲んでいましたよ」と云つたが、別に怪しみもせず直ぐ合鍵を貸してくれた。

本庄は宮岡警部の命令に従つて、自動車を人通りのない裏門へ廻し、車内に入つて待つていた。

暫時しばらくすると十三が馳け出して来て、いきなり本庄の手を握り、しなやかな体をすりつけるようにして、耳元に唇を寄せ、

「肝心の書類は銀行の金庫に納つてあるんですとき。——これから皆で銀行へ行くのよ」

生温い息が耳にくすぐつたかった。

本庄は帽子を眼深に被り助手台に腰を掛けていると、どうやら自分も探偵小説中の一役を買つていようで愉快だった。

聽て、後に靴音が近づき、扉が開いて、シートにどツかりと腰を下す音がした。皆黙々としていた。

ハンドルを握っている彼女の顔は真蒼で、引きしまっていた。辰馬銀行に着くまで、誰も一言も口をきかなかつた。車が停つた時、本庄は始めてそつと後を向いて見た。辰馬久は目隠しをされ、猿轡さるくわをはめられ、両手を縛られていた。シークな彼が、この時位物哀れに見えたことはなかつた。

辰馬は宮岡警部と、ピストルを手に持った十三との間に挟まれながら、行員出入口から、銀行内に入つて行つた。本庄は張番を命ぜられたので、暗い横町に立つて居た。預つた黒猫をしっかりと胸にかかえ、その柔らかい毛並を撫でていると、どこかに彼女の移香を感じたので、彼は思わずミミーを抱きしめて、頬ずりした。

その時、突如、静寂な往来に沢山な靴音が聞えたので、彼は本能的に身を転じ、暗い蔭にひそんで様子を覗^{うかが}った。一かたまりの黒い人影は飛ぶように近づいて来る、警官らしい。先頭に立って馳^はつけたのは、意外にも銀行内に入っているはずの宮岡警部の顔であった。本庄は驚いて、街燈の灯に透して見直そうとした途端、警部は部下を顧みて、

「つづけ！」

と一声厳然と云い放った。その声いろは別人のような鋭さがあつたので、本庄は思わず驚愕の眼を瞠^{みは}った。よく似ている、全く生写しだが、人間は違うようだ、たしかにこれは宮岡警部ではない、偽物に違いないが、それにしても同じ顔の人が二人、——俺の眼がどうかしているんじゃないか、とも思ったが、余り酷^{そうく}似なので異様な無気味さを感じた。が、また咄嗟にこんな事をも考えた。辰馬の急を知って、××会から救助に来たのではあるまいか、警官に変装して、——危いぞ、これだけの人数を相手にしては敵^{かた}いッこはない、何とかして十三を助けてやらなければならぬ、と氣を揉んでいるうちに、黒い影はひとかたまりになって、裏口からどやどやと奥へなだれ込んだ。

「真暗だ！」と一人が呶鳴った。

「スウィッチも、——電線も、——切断されてる！」

「逃すな！——女を。——」
と喚いた。

それを聞くと本庄はもう気が転動してしまった。前後の考えもなく跳り込んで行くこうとした時、中からぱつと飛び出して来た十三の体に打つかった。その拍子にミミーは驚いて彼の腕を引掻いて逃げ出し、彼女の後を追うて往来を真蔦地に走った。まるで二つの黒猫がもつれ合つて飛んで行くように見えた。と、殆ど同時に、真暗い銀行の廊下で恐しい格闘が始つた。罵り喚めく声、入り乱れた靴の音。

「あッ。やられた！」

どたり、人の倒れる響き、続いて起る物凄い叫び声に本庄は度胆をぬかれた。逃げよう！ 踵を転じた刹那、どんと背中を突かれた。

「逃げる！ 早く——」

底力の籠つた聞き馴れた声、それはたしかに宮岡警部に違いなかつたが、どういふ訳か、一人の警官がいきなり飛び出して来て、背後から警部の胴中にしがみつき、呼笛を鳴らした。

本庄は夢中で走つた。

× × ×

気がついた時、彼は全身打ちのめされたように疲れ切つて、ベッドの傍の床の上に倒れていたのだつた。

扉の下から室内に沁べり込ませてある新聞を、習慣的に手に取つて拵げて見た。はッとして、本庄は跳ね起き、眼をこすりながら、もう一度見直した。

「辰馬銀行、黒猫トミーに襲わる」

三段ぬきで書かれたその記事を見て、魂消けてしまった。彼は息をはずませながら、むさぼるように読んだ。

幸い彼の名はどこにも出ていなかったが、宮岡警部と辰馬久と、負傷した警官との写真が出ていた。

世界を跨にかけた女賊黒猫トミー及びその情夫が、辰馬銀行の金庫から多額の金を奪つて逃走した。しかもその案内役は頭取の令息である、という点に多少の疑惑を抱かれているというのだ。

本庄は思わず胸震いした。が、不思議な事ばかりで、どうも腑に落ちなかつた。第一××会の首領であるべき辰馬久が捕われぬのも変だ。十三が仮に黒猫トミーという女賊であつたとしても、宮岡警部はどうしたんだらう。辰馬に会つてみよう。そうだ、彼に会つて訊いてみる事だ。

しかし、さすがにアパートに行く気はしなかったもので、辰馬銀行に出かける事にした。新聞を見て見舞いに来た、と云えば誰も怪しむまい。

銀行の応接室には見舞客が辰馬久を取巻いて、事件の顛末を聞いているところだった。彼は両足をふんばり、腕を組んで、興奮しきった顔をして、刑事から聞いてきたという話を受け売りしていた。が、本庄の顔を見るといきなり手を握って、

「例の一件から、遂々こんなめに会っちゃったよ」とささやいた。それを××会に關係した事と本庄は早呑込みして、

「どうして君が、——××会の首領なんかになっていたんだ？ 僕は全然知らなかったよ」

辰馬は目をむいて、

「君、何云ってるんだ」本庄はどぎまぎしながら、

「だって、例の一件だなんて云うから。——」

「賭場の一件さ。あの弱味につけ込まれたんだよ」

「ああそうか、なあんだ」

「あれを種に脅迫しやがったんだ。アパートに最初やって来てね」

聞いている彼は冷汗を流した。心臓の鼓動が耳に騒々しく聞えた。

「辰馬君、新聞に出ていた通りかね？ 黒猫トミーツて、どんな女だ？」

辰馬は鼻の先に小皺を寄せて、フンと笑った。

「いい女だぜ。俺が金は持ち合せていないッて云つたら、銀行の金庫にあるわよッて、あの女ピストルを突きつけやがった。好い度胸だぜ。自動車に乗せて俺を銀行に連れて行つたが、手配中の宮岡警部が来てくれたんで助かった」

「君はトミーを知つてたんだらう？」

「知つてるもんか。泥棒じゃないか。いくら俺が物好きだつて、あんな凄こい女は真平だ。情夫の方がぺこぺこして、女に使われていたぜ。奴やつこさん、宮岡警部に写真酷そつくり似に変装してやがった。二人宮岡警部が出来ちやつて、どっちが真物ほんものだか分らなかつた。そのために遂々捕え損こつたんだそうだよ」と辰馬は笑つた。

まんまと欺かれ、手先に使われたのかと思うと腹が立ったが、何故か本庄は心から彼等を憎む気にはなれなかつた。

鷺娘

「まゆみちゃん、何のお話かと思つて飛んで来たたら、いやあよ、またあの縁談なの？
私はやっぱり一生独身で、芸術に精進する積りなんだから、お断りしますよ」

百合子はさっぱりと云つた。

まゆみは彼女が一度いやだと云い出したらどんなにすすめてみたところで無駄だと知っていたので、黙っていると、百合子はまゆみの気持ちを損じたとも思つたのか、駅前の中野で買つてきたという南京豆入りの餡を出してすすめ、自分も口に入れて、

「内玄関で薬剤師の竹村春枝さんに会つたわ。あのひと、また来ているの？」
と話をかえた。

「そう。疎開先から戻つて来たけれど行くところがないんですつて、それで当分薬局を手伝つて頂く事にしたの、でもねえ、開業医だつて、この頃、とても楽じゃないわ。竹村さんがいた時分のように景気もよくないし、第一あなた、旧円から新円にかわる時、沢山な患者さん達がしこたま旧円を預けに来たんでしよう、それがみんな預金になつちやつて出せないんだから、今じゃまるで遊びよ、忙しいけれどた

だ働きたいなもの。竹村さん、月給はいらないからッて云うんだけれど、月給なんか知れたもんよ、それよりか食糧のかがりが大変だわ」

百合子は薄い唇を曲げて、

「断わつちまいなさいよ。私、あんな高慢ちき女大嫌いさ。美人ぶつていて——」

まゆみと百合子は従妹同志で両方とも一人娘だったので、幼少い時から姉妹のようになつて仲よくしていた。年も同年の二十四、身長も同じ五尺一寸、色白のぱちりとした目鼻だち、うすでの感じまでよく似ている。しかし、性質はまるで正反対だった、まゆみがおっとりとして口数も少なく万事控えめなのに反して、百合子はてきぱきとして負けずぎらいの強気だ。金持ちのお嬢さんでふたりは学校以外にいろいろなことを仕込まれたが取り分け舞踊は両方の親達が好きだったので、六才の六月から稽古にやられ、まゆみも光村医学博士夫人となるまでは舞踊家としてたつ位の意気込みであつたので、仲の好い二人も舞踊の事になるとまるで敵同志のように互いに鎬をけずつていた。が、天分のあるまゆみにはいくら努力しても百合子は足許にも追いつかなかつた。

ところが今から五年前、歌舞伎座で舞踊大会のあつた時、まゆみは見物に来ていた光村博士に見染められ、懇望されて妻になつて以来ふつとりと舞踊とは縁をきり、地味な若奥様となつて家庭の奥へ引込んでしまった。

まゆみは細い指先で飴をつまんで口に入れようとしたところへ、噂の主の竹村春枝が入つて来た。二十七八のすつきりとした美しい女だった。

「奥様、先生が、応接室に川崎様がいらしてますから、お相手をして下さいませつて——」

彼女は自分の口に持つて行こうとした飴を竹村にやつて、

「ちよいと待つていてね」と百合子を残して竹村と部屋を出ると入れ違いに光村博士が聴診器を首にかけてままで入つて来た。百合子は軽く頭を下げてにツと笑つた。博士は彼女の膝の前に放り出してある写真を手にとつてにやりと笑い、揶揄口調で云うのだった。

「やあ素敵！ モダンだな。お媚さんの候補者かい？ 素晴らしい美男子じゃないか」

「知らない」

百合子はすねたようにつんとした。

博士はわざと親類書を声高かに読み上げた。

「大審院判事の子息で弁護士か、姉さんが大学教授法学博士に嫁すとあるから家には小姑はなしか、両親はいないし気楽だなあ、その上に財産がある。五十万円——、こいつあ結婚した方が得だぜ」

「いやだわ。光村博士おにいさままでそんなこと云つて、憎らしい！ 私は舞踊と結婚して一生舞踊を旦那様だと思つて暮すんだわよ」

「おや、それじゃ約束が違うじゃないか」

「まゆみちゃんが死んだら貴方と結婚するツてこと？ 一つのことだか分らないわそんな話——、ああ、考えるとつままない」百合子は焦れたそうにハンケチを丸めて畳の上に叩きつけ、

「誰も彼もみんな癪にさわる人ばかりだ、まゆみちゃんなんか殺してしまいたい、大事な私の光村博士を横取りして、涼しい顔をしているんだもの」

「横取り？ ウフウフ。君を光らせるために、まゆみが死ぬほど好きな舞踊を封じてやつてるんじゃないか、ちつたあ僕に感謝してもいいはずだよ」

「私だつて自分の恋人をまゆみちゃんに捧げてるじゃないの。恋を犠牲にしてまでもやりとげようとしている私の芸術も——」

百合子はしばらく肩を落して、

「天分のないものは仕方がないわねえ、ああまゆみちゃんが羨しい、あれだけ才のある人は見たことがないって家元さん口癖のように云つてらっしゃるわ」

「お世辞さ」

「羨しいより憎らしいわ。私は努力でのびて行くより仕方がないんだもの、光村博

士がいくら封じた積りでも、まゆみちゃんいつ気がかわって舞踊家になろうと思うまいもんでもない、この頃少し結婚生活に退屈しているようだもの。あのひとが生きている限り安心が出来ないわ、一層殺しちゃいたい」

百合子は博士にとられた手を邪慳にふりきって起ち上ろうとすると、

「川崎様のお薬が出来ました」

と竹村が薬瓶を持って来た。話に夢中になっていた兩人は胸がドキンと鳴った。博士は狼狽して応接室の方を指差し、

「竹村君、川崎さんはあつちだ、早く薬瓶をよこせ、いや、早く持って行って上げろ」しどろもどろだった。竹村は何も気がつかないように応接室の方へ去った。百合子はほっとして後姿を見送り、

「何んて美しい女だろう。光村博士はあの人好きなんじゃないの？ 利口そうなのばっちりした眼、油断がならない、何か感付いたんじゃないか知ら？」

「感付いたって構うもんか、あんな奴、追い出しちまえばそれきりだよ。それよりかね、百合ちゃんの名披露何日にするの？ 切符をウンと引き受けるぜ」

と博士は話を転じようとしたが、百合子は竹村の事ばかり気にして、

「まゆみちゃんに何か云いつけると困るわ、あのひと、私の方を變にじろじろ見ていたけれど大丈夫かしら？」

「気のせいだよ」軽く受け流して、博士はコロナに火を点じた。

2

舞台稽古の前日になって百合子は急に鷺娘を踊るのがいやだと云い出した。

下ざらいで興奮していた家元は、この我儘な申出でに忽ち腹を立てたが、そこは何と云つても鼻肩筋の大切なお嬢様なので、怒りをぐつと呑み込んで、

「駄目ですよ。プロまで出来ているんだから」

と言葉だけはおだやかに云った。

「だって、うまく出来ないんですもの」

「名取りの癖に何んですって？」

百合子は溜息を吐いて、

「ほんとに私、名なんか貰らわなけりやよかつたわ」と口を辻べらせてしまった。

その一言で今まで抑えていた疔癩玉が破裂した、家元はカツとなつて、

「ちよいと、もう一度云つてごらん。——私はねえ百合ちゃん、あんたが泣いて頼ん

だから仕方なしに名を上げたんですよ。それだのに名を貰らわなけりやよかつたとは何事です。それもさ、まゆみちちゃんのように質が良いのなら格別、あんたみたいに苦勞させられた上に勝手なことを云われちゃ、いくら親御様の御鼻屑にあずかつている私でも、そうそう御機嫌をとつちやいられませんよ」

家元の権幕に百合子は唇を白くした。今まで、そこにずらりと並んで自分の番を待っていた朋輩弟子は一人へり二人へりして、いつの間にかこそこそと姿を消して次の間へ逃げてしまった。

「すみません。家元さん」

百合子は低い声で謝罪ながら、境の唐紙の方をちよつと見た、唐紙の後ろには弟子達が寄り添って聴き耳を立てていることだろう。

百合子はもう一度丁寧に頭を下げて佗びてみたが、家元はその位の事では納まらなかった。

「あんたにさ、まゆみちちゃんみたいに上手に踊れつて云つたら、これや私の注文が無理というもんでしよう。だけど人並みのこと位は出来そうなものね。無理に名をとつた手前に対しても——、意地にもですよ」

「よく分っています。家元さん」

「分っているなら何故もつと勉強しないんです？」

「勉強していますわ、それでも——、どうしても——」

「出来ないってどういうの？　こんなに教えてやって出来ない人が、芸で立とうなんて余り虫が好すぎるよ、あんたはお金持ちのお嬢様だもの、出来もしない芸で苦労するより、お嫁に行ったらいいじやありませんか。まゆみちちゃんのような人なら芸を捨てて勿体ないと思うけれど、あんた位なら別に惜しいこともないからね」

稽古所の格子戸がからりと開いて、娘達が笑声を先に立てて賑やかに入って来たが、忽ち穏かでない空気を見て取って、すうっと次の間へ逃げてしまった。百合子はもうこれ以上はずけはずけ云われるのは辛かったので、

「わかりましたわ。私、一生懸命にやります。きつと、うまく踊りますから堪忍して下さい」

「名取りにならなけりやよかったなんて大きな口をきいたんだからね、うまく出来なかつたら札を返してもらいますよ」

「はい」

「まゆみちちゃんところへ行つて、よく教わつて来るといいよ」

「はい」

「あの人の鷺娘、実によかったからねえ」

「はい」百合子は膝の上に涙を落した。

「名披露に肝心のあんたが一番拙かったなんて云われちゃ耻つ搔きだからね」
「はい」と震える指先で眼頭を押えた、涙はその指を伝わって流れた。

百合子の胸の中は口惜しさで一杯だった。家元の一言一句はさながら毒汁でも注射したように骨身に通った。朋輩の前でこれほどまでに侮辱しなくても、と、家元の心が恨めしかった。この屈辱をそそぐためには、どんなに苦しくつても努力して立派に踊りぬいて見せる事だ、それより他に道がない。

家へ帰ると早速猛練習を始めた。一夜まんじりともしないで踊りつづけ暁方近くには疲れきつて舞台に俯伏したまま前後不覚に寝入ってしまった。

「百合ちゃん、風をひくよ。今日は大事な舞台稽古だというのに——」
母に起されて、百合子はパツと眼を開くと、直ぐまた起ち上って復習を始め、母を驚かせた。

青褪めた顔に眼を血走らせ、舞台稽古に馳けつけた。彼女はもう死者狂い、耻を搔かされた家元への吊合戦だ。悲壮な決心で鶯娘に全霊を打ち込んだのだったが、悲しいことには百合子の芸には独特の持ち味もなければ、習った形以外のうまみを見せるということがなかった。焦れば焦れるほどかたくなった。

家元はもう投げてしまって、

「今となつちやもう仕様がな。反つて、お笑いぐさで、愛嬌があつていいよ」と

嘲笑した。

笑いを噛み殺していた朋輩達は家元が笑ったので、もう我慢がしきれなくなり、一度にぷっと吹き出した。

百合子は狂気のようになって、楽屋口から外へ飛び出した。

3

百合子が晴れの舞台で鶯娘を踊ると聞いてから、まゆみはすっかり憂鬱になってしまった。

「どうぞ、切符をどっさりはいて頂戴、舞踊界へ入る私の首途を祝福して、成功を祈って下さい。当日は是非お二方様お揃いで御見物のほどを——」

走り書きの手紙に添えて、プログラムと切符が沢山届けられた。

気の利いたそのプログラムを眺めると、まゆみは我知らず心の時めくのを覚えた。自分も止めなかったら、やはりこうして晴れの舞台も踏めるものを——、見物の拍手を浴びて引込む時の愉快さを思うと身内がうずくようだった。

「久しく見ないが、百合ちゃん、きつと上手になつただろう」羨しい、嫉ましい、淋しいごちやごちな感情が込み上げてきて眼が熱くなる。思わず溜息を吐いた時、廊下を慌しく馳ける音がして、突然、百合子が入つて来た。彼女の顔は死人のように真青だ、一目見た時そのただならぬ表情に驚いたが、次ぎの瞬間にはいきなりとられたまゆみの手に、わなわなと烈しく震えている百合子の手を感じて二度びつくりした。

「まゆみちゃん！」

百合子は彼女の膝に泣き崩れた。

「どうしたのよ、そんな青い顔をして——、泣かないで話してごらんよ」

「ああ、私、口惜しいわ！」

百合子は下唇を血の染むほど噛みしめて、ぼろぼろと涙を頬に伝わらせ、

「家元さんはほんとにひどい人よ」

「あんた、叱られたの？」

「叱られたんじゃない、いじめられたのよ、口惜しいわ、まゆみちゃん」百合子は麻のハンケチを前歯でピリピリ引き裂き、きつとなつて、

「あんた、私の一生のお願いいきいて下さらない？ 私を助けて頂戴よ」と云つて、また一しきり泣き出したが、

「まゆみちゃん、私の云うこと、絶対に他言しないって誓って頂戴」

「誓うわ。だけれど何なの？」

「きつと秘密をまもってくれる？」

「大丈夫」

「饒舌しやべつたら承知しないことよ、生かしておかない、殺しちゃうわよ」

「殺すんだって？」

まゆみは思わず大きな声を出した。

「しっ！」百合子は庭を指差した。植込の中に屈んで竹村が草をむしっている。

まゆみは縁側に出て声をかけた。

「竹村さん、草むしり、今でなくっていいわよ」

「はい」

竹村は賢そうな眼をぱちりと開いて、にっこりした。まゆみも微笑をかえした。

「向へやったから、さあ早くその秘密話してよ」まゆみはもとの席へ戻った。

「まゆみちゃん、私の代りになって、——鶯嬢踊って下さらない？」

「えっ?!」

「私になりすまして、踊って頂戴な」

突飛なこの依頼に驚いて、まゆみは返事が出来なかった。

「ね、いいでしょう?」

まゆみは黙っていた。引き受ければ夫の命令に反くわけだ。公の舞台にたった以上どこで誰に見破られまいものでもない。うまくいったところで縁の下の力持ち、下手をすれば博士夫人を棒に振らなければならぬ。まゆみは途方に暮れてもじもじしていると、百合子は威圧するような鋭い眼と烈しい語調で迫るのだった。

「いやならいやとはつきり云いなさいよ」

「いやってわけじゃないけれど——」

「そんなら引き受けると云って、私を安心させて頂戴」

「でも——、何んだか恐いわ」

「意気地なし! そんなら頼まないわよ。私はもう決心してるんだから、あんたに断わられたら生きていない、死ぬわ、まゆみちゃんを恨んで死んでやる。たつたいま、ここで。この部屋で——、嘘だと思うんなら見ていらっしやい、お薬はちゃんと薬局から盗んでこの通り持っているわよ」

百合子は帯の間から薬を出して、

「生かすも殺すもあんだの心一つ、私はもう絶対絶命なんだから、まゆみちゃんが承知してくれなければ死ぬより他にみちがない」と云いながら一息に薬を飲もうとした、まゆみは驚いてそれを奪い取り、庭へ投げた。

「馬鹿なことをするもんじゃないっ」

「じゃ、引き受けてくれる？」

まゆみはうなずくより仕方がなかった。

「だけれど、そんなこと出来るものか知ら？」

「出来ますとも、まゆみちゃんと私はそっくりだから、顔をつくってしまえば、絶対に分りっこありやしないわよ」

「うまく替玉になれるか知ら？　そして、あんたはどうするの？」

「楽屋の隅にでも隠れているわ」

「危ぶない話ね、もし見つかったら——」とまゆみは胸震いした。

「光村博士は重病患者があつて行かれないと仰しやるし。見物はまゆみちゃんの妙技にうっとり魂を奪われているから、見破る人なんかありっこないわ。危ぶなそうな人には切符をやらないから」

百合子の替玉になつて踊る、まゆみは恐いような、また嬉しいような気持ちでした。そんな機会でも与えられなければ舞台に立つ望みは永久来ないのだ、彼女の頭の中は華やかな舞台の光景で浮き立った。

「この御恩私一生忘れないわ。万が一に光村博士に知れた場合、きっと私が命にかけて引受ける。まゆみちゃんを悲境に陥すような事は断じてしないから、私を信じ

て、安心して立派に踊って下さいな、ね、いいでしょう」

百合子の眼が否でも応でも承知させずにはおかないというように鋭く光る、まゆみはその眼光に射すくめられたようになって、

「ええ」とかすかに答えてしまった。

百合子はまゆみの手をとって唇に強く押し当てて泣いた。

「ありがとう。あんたは私の命の親だわ」

まゆみは非常に不安だったが、そのまた半面には思いがけない機会が到来してあこがれの舞台が踏めるという喜びがないでもなかった。

百合子は起ち上って、

「じゃ、明日、間違いない、楽屋口へ来て下さい。うまく誤魔化すからね」

4

当日は百合子と牒めし合せてあるので、万事うまく行った。

楽屋は大混雑で、家元へ挨拶しようと思ってもそれすら出来かねるほどだったか

ら、百合子の傍でまゆみがうろうろしていても、誰一人それを怪しむ者はなかった。すべては好都合だった。まんまと百合子になりすまして、白綸子りんすに黒の帯、素足に手拭をふきながしに被ったところは どう見ても替玉とは思えなかった。

いよいよ鶯娘の出番になった。昨日散々小言を食った百合子が今日はどんな風にするかと、同情半分好奇心半分で朋輩達は自分の事を放り出して見に行ったので、楽屋に居残っている者は一人もなく、空っぽだった。

百合子は舞台が気になつて堪らなかつたが、見に出ることもならず、荷物の間にすくんでいると、幕溜りから覗き見している朋輩達の思わずもらす歎声が入った。「まあ！ 素晴らしい出来だね」

「大した芸ねえ。家元さん以上よ」

そういう声を聞く度に百合子は胸がわくわくした。どんなにうまいのか、一つのぞいてやろうとひよいと首を出すと、運悪く楽屋へ飛び込んで来たお弟子の女の子に見つかった。

「あれっ！」女の子は飛び上るほど驚いた。そのはずだ、舞台上で踊っているのも百合子、楽屋にいるのも百合子、二人の百合子を同時に見たのだから。

百合子は人差指を唇にあて、

「云うときかないよ、殺しちゃうから」

そこに落ちていた小道具の短刀を突きつけて威した。

恰度その時、舞台ではまゆみが火焰模様の襦袢になって踊っているところだった。百合子はくろごを着て幕溜りから覗いていた。うまいな、うまいもんだな、と思うと同時にむらむらと嫉しくなった。胸が裂けるような気がした。憎い！ じいっと睨んでいると、どうしたのかまゆみは急に眉をしかめ、苦しそうな表情をした。

鷺娘は大成功だった、場内を揺り動かすような拍手の中に幕となった。

百合子の母は客席から楽屋へ飛んで来て、家元に礼を云った。家元は今日の出来栄の見事さを褒めぬいた。百合子は撥ったくて居たたまれず早々逃げ出して、客席の方を眼で探すと、約束通りまゆみはいつか洋装に着換えて、彼女を招いていた。

「百合ちゃん、困った事が出来たわよ。見物席に竹村さんが来ていたのよ、はつと思つたら、よろけて釘を踏んじやった、素足だからね、ずぶりとささった。苦しかったけれど踊っちゃった、が、痛くって——、迎も堪らない。私はこのまま帰るわ、竹村さん、まさか私だと気はつくまいが、何だか恐いわ。だが、どうして切符を手に入れたんだらう、——とにかく、どんなことがあつても今夜の事は秘密よ。お互いに困る事なんだから——」

百合子は心配そうに足許を見て、

「送って行こうか？」

「大丈夫、ひとりで帰れる」

まゆみは足を引摺りながら帰った。

その夜からまゆみは苦しみ出して、翌朝百合子が見舞に行った時にはもう動くことができ出来なかった。

「ありがとうよ。お蔭様で大変な評判——」

とささやくと、まゆみはにっこりして百合子の手を握った、その手は火のように熱かった。

まゆみの苦悶は日毎に加わった、踏抜きから黴菌が入ったのだが、その釘をどこで踏んだのか誰にも分らなかった。

夜となく、昼となく苦しみつづけて四日目の暁方、まゆみは遂いに死んでしまった。

敗血症で死亡したと思われていたまゆみの死因が夫博士によって覆えされた。踏んだ釘にはある恐しい毒薬が塗られてあったことが発見されたのだった。釘を踏んでその傷口から黴菌が入り敗血症になるという事はあり得る。しかし、それに予め毒薬が塗ってあったとなるとそれは問題だった。

不思議な殺人事件として警視庁内は俄かに緊張した。一人の刑事が慌しく入って来て司法主任の前に報告した。

「舞台上で百合子が踊っている真最中に楽屋で百合子を見たという女の子があります。女の子はあの晩から発熱して『お化物ばけが鶯娘を踊っている』と囁言を云いつづけているそうです。家元は家元である時の踊りが到底百合子の芸ではなかった、とあとで気がついて薄気味悪く思っていると、まゆみが死んだ、それを聞いて益々怖気づいているという話なんです」

「百合子を調べた結果は？」

「何を訊いてもただ泣くばかりで駄目なんです、その代り薬剤師の竹村春枝という婦人から参考になる話を大分聞きました。百合子とまゆみは表面非常に仲が好く見えたが、実はお互いに憎しみ合い、嫉妬に燃えていたそうです」

「嫉妬？」

「そうです。光村博士をまゆみに紹介したのは百合子です。女にかけてはなかなか

手腕のある博士はうまく百合子を説きつけ、美人のまゆみと結婚しました。その代り競走者であるまゆみの芸を永久に封じるといふ約束をしたのです、その約束が非常な魅力で、百合子は直ぐ二人の結婚を承知したといいます」

「それを百合子が白状したのか？」

「どうして、あの勝気な、虚栄心の強い女が自分の弱点を曝露するもんですか。彼女は驚娘を踊ることになっていたが急に気分が悪くなり、止めると云えば家元に叱られるので已むなくまゆみに代理をつとめてもらったとだけは白状しました。まゆみが踏抜きをしたのは舞台でだそうです。それ以上は何も云いません。勿論博士との関係についても絶対にそんな事はないと云い張っています」

「竹村春枝という婦人はどうして微細な関係を知っていたのだろうか？」

「さあ」

「まゆみの芸を封じたなどは想像とも思えない、現にあれだけ好きだった踊りだからな、それを禁じられていたればこそやらなかったのだろう。しかし、そんな事まで知っているのが妙じゃないか」

「竹村は頻りに博士と百合子との関係を云つて、一週間ほど前にも博士がまゆみを応接室に追いやって、百合子と巫山戯散らしていたのを見たと言っています。それから名披露の前日百合子が何かまゆみを脅迫でもしているらしく云い争つて

いるのを庭先にいて聞いたとも云っています。その時まゆみが百合子の手から奪い取って庭へ投げ捨てた紙包を拾ってみたら毒薬が入っていた、変だなと思っていたら果してこの度の事件だ、これはたしかに計画的に行われた殺人で、まゆみを殺す目的で鷺娘を踊らせたに違いない、と云って非常に憤慨しています」

司法主任は直ちに竹村春枝を召喚した。

「薬剤師がどういう理で奥座敷の話を立て聞きしていたのか？」

「立聞きしていたのではございません。博士せんせいのお仕事をしている時お隣りのお部屋の話を聞いたのでございます。奥様は何も御存じないんですが、百合子さんはほんとに悪い方だと日頃癪にさわっていたものですから、遂にお話を聞いていたのです」

「まゆみの芸を封じる約束をしたという事は誰から聞いたのか？」

竹村はちよつと返事に詰つてうつむいた。

「出鱈目か！」

「いいえ、それはいつか博士が御酒に酔ぱらつていらした時仰しゃいましたんです」
「君はこの犯人を知っているんだな」

竹村は黙っていたが、知らないとは云わなかった。

「知っているなら云つてしまえ、白状しないと反つて君に嫌疑がかかるぞ」

びくりとして顔を上げ、きつぱりと、

「百合子さんでございます」

と竹村は云いきった。

「証拠は？」

「百合子さんは奥様を殺して、御自分が博士夫人になるお積りだったのです。釘に毒を塗つてわざと踏むような場所に投げて置いたに違いございません。私は数日前薬局で薬が紛失した時からあの方を怪しいと思い、奥様のお身をよそながら保護し上げる積りで、あの晩も舞台間近かの客席にいましたのです」

「切符をどうして手に入れた？」

「博士から頂きました」

「毒を塗つて釘を投げたのまで知っていながら何故黙っていたんだね？」

「恐しかったからでございます。——百合子さんの復讐が恐かったので——、あの方はお顔に似合わず凄いい人で、どんな事でもやりかねないんですから——、奥様をうまく煽動おだして替玉に使い御自分だけがうまい汁を吸つて世間の眼を暗ませようとなさるなんて——、その上御自分のために犠牲を覚悟で踊ほつて下さる奥様を殺そうと計画はむなんてほんとにひどいと思います。私の口から発覚はれたなんて事になったらどんなめにあうか知れません。それを思うと迎も怖おそしくて今まで申上げられませ

んでしたが、何も御存じない、あんなお優しい善良な博士に嫌疑がかかっていると聞ききましたので、もう黙ってはいられないと私も決心をいたしました。罪のない方が罪を被るといふ事が余りお気の毒なので――、私はもう百合子さんに恨まれても構わない、博士をお救いしなければならないと存じて思い切って何もかも申上げてしまいました。博士は何もこの事件には関係がございません。あの百合子さんこそは人間の皮を着た鬼でほんとの悪人なんです」と夢中になって博士を弁護し、口をきわめて百合子を罵った。

司法主任は竹村が怒れば怒るほど美しさを増す大きな眼をじいっと見入っていたが、やがてにっこりとして、

「ありがとう、よく話してくれた、これですべてが明白になりました」

と優しい声で云ったのだが、竹村はその一言ではっとしたように真青になった。

竹村が博士に罪を被せまいとして一生懸命に口語る言葉の中から、司法主任はある疑いを見出したのだった。

厳しく訊問した結果、遂いに彼女はすべてを白状した、それによると自分が博士の妻になる積りであったのを、横合いからまゆみという人が出て来て奪ってしまった。その恨みでまゆみを殺す気になった。釘に毒を塗って舞台に置いたのも無論竹

村のやったことで、その次ぎに殺人嫌疑を百合子にかけて、永久に博士から遠ざけてしまう計画であったと云った。

蛇性の執念

1

一つの事件の解決がつくと、S夫人はまるで人間が変わったように朗かになる。それが難しい事件であればあるほど、すんだあとは上機嫌だ。

「また何か変ったお話、聞かせて下さいましな」

そういう時を狙っては、彼女からいろいろ面白い話を聞いた。

S夫人はテーブルの上のチェリー・ブランドーの瓶をとって、美しいカット・グラスに注いで自分も呑み、私にもすすめながら云った。

「上流の家庭内に起つた事件というものは、よく、うやむやのうちに葬り去られて、その真相は永久に、社会の表面にはあらわれずじまいに終つてしまう、というようなことが沢山あります。このお話もその一つですが」

と云いながら椅子を離れて隣室の書齋へ行つたが、少時しばらくすると一冊のスクラップ・ブックを持って帰つて来た。夫人はその中ほどを開いて私の前に置いた。私は思わず目を瞠みはつて云った。

「まあ！ お美しい方！ 御結婚のお写真でございますね、何方どちらさんでございますか？」

「麻布の御木井男爵ですの。御木井合名会社の社長さん御夫妻ですよ」

「若い社長さんですこと！」

「ああいう大富豪になるとなかなか面倒なものと見えて、代々総家の相続人が社長
の椅子に座ることに定きまっているらしいんですの。その新聞には昭和七年と書いてあ
りますから、その時多分新郎の御木井武雄さんが二十七歳、新婦の綾子さんが二十
二歳だったんですわね」

「新夫人はどちらから？」

「政友会の山科さんのお嬢さんです。山科さんは以前南洋方面にも大分目をつけて
いた関係上、私の夫とも相当親しくしていらしたので、夫が亡くなりますと間もな
く、山科さんから招かれて、私は綾子さんの家庭教師になり、一年ばかり山科家の
家族達と一緒に暮したことがございました。それは綾子さんと武雄さんが結婚さ
れるずっと以前のことなのです。さあそろそろお話の本筋に入りましょうかね」

S夫人はチェリー・ブランデーを一口呑んでから、静かな語調で話し始めた。

「綾子さんが武雄さんと結婚するそうだが、そんな噂を耳にした時から、私は不満で
不満でたまらなかつたのです。どうぞまあ噂だけであつて欲しいと希つていたほど
でしたから、お祝いにもまいりませんでしたし、遂々披露会にも出席いたしません
でした。処が翌朝の新聞には麗々しく二人の写真までこの通り出ていたので、すつ
かり気を悪くしてしまいました。」

何故この結婚をそんなにまで不愉快に思うかというには理由があるのです。綾子さんは武雄さんの実兄で、御木井男爵家の嫡男文夫さんの妻だった人なのです。しかも二人は相思の仲だったのですもの、その文夫さんが亡くなって、まだ一年も経たないのにもう弟さんと結婚する。何だか厭じやありませんか。しかも文夫さんは病気で亡くなったのでありません。綾子さんと結婚して四日目の披露会の当日自殺したのです。

私は二人の写真を見てから不愉快になって、事務所に出るのにはまだ早いけれど、お天気もいいしするからともかくも外へ出ようと思って、アパートの自動昇降機を降りました。私はその頃アパートに住んで居りました。扉を明けて出ようとするところ、そこに大きな男が立っていました、危ぶなく突き当るところでした。

『ご免ん遊ばせ』

軽く云つてすれ違いながら、ふとその男の顔を見たんです。黒い大きな眼鏡と黒いマスク、前のめりに被った帽子、それで顔の大半はかくされていますが、左の目の下から頬へかけて大きな切疵の跡があつて、そのためでしょう口が少し曲つているんです。どうも人相のよくない、気味の悪い人だ、身装みなりは悪くありませんが、どう見たって善良な紳士とは見えません。しかし身装なんかは後になってから憶い出した事で、一と目見た瞬間あのゾツとした感じは忘れられませんでした。大カバン

を右手にぶら下げ、左手にも二つ三つの包を抱えていました。このアパートを借りた新客には違いないんですが、こんな相客は有り難くないと心に思いながら外へ出ました。

私は電車に乗ってから、今見た男が気になつてなりませんでした。何階にいるのかわからず、あんな人が隣室にでも引越して来たら、早速逃げ出してしまわなければならぬなどと考えながら、銀座で電車を乗換えましたら今度は座席が空いていません。仕方なく入口に立っていますと三越前から一人の老婦人が乗りました。ふと顔を合せると、それは思いがけないお梶さんでした。

お梶さんは御木井家の老女で、文夫さんの乳母だった人でございます。文夫さんの亡くなつたいまは主に綾子さんの世話をしていると聞いて居ました。ああした大家の奥向を取締つている女だけに、まことに上品で、私はどこかいいところの奥様かと思いました。先方でも逸早く私を見ると直ぐ傍へ来て、丁寧^{いちはや}に頭を下げました。

『綾子さんもお身^{からだ}がお定まりになつてようございましたね』

仕方なく、お祝いともつかぬこんなことを申しました。するとお梶さんは厭な顔をして凝^{じつ}と私を見て居ましたが、臆^{おそ}て不平そうに申しました。

『先生までそんな事を思召^{おぼしめ}してらっしゃるんですか？ それじゃ余りでございませぬ。綾子様がお可哀想でございます』

お梶さんは何だか話したそうな素振でしたが、電車の中では何ともしようがないので、

『どこかでお茶でもおのみになりませんか？』

誘いかけてみますと、喜んで直ぐ同意いたしました。

お梶さんは自分の姉さんが急病のため、四五日宿下りしていたが、病人も快くなつたし綾子さんの事が気になるので、明日あたりはお屋敷へ帰る積りだと申しました。今日は病人からの頼まれで買物に出たのだといいました。

二人は連れ立って、静かな喫茶店を撰んで入りました。

『綾子様はほんとお可哀想でございますよ。先生、毎日泣き通していらつしやいます』

『そんなに武雄さんをお嫌いだったんですかねえ、それほども見えなかつたけれど――』

『先生は本当のいきさつを御承知ないからでございます。どういうものか武雄様は、文夫様と綾子様とがお親しくなると同じ頃から綾子様にお付き纏いになって、誰もいないと眼の色変えていろいろ仰しやるんでございますよ。とても怖くって、文夫様があんなにご親切でなかつたら、迎も綾子様は武雄様が怖くって、御木井のお邸へお嫁様には入らつしやらなかつたでございますよ。御婚約がお出来になつてか

らだつて、武雄様は幾度も隙を狙ってはくどいていらつしやるんです。それを存じて居ますのは私一人でございます。ほんとを申すと綾子様は文夫様がお亡くなりになりました後、山科様の方へお帰りになつておしまいになればおよろしゅうございましてんです。私も随分それをおすすめたしましたが、何分、お実家様のお母様が生なさぬ仲でいらつしやいましょう？ 綾子様は御自分は死ぬより行途ゆくみちはないと仰しやつていらつしやいました位でございますから——』

お梶さんは涙ぐんでいい続けるのでございました。

『ちよつと考えますと、只今のようになりませうのがいい解決でございますからね。せつかく御木井家と山科家との御縁が結ばれたのでございますから、これを放したくないというお考えが両家におありになるのも御尤もでございます。文夫様がお亡くなり遊ばし、武雄様がお跡をおとりになる、恰度お年頃もいし、武雄様に異議がおありにならないといえ、御再婚は四方八方都合じゃございませんか。綾子様のお考えなんて聴いて上げようとも遊ばさずに、お話はずんずん進んでしまつたのでございます』

『綾子さんがそんなにも武雄さんを嫌つてらしたことは、誰も知らなかつたんですか？』

『武雄様御自身はよく御承知でございます。あとは私位のものでございます。私

がお口出し出来ませぬ身分でもございませぬし、実は綾子様には決して御承知遊ばしますな、どんなことがあつても、お嫌いなものを無理押しつけにおされになつてはいけません。と申上げていたのでございませぬけれど——。そのうちお実家様のお母様は御相談に入らつしやいました。それも文夫様と余りお仲がおよろしかつたから、そのためにお気がお進みにならないのだらうとの御懸念で、お見えになつたのでございませぬ。どうせ行く行くはこうなるのだからと、御説得なすつたそうで、綾子様としては文夫様にもすまないように思召しましうし、第一武雄様がお嫌いなのでございませぬもの、お母様にそれを申上げたつてお分りになりませぬしね、お一人で小さいお胸を痛めて、ただ泣いていらつしやるばかりだつたのでございませぬ。それでも綾子様はどうとう最後まで、御承知はなさらなかつたのでございませぬけれど——』

『いくら綾子さんがしつかりしていても女ですからねえ。運命に抗し得ず、皆さんのするままに引きずられて往つておしまひになつたのでしよう、全くお可哀想です
ねえ』

『どうしたらいいか分りませんが、なまなか余計な口を出して、武雄様のお気にさわり私がお暇いそまにでもなつたら、それこそ綾子様は誰一人味方のない独りぼつちにおなりになりますから』

『そんな理わけとは知らずに——。ごぶさたをしてすみませんでした。早速お訪ねして

お慰めしましょう』

『本当にどうぞ、お見舞い上げて下さいませ、外ほかにどなたもいらつしやらないと、まるで失心遊ばしたように、お目に一杯涙をおためになって、ふさぎ込んでいらつしやるのでございます。先生にもお目にかかりたい、お目にかかってお話がしたいと始終仰しやうていらつしやいます』

『是非近日伺いましょう』

二人は喫茶店を出ました。お梶さんに別れて私は事務所に参りましたが、綾子さんの事が気にかかって仕方がありませんでした。綾子さんと思うと直ぐ私は文夫さんの事を考えます。殊に文夫さんの自殺は一つの謎として、私の頭にこびりついているのでしたから。

2

日もありましようのに、お目出度い結婚披露式の宴会なかばの事だったので。書斎の机の上に俯伏したまま、冷たくなっている文夫さんが発見されたのは。

机の右側の紙屑籠の中から見出された注射器と、空になったアンプレの四五本と、左の手首に赤くはれ上った注射の跡とによって、文夫さんは自殺と決定されました。何しろ結婚後僅かに四日目の出来事なので、大分新聞でも騒ぎましたが、間もなく余り評判もしなくなり、新聞にも出なくなりました。それは多分御本井男爵家側の運動のためだったろうと、私は考えて居ります。

しかし文夫さんは何故死んだのでしょうか？

あの人に自殺しなければならぬような原因は何もないはずです。大富豪御本井男爵家の嫡男と生れ、幼い時両親に死別したというのが不幸ではありますが、頭もいいし、風采も綺麗だし何一つ不自由なく育ったばかりか、相愛の綾子さんを得て、実に幸福の絶頂にあるのではありませんか。そういう恵まれた境遇に置かれたものが、何の理由なくぼっこり自殺してしまうなんて、そんな馬鹿々々しい話がありませんか。

その当時から、それは一つの疑問として、私には忘れられない宿題となっていたのでございます。

私が綾子さんを訪問したのは、お梶さんに会った翌日の午後でした。

その日武雄さんは不在でした。御木井合名会社の重役会議に出かけたとやらで、思いがけず綾子さんと二人ぎりです話せる機会が出来たのを、大変嬉しく思いました。綾子さんも同じ心持だったのでしようか、応接室おうせつまへは通さず、見馴れた懐しい彼女の居間に案内させてくれたのがまた私には嬉しゅうございました。

半年ばかり会わなかった間に、綾子さんは見違えるほど面癩おもやつれして、大きな眼がますます大きく、ふつくりしていた頬の肉もすっかり落ちて、何となく老けました。美しい人の疲れたのはまた風情のあるものですが、ダリヤのように濃艶だった綾子さんが、まるで夕闇に浅黄桜を仰ぎ見るような物寂しさに変つては、風情があるなと云つてはいられません。最初病気かなと思いましたが、それでもなさそうです。しかしどうにも新婚の人らしくは見えません、晴れやかさもなければ、元気もない。ただ淋しい陰に全身を包まれ、浮き立たない頬に強いてほほ笑みを見せているのを見ると、私までが引き入れられて、気が滅入つてしまうような感じがいたします。陰気な花嫁さんだと思わず心でつぶやきました。

綾子さんは口数も少なく、島田に結った小間使がお茶を運んだり、お菓子を持って来たりするのを眺めていましたが、

『ベルを押すまで、誰も来ないでくれ』

と云つて小間使を退けてしまいました。さて二人ぎりになると急に態度が変わつて、綾子さんは自分の感情を率直にあらわして、やる瀬ない悲しさを訴えはじめるのでした。私はお祝いを述べるより先に、慰めの言葉を探すのに、骨を折らなければなりませんでした。

『実は綾子さん、昨日偶然に電車の中でお梶さんに会いましたね、あなたのお噂もお聞きしたんですの、ほんとお察しいたして居ますわ』

それだけの言葉を聞いてさえ、綾子さんの目はもう涙に湿っていました、お目出度うございますと祝つてくれる人はあつても、お気の毒だと慰めてくれる人のない、綾子さんの境遇に、心から同情せずにはいられませんでした。

綾子さんは私の手を握つて、出しぬけにこんな事をいい出すのでした。

『先生、私の家へお引越して入らして下さいませんか？』

『？』

『御一緒に私と暮らして下さいませんか？ 昔のように——。私の傍にいて下さらない？ もう寂しくつて、寂しくつて——』

私は返辞が出来ませんでした。

『先生はアパートお好きじゃないでしょうか。殺風景だけれど仕方がないと仰しやつたのよく覚えて居ますわ。どの部屋でも、先生のお好きな部屋お使い下すつて、私の家から事務所へお通いになったらいわ。ねえ先生そうして下さらない？』

『ええ、有難うございますが——。でも、もう直きにお梶さんが戻つて来るでしょうから』

『ねえ先生、あなたは何もかもようく御存じですから申上げますが、何故武雄なんかと結婚したのかと逆も後悔しているんですよ、あんな嫌いな人と——。あんな厭な武雄と——』

『分つてますよ。でも今更そんな事は仰しやらない方がようございますよ』

『政略結婚！ 親の犠牲になったのですわ。でも一番悪いのは私です。私の意志が弱かったからこそ、こんな悲しいことになってしまつたんです。意気地なしだからです。馬鹿だからです』

綾子さんはハンケチを齒で破きながらいい続けます。

『ああそれにつけても文夫さえ自殺してくれなかつたら——。何故文夫は死んだんでしよう？ 先生、私はその原因が知りたいんです。真実ほんとのことがね、死ななけれ

4 ばならない事情があるなら、私にだけは話してくれてもよかったですと思えますわ。黙って独りで死ぬなんて——。それをどんなに口惜しく思っているか、先生、私の気持お分りになりますでしょうか？」

綾子さんは段々興奮して声が大きくなるので、それを押し静めようとして、

『誰か来ましたよ。綾子さん、人に聞えるといけないから』

私はとつさに思いついて、そんなでたらめを云い、耳を聳そはだてたんです。すると綾子さんは涙を拭きながら立ち上って、

『武雄が帰ったのかも知れません。あの人ほんとに猜疑心が強いのだよ』

綾子さんは襖を開けて廊下を見ましたが、誰もいないのでまたもとの席に戻ってまいりました。

『そんなにお厭だったんなら、武雄さんと御結婚なさらなけりやよかったですわね。文夫さんの未亡人でお通しになればよかったですのに——』

『それが出来る位なら何も——』

綾子さんは半分口の中で云いながら、急にすすり上げて泣きはじめました。うっかりと云った私の言葉は、綾子さんの最も痛い処を突いたんです。飛んだことを云つ

4 「死ななければ」は底本では「死ななれば」

たと思つて後悔いたしました。

ながい間泣き続けていた綾子さんは何か心に決してもしたように、臆てきつと顔を上げて申しました。

『先生も私が武雄と結婚したのを不愉快に思つてらっしゃるんでしょうね。私自身でさえこんなの不愉快に思う位なんですから』

『でも仕方のない事なんでしょう。そうなさるより途がなかったとしたら、それに武雄さんは昔から貴女が好きだったのね、ほんとは文夫さんから奪つても、御自分のものになさりたかつたんでしょう？』

綾子さんはそれには答えなくて、じいっと何か考え込んでいましたが、

『私、先生にどうしても聞いて頂きたいことがございますの、でもそれは他人の耳に入ると、ちよつと困ることなんですし、どうぞ、どなたにも仰しやらないで下さいませ』

綾子さんはしきりに他言しないでくれと繰り返し繰り返し云つてから話しました。

『どうしても信じられない事なんです、文夫を自殺させた罪は私と武雄にあるというのを聞いたんですの』

『誰がそんな事を申しました？ 武雄さんじゃありませんか？』

『そうです、武雄が申しました。文夫は私と武雄との間に恋愛関係があるものと

思い込み、それを訊きただしもしないで、独りで煩悶していたんですって、それこそ全くの誤解でしたが、ああいう善良な人だったものですから、自分独りの胸に秘めてただ苦しみぬいた揚句、私や武雄を幸福にさせるために自殺したんだと申しますの、そんな馬鹿々々しい事と最初は気にもかけなかつたんですけれど、段々考えてみますと、満更武雄のでたらめばかりでもなさそうな節もございますの。文夫の日記を見ても、何か煩悶があつたのは事実でございます。それが私の事に關してだかどうかは分りませんが、また武雄はこんな事も申しましたの。私と武雄は深い關係があるのだと、結婚直後に何人かなんびとが文夫に密告したそうですの、私も見ましたが、文夫の本箱から出たという差出人無名の手紙にもそんな事が書いてございました。死ぬ前日文夫が武雄に申したそうです、僕に万一の事があつた場合、綾子の事は君に頼むよ、と冗談のように云つたのが、今になると遺言のような気がして責任を感じると申しました。でも先生はどうお考えになりました？　それが事実だとしますと、一言も云わずに死んで行つた文夫の心持も分るような氣もしますけれど――』

『それで武雄さんはお兄様からあなたの将来を頼まれたから、あなたを保護するためにも結婚しなければならぬと仰しやるんでしょう？』

『ええ、兄の遺志でもあるから、と申して度々私に迫りましたの、その度毎に私は

この家を逃げ出してしまふかと思いましたが、御存じの通り行く処もないし、それにもう一つこの家をどうしても離れられなかった理由がありましたの』

『このお家を離れては文夫さんにすまないとお思ひになったの？』

『いいえ、全然違います』

『ではどんな理由？』

『先生はどうお思ひになりました？ 文夫と武雄と似て居ますか？』

『さあ、私はちつとも似ていらつしやらない、御兄弟のようじやないと思ひますけれど——。御性質だつて、御風采だつてまるで反対じやありませんか』

『そうでしょう、皆様が兄弟とは思えないと仰しやいます。処がね、不思議なことには一時私の目にはとても似ているように見えましたのよ。ちよいとした表情や動作などに懐しい文夫の面影を見ることがあつたんでございますの。またよく見直しますとちつとも似た処のない、醜い武雄の顔になつてしまひます、文夫は死にはしないんだと、ふと私は思ひました。この家のどこかにいて私を守つてくれるんだ、という気がしたんですの、それでこの家を離れることも、武雄の傍を離れることも出来なかつたんです。淋しかつたんですわ。それが私と武雄と結婚させてしまうような原因となつたんですの、でも妙じやございませんか。ほんとに妙なお話ですが、結婚して後は、今までただ嫌いだった武雄が、今度は憎くさえなつてきましたの、

嫌いな人でも結婚すれば、そこにまた新しい愛情が湧くように申す人もありますが、あれは嘘でございますわ、私のような場合から考えますとね、いまでは武雄を敵のように憎みます、憎くつて、憎くつてたまりませんの。その反対に文夫に対する愛情は益々深くなつて、恋しくてたまりません。でも悲しいことにはこの頃は、もう武雄のどこからも、文夫の面影を見出すことは出来なくなりました。まぼろしは結婚と同時に消えてしまつたんでございます。きつと文夫も私に対して快からず思っているのじゃないかと思ひます。たとえ武雄の計略にのつたのだといつても私はまあ何という軽卒な真似をしてしまつたんでしよう、今更取り返しはつきませんが、考えると口惜しいやら、情ないやら、自分で自分に愛想がつきてしまひます』

綾子さんはさめざめと泣くのでした。

4

そこへ宿下りをしていたお梶さんが帰つて参りました。

綾子さんはお梶さんの顔を見ると急に元気づいたので、私まで何だか安心したよ

うな気がいたしました。お梶さんは文夫さんのお母様とは乳姉妹で、また文夫さんの乳母でもありましたので、今は文夫さんに仕えるような心持ちで、心から綾子さんを大事にして居ました。

『梶に見せて上げるものがあるわよ』

綾子さんはじぶくろからキャビネ形の写真を出して来ました。

『こんなお写真見たことある？ 文夫さまのお書斎をお片付けしたら、お机の上の書簡紙の間から出たんだけれどもね』

お梶さんは写真を手にして、一と目見ますと忽ち変な表情をいたしました。

『このお写真が——、まあ！ どうして——。お書斎にございましたんですって？』

『梶は知ってるんでしょう？ 私、ついぞこんなお写真拝見したことがなかったわ』

『不思議でございますねえ。これがどうしてお書斎にございましたか知らず？』

お梶さんはじつとその写真を見詰めているようなのですが、実はその眼はお写真を見ているのでなく、何かこう幻影を追いながら、深い物思いにでも沈んでいるという風なのです。私は変だなと、心に思いました。

『ちよいと拝見』

無雑作にいつて、お梶さんの手から写真を取って見ました。処々汚点が出たり、色が変わったりして大分古ぼけてはいますが、顔の処だけははっきりとしていました。

古風な椅子に腰かけている若い女の傍に、倚り添うようにして一人の青年が立つて居ます。女は文夫さんの母君、御木井男爵夫人と直ぐ分りました。男の方は父君男爵ではありませんでしたが、私はその顔を見て吃驚びっくりしました。それは忘れようとしても忘れられない、あの昨日の朝アパートのエレベーターの前で見た気味の悪い男、その男の顔そっくりではありませんか。しかし私は何気なく申しました。

『文夫さんのお母様、ほんとにお美しいお方でしたのねえ。そしてこの方はどなたなの？』

綾子さんはこの男は誰だか知らないと見えて、お梶さんの顔を見て云いました。

『梶、どなたなの？』

『叔父様でいらつしやいます。大旦那様の弟ご様で——』

お梶さんは重苦しい調子でいって、深い溜息をつきました。

叔父様だと聞いて、綾子さんも急に写真を見直しました。

『印度インドに往つて入らつしやる叔父様なの？』

『はい』

『梶、私は叔父様のお写真つても今まで拝見した事がなかったのよ。だからどんなお方かと思つていたの。こないにお写真があるんなら何故アルバムにはつておかないんでしょう。お母様も御一緒だしね。私は叔父様のお写真は家には一枚もな

いものかと思つてたわ』

『はい。一枚もないはずなんでございます。殊にこのお写真はどうしてもこのお邸にある理わけがないのでございます。まさかお写真がひとり歩いて参つたんでもございますまいに——』

綾子さんは笑い出しました。それに釣られて私も笑いました。しかしお梶さんだけは真面目なんです。のみならず何か怖い幻にでも襲われているように、息はずませながら何となく落付を失っているようなのです。

私はお梶さんの様子を注意深く見ながら、綾子さんに云いました。

『文夫さんがどこからか持つていらしたんではありませんの？』

『それなら必ず私に見せますわ』

と綾子さんは直ぐに否定しました。

『すると文夫さんがお亡くなりになった後に、どなたかがお置きになったんですわね』

綾子さんは首を振って、

『あの後、お書斎には私の外、絶対に誰も入れませんでしたわ』

お梶さんは黙つて考えつづけています。写真がある以上、何人か入つたと見なければなりません。誰も入つてはならないという書斎に何人かこっそりと忍び込んだ

のでしよう。そして何のためにこの写真を残して去ったのでしょうか。一体それはいつの事でしょう。これは何か文夫さんの死に関係があるのではあるまいか。私の好奇心は少しずつ動き始めました。

私はお梶さんに訊いてみました。

『このお写真は、このお邸内には一枚もないはずだと仰しやいましたね。それはどういう理ですの？』

『細かい事はここでは申上げかねますが、このお写真はたった一枚を残して全部破り棄てられたのでございます。種板までも——』

『そして残った一枚は？』

『それは——。その一枚を持っていた人が、ここへ来たんでございましょうか？』
お梶さんは昂奮に震るえて、その顔は真青になって居りました。

私はもう一度写真を見改めましてから、お梶さんに訊いてみました。

『実はね、このお方昨日ある処でお見かけしたように思うんですが、違いますか知ら？ お年頃は五十がらみで、何だか頬に大きな傷がおりになりはしないでしょうか？』

それを聞いてお梶さんは一層青くなりました。急に眩めまいがすると云って、額を押えながら引退ってしまいましたので、これ以上何も訊くことが出来ませんでした。

お梶さんのこの様子を見て、この写真と文夫さんの自殺との間には、何等かの関係があるに相違ないと疑わずにはいられませんでした。お梶さんもそれに気付いてあんな異常の動揺を感じたのではありますまいか。

5

綾子さんを訪ねてお梶さんに会って以来、文夫さんの死についての疑問はいよいよ深くまりました。何とかしてお梶さん一人にもう一度ゆっくり会ってみたいと思いながら、忙しい仕事に追われて二三日過ぎました。所がある朝、思いがけずお梶さんの訪問を受けたのでございます。喜んで直ぐ私の部屋に迎えました。お梶さんは私が会い度いと思っていた事なぞ存じませんから、出し抜けの訪問を気にして、無暗に詫言ばかり申し申しているのです。でも一と通りの挨拶をすませますと、お梶さんはちよつと口ごもって居りましたが、臆て思い切ったように切り出しました。

『実は私一人の胸に納めかねますんで——。是非先生に内証ないしよで聞いて頂きたいと存じまして上りました。文夫様の事なんでしょうが——』

そら来た！　と思つたので、思わず膝を乗り出しました。

『文夫さんがどうしたというの？』

『先生、先生は文夫様がどうしてお亡くなり遊ばしたと思召します？』

『——』

『私は変だ、変だ、と思いつづけて居ましたが、この間先生にお目にかかった時から、どうやらこの謎がすっかり解けたような気がいたしますのでございます。文夫様はお殺されになったのに相違ございません』

これには私も驚きました。

『だって自殺と決定したんじゃないやありませんか。何を証拠にそんなことを云うんですか、そして誰に殺されたと思うんですの？』

『そのお写真の方にでございます。印度にいらつしやる叔父様』

『叔父様？　だって叔父様は印度においてになるのじゃありませんか』

『いいえ、叔父様に違いございません。あの方を先生がどこかで御覧になったとすれば、もう間違いないません。私はあの方のやった仕事だと信じてるのでございます。あの日の混雑に紛れて入り込み、巧みに文夫様をお殺しになったに間違いございません』

『だって——、よしんばあの方が入らしたとしても、それは実の血を分けた叔父様

じやありませんか』

『叔父様だから怪しいのでございますよ。先生、先生は御承知ございませんが、その叔父様というのは御実兄にあたる大旦那様を殺し、大奥様を散々苦しめ、御木井家を横領しようと企らんだ、飛んでもない人非人にんびにんなんでございます』

『それは本当ですか？』

『それですから、叔父様が東京に入らしたと聞いただけでもゾツとするのでございます』

『しかしね、横領しようたつて、文夫さんを殺しただけじゃ駄目じやありませんか。武雄さんつて方がありますからね』

『武雄様はおよろしいんでございます』

『何故なの？』

お梶さんは暫時しばらく黙つて考え込んで居りましたが、やがてさも云い憎そうに声をひそめて申しました。

『でも——。武雄様は——、御自分のお子さんなんでございますの』

私はこれを聞いて、事の意外なのに驚きました。

『もしそれが本当だとしたら、武雄さんは綾子さんに取つて讐かたきの片割じやありませんか。無論綾子さんは御存じないんでしようけれど——』

『綾子様はお可哀想でございます。御承知の通り武雄様が随分うるさくお付き纏いになったのを、嫌って嫌って、嫌いぬいて文夫様のところへ入らしたので、綾子様はあれでなかなか御苦労していらつしやるんでございます。親御様達の無理強いで、武雄様との御再婚を御承知遊ばしたんですから、この上お気持ちをお悪くおさせすることは余りお可哀想で申せませんの』

『何だか、随分込み入った事情なんですね』

『ですけど——、誰一人私の外には事情を知った者はございませんのですから』

『では、真相を知っているのはお梶さんだけなんですか？』

『多分そうでございます。私は直接大奥様から一切の秘密を承って居ますから』

『秘密の鍵をあなたが握っているという事を叔父様は御存じなんですか？』

『多分御存じだろうと存じます。ですから先生、怖いんでございます。私さえないなかつたら、この秘密は永遠に知れっこないんでございますもの。叔父様がこの東京に来ていらつしやると承わつては怖しくつて、夜もおちおち眠られませんか。こんどは私が殺される番でございます』

お梶さんは総毛立ったような顔をして四辺あたりを見廻しながら声をひそめ、

『扉の外に誰かいるようじゃございませんか？』

と申しました。そう云われれば誰か鍵穴から覗いているような気がいたしました。

私は立つて扉を開けました。その瞬間、影のようなものがすうつと次の室へ入ったように思いました。しかしそれは見違いかも知れませんが、どうも自動昇降機の前で見た男の姿に似ていたようでした。私も何となくいい気持ちはいたしませんでしたが、お梶さんを怖れさせてはなりませんから、故意と平気を装って笑いながら申しました。

『誰がいるもんですか、余り怖い怖いと思っていらっしゃるからですよ』

私は鍵穴に内から鍵をさしておきました。これなら大丈夫外から覗かれることもありませぬ。それに周囲は厚い壁で仕切られているし、話声の外部へもれる恐れもない。お梶さんはやっとな心したらしく、

『私も大奥様から秘密を承わって居らなかつたら、これほどまでに叔父様を怖れはいたしませんのでございますけれども——』

と云つてお梶さんは男爵夫人の自白の一部を打ち明けました。

それによると夫人は娘盛りの時、同時に文夫さんの父君とその実弟と、二人の熱愛の的であったということでございます。彼女は兄の愛には喜んで報いましたが、弟は大嫌いでした。それは恰度綾子さんの場合によく似ています。

恋に負けた弟は臆て兄に対して兇暴な態度を取るようになり、夫人を脅迫して武雄さんが生れたようなわけで、あの写真もその当時無理に撮ったのだそうですが、夫人は見るのも穢けがらわしいと云つて、一枚残らずお梶さんと一緒に焼き捨てました。同時に種板をこわしてしまつたそうです。(だから、叔父自身の手許にある以外、一枚もこの世に存在しないわけなのです)それから彼は兄を殺害した。そして夫人を自分のものにすると共に、御木井家を横領する慾心を起し、武雄さんのために文夫さんを亡きものにしようと思つたのです。それを見破つて夫人は棄鉢に強くなつて、もう脅迫などには負けていませんでした。それで彼はあきらめて印度へ帰りました。その後今日まで行方を晦くらしていたのだということです。

『それだけの大罪を犯しても刑務所へは行かなかつたのですか？』

『大奥様の外はどなたも御存じございませんもの』

『夫人はそれをどなたにもお打ち開けにならなかつたんですか？』

『お身のお耻は、お家のお耻とお考えになつたんでございましょう。ジツとお胸にお納めになつてどなたにも仰しやらず、一生苦しんでつまり悶え死遊ばしましたよう

なものでございます』

『そう仰しやれば、武雄さんはどこやらあのお写真に似たところがありますね』

『はい。それを大奥様が苦に遊ばしましてね——』

『男爵はその事を御存じだったのですか？』

『いいえ。大旦那様は何も御存じございません。武雄様は御自分のお子さんだと思召していらつしやいました』

『そう伺うと文夫さんの事もよく分りますが、しかしまだ叔父様が、確かに手をお下しになったという証拠があると申すわけには参りませんね』

『でございますが——、私には前と手口が同じなので、それに相違ないと思われるのでございます。これも秘密をお明し下すつた大奥様のお言葉を思い出すのでございますが——、それによりますと、文夫様を殺したものは叔父様の外には絶対になりと思うんでございますの』

『それはまたどうして？』

お梶さんの青褪めた額からは油汗が染み出しました。それを拭いながら次ぎのように語るのございました。

『大奥様のお亡くなりになりましたのは、今から二十年ばかり前で、恰度二十八歳でいらっしやいました。文夫様十歳、武雄様が八歳、大旦那様がお亡くなりになってから、大奥様はすっかりお力落しでお弱りになり、遂々お亡くなりになってしまったのでございます。

元来お体もお弱いし、武雄様をお生みになってから、肺の方も少しお悪いと承つて居ました。何しろ大変に神経をお使いになったのであんなことになったのでございましょう。御境遇をお察し申せば已を得ないと存じます。私は始終お次の間に息んで居ましたが、夜は殆んどお息みになったことはなかつたと存じます。

私が夜更に眼をさましますときつと大奥様はお起きになつていらっしやいます。大抵は大旦那様のお居間にお在いでになります。そこには大旦那様のお油画の大きなのが掲げてございます。その前にお座りになり、御肖像に向つてさめざめと泣いて入らっしゃるのでございます。お可哀想で見て居られませんでした。それは毎夜の事でございますが、後にはお氣が変におなりになったのではあるまいかと、疑つた事もございました。

ある雨の降る晩でございました、いつものように、私はそつと襖の蔭から覗きま
すと、大奥様は早口で何か御肖像にお話しかけていらつしやいました。時々は淋し
い笑をさえお洩しになります。雨の戸を打つ音でお言葉は断続してよくきき取れま
せんが、何とも云えない寂しさに我知らず身震いいたしました。

大奥様の御病気はそう御重態というほどでもございませんが、一向はかばかしく
はお癒になりません。お医者様からは嚴重に絶対安静を申渡されました。夜は申上
げたような次第ですが、日中はおとなしくお床の上に休んでいらつしやいました。

ある日、大奥様は一度大旦那様の御墓参がしたいと仰しやいました。お医者様に
御相談すれば無論いけないと申されるに定まつて居ます。しかし大奥様は何と申上
げてもお聴きになりません。已むなくお天氣の好い日の暖かい時刻を計つて、お医
者様には内密で、私がお伴をしてお墓参りにまいることにいたしました。

型の通りお墓の前に香花を捧げ、本堂に立寄られるまでは無事でございましたが、
今度は本堂裏のお位牌堂にお参りしたいと仰しやるのでございます。人氣のないお
寺は華やかに飾つた本堂でも、余りいい気持のものではございませんが、お位牌堂
ときては陰気で、薄暗くて、湿めつぼくて、まるで地獄の入口のような気がいたし
ます。

已を得ず後に従いて参りますと、床は塵垢の上に鼠の糞、時々顔を撫でるのは蜘蛛

蛛の巣でございます、人の気配に驚いて逃げ廻る鼠の音にも私は縮み上りました。小さい窓からさし込む陽の光がその一室を一層青白い寂しいものにして居ります。大奥様は平気で歩いていらつしやいましたが、中ほどの右側を指して、突然頓狂なお声で仰しやいました。

「あすこに旦那様がいらつしやる」

私はゾツといたしました。大奥様はその前にべたりとお座りになり、私に外へ往つて待つていろと目くばせ遊ばしますのです。

私はいいつけ通り入口の外へ出ましたが、気になりますので絶えず注意いたして居りました。大奥様は始めさめざめと泣いていらつしやいましたが、時々大旦那様のお名をお呼びになるお声が聞えました。終には齒しほをきするようなお調子で「お許し下さい！ お許し下さい！」と叫ぶのがいかにも異常なので、ツイお傍へ飛んでまいました。

いろいろとお慰めして、やっとそこをお起たせ申しました。そこを出ます時大奥様はもう一度お振り返りになつて「私も直きに参ります。お許し下さるでしょうか」と仰しやつて、今度は大声でオイオイとお泣きになるのでございます。

私は何も事情は分りませんが、外にお慰めする言葉も知りませんので申しました。

「お許しになりますとも」

大奥様はいきなり私の手首をお取りになつて仰しやいました。

「いいえ、お許しにならないでしょう。それには敵を——、梶や、敵を取つておくれ」

と仰しやつて、また泣き崩れておしまいになりました。

その晩でございました。大奥様は冷静におかえりになり、私をお居間にお呼びになつて外の人をさけて、永い間のお苦しい秘密をすっかりお打ち開けになりました。

大旦那様と恋をお争いになつて、弟様のお負けになつたことは先刻も申し上げました。大奥様と御結婚遊ばしてから、弟様の態度が恐しく兇暴におなりになりました。手がつけられない、仕方なく大金をおかけになつた親譲りの南洋のゴム園の一つを弟様にさし上げて、日本を去つて頂いたのださうでございます。所がお酒と女とで間もなく無一文とおなりになつて、文夫様がお生れになつた翌年、突然帰つていらして強請ゆすり始めなすつたのださうでございます。

間もなく大旦那様は御用で北海道へ御旅行になり、大奥様は東京がうるさいからと仰しやつて文夫様をお連れになり箱根の御別荘へ行らつしやいました。そこへ弟様がこつそりお訪ねになつたのでございます。

始めは何気ない四方よもやま八方のお話を遊ばしていらしたのですが、聽て印度で飼ひ馴

らしたという恐しい毒のある黒蛇の籠を出してお見せになり、これを放すと直ぐ人の首筋に噛みつくの、これに噛まれると見る間に顔が変り、二た目と見られない癩病患者のようになるのと、そろそろ大奥様をお脅かしになり、遂々無体な真似をなさろうと遊ばすので、大奥様は急に怖しくなつて、その場を逃げ出そうとなさるのを、弟様は力強い手でむずと肩を掴かみ、扉の隅に押しつけて、熱い息を首筋に浴せながら、

「そんなに厭なんですか、私は真剣なんです、命を投げ出しているんですよ。死ぬ覚悟で——。あなたは私の心を、この私の思いをむざむざと踏みにじつてしまう気なんですか。今日の日の来るのを、ああ私は何年待つていたと思います？」

弟様の眼からは涙がこぼれて頬を伝わりました。大奥様はまるで電気にでもかけられたように足がすくみ、身動きも出来なくなり、弟様の勢にすっかり威圧されておしまいになりました、昔の人のいう魔がさしたとでも申すのでしょうか。お心では憤りに燃えていらつしやるにもかかわらず、この我武者らな、気狂いのように熱愛する弟様の暴力に一種の魅力をさえ感じたと仰しやいました。そしてまるで無抵抗で、あの方の思うままになつておしまいになりました。

しかしそれはほんの通り魔のような過失で、全く一時の感情で、弟様に対して新しい愛情が起つたのではございません。その証拠にはその時以来、弟様に対する

憎悪の念は益々深くなり、仇敵のような間柄におなりになったと仰しやいました。殺してもあきたらない人だ、恐しい悪魔だと大奥様は身震いなさりながらお泣きになりました。

不運にも御妊娠なすつて、煩悶は更に加わりました。そこへ間もなく大旦那様の御変死という事件が起つたのでございます。

大旦那様は弟様と御一緒に獵にお出かけになりました、断崖から谷底へお落になり、大怪我を遊ばしてお亡くなりになったということになって居ます。現場を見た人もあり、只今もそう信ぜられて居ります。

ところが、弟様が二度目に大奥様を強迫に入らした時に、兄様殺しを白状遊ばしたのだそうでございます。その時も、例の黒蛇をお持ちになっていらして、仇はいつじや、こいつじやと仰しやり、顛末をお話しになったそうでございます。

それによりますと大旦那様をおすすめになつて断崖にお立たせになり、数間隔つた処で弟様は御冗談を仰しやつて人々の目を御自分の方へ集めさせ、こつそりと黒蛇を放したら、案の定、大旦那様の首筋に噛みつき、そのために倒れて谷底にお落になったのだそうでございます。幸か不幸かお顔がめちやめちやに砕けたので分らなくなりましたが、そうでなかったら、変色の点で疑問が起きたかも知れません。こんなお話をして弟様はグングン大奥様を脅かし殆んどお氣を失いかけていらつしや

るのをいい事にし、これからはお嫂様おふくさまと御木井家が欲しいんだそれにはこれが邪魔になると仰しやつて、文夫様を指したそうでございます。

大奥様は急に我に帰り、「どう遊ばすんですか？」とお訊きになりましたら、これには黒蛇まで使う必要はないとせせら笑つて仰しやつたそうで、大奥様は文夫様と聞いて始めて俄かにお強くおなりになりました。その先の事は大奥様はお言葉をお濁しになりましたけれども、何か弟様との間に葛藤がおりになつたらしく、大奥様は棄て鉢におなりになり、傍にあつた海軍ナイフを取つて、弟様目がけてお斬りつけになつたのだそうでございます。左の目の下を傷けたようだと仰しやいました。先生のお目にとまつたあの疵は、その時の記念でございます。

大奥様はそれから文夫様のお身を御案じになり、弟様がいつかまた現われて危害を加えやしないかと、そればかり苦に遊ばしていらしたそうでございます。

しかしそれよりも苦になさいましたのは、お躰がお弱くおなりになると共に、大旦那様にすまない、申訳ないというお考えのようでございます。

一人の方を御兄弟して争うなんて厭なことでございますが、それが二代も続きますとは何という因縁でございます。しかしお兄様を殺しても足らず、更に一旦狙いをつけた文夫様をまで殺すという、弟様の執念深さは驚くほかございません。

注射のあとだとの事でしたが、どうも私は叔父様が黒蛇を使って文夫様

をお殺しになったに違いないと思います。自殺と見せかけるために、注射器やアンブレを屑籠に投げ込んだのはごさいますまいか。大奥様もお家の耻と思召しましたからこそ、苦しい我慢を遊ばしたのでごさいますから、どうぞそのお心をお汲み下さいますして、秘密に、世間に知れませんかのように何とか大奥様の敵を取って頂けないでございましょうか」

8

何という恐しい人でしょう。事件はたぶんお梶さんのいう通りに相違ありません。私はともかくもこれだけの話を告げるために警察へいそぎました。

間もなく叔父様はアパートから検挙されました。家宅搜索の結果、黒蛇も発見されました。写真と黒蛇とを突きつけられて、それ以上の証人の必要もなく、遂々すべてを白状してしまいました」

S夫人は云い終ると写真ブックから、小さい写真を一枚ぬき取って私に見せました。それは金網に入った黒蛇を写したものでした。

「やっぱり文夫さんという方はこの黒蛇に殺されたんでございますか？」
と夫人に訊いてみました。

「ええそうですので、当日は披露をかねた園遊会を麻布の御木井邸で開かれたんですが、私も招待されて参りましたからよく記憶して居ります。随分盛大なものでございましてよ。恰度その午後三時頃、混雑の真最中を見計って、来賓に化けてまざれ込み、突然文夫さんの前に現われたんだそうです。文夫さんは取り敢えず叔父様を自分の書齋に連れて行きました。ごたごたしていたので文夫さんの姿の見えないのを、誰一人として気がつくものはありませんでした。書齋は広い建物の外れに作ってありまして、別棟のようになって居りますからまことに静かで、殊にその日はひっそりとして近くに誰も居ませんでした」

「何故また文夫さんはそんな淋しいお書齋へ叔父様をお通しなすつたのでしようか知ら？」

「そこですわ。皆さんも不思議に思わうんですけれど、私が考えますのに、叔父様は南洋をながい間うろつき廻っていた人ですから、どこやら容子も違っていただけでしょうし、第一あの顔の疵は人相を随分悪く見せますからね。文夫さんは最初暴力団か何かと間違えたのじゃないかと思うんですの、それでなるべくお客さん達の目につかないように、自分で始末をつける積りで、故意と人のいない書齋を撰んだものだ

ろうと思ひますのよ」

「文夫さんは叔父様のお顔もご存じなかつたのでございますか？」

「忘れてしまつてたんでしよう。だから叔父様は例の写真を持参して、それを証拠に、自分は、先代御木井男爵の弟で、落魄している叔父だということを告げて、若干の合力を頼んだのだそうです。それ以上の考えは断じてなかつたと強弁していますよ」

「ではどうして殺す氣になつたんでしよう？」

「最初はそんな氣もなかつたんでしようが——何しろ叔父様という人は執念深くつて、御木井家の事なら何事によらず、一から十まで探つて知つていたのです。無論武雄さんの失恋したのも聞き知つていました。文夫さんの方ではまた何も知らないで、ほんとの叔父様だと思ふものですから、氣をゆるしているいろ打ち解けて話していたそうです。そのうちにふと叔父様の頭に、二十何年前の自分と同じ境遇に泣いているだろう処の武雄さんの姿が浮びましたんですつて、その日も今日のように盛んな披露会が、しかもこの同じ邸内で行われたんだそうです。喜びに満ちたあの晴れやかな、恋の勝利に輝く兄の顔は今だに忘れようとしても忘れられない。それに引き換えて自分の惨めさはどうだつたらう。ああ武雄は可哀想だ！ と思うと眼の前の文夫さんが急に憎くなり出して、遂いに殺意を生じたのだといひますが、

それは少し怪しいと思います、文夫さんの方では叔父様の心が変わったのも知らずに、懐そうに写真に見入って、『叔父様もこの頃はお若かったんですね、そのお写真は言葉にお甘えして頂いておきます』と云いながら、大切そうに書簡紙の間に挟んだ刹那、叔父様は秘かに携えて来た黒蛇を放したのだと申します。黒蛇は文夫さんの首筋を巻きかけたんですって、驚いて――、夢中で黒蛇を手に握って起ち上った時、手首を噛まれ、文夫さんはばったり倒れてしまったんです。モヒ中毒にかかっていた叔父様は、自分局の注射器とアンプレを残して立ち去ったのだそうですの」

情鬼

「小田切大使が自殺しましたよ」

夕刊をひろげると殆ど同時にS夫人が云った。その瞬間、私の頭の中をすうツと掠めたある影——、それは宮本夫人の妖艶な姿であった。

小田切大使の自殺に宮本夫人を引張り出すのはちよつと可笑しいが、私の頭の隅に、二十年前の記憶が今なお残っていたからであろう。

その当時は小田切大使も宮本夫人もまだ若かった。少壮外交官の彼と彼女とは到る処で話題の種をまきちらしていた。そして二人の關係は公然の秘密として余りにも有名であった。宮本夫人は器量自慢で、華美好きで、才子ぶるといふのでとかく評判がよくなかった。大会社の支店長代理という夫の地位を笠にきて、横暴な振舞をすると云つて、社宅の婦人達の反感を買い、何も知らない宮本氏へ夫人の不行跡を洗い立てて、密告した者さえあつた。それがために宮本氏は憤死したとさえ伝えられてはいるが、實際は任地で風土病にかかつて死んだのだつた。

兩人の關係を承知の上で、大谷伯爵が自分の愛嬢を小田切氏に嫁つた。この結婚がまた噂の種になつた。必ず小田切時代が来ると伯爵が断言したとか、眞実か嘘か

分らないが、いずれにしてもその予言が当って、その後小田切氏はとん拍子に栄転した。

それはとにかく、小田切氏の結婚と同時に宮本夫人に、好感を持たなかったある一部の連中は、いい気味だ、絶世の美人も伯爵令嬢という肩書には美事背負投げを喰わされたではないか、と云って嘲笑した。しかしそんな噂も一時で、臆やぶて二人の問題も口にする人がなくなり、後には宮本夫人の存在すら忘れられてしまった。

そういう記憶があるので、私は小田切大使の自殺と聞いて、直ぐ宮本夫人を聯想したわけなのである。

新聞には最初自殺とあった。それからまた一時他殺の疑いが濃厚となり、種々な臆測が伝えられて、世間を騒がしたが、結局自殺と確定された。

自殺に撰んだ日が亡き夫人の一周忌にあたり、しかも夫人の写真を懐に抱いていたというので、私は最初から自殺説を主張していたが、S夫人はそれに対して別段反対説を唱えるでもなく、といって私の意見に同意した様子もなかった。

「あすこは任地から云つても重要な処ですからね。小田切さんとしてはほんとに働ばき栄ばえのする、腕のふるいどころでしょう。外交官としては面白い檜舞台。そこへ撰ばばれてやられたんですから、あの人としては今が最も華やかな時代だと云つても差支ありませんまい。その得意な時に、ただ奥さんが恋しい位の理由で自殺するなんて、

そんな馬鹿々々しいこと考えられないけれどね——」

「じゃ他殺だと思ひになりました？」

S夫人とは違つて私は直接小田切大使を知っていた。豪気な才物だが、また一面には情にもろい、涙のある優しい人だった。おまけに亡き夫人とは思ひ合つた間柄だったとも云われるし、あの人だからこそ自殺したのだろうと私には思われるのだが——。

「他殺と断定するわけでは無論ないんだけど、しかし自殺とすれば何かそこにもっと深い原因があるわけでしょう。一時的発狂とも考えられないことはないけれど、小田切さんはそんな人じゃないでしょう、冷静な、落ちついた人だという評判だから」

「でも、また半面には熱情家でもあつたんですの。だからこそ宮本夫人ともあつた関係に陥おちたんではございますまいか？」

「それはそうかも知れないんだけど、自殺とすれば他にもっと重大な問題が必ずあると思ひますね。例えば外交上の失敗だとか、秘密書類をどうかしたとか、また本省の意見なり命令なりに無理がある場合、それを承知で横車を押さなければならぬ場合もあるでしょう。そんな時いつも貧乏籤くじをひくのは外交官ですわね。日本と外国との間に板挟みになつて、散々非道ひどい目にあつて悶もえ苦しんだ揚句うが神経衰弱。心ない人からは無能呼ばわりをされる。さもなければ質たちの悪い婦人関係か、とにか

く外交官には秘密が多いから、そうそう単純に片付けてしまうわけにはゆきませんよ。他殺だったら興味があるから新聞にもいろいろ書き立てられるでしょうが——」
「自殺となると地味ですから、余り新聞でも騒がないと仰しやるんでしょう？」
夫人は私の顔を見て苦笑した。

それきり二人は小田切大使の自殺については話し合わなかった。

忙しい仕事に追われている私は遂々告別式にさえも行かれなかった。それがまた気になるので、恰度半日ばかり閑が出来たのを幸に、急に墓参を思い立った。

時候のいい頃だからいいようなものの、朝から荒れ模様であった空が、午後には暴風雨となつた。荒れ狂う風雨の音を聞くと出足もしぶり勝となるが、やっと勇気を出して出かける決心をした。

ひどい荒れで、雨は横なぐりに円タクの窓に打ちつけた。そのしぶきを浴びて、座席のクッションまでしつとりと湿つてきた。私は運転台と座席の間に洋傘を^{こもり}広げて立てかけ、そのかげに小さくなつていた。電線はうなり、大木は風にしなつて今にもへし折れそうだ。こんな日に歩く物好きな人もいないと見えて、甲州街道は人一人歩いていない。トラックに一度行き違つたきり、円タクなどは影さえ見えなかった。

墓地の入口には両側に茶店が並んでいた。その一軒の前に車を停めて、

「小田切大使のお墓はどこでしょうか？」

と運転手が窓から首を出して訊いてくれた。

「まだお墓はありませんよ。事務所へ行つてよく訊いてもらいなさい」

長火鉢の前にいたお神さんは、煙管キセルで事務所の方向を指しながら、親切に教えてくれた。

「お参りなら、管理事務所に頼んで、納骨堂に案内しておもらいなさるとよござんすよ」

教えられた通り、管理事務所の扉ドヤを開けた。机を前に調べものをしていた管理人に來意を告げて納骨堂への案内を頼んだ。洋服を着た管理人は無言で立ち上つて金庫から合鍵を取り出し、先に立つて案内してくれた。納骨堂は別棟になつていて、椎や檜の老樹の間に、まるで土蔵のような形に建てられてあつた。コンクリートの長い廊下を伝つて、入口の方へ曲ろうとした時、参詣をすませて帰るらしい若夫婦と擦れ違つた。

女の方は小造りで、目立たない極くありふれた格好の人だが、男の方は素晴らしく奇麗だ。痩せ形で西洋人のようにスーツがしっくりとよく身につけている。いい姿だな、と思わず振り返つて見ると、先方の二人も同じように振り向いて見ていた。どこかで見たような顔だがどうも思い出せない。この頃の若い連中には美しい人が沢

山あるが、こんなにすべてが整った人は多くはないだろう、黒い大きな眼鏡がちよつと邪魔になるが、上品な顔だちと、貴公子らしい風采とはいつまでも眼に残った。何んて奇麗な男だろう。

小田切大使の遺骨は黒い布に覆われて、ガラス戸棚の中段に安置されていた。その前には黒いリボンを結んだ小さな造花の花輪が供えてあった。私はそこにひざまず跪いて祈禱を捧げた。

2

それから一ヶ月ばかり過ぎたある日、事務所に働いて居る私の処へ、給仕が一枚の名刺を持って来た。

小田切久子と書いてあるその名刺をS夫人に示しながら云った。

「小田切大使の令妹いもづとさんでございますの」

もうこの頃では小田切大使の死も世間からそろそろ忘れられかけていたし、自分達の間でさえも、自殺か他殺かなどと問題にしなくなっていたので、この突然の訪

問はちよつと妙な感じを与えたのだった。

「こちらにお通し申して下さい」

給仕の後について久子さんは静に部屋へ入つて来た。

十数年振りで会つた彼女は、昔の面影もなく、痛々しく瘦やつれて、この人も今に死んでしまうのではあるまいかと、ふとそんなことを思いながら、一通りの悔みを述べて後、来訪の用件を訊いてみた。

「あなたがこういうお職業しごとをしていらつしやるという事を承しんわつていましたので、実は急にお力を拝借したいと思つて突然御都合も承しんわらずに伺ましまして——」
と軽く頭を下げてから、急に声を低くして云うのだった。

「極く秘密に、世間に知れないように、調べて頂きたいことが出来まして、実はそのお願いに上つたのでございますが——」

久子さんはちよつと言葉を断きつて、気兼ねするように傍のS夫人を見た。彼女はそれと気がついて、

「御心配なく、どうぞ。決して他人に漏らすようなことはございませんから」

と云われて安心したらしく見えたが、それでもなお四辺あたりを憚おそかるような小さな声で語るのだった。

「実は妙なことなんですの、兄の遺骨が誰かに盗まれたらしいのでございます。否いい

え、盗まれたらしいと云うよりもすりかえられたのではないかと思われんですの」
夫人と私は思わず顔を見合せた。

「それはまた、どういうわけなんですの？」

「お耻はずかしいお話ですが、兄はあの通りの無頓着な人だったものですから、まだ墓地がなかったんでございます。昨年おととし嫂あねが外国で死なくなりました時は、取敢えずお骨こつを嫂の実家の墓地へ同居させてもらっておきました、この度兄と一緒に葬まうることにいたしましたので、小田切家の墓所を新たにつくることになりまして、かろうとを造こしらえます間、一時、遺骨をお預けしておいたのでございます」

「納骨堂へは先日私も御参りしましたのでよく存じて居ります」と云うと久子さんは丁寧におじぎして、感謝の意を表してからまた続けて、

「それで私共は安心して居りました処、十日ばかり前に、知らない名の女の人から書面が参りまして『お兄様のお遺骨は私が頂戴いたしました。御生前からのお約束でございますから、お預りいたして大切にお守をすることにいたしました。何卒御承知置下さるようお願いいたします』と藪から棒にこんな事を申して来たんでございませぬ。私は驚いて、早速墓地管理事務所に参り、いろいろ調べてみましたがお預けしてある骨壺には何の異状もなく同じ場所に安置されてあるのでございます。それにあれほど嚴重になつて居りますので、そんなことの出来るはずもないとは存

じますが——、また戯談いんぎんにそんなことをわざわざ申して来る人もあるまいと思ひますので、念のため、お参りにいらして下さった方々の事を詮議してみました。その中にちよつと妙に思われる方が一人ございました。いつぞや暴風雨の日がございましたね。二十日ばかり前になりますが——、あの日、あの荒れの真最中に御夫婦連れの方がお見えになつて「小田切の親類の者だが、今日故郷こくにへ帰るについて暇乞いとまごいかたがた参詣に來た、是非納骨堂に案内して欲しい」と申したそうでございます。そこで係りの人はその夫婦者を案内しますと、旦那様の方は入口の扉のところ立つていて管理人と話していたようですが、奥様は一人で中へ入り遺骨の前に跪いて、長い間すすり泣いていられたと申します。それがまた余り長いので、しまいには旦那様が退屈なすつて、欠伸あくびをしながら、煙草を御自分も喫み、管理人にも一本下すつたそうでまたその煙草が外国製のものらしく、逆とそも堪らない佳よい香がしたが、吸つているうちに何だか少し頭がぼんやりしてきて、いい気持ちに眠くなつた。何という煙草だろうと後で同僚に話したそうでございます。私もそのお人に会つてお訊きしてみました。はつきりした記憶はないらしく、ただ旦那様という方は非常な美男子で、女のようにきやしやな細ほつそりしたお人だったということと、これから直ぐ汽車に乗るのだと云つて、大きな荷物を持っていられたことだけは分りました。何分にもあの暴風雨の最中なので、荷物の置場に困り、納骨堂の入口に持つて行つた

そうでございます。しかし私の方ではそんな方にはどうも心当りがなく、むろんそんな親類もございませんので——」

「じゃ、その御夫婦のどっちかが、お兄様のお遺骨をすりかえたらしい、と仰有るのでございますか？」

「どうもそう思うより他には心当りがございませんものですから、でもまるで雲を掴むような話で、何人かの悪戯かとも思うのでございますが——、でも万一ほんとうにすりかえられたものとなりましたら、どんな事をしてでも取り返さなければ兄へ対して申訳がございません。知らない他人様のお遺骨を葬って、肝心の兄のは行方不明では大変でございますものね」

久子さんは帯の間をさぐって、見知らない婦人の手紙というのを出して見せた。

3

S夫人と私は早速墓地管理事務所を訪ねた。事務所では夫婦者が暴風雨の日に参詣はしたが、預つてある遺骨には断じて異状はないと頑張つて、しまいにはこちら

の問にも答えず、てんで相手にもなつてくれなかつた。

秘密に取り扱ってもらいたい、世間に知れるのが嫌だという久子さんの依頼もあるので、この上押しきつて調べるわけにもいかなかつた。

「遺骨をすりかえるなんて常識じゃ考えられませんわ。誰かの悪戯じゃございませんまいか？」

「悪戯としたらちよつとうまい思いつきよ、どうも女の考えらしい。盗んだと云えば第一遺骨が紛失するので、直ぐ知れてしまうんだけど、すりかえたと云うんだと内容だけが変わつてゐる事になるから、お骨には何の証拠もないし小田切さんの妹さんだつて迷うわね」

「管理人に突撥ねられたから云うわけじゃございませんが、すりかえるなんてそんなこと、なかなか出来やしませんわ」

納骨堂の扉を開けてもらうのさえ随分面倒だつたあの日の事を思い出して、私は云つたのだった。

それなり二人は無言のまま歩きつづけていたが、しばらく暫時すると、夫人は突然こんなことを訊いた。

「あなたの知つてらつしやる宮本夫人というのはどういう人で、今はどうしていられるの？」

「それは美しい人でございますよ。しかし顔に似合わず大胆で押しが強くて、負けず嫌いで、性質はいい方じゃございません。悪くいう人はあれや毒婦だなんて申しましたからね。でも今はどうしていますか、御主人が亡くなってから、幾度も結婚したという噂を聞きました。小田切さんもあの人には随分悩まされたりと蔭では皆同情してましたの。何しろ評判のよくない人でしたから」

「小田切さんの妹さんは宮本夫人とお兄様との関係を知らないんでしょうか？」
「知っておりますでしょう。でも利口者だから。黙っているんじゃないやございませんか」

「居所判つてるか知ら？」

「さあ、いかがでしょう。名前も変つておりましようし、何でも落魄して満洲に行き、支那ゴロと同棲してるなんて話も聞きましたから。しかしそれも、もう大分前のことでございますわ。今はどこにどうしていますか、無論内地ではないでしょう。でもあの勝気な女のことでございますから、小田切さん御夫婦の仲のいい評判なんかが耳に入ったら、それこそ凝^{じっ}としてはおりませんはずなのに、一向表面にあらわれて来ない処をみると、事によつたらもう死んじまっているかも知れません、とにかく小田切さんとはあれつきり全然交渉はなかつたんだろうと私は思つて居ります」
「じゃ宮本さんのいた会社に問合せでも無駄でしょうかね？」
「人事課でも最早^も分らないかも知れません。何しろ姓が幾度も変つておるのでしよ

うし、それにあの会社とは今は何の関係もございませんでしようから——。それよりは、むしろ久子さんに直接あたって訊いてみた方がかえって何かの糸口がつかめるかも知れませんか。あんなに仲のよかつた兄妹きょうだいなんですから、お兄さんのことは何でも知っていきましょうと思ひますが」

夫人は前々から宮本夫人には興味を有もつていた。勿論本人を知っているのではないが、想像力の強い人だけに、世間の噂うわささだの、私から聞いた話だのを集めて、一人の宮本夫人を造り上げていた。しかしこの事件に何も関係のない、彼女を引きずり出して来る夫人の気持はどうも分らなかつた。たぶん彼女を突つついたら、何かしら手たくり出す方法があるかも知れないという位の考えなのだろうが、今頃こんな人を、ほじくり出した処で、どうせ何も出やしないと思つたので、私は余り気乗りがしなかつた。しかし夫人の案内役として久子さんを訪問することは拒めなかつた。

久子さんは一度嫁いだが、不縁になつて戻つて来てから、小田切さんの留守宅を預つて、番町の屋敷に伯母さんと二人で暮らしているのだつた。

宮本夫人と聞くと、久子さんは急に眉を曇らせた。兄の昔の過失あやまちを今更明るみへ引き出されて、詮議だてされることは辛かつたのだろう。

「宮本さんは兄が亡くなりました時でさえも、まるつきりお姿をお見せになりませんでしたし、お噂もとお聞きいたしませんから、私は何も存じませぬの」

「では、他に何か御婦人のお心あたりはございませんでしょうか？」

「それが一向ございませんので——。兄は以前はともかくも、嫂と結婚いたしました後は、ほんとうに真面目だったんでございます。嫂の死後は一層身を謹みまして、只管ひたすら嫂の冥福を祈つて居りましたのですから、たとえば人様が何と仰しやいまして、兄には婦人関係などなかったと存じますの」

夫人は幾度もうなずいて後、ちよつと云い憎そうにいうのだった。

「失礼ですが、お兄様の日記のようなものはおありになりませんか？」

久子さんは席を立つて出て行つたが、間もなく鼠色の厚いノートを手に持つて入つて来て、夫人の前にそれを置きながら云つた。

「心覚えに書いておいたものらしいゆうございまして、ちよつと読んでみましたが、何のことだかさっぱり分りませんのよ」

日記は日本語と仏国語フランスと半々位に書かれてあつた。夫人を失つた悲しみが胸を打つらしく、至る処に悲痛な歎きが見出される。ある時は夫人の後を追うて、死を切望するらしい文字もあつた。私は小田切さんを知っているだけに、彼の心中を思つて涙ぐましい気持になつた。過去の古疵から何を探り出そうとするのだろうか、夫人の冷めたい態度に思わず軽い反感をいだいた。この上死者の心を傷きずけたくない、汚したくない。しかしそんな気持などにはまるで頓着なく夫人はノートを久子さん

に返しながら云うのだった。

「おついでにアドレス・ブックも拝見出来ないでしょうか？」

久子さんはまた立ってアドレス・ブックを持って来た。

夫人は頻りにページを繰って何か探し求めている容子ようすだったが、臆て見つかったものと見えて、自分の手帖を出して書き留めていた。私は何気なく覗き込んでみると、それは吉岡五郎という人の宿所であった。

4

「吉岡五郎さんと仰しやる方は？」

夫人は自分の手帖を納めながら久子さんに訊いた。

「吉岡さんは兄の秘書官でしたの」

そう云って、何故か久子さんはちよつと顔を赤くした。

「秘書官？ と仰しやるとやはり外務省の方でございますね？」

「いいえ。兄個人のですから外務省とは全然関係ございません」

「ではお兄様個人の秘書？」

「はい。そうなんですの。吉岡さんは面白い方で、個人の秘書ではねうちがないからって、御自分の事を秘書官、秘書官って仰しやいますのよ。吉岡秘書官がなどとね、無論御冗談にですが、それで私達もつい口癖になってしましましてあの方のことを秘書官と申しますの」

「じゃあお役人さまではありませんのね？」

「はい。それに今度あちらから帰朝いたしました時、初めて連れてまいった人でございます」

「その方、只今でも時々見えますか？」

「いいえ、兄が亡くなったものですから、自然用事もなくなり、それに伯母がやかましくって——」

「伯母様が？」

「はい。吉岡さんはお美しい方だものですから、ああいう方がいつまでもいらつしやると目立つからなどと申しましてね」

なるほど久子さんは今独りであるので、世間の誤解を恐れる。そこで伯母様が心配されるのだと分った。

「吉岡さんはお兄様のお気に入りでしたか？」

「はい。大変気に入って居りました。テキパキした方だものですから。それに頭がよくって、語学が達者なので調法だと申して居りました」

「じゃ何かお考えがあつて、特に目をかけていらしたというようなことはございませんか、譬えばあなたとご結婚でもおさせしようとか——」

久子さんはびっくりしたようだった。

「いいえ。そんな事は決してございません。兄は吉岡さんと私とが接近するのさえ余り好みません位でしたから」

「吉岡さんはどこに住んでいらしたんです？」

「宅の離室はなれをお貸して上げていました。こんどの兄の滞在は余り長くない予定でございますましたので——」

「お兄様が日光でお亡くなりになりましたのはたしか午前二時だったと思いますが、その当日やはり吉岡さんはお兄様とご一緒に日光においでになつたのではありませんか？」

「いいえ一緒ではございませんでした。そしてあの方が外出先から帰っていらしたのは夜分の十一時頃だったと思いますの。忘れもしませんが、あの晩吉岡さんは非道い胃痙攣いけいれんを起して大騒ぎいたしました。それからずつとお体が悪くつて、兄の告別式にさえお出になられませんでしたの」

「只今でもお音信たよりがございますか？」

「もうさつぱり——」

「いつ頃あちらへ帰られましたか？」

「兄の告別式がすんだ翌日でございます。もともとあちらから連れて来た人なんですから」

「でもあちらがお故郷くにというわけでもないでしょうにね？」

「何ですか吉岡さんは男には惜しい、余り美し過ぎるといつぞや伯母と私が噂していましたら、兄がそれを聞いて、支那人の混血児にはどうかするとああいうタイプの美男子があると申ししていましたから、もしかすると混血児なのかも知れません」
それだけの事を訊いて、二人はひとまず小田切邸を辞した。

「吉岡つて人、何だか臭いじゃありませんか？」

S夫人は私の問いには答ええないで、頻りに何か考え込んでいたが、

「これからちよつとわきへ廻ります。あなたはお先へ事務所へ帰って待っていて下さい」

そう云い捨てると通りがかりの円タクを拾って、さつさと車の中へ入ってしまった。

私は命令通り事務所へ帰って、夫人の帰りを待つ間に、自分の考えをまとめてみ

ようと思つてノートへ書きつけた。

まずこう考えてみる。

吉岡五郎。年齢不明。イタリー人あるいはスペイン人と支那人との混血児。頭はいいが素情のよくない人。才智に長けた美男子。

まず小田切大使に取り入り、令妹と恋仲になる。勿論それは最初からの予定の行動で、結婚とまで運ばばもうしめたもの、財産も分けてもらえるだろうし、失業の怖れもなさそうだ。そこで吉岡は腕によりをかけて久子さんを弄落にかかると。処が肝心の兄さんが賛成しない。吉岡の才能は愛するが、妹の夫として撰ぶ人物ではないと思つてゐるらしいと吉岡が感づく。そこで彼には小田切氏が邪魔になつてくる。

事によるとこれは自殺ではないかも知れない。支那人などがよく用いる巧妙な手段で、殺害されたのではあるまいか。支那人には残忍性があるから、その血をひいているとしたら、自分の目的を達するためには、どんな悪辣な方法でもやるだろう。だからこそ大使が死ぬと早速故国へ引揚げてしまったのではないか。ほとぼりをさましてから素知らぬ顔で小田切家にまた現れてくるに相違ない。もしかするとその秘密の一部を久子さんも知つてゐるのではあるまいか。そこまで考えると何かしら彼女の身辺にも暗い翳があるように思われる。恋のためには親を殺す者さえある。久子さんが吉岡の話をする時の態度から察しても、大分兩人の間は進んでゐるよう

だ。小田切大使がどうしても二人の恋を許さなかったとしたら？

私はすっかり吉岡を犯人にでっち上げて考えている処へ、忙しそうに階段を昇つて来る夫人の足音がした。

5

「さあ、これから吉岡五郎さんを訪問するんですよ。あなたも一緒に行らっしゃい」
夫人は荒原の女豹が獲物を捕える時のように生き生きとした眼を輝かせながら、私を伴つて外へ出た。私はちよつと狐につままれたような気がした。

「吉岡五郎さんは支那へ帰ったんじゃないやございませんの？」

「いいえ、東京にいるんですよ」

「もうやって来たんですの？」

「ずうつといるんです。支那へ帰ったなんて嘘ですよ」

夫人は先に立つて円タクを交渉し、京浜国道を驀地まっしぐらに大森の方へ走らせた。

途々みちみち夫人はこんなことを云った。

「小田切さんの妹さんの処で日記を見たでしょう？ それから吉岡って人怪しいと思っただけですよ。あの日記で読むと大使は死ぬ日の夕方吉岡さんを連れて中禅寺湖から日光へ歩いたんです。二人で山越しをしながら云々うんぬんという処があつたんですもの——」

「でも、どうして今までそれが問題にならなかったのでしょうか？ 日記があつたなんて事はどの新聞にも書いてございませんでしたかね」

「日記は持ち去つた人があつたのでしよう。よしんばその場に日記があつたとしても他人には解らないでしょう。特殊の文字が使つてありますから、つまり暗号なのですが私は幸いそれを知っていましたからね、まあ吉岡さんに会つたら、何かもつと新しい発見があるだろうと思つてんです」

「じゃやつぱりあの人が犯人なんですか？」私は内心いささか得意だつた。二人は大森のBホテルの玄関で車を乗り捨てた。そして夫人は私を入口に待せたまま受付の中へ入つて行つた。

やや少時しばしすると戻つて来て、こんどは玄関とは反対の裏口から庭へ廻つた。日はすっかり暮れてしまつて四辺はもう暗かつた。大きな番犬がどこからか出て来て、迂散臭うさんくさそうに二人の後をついて来る。二人は植込みを抜けて広い芝生の上を歩いた。芝生は露に濡れていて、着物の裾がしめっぽくしつとりとなつた。

私は夫人のうしろに従つて足音を忍ばせながら、建物の一番端れの方へと近づいて行つた。その庭に面した一つの窓にはまだブラインドが下してなかつた。しかも電気がついてるので室内は一目でよく見えた。長椅子、安楽椅子、壁掛まで全部同色の鼠色で、寄木細工の床の上には処々にペルシャ絨氈じゅうたんが敷いてある。あるものは正方形に輝き、あるものは細長くあたかも蛇の背のように冷めたく光っている。光線の加減だろうか、硝子ガラス越しに見るせいだろうか、部屋全体の感じがまるで水中のように思われた。

次の室へやへ通ずる扉が半開きになつていて、どこからさし込むか、月の光が蒼白く照らしている。その月の光を上半身に浴びてしどけなく座っている女の姿があつた。少し離れた処にモーニングを着た男がこつちを向いていかにも行儀よく、俯向き加減になつて、深々と安楽椅子に腰かけていた。私は息も吐つかず延び上つて見ていた。やがて女は膝頭でいざり始めた。まるで蛇のような曲線美を描きながら、男の傍にすりよつてズボンの膝に両手を置いた。その片方の手には何か小さいほの白い棒のようなものを持つていた。女は最初しきりに何か搔かきくどいていたが、男がてんで相手にもしないので、しまいには男の膝に顔を伏せてしくしく泣き出した。泣きながらこんどはその小さいほの白い棒に頬ほずりしたり、唇をつけたり、はてはびしゃびしゃとしゃぶり出した。しかし相手は一向無表情で身動き一つしない、同じ

姿勢を崩さずにちゃんとしているのだ。

その時、女は何気なくふと私達の立つている窓の方へ振り向いた。細面の鼻の高い、素晴らしい美人だ、その顔が誰やらに似ている。誰だったか知らず？ 誰だろう、と思った瞬間ふつと思ひ出した。宮本夫人！ ああそうだ、宮本夫人だ、確実に（たしか）そうだ。と思うと同時にこんどは男の顔も思ひ出せた。小田切大使！ 思わず声を立てようとした。と、柔かい夫人の手が、つと私の唇を押えた。

宮本夫人はするすると裾を引きずつて二人の目の前まで歩いて来た、私はもう息が詰りそうな気がした。しかし幸にも彼女は窓の外から隙見していることなど全く気がつかないようだった。静かに私達の目の前のブラインドを降し、スイッチをひねつて電気を消した。多分ブラインドを降すことを忘れていたために来たものだろう。

私は夢から醒めたように深い太息（といき）をつくと両手で頭を押えた。私は気が狂ったんじゃないか知ら、しかし慥（た）かに宮本夫人を見た。小田切大使を見た。この目で見たんだから間違うはずはない。でも、そんな事があり得ようか、もう一度見直したいと思うが、もう次の間との境の扉も閉められたので、室内（のそ）は窺（のぞ）き見るよしもなかった。まるで妖気に打たれたとでもいうような、無気味な感じがして、今見たものすべては夢であったような気もするのだ。

ぼんやりしている私を見て、夫人はにこにこしながら云った。

「慥かに宮本夫人だったでしょう？」

「はあ、それは慥かにそうですね——、でも。まあ、どうしてあすこに小田切大使までがいらしたんでしょう？」

「オホホホホホ。気がつかなかったの？ あれや人形ですよ」

「えッ。人形？」

私はぞっとした。

「あの似顔なかなかく出来ていましたね」

「じゃ宮本夫人が持っていたあのほの白い棒、あれや何でございますの？」

「さあね、まあ云うのは止しましょう。どうせいまに分るでしょうから」

夫人は意味ありそうに微笑した。私はあの小さいほの白い棒が気にかかつてならなかったが、強いて訊いてみるだけの勇氣もなかったの、その儘黙ってしまった。

夫人は気の抜けたようになって私を急ぎ立てて、こんどは改めて表玄関から名刺を出し、吉岡五郎氏に面会を求めた。二人は長い間玄関の敷石の上で待たされた。

廳で取り次ぎのボーイに案内されて、細長い廊下を幾度も曲り、やっと吉岡氏の扉の前に立った。ボーイはノックしておいてから二人を残して立ち去った。

ここでもやや少時待たされた。室内をあちこち歩く靴の音を聞きながらたすんいで

いると、扉が内から颯と開いて、吉岡五郎氏の美しい姿が燈を背にしてすらりと立っていた。

「宮本さんの奥様、いや。今日は吉岡秘書官としてお目にかかせて頂きましょう」
はっとしている宮本夫人を押し入れるようにして、S夫人は室内に入り、同時に自分で扉を閉めてしまった。

次の間のテーブルの上には、黒い布で覆われた四角な箱が置いてある。それは確かに見覚えのある品であった。暴風雨の日納骨堂で見た小田切大使の遺骨、たしかにそれに違いない。しかも目前に立っている人は？ あの日コンクリートの廊下で擦れ違った黒眼鏡の美しい男ではないか。宮本夫人と小田切大使の遺骨、私は何だか全てが判ったような気がした。そしてほの白い棒の謎までも。

S夫人は丁寧に頭を下げながら、しかし命令的な語調でいうのだった。

「小田切さんの遺族のお代理として出ました。お遺骨のお返しをお願いします」
宮本夫人の顔は見る見る蒼白になった。

ながい沈黙の後、遺骨を前にして宮本夫人が語った話はこうだ。

「私と小田切さんとの関係は彼がこの世を去る最後の日までずっと続いていたのでした。世間では疾うの昔、二人の縁は断れたものと思つていたでしょうが、そう思わせるように仕向けたのも、実は私達の考えからやったことで、二人の関係を続けて行こうとするには、何よりも人の口端くちのはにのぼるといふことが一番困ることだったのです。ですから世間の噂をさけるために、故意わざと私は姿を消していたのです。

私の夫宮本が任地で病死した後、当然小田切さんは私と結婚するものと信じきつて居りました。処とが利口な彼は世間の噂にまでのぼった二人の関係を、結婚によつて裏書するような真似はいたしませんでした。そればかりではなく、二人の噂を封じるためには、どうしても表面をちやんとつくつておく必要があると申します。そして間もなく伯爵令嬢との結婚が発表されたのです。欺だまされたとは思いませんでしたが、その時始めて小田切さんの姿、いや、男の人というものの真の姿を見たような気がいたしました。

どんなことがあつても、二人は決して離れまいと誓い合い、かたく約束したほど

ではありましたが、さて相手の男が、他の女と正式に結婚してしまったとなると、たとえ男の心が少しも変っていないと分つていても、どうも面白くありません。

私はいろいろに自分で自分の心を慰めて居ました。世間から認められなくても、小田切さんのほんとの妻は私だ。結婚という形式を踏まなくても、彼の心を完全に掴んでいれば満足じゃないかとか。新夫人は表面をつくるための道具でしかないんだと――。

しかし真実の心は、そんな慰めなんかにごまかされていませんでした。口惜しくつて、口惜しくつて、自分で自分が可哀想になり、しまいには腹が立つて当り散らし、狂気のようになって小田切さんに喰つてかかることもありました、それなのに思い断つて別れてしまおうという気にはなれないのです。私はほんとにあの人を愛していたのでしよう。愛してはいましたが、また一面では憎んでもいたのでございます。

私はいつでも自分で自分の心を判断するのに苦しみますが、どうしてこんなに愛している人が憎いんでしょうか。絶えず小田切さんをいじめる事ばかり考えていました。私同様にあの人も私がどんな乱暴な真似をしても、私から離れて行くことの出来ないのをよく知っていますので、それをいいことにして、いろいろと苦しめてやりました。その手段として撰んだうちで、一番効めキタメがあつたのは浮気をする事だつたんです。男から男へ渡り歩くのを凝と眺めているのは、小田切さんにとつ

ては実に辛かったらしゅうございます。それだけに迎も愉快でした。

『もういい加減に勘忍して下さい』

うめくように小田切さんがいいます。

『私と結婚すれば勘忍して上げるわ』

するとあの人は黙ってしまふのです、新夫人を迎えてから、彼と私とは始終口争いをして居りました。

それでも自惚うぬぼれの強い私は去年外国で夫人が亡なくなられた時、今度こそ必ず私と結婚するだろうと思ひ込んで居りました。すると小田切さんは自分には地位があるからと申すのです。その一言でかあとして一時に怒りが頭へ込み上げて来ましたが、それをじつと我慢して、『地位ですつて？ オホホホホ——』

故意とお腹を抱えて笑つてやりました。

余り私が可笑がるものですから、小田切さんは間の悪るような顔をして云い直しました。

『イヤ、仕事に追われて、結婚など考える暇がない』

『嘘お吐きなさい。あなたに再婚問題が起つているのもちやんと知つてますよ』

『イヤ、あれは嘘だ、僕は再婚だけはしない、それは断じてしない、そんな事をしてはそれこそあなたに対してすまないことになる。僕を信じて下さい』

『お上手を仰しやること。再婚しないのをいやに恩に被せて、しかし場合によつちや表面を作る必要が起つてくるんですからね。実に勝手なものよ』

『そう誤解しちや困る』

『じゃ正式に結婚して頂きましょうかね』

『何でも承知しきつて、よく解つてるあなたなのに、どうしてそんな分らない事をいつて僕を困らせるんだらう。人を苦しめて喜ぶなんて淑女のすることぢやない。そんな事はすれつからしの西洋かぶれのした売娼婦か何かのやる手ですよ。宮本夫人ともあろうあなただが、そんな浅間しい真似をしちやいけません』

噛んで吐き出すように小田切さんがいいました。私はちよつと返事に詰つたものの、負け惜しみから口唇に微笑を見せて、横を向いて居りました。するとあの人は少時暗い顔をして沈んで居ましたが、

『何もかも僕が悪いんだから、どんなにあなたから苦しめられたつて仕方がないんだけど——。僕が今、あなたと結婚することはちよつと難しいという事は分つてゐるんでしょう？ ねえ、だからもう少し待つて下さい。云い逃れをするんじゃないやありません。僕が隠退して、官界を退き自由な身になるまで——』

『自由な身になるとまた何か云い分が出来るんでしょう。面倒臭いからどうでも御勝手になすつて頂きますわ。結局私はあなたに欺されたという結論になるんですか

ら。しかし欺されて、泣寝入りに終ってしまう女かどうかだか、私という人間を一番よく知っていらつしやるのはあなただから、もう何も申し上げますまい』

小田切さんは私の顔をじいと感じていましたが、急に調子をかえて、優しく機嫌をとるように申しました。

『冗談ですよ。怒りっぽいな、あなたは。じゃ約束しましょう。もう少し待つて下さい。ねえ、いいでしょう？』

『もう少して、いつのことですか？ あなたのもう少しなんて、何年先の事だか、何十年先の事だか、永久来ないもう少しだか分りやしない。その手で何年釣られたと思召すの？ はっきりしたところを仰しやって頂きますわ』

『そんな我意を云うなら、意地にもいえません』

『それごらんなさい。嘘がばれたもんだから返事が出来ないんですわ』

『嘘はいません』

『否え嘘です。その嘘で××は欺ませても私は欺ませませんよ』

『勝手になさい』

『ええ、勝手にしますとも』

そんな口喧嘩を最近はのべつ繰返すようになり、そのためお互の間も段々気拙ずくなってまいりました。

そこへある事件の打ち合せのため、急に本省から電報で呼び寄せられることになりました。小田切さんの帰朝を耳にすると殆ど同時に、またある確実な処からこんな情報を得たのでございます。それはある有名な家からあの人へ結婚の申込みがあつて、話は順調に進んでいる。再赴任せられる時は新夫人を伴つて来られるだろうというのです。

私はもう我慢してはいられませんでした。真偽をたしかめようと小田切さんを散々詰問してみました。どうも要領を得ません。遂々私はあの人の秘書という触れ込みで、男装して日本へ従つて来てしまったのです。そして小田切さんと会うために最初からこのホテルに宿をとつて居りましたが、久子さんの御厚意で、あの方の家のお離室はなれをお貸し下さることになったので、両方に住んで居りました。

小田切さんと私とは忙しそうに家を出てはこのホテルで会つていました。会つては喧嘩ばかりして居りました。このホテルでも私をほんものの秘書官だと信じて居りますし、久子さんのお家の方達も少しも怪しまず、お兄様の秘書として一生懸命に働いているものと思ひ込んでいられたようでしたから、万事に都合がようございしました。久子さんなどは大変親切にして下さつて、よく気をつけ、いたわつて下さつたり、度々優しい情のこもつたお手紙を頂きましたが、いい加減にあしらつて居りました。

その中に、争いに争いを重ねて、遂々最後の日が来たのでございます。私達は中禅寺から日光へ出るのに、言い争いをしつづけながら、わざわざ人の通らない路を撰んで歩きました。

再婚はしないとあれほどきっぱりと申しておきながら、私に厳しく問い詰められて、小田切さんは遂々本根を吐いてしまったんです。長官の娘だから断りきれないんだと申すじゃあございせんか。その時位小田切さんが詰らなく、情けない人間に見えたことはありませんでした。

『私や買ひ被った!』

そう云うと急に口惜しさが胸に込み上げて来ました。欺されたんだ、欺されたんだ、ああ遂々欺されちゃったんだ。

私は小田切さんを突き飛して、無茶苦茶に馳け出しました。あの人は後から追いかけて来て肩を押え、頻りに何かくどくど云い訳しながら謝罪あやまっているのですが、もうすっかり逆上し切っている私には、何を云ったって聞えもしないし、分りっこありません。

あの晩は宵闇で暗うございました。私は山路でピストルをあの人胸に突きつけて云いましたの。

『殺しつちまう、殺しつちまう、私を欺して——。よくも欺まして、私の一生は、あ

あ私の一生は——。滅茶々々になってしまった!』

私はピストルをそこに投げ出して、急に泣き出してしまいました。

『こんな目にあつて、黙つて引込んでしまえると思う? それほどの意気地なしだとみくびつていらつしやるの? 私はあなたなんかに敗けているもんですか。世間に発表します。一身を投げ出して、捨て身になって、社会に訴えてやるんだ。ついでに何もかもしゃべつてしまふわ。私を信用してべらべらと話して下すつた外交上の秘密も、こんどの大事な使命も、すっかり打ちまけてやる。秘密書類の紛失事件、あれが公になつたらば、いくら凶々しいあなただつて、おめおめとこうやつちやあいられやしない。私の復讐がどんなものだか、楽しみにして見てらつしやるがいいわ』

私は狂人のようになつて叫びました。怖い権幕におびえて、小田切さんは一言も云わず、青い筋を額に見せて、唇を噛みしめていました。

私は自分で手を下して殺すか、生きながら葬つてしまふか、二つに一つだと深く決心をいたしました。やろうと一度決心した事は必ずやり遂げる。それが私の性質なのです。あの人はそれをよく知つて居りました。もうこうなつてはいくらなだめでも心を翻すような女でないということも、彼にはよく分つて居りました。

『社会的に殺されるよりは、むしろあなたの手で殺されたい。ああ僕ももう疲れた!』

あの人の乾いた唇から出た言葉はこれだったので。私は悪魔のような笑いを唇

に浮べて云いました。

『あなたに殺されたい？　まだそんなお世辞を云ってる。誰が殺してやるもんか。あなたのような人間を殺すだけの情も、最早私は持ち合せてないんですよ、死にたかつたら御自分で勝手にお死になさい——』

ピストルを拾つて小田切さんに突きつけました。——そのピストルであの人は遂々死んでしまつたんでございます」

宮本夫人は云い終ると骨壺を抱きしめて、懐かしそうに頬ずりしなから、私達の手にそれを返した、そして更に付け加えていうのだった。

「あんなに喧嘩ばかりしていましたが、やはり私は小田切さんを愛しています。あの人も私を憎めなかつたんでしよう。二人は真実に愛し合つている癖に、始終諍あつせいばかりしていました。が、さてあの人はもうこの世にいないと思うと、この先どうして生きて行つていいか分からなくなりまして。口惜しさも腹立たしさも皆消えてしまつて、残つて居るのはただ深く彼を愛しているという心だけなんです、せめてお遺骨のお傍にでもいなくては寂しくて一刻も生きていられなかつたものですから、実は告別式のすんだ晩、遺族の方達が皆疲れてしばらく休んでいられた間に、私はそつとお遺骨をすりかえておいたのでございます。が、どうにも不安でならなかつたものですから、納骨堂にあるお遺骨を異物と思わせようと苦心した結果、あなたにお目

にかかったあの暴風雨の日などは、女優をしている従妹に涙を流す役をつとめさせたりしたのです。私の秘密を知った従妹からの重なる要求に応じかねて、拒絶しましたので大変彼女を怒らせてしまいましたから、多分従妹が久子さんに何事か密告したものだろうと考えますが――。しかし段々日がたつにつれてやつとある理ことわりを感じ得しました。そしてもうお遺骨を抱いていなくても、小田切さんの全霊たましいは私の心の中に生きていると思うようになりましたので、今はもうお遺骨には何の執着も未練もなくなりました。自身でお返しに出なければならぬのに、あなた方をおわずらわせするような事になりました、まことに何ともお申訳がございません。覚悟の上でかような罪を犯しました私を、どうぞあなた方のお手でどんなにでもご処分遊ばして下さいませ。私は決して逃げもかくれもいたしません。御沙汰のあるまでこのホテルに留って居ります。どうぞ久子さんへよろしくお詫びをお願いいたします」

S夫人は遺骨を抱いて私の先に立って室を出た。見送っている宮本夫人の眼には涙が光っていた。

深夜の客

声

女流探偵桜井洋子のところへ、沼津の別荘に病氣静養中の富豪有松武雄から、至急報の電話がかかり、御依頼したい件が出来た、至急にお出でを願いたい、と云ってきた。

有松は如才ない男だ。殊に婦人に対しては慇懃いんきんで物優しく、まことに立派な紳士であるが、どういうものか洋子は彼を好まなかつたので、ちよつと行き渋つたが、職業柄理由なく断わるのもよくないと思い、午後四時四十分発の急行で、東京駅を立つたのだつた。

汽車が小田原に着く頃には、ひあしの短い冬の日は、もうとつぷり暮れていた。洋子はやつとある事件の解決をつけたばかり、ゆっくり休む暇いとまもなく、直ちに車中の人となつたので、座席に落付いてみると、一時に疲れが出てぐったりとなり、おまけにひどい睡魔に襲われて、ともすればうつらうつらとなるのだつた。

ふと、近くで人の話声がした。彼女は夢のようにそれを聞いていた。声はどうやら通路あたりから聞えて来るように思われる。

「うまく行つた。が、危ぶないところだつた。何しろ、——客車全体にはッてやが

るんだから——」

調子は荒っぽいが、声は細くて柔らかい感じがした。返事は聞えない。

「どんなに手配したって、——目的を果すまでは、掴まっちゃならないぞ！」

少時しばらく、間を置いて、また、

「なアに、愚図々々云つたら、——俺がやつつけつちまう」底力の籠った云い方をした。

それぎり途絶えてしまった。

ところが湯ヶ原を通過すると間もなくだった。突然、「さア行こう」と同じ声があった、と思うと非常ベルが鳴り、列車は俄かに速度を緩め、停車しようとした。洋子はぼんやりと眼を開けていた。その時、突如出入口のドアを開け、身を跳らせて飛び降りた二つの影を見た。一人は背の高い、がっちりした体格の烏打帽の男、もう一人は小柄で細ほそりとした色白の細面だった。

やがて、汽車はレールの上を引きずられるような重い音を立てて停った。乗客は総立ちとなり、車内は騒然とした。真暗な外を透し、事故を知ろうとする顔が、窓に重っている。が、別に何事もなかったものと見え、車はまた静かに進行を続け始めた。

「どうしたんだ？ 何があったんだ？」

「轆ひかれたのか？」

通りかかった車掌を捕えて、乗客は詰問するような語調で言った。

「何んでもなかったんです。誰か悪戯した人があるんでしょう。——非常ベルを鳴らしたりするもんだから、すっかり脅かされてしまいました」と苦笑した。

「怪けしからんじゃないか。お客がやったのかね？」

「それを調べておるんですが、——どうも、分らないで困っているんです」

「弄から戯かつておいて、逃げたんじやないか？」

「否いいえ、そんな事はありません。お客さんはお一人もお降りになりませんから。——ちやんとこの通り一々行先を記しよしてあります。いらつしやらなくなれば直ぐ分りますが、お一人も欠けていないんですから——」

洋子の見た二つの影、それは何であつたのだろうか？ 乗客の人数に変わりがないとしたら、——あるいは夢だったのかも知れない、が、自分にはどうしても夢だとは思われなかった。しかし、何事もなかったと云っているところへ、余計な話を持ち出して、騒さわぎを大きくしてはならないと考えたので、彼女は黙っていた。

すると今度は背中合せに腰掛けている若夫人が、役人風の夫にささやいているのが聞えた。

「停車場でもないところへ汽車が停るのは、何だか無気味なもんですわねえ。一体、

誰が非常ベルを押したんでしよう?」

「うっかりと間違えたんじゃないか。——何しろ、あの有名な義賊尾越千造が脱獄したというので、その筋じやすっかり神経を尖らしてるからな。見給え、この列車にも多勢刑事が張り込んでるぞ」

「まあ、いやだ!——じゃこの列車に怪しい人が乗っているんでしようか?」

「と、でも——、睨んでいるんだらうな」

「気味が悪いわねえ。そんな事仰しやると、皆さんのお顔が恐しく見えますわ」

「冗談じゃない。尾越は女のような優男だ。顔ばかりでなく、悪人だがどこか優しいところがあるとみえて一仕事やるとね、早速ニュースに出た哀れな家庭へ現われて、ほどこして行くんだ。だからみんな彼を庇護^{かくま}って、故意^{わざ}と違った人相を云つたりするもんだから、捕えるには随分骨が折れたそうだよ。もう一つ、尾越が普通の強盗^{ちゅうど}と異^{ちが}っていた点は、押入る家が、必ず不正な事をやって金をこしらえた富豪連中と定^{きま}っていたことだ」

「どうして、貴方はそんなに委しく知^わっていらっしやるの? 新聞にはまだ何も出ていませんわねえ」

「あの当時、僕は司法官だったからね、裁判所に始終出入りしていたので知っているんだよ」

「同じ強盗でも、どうして尾越だけはあんなに人気があるのかと不思議に思っていました、やはり異ったところがあるからですわねえ」

汽車は無事に沼津に着いた。

プラットフォームに降りた洋子は、そこに有松の姿を見ないのをいささか意外に思った。行き届いた彼の事であるから、必ず自身車をもつて出迎えに来るだろう、と、予想していたのに――。

あるいは改札口で待っているのかも知れないと思ったが、そにもい⁵ない。そればかりでなく、有松からの出迎人らしい者は一人も来ていないし、自動車も廻^まわらないのはちよつとがっかりした。

洋子は円タクの傍に進み、ドアに手をかけながら、

「有松さんのお邸まで送って頂戴」と云った。

運転手はボタンと扉^{ドア}を閉めると同時にハンドルをきった。

夜風が寒く、空には星がきらめいていた。車が松並木にさしかかった時、反対の方
向へ向いて、一台のフォードが疾駆して来た。擦れ違つた瞬間、ハンドルを握つて
いるがっちりとした鳥打帽の男、それと並んで腰かけている貴公子風の男とが、チ
ラリと眼に入った、はつとして見直そうとした時には、車はもう行き過ぎてしまつ

ていた。彼女はそれが何となく汽車を飛び降りた二つの影であるような気がしてならなかった。

有松の邸はひっそりとしていたが、それでも人待ち顔に扉は左右に開かれていたので、円タクは音を立てて門内に^す江べり込んだ。が、誰一人出迎えなかった。洋子は玄関のベルを押した。取り次ぎは出て来ない。

奥座敷の方に灯は見えるが、家の中は妙にしいんとして、まるで人気がないようだ。もう一度ベルを鳴らしてみた。耳を澄ませていると遠くの方で登音のする音が聞えた。二三分待ったが、やはり誰も姿を見せない。

洋子は少し焦^じれ^じつた^じたくな^じったので、今度は続けさまにベルを押した。

青褪めた顔

すると、ドアが細眼に開いて、そこから物怖^{ものお}じしたような二つの眼が覗いた。

「東京から参りました。御主人にお取り次ぎ下さい」と、苦笑しながら名刺を出した。

相手は無言で、細い白い手を差延べてその名刺を受けた。と思うと、急にさつとドアを開けて、さも待ち焦れてでもいたように、息まではずませて、

「どうぞ、先生、お入り下さいませ。よくいらして下さいました！」打って変ったような人懐い態度で迎えた。

洋子是一目で、それが評判の美人、有松の養女美和子だと分った。十七八位だろうか、凄いほどの美しさだが、何分にも青褪めてまるで病人のようだ。しかも、彼女は小刻みにぶるぶると体を震わし、唇のあたりには微かな瘰癧けいれんさえ見える。これはただごとではない、と直感したので、

「お嬢様、どうかなすつたんですか？」優しく言うと、美和子はもう我慢がしきれなくなつたというように、突然声をあげて泣き出した。

「どうなさいました？ お父様の御病気でもお悪いのですか？」

「いいえ。父が——、あの父が——」

「お父様が？」

「あの——、亡くなりましたの」

「えッ？ いつ？」

長距離電話で声で聞いたのは、まだ四五時間前の事だ。洋子もこの急変に驚いてしまった。

「それが分らないんですの。私——、ちつとも知らずに——、お書齋へお茶をいれて持つて行つたんですの」と云いかけて、美和子は怖しそうに身を震わし、

「父は机の前に俯伏せになつて——、死んで居りました。四辺あたりは一面の血——」
「咯血なすつたの？」

「いいえ。たぶん泥棒に——、心臓に短刀が刺っていました。——私は夢中でその短刀を抜き取りましたの、すると急に血が吹き出して、私の手も、腕も、袖も、血だらけになつてしまい——」

洋子は終りまで聞いていられなかつた。美和子に案内させ、主人の書齋へ馳けつけた。

室内はすっかり荒され、散乱した書類の中に、有松は朱あかに染つて倒れていた。その右手にはピストルがかたく握られてあつたが、彼は引金をひく前に、心臓を刺されたものらしかつた。美和子が抜き取つたという短刀は床の上に投げ出されてあつた。

「警察へお知らせになりましたか？」

「いいえ、まだ——、だつて、誰も居りませんの。私一人きりで——、どうしたらいいかと途方に暮れているとベルが鳴つたので、竦おそんでしまいました。泥棒どろぼうがまた来たのかと思つたもんですから、恐おそくつて——、とてもお玄関へ出られませんでしたの。——でも、ほんとに嬉うれしうございました、先生がいまして下すつて、私は

助かりましたわ」

「お女中さんは？」

「町へ買物に参りました。もう帰るだろうと思えますけれど——」

何も知らないこととは云え、短刀には美和子の指紋が着いたであろうし、偶然ではあろうが、女中は買物に出掛けて不在、家の中には美和子一人しかいなかったとなると、その結果はどういう事になるのだろう。犯人が証拠でも残して去ってくれない限り、嫌疑のかかるのは当然だった。

洋子は第一にそれが心配になった。しかし、美和子はそんな事よりも、父が殺害されたという事で気が顛倒しているらしく、洋子が警察へ知らせに行こうと云うと、慌てて引き止め、

「先生、どこへもいらつしやらないで——、どうぞ、私の傍にいらして下さいませ。後生ですから——」手に縋りついた。

「じゃ、私が留守番していますから、お嬢様行っていらつしやい」

家に居残るよりも、その方がいくらか恐しくなかつたと見えて、美和子は直ぐに外へ馳け出した。

検屍の結果、殺人の行われたのは午後六時から七時の間であるとの事であった。

その時間に家にいた者は美和子一人である。

一女中は係官の前でこんなことを云った。

「最近の旦那様は非常な気難しきで、始終いらいらして、夜もおちおちお眠りにならない御様子でした。ニュースを聞いていらしたかと思うと、突然顔色を変え、東京から急に大工を呼び寄せて戸締りを直させたり、ちよつとした物音にも脅えて、まるで誰かに狙われてでもいらつしやるようでした。今日は朝から大不機嫌で、お嬢様に当り散し、聞くに堪えない悪口を浴びせかけたので、お温順としいお嬢様も我慢が出来にならなかつたと見え、遂いに大口論となりました。旦那様は恐しいお声で、美和子は俺を殺す気だな、とか、いつかは俺はお前に殺されるだろうとか仰しやっているのが聞えました」

係官の眼は等しく美和子にそそがれた。しかし、彼女はその六時と七時の間には二階の自分の部屋で手紙を書いていたと云った。

なるほど書きかけのレター紙が机の上に置いてあつた。それにはこんなことが書いてあつた。

「私はお世話になるべからざる人のお世話になつてゐることの苦痛に、もはや堪えられなくなつてしまいました。

私の亡き父と無二の親友の養父が、突然両親に死別し孤児になつた私を引取つ

て、今日まで育てて下さった御恩、それを思うと、反抗してはすまないと思ひますが——、一言目には有松家の財産を私が狙っているように云われるのも辛く、私の顔が母に似ず、段々亡父に似てくるので養父はひどく厭がつて、時には眼を覆うて私の顔を見ないようにしたりするのも辛うございます。親友なら懐しそうなものなのに、何故厭がるのだらうと思うのですが、また考えてみれば、それは当然の事でもあります。だつて、亡父は母を殺害し、入牢中に発狂して自殺した人なんですもの。どういう動機で父が母を殺すようになったのかよく分りませんが、非常な感情家で、激し易かつたそうですから、単純な動機からついそんな大罪を犯してしまつたのではないかと思ひます。

余りにも母を愛する結果、ひどく独占的になり母が、ちよつと男の人と話していても怒つたのを覚えています。熱し易く、怒りつぽいが、直ぐまた上機嫌になるよくな性質でした。それがまた私にそっくりだそうです。私も怒つたが最後、随分乱暴をしますよ。今日なんて、私は半日氣狂いになりました。何故つて、養父は自分の置き忘れを柵に上げて、ネクタイピンが紛失したと云つて私に疑いをかけ、ひどくせめられました。盗んで逃げる積りだらうつて、そして最後には、氏より育ちというがやはり両親が両親だからなアつて云いました。

私はその一言でカツとなり、そこにあつた一輪ざしを床の上に叩きつけました。

無論心の中では養父に投げつけたのですが――。養父は眼をむいて、私を打ちました。投げつけた一輪さしで私は散々打たれて、痣あざだらけになりました。

私はもう今日限りこの家を出ます、そしてタイピストになって働く決心をいたしました。働いて自活します。針の蓆いばらに座っているより、荊棘いばらの道を勇敢に掻き分けて進みます。養父に云わせると私の父は気狂いだったそうですから、私も今に気狂いになつて何を仕出かすか分りません。養父の恐怖病も私がいなくなつたら全快するでしょう、心密かに私を怖れているものようですから。私もまた養父が怖い――」

手紙は参考として押収され、美和子はその場から連行された。

義賊の訪問

有松は死を予知していたか、あるいは何事か危険の身に迫るのを感じて、洋子へ電話をかけたものではなかったろうか、もう一汽車早く乗れば、その危険から逃がれ得たかも分らないのに、と彼女は残念に思った。

終列車に乗り込んだ洋子は疲れきっていたが、妙に眼が冴えて、居眠りする気に

もなれなかつた。

帰宅すると客が応接室に待つていた、彼女は用談をすませ、玄関へ送り出したのは、もうかれこれ一時近かつた。

あと片づけに來た女中には早く休むように云つて、自分はたつたひとり応接室に居残つた。邪魔される事なしに、静かに独りで考えたかつたからだ。

美和子の運命、それは余りにも惨むたらしいものであつた、彼女は胸が痛くなるような気持ちがあつた。——実父は母を殺して牢死し、いままた養父は非業の最後をとげてゐる、稀れにみる美貌の孤兒の背景はあたかも血をもつて描かれたものであつた。夜は次第に更けてゆく。

洋子は身動きもしないで物思いに沈んでいた。瓦斯ガスストーヴの火が青く見える。すると、庭を誰やら忍び歩いてゐるような音がした。この夜更けに！——と思ひ、窓を開けて外を眺めたが何も見えない、植込の闇は深く、ひっそりとしている。

彼女は窓を閉め、ストーヴの側に椅子をすすめたが、また微かな音を聞いた、と、思うと、今度は齒の浮くような響がした。

振り向いてみると、窓に人影が映つてゐる、ハツとしてゐる間に硝子ガラスを切り、窓のかけ金を外して、覆面の男がひらりと部屋の中へ入つて來た。

洋子は起たち上り、ベルを押そうとすると男はその手を押えて、

「人をよばないで下さい。どうぞ騒がないで——私はお宅へ泥棒に来たものではありません。先生にお目にかかりたくって参ったのですから——」

「それなら、何故、玄関から案内を乞うておいでにならないのですか？」

「表玄関から——、上られる身ではございませんので——」

応接室の硝子窓を破って闖入するほどの兇漢にも似ず、その声は柔らかくいかにも優しい、しかもどうやら聞き覚えがあるようにさえ思われるのだった。

男はやがてテーブルの上に短刀を置いた。洋子はそれをちらりと横眼で見た。彼はポケットを探り、ダイヤ入の指輪と釘二三本とを同じくテーブルの上に載せて、無言でポケットをたたいて見せた。もはや身に寸鉄も帯びていないという事を示す積りらしかった。

深夜、危険を冒して入って来た位だから、並々ならぬ用事があるに違いないと思つたので、洋子は椅子の一つを指差して、

「どうぞ、お掛け下さい」と云つてから、改めて、

「一体、あなたはどなたなんですか？」と詰問するように云つた。

男は覆面を脱^とつた。彼女はびっくりした、その顔には見覚えがある。沼津の松並木で擦れ違つた時、運転手と並んで腰かけていた貴公子風の男だった。恐らく汽車を飛び降りた影の一つも同人に違いない。聞き覚えのある声だと思つたのも道理だ。

すでに彼女は通路で話していた彼の声を聞いていたのだから。

彼女の驚いている顔を見ながら、落付き払って、

「私は脱獄囚尾越千造でございます」と名乗った。洋子は二度びつくりした。

「お驚きになりましたか？」

ちよつと返事が出来なかつた。

覆面を脱いだ男は色白の女のような美しい顔をしていた。これがもし玄関から一人の訪客としてやって来たのだつたら、義賊尾越千造だと名乗られても、恐らく信じられなかつたであろう。それほど態度にも容貌にも兇悪のかけはみじんも見えなかつた、反つて人の好きそうな貴公子にさえ見えるのだつた。

「先生、どうか、少時私の申上げること、お耳をお貸し下さい」

洋子は無論その願いを拒むわけにはゆかなかつた。こんな優しい顔はしているが、彼女がもし先方の乞いを退けたら、どんな態度に出るか分らなかつた。

「承りましたよう。が——、夜も更けていますから、どうぞお早くお話し下さい」

尾越は嬉しそうに、小腰を屈め、

「そう仰しやつて下さるだろうと思つて居りました。やはり、私の眼は過まらなかつた！」と呟いた。やや沈黙の後、

「今度私が脱獄した理由、それは決して自分自身のためにやつたのではないのです。

あの男のため、いや、ある男の頼みを果してやるためだったのです。先生、私はあなたの前に偽りのない事実をお話しいたします、それをお聞きの上、是非先生もお力をお貸し下さいますように、お願いいたします」

嫉妬

尾越千造は襟を正して語るのだった。

「私はこれまで自分でやろうと思つた事で失敗したことはありません。脱獄も今度で二度目ですが、二度とも成功でした。最初の時はある売国奴を殺^{やっ}つけるため、今度は罪なき囚人の死の願いを果たすためです。私は忍術使いではありませんが、人の注意を他に外らせておいて、仕事をするのが得意ですから、脱獄もそう難しい事ではありません、が、さて、脱獄しても、今度のような場合は、自分の力ばかりでは駄目、囚人の願いを聞いて頂く方を探し求めなければならぬ、それが一方ならぬ困難でした。先生には御迷惑でしょうが、まあ白羽の矢が当たったものと思召^{おぼしめ}して、一肌ぬいで頂きたいのです」

「お話に依っては——、私の力で出来ますことでしたら、何なりと致しましょう」と、快く引受けた。

「私はある死刑囚から世にも気の毒な物語を聞いたのです。独房にいるはずのその囚人から、同じく囚人である私が、どうして話を聞いたかという事は、どうぞ、お訊ね下さいますな。ただその物語りを先生に聞いて頂きさえすればよいのですから、——それで私の義務は終るのです。余計な事は一切省くことにいたしましょう」

「なに、要点だけを承わればよろしいんですよ」

「その死刑囚も、もう疾とうの昔、発狂し、自殺を遂げてしまいました」と云つて、尾越は少時瞑目した。やがて言葉をつぎ、

「その男を仮りに讓治とよびましょう。——その讓治は米国で生まれましたが、両親には早く死別し、兄弟姉妹もなく、全くの独りぼっちでしたので、情のある宣教師に拾われて非常に愛され、やがて一緒に東京へ参り、讓治は学校へ入ったが、言葉もよく通じないし、西洋人の習慣が身についているので、友達になってくれる人もなかった。彼はいつでも淋しく校庭の隅っこに小さくなっていたのです。それを気の毒に思つたのか、上級生の中で一人、大変親切に世話をしてくれる人がありました。間もなく二人は兄弟のように仲好くなりました」と云いながら、彼はマツチをすつて、バットに火をつけ、

「友人というものを始めて持った讓治は実に有頂天でした。何でもかでも親友に打ち開けて相談する、という風でした。何年か経つうちに宣教師は亡くなり、その遺言によつて、莫大な遺産が彼の懷中に転がり込みました」

「西洋人にはよくそういうことがありますのねえ」

「宣教師が亡くなつてみると、大きな家に一人でいるのも淋しいからと云つて、親友は知り合いのある未亡人の家を紹介してくれました。讓治は家族同様の待遇という約束でその家に移ることになったのです。そこから通学を始め、親友は始終訪ねて来て何かと世話をやいてくれました。未亡人には冬子という大変美しい娘があつて、讓治はその娘に熱烈な恋をささやくようになりました。親友はそれを聞いて苦い顔をし、度々忠告したものです。冬子は不良だから断念あきらめろ、将来ある君の妻にあんな女は相応しくないよ、第一貧乏人の娘じゃないか、などと云つて、ひどくけなしていました。しかし、彼はどうしても思い切れないので、親友のとめるのもきかないで求婚しました。未亡人は非常に喜んだが、肝心の相手はつきりとした返事をしなかつたのです。が、遂に二人は結婚しました。冬子はともかくも、讓治は幸福でした。翌年には可愛女兒おんなのこも生れた、親友はまるで家族の一人であるように入り浸っていたものです。が、どういふものか、冬子は彼を好まなかつたようで、それだけがいつも讓治の心を暗くさせていました。夫の親友なら、妻も親しんでくれ

ればよいが、と、思っていたのです」

「よほど純情な男なのですね」

「夢のように七八年過ぎました。冬子は従兄いとこに仙ちゃんという若い船員があつて、航海から帰る度に土産物などを持って訪ねて来る。二人は幼少の頃同じ家で育つたとかで、まるで兄と妹のような睦むつまじさです。従兄同志というものの親しさを、讓治は美しい眼で見えて喜んでいましたが、親友は早くも二人の間に疑いを抱き、しばしば警告を与えるのです。妻の心を少しも疑つていない彼も、まのあたり見るような話を余り度々聞かされるので、あるいは？ という気がしはじめたのです」

「無二の親友の言葉だけに、一層信じるでしょう」

「さあ、それからというものは、以前のような穏かな眼で二人を見ることは出来なくなりました。でもまだまだ半信半疑だったので、親友が齒がゆがって、一度証拠を見せてやろう、それほど僕の言葉が信じられないなら——、と云いました。見せてくれ、と彼も頼みました。見せてやってもいいが、君興奮すると危ぶないナ、と妙な笑い方をした。讓治は憤然として、もし事実でなかったら許さんよ、と云いました。親友は再び笑いました」と云いかけた時、応接室の置時計がふいに二時を打った。尾越はちよつと振り返つて時計を見たが、また語をつぎ、

「するとクラス会の夜、出席している讓治のところへ慌しく親友が迎えに来ました。

一緒に家へ帰ってみるとなるほど、奥の離室はなれの方から賑かな楽しそうな笑声が聞こえています。従兄の仙ちゃんが来ています。親友の思いつきで、次の間の戸棚の中にかくれて様子を見ていることになりました」

「女の子はその時どこにいたのです？」

「仙ちゃんの膝に腰かけて、チョコレートを食べていました。三味線を聞かせてよ、と仙ちゃんが云います。冬子は戸棚から三味線を出して調子を合せ、今日は何をやりましたよ。と云う。思いなしか仙ちゃんは熱っぽい声で袈裟御前が首を落されるあれ、何とか云ったなと云うと、鳥羽の恋塚よ、と冬子は朗らかに笑いました。妻は幼少の頃から長唄を習い、相当自信があるようでしたが、譲治はオルガンは好きだが、三味線は嫌いだったので決して弾くな、と言いついて渡りあつたのです。その代りにグラランドピアノの立派なものを買ってやったのです」

「それじゃ譲治さんがほんとに冬子さんを愛していたものとは思われませんか。少し思いやりがなさ過ぎる、自分の思うままにしようとするような男を、女は愛すでしょうか」と洋子はちよつと首を傾げた。尾越も同意するように微笑した。

「とにかく、譲治は自分の禁じていた三味線を弾いているという事からして腹が立つた。しばらくすると、冬子は澄んでいい声で唄い出しました。

『さるほどに遠藤武者盛遠もりとおは、春も弥生の始めつかた霞がくれの花よりも、床

しき君の面影を、見初めし緑のはし供養、あけくれ絶えぬおもい川、恋わたる身はうつつなや——』

そこまで進むと、突然、仙ちゃんが感傷的な声で、僕ね、明日また航海に出るんだ、冬ちゃんの鳥羽の恋塚を吹き込んでもらおうと思ってレコードを持ってきたよ。君の声が聞きたかったらこのレコードをききます。と云いました。冬子の声は低くてよく聞えなかったが、讓治は何となく息苦しくなり、生汗がじとじと滲んできました。が、親友がしつかりと手を押えているので、戸棚から出ることも出来ませんでした。隙見しているのはつきりとは見えませんが、どうやら仙ちゃんと冬子の手が時々触れ合ったりするような気がして、彼はもうじつとしてはいられなくなつたんです」と云つて、尾越は自分の事でもあるように、大きな溜息を吐いて、

「やがて、隣の部屋にレコード吹込みの仕度が出来、女の子はその方へ行きました。三味線を弾いている冬子の半身が見えているぎりで、仙ちゃんの姿は見えない。親友は讓治の体をちよいちよい突いて、ソラ、見ろ、どうだ？　なんてささやきます、が、讓治には何も見えません。親友は彼以上に夢中になつていようでした」ちよつと言葉を断り、軽い咳をしていたが、また話しました。

「ところが、仙ちゃんが起ち上つたらしい気配がしたと思うと、同時に妻の肩へ彼の手がかかったのを見たのです。讓治はくらくらと眩暈めまいを感じました。彼の熱い血は

ぐんぐん頭へ昇り、すっかり思慮を失つて、親友の止めるのを振り切つて、ふらふらと戸棚から出たものです。余り唐突に姿を現わしたので、冬子は愕おどろき、あれッ！と叫んで仙ちゃんに継りついた。もう駄目です。讓治は前後を忘れて飛びかかった。すると、どういうわけか、パツと電燈が消え、室内は真暗になりました。その途端に刃物が彼の手に渡された——、と感じました。あるいは偶然そこに置いてあつた刃物を掴んだのかも知れませんが——、とにかく、刃物を握ると同時に逆上した」話している尾越の眼も、何となく殺気を帯びて来た。

「讓治は短刀を振り廻わして、無茶苦茶に暴れ廻つたが、さっぱり手答こたえがない、血迷っているの、柱に打ぶつかったり、襖を突破つたりしているうちに突然、妻が悲鳴を上げたので、一層物狂おしくなりました。アツ。あなた、助けて——、あれッ、と叫ぶ冬子の声に混つて、やったな！と恐い声、それと共にどたりと倒れる重そうな響きを聞きました。讓治は氣狂いのようになって、やたらに短刀を振り廻した。助けて——あなた、武さんを押えてよ——。と声を限りに救いを求める妻の声も、混乱している讓治には何も分らなかつたのです。やがて彼はへとへとに疲れて、その場に倒れてしまいました。誰が急報したもののか、ドカドカと警官が入つて来て、難なく讓治は捕えられたのです。仙ちゃんも冬子も、もうその時には息が絶えていました」

「女の子は助かったのですね？」

「女の子は夢中で——、大切なものと思つてそのレコードを抱え、奥へ逃げてしまつたのです」

レコード

「讓治は段々気が落ちついて来ると、余りにも恐しい罪に戦おのきました。咄嗟の間に人間を二人も殺し、しかも、一人は命にも代え難い愛妻なのです。親友はあのごたごたの始まる前に逃げ帰つたと見えて、警官が来た頃には姿は見えませんでした。血の海の中に彼は一人ぼかんと、失神したように短刀を握つていたのです」

「短刀を渡したのはその親友ではなかったのですか？」

「あるいは？——と考えるではなかったのですが、短刀は自分のものだし、何の証拠もないことだし、——どうすることも出来ませんでした。それに、その後の親友は実に至れりつくせりの親切ぶりを示してくれましたので——。弁護士を頼むことから、減刑運動から、女の子を手許に引取つて立派な令嬢に仕上げやるとい

約束までしてくれました。兄弟だって、これほどまでにつくしてはくれまいと思うほどだったのです。讓治は涙を流して感謝し、一時にもせよ、彼を疑ったことを後悔し、全財産の監理から、女の子の将来まで一任したそうです」

「よほど、善良な方なんですわねえ」

「ですが、段々日を経るに従って、彼の頭にいろいろな疑いが起りました。やたらむしように突いたが、肉体を突刺したような手応えは一度もなかった。それなのに、冬子は背中から肺臓を突貫かれ、仙ちゃんも心臓を突かれている。どうもそれが分らないのです。記憶が次第に整って来るにつれ、妻が死際に、あなた武さんを押えてよ、と、云った言葉も、また刺そうとしているのが夫だったとしたら、その夫へ救いを求めていたのも変です。暗闇に紛れて、何者かがやったのではないか、と考え始めるようになりました。その何者とは一体誰でしょう？ その場に居合せたとしたら、それは親友一人しかありません、しかし、その人は何一つ証拠を残していないばかりか、警官が飛んで来た時には、もう現場にいなかったのですから——」

「誰が警察へ知らせに行ったのです？」

「公衆電話だったそうです。無論誰だか分かりませんでした。——で、讓治も一時はもしかしたら？ と疑ってみたのですが、仮りに親友が殺したにしても、その後の仕打ちが余りにも親切なので、恨む気にもなれなかった。どんな事であろうと、罪

は一人で背負おうと決心したそうです。が、また冷静に考えると馬鹿々々しくなつて、自分に覚えがないのだから、これは飽くまで争わなければならない、という気も起るのです。そこで、なおよく記憶を辿つてみると嘗て妻の母が、冬子を讓治が知る以前に、親友が彼女へ求婚したことがあつたと話したこと、親友が余りにも仙ちゃんに敵意を持つていたこと、妻がひどく彼を嫌つて避けていたこと、等を思い合せてみた時、彼は思わずハツとして唇を噛みました」

「讓治さんは始めて、親友の奸計にまんまとのつたことを、お知りになったのですね？」

「そうです。愛する妻は殺され、自分は罪なくして死刑に処せられる、しかもその敵のような男に、恩人から譲られた財産まで自由にする権利を与えてしまったのか、と思うと彼の憤りは極点に達しました。それから間もなく発狂して、自殺したのです」

「親友はどうしました？」

「讓治の金で相場をやり、今は大金持ちになっています」

「女の子は？」

「その事なのです。女の子が成人した暁、必ず讓治を恨むに違いない。恨まれるのは仕方がないけれど、彼女が世間へ対して、どんなにか肩身狭く暮らす事だろう、

と思うと堪まらない。どうぞ真犯人を見出して、娘のために父が無罪であったことの証明を立てて頂きたい、という譲治の切なる願いを果してやりたくて、実はお願いに上ったのでございます」洋子は当惑した。

「しかし、証拠は何一つないのでしょう?」

「証拠はレコードに残っています」

「そのレコードは——、もうないのでしょう?」

「それが不思議な事で私の手に入ったのです。それで急に彼の約束を果す日が来たと思ひ、脱獄したわけなんです。——私の仲間がある屋敷に強盗に入り、偶然盗んだ着物の間から一枚のレコードが出た、家へ帰ってかけてみたら逆も物凄かったので、毀すのも薄気味が悪いから、納める積りでお寺の縁の下へかくしておいた、という話を聞いたのです」

「強盗に入った屋敷というのはどこですか?」

「沼津の有松武雄の家なんです」

「それでは——」尾越はにっこりして、

「有松を殺害したのは私です。実はこの前脱獄した時、彼を訪問して譲治の話をしてやりました。有松は兩人を殺害したのは自分だと白状しましたから、潔く自首しろと薦めました。彼も必ず自首すると誓ったにかかわらず今日まで実行しませんで

した。多分、私が間もなく捕えられて刑務所へ入ったと聞いて、安心してしまったのでしよう。ところが今度の脱獄をニュースで知ってから、すっかり脅えてしまい、私を捕えるようにお願ひする積りで、先生へ長距離電話なんかかけたのでしよう」

「汽車を飛び降りた二つの影は？」

「一つは私で、一つは仲間の奴、そのレコードを盗んだ男です」

「何故、通路であんな話をなすったんです？ 人に聞かれたら危険だとは思いませんか？」

「先生にだけ聞かせる積りだったんです。非常ベルで驚いているところだから、先生が怪しい話を聞いたと仰有つて下されば騒ぎは一層大きくなりましょう？」

「どういうわけでそんな事をしたんです？」

「停車を長びかせたかったのです。仕事最中に先生に訪問されては、都合が悪いと思つたから。しかし、私も有松を殺す気はなかつたのですが、先方でいきなりピストルを向けたもんですから、つい——」

「では、今度はあなたに自首して頂かなければなりませんね。それでないと、可哀想に美和子さんに嫌疑がかかっていますから——」

「無論、自首いたします。この事さえお引受け下されば、私の用事は終るのですから、しゃばにぐずぐずしていることはありません」

尾越は懐中からレコードを出してテーブルの上に置いた。洋子はレコードをかけた。二人は緊張した。

「かかるべしとはしらつゆの、草踏みしだき庭伝い、忍びよつたる盛遠は、月こそ冴ゆれ恋の闇、キャッー あれ——、あなた助けて——、アレー武さんが仙ちゃんを——、あなた！ あなた早く来て、武さんを押えてよ。——ウム、この野郎、やったな！ 血迷うな、僕に何の恨みが——、僕を殺してどうするんだ?! あれッ、あなた！ ひ、ひと殺し、ヒエッ、あなた助け——」

言葉に交る烈しい雑音、それはその場の光景を物語るように聞えた。文句はそこで途切れ、あとはまるで闇の中に沈んでゆくような無気味な沈黙の中に、針の廻る音のみが物淋しく聞えていた。

洋子はぞつとして、

「これだけ立派な証拠があつたのに——」と、歓声をもらした。

「先生、では、どうぞ、お願いいたします。私は死刑囚の依頼をやつと今日果し得たかと思うと、胸がすくようです。——脱獄をやつたからにはまた罪が重くなりましょう。が、私の心の荷は軽くなりました。どうぞ、美和子さんの将来もお願いいたします」

「承知いたしました」

暁の霜を踏んで、深夜の客はどこともなく姿を晦くらした。

心霊の抱く金塊

(上)

ツイ二三日前のこと、私達は赤い丸卓子を囲んで昂奮に汗ばんだ顔を並べ、心靈学者深井博士の話を、熱心に聞いていた。もう秋だというのに恐ろしく蒸し暑い晩だ。「金塊はたしかにあった。この眼で見えてきたのだから間違いはない、価格はまず五億万円ほどだ」

と云つて、口を真一文字にきゅツと結び、皆を見廻した。隣席にいた人は、その時、思わず低い呻きのような歎声をもらした。

× × ×

五億万円ばかりの金塊が、ある洞窟の奥に隠されている、と、一人の優れた霊媒が云い出したのは、よほど前のことである。ナヒモフ号やリユウリック号を聯想して、私達はそれを一笑に付して顧みもしなかつたのであるが、博士は何か信ずるところがあつたと見えて、その後、研究に研究を重ねた結果、登山客の杜絶とだえたこの秋の初めに自ら探検に出かけて、遂に実証を見届けて来たという、その驚くべき報

告を、今宵集まった人達に話そうとするのである。

「場所はどこですか」「その金塊には全く所有者がないのですか」「発見者は全部貰えるのですか、それとも何割という規定でもあるのでしょうか」などと、慾深い連中からの質問が続出する。

雨が降り出した、大つぶの雨が軒をうつ。博士は顎鬚あごひげをしごきながら、徐ろおもむに語をついでいう。

「場所は日本アルプスの×××の麓の城趾である。無論所有者はない。皆さんも知っているであろうが、——甲州の金山から武田信玄が掘り出した莫大な金の行方が、今に分らない、何れどこかに隠してあるのだろうが、——世間で甲州の金山だなんて掘っているのは、ありや武田信玄の掘りツかす、つまり屑なんだ。屑だつて大したものなんだが——、当時、大望を懐いていた彼が密に準備をしておいた軍用金、——即ちその金塊は、人に知れないようにあるところに納つておき、時機を待つているうちに、死んでしまったのだ。

三百何十年この方、その金塊の所在地を人知れず研究した者は沢山ある。中途で匙を投げた人もあるけれど、今日までに探り当てた慾の深い行者などが凡そ二百何十人もあった、が、多くはその洞窟に入ったきり出て来ない。稀に出て来た者もあるが、悉く癡狂しては死んでしまっている。その付近は魔の岩とよばれ、土地の人々

からは怖れられているのだ。

私は霊媒を伴って行くのだから白昼は面白くない。殊に精神を統一させるのは人の寝静まった真夜中に限る。私達はゲートルに黒い雨合羽を着て、山路を辿り始めた、それは午前一時頃である。案内役の霊媒はまるで霊に導かれてでもいるように、空を見詰めたまま、デコボコした岩の上を平地のように馳けて行く、私はその後を追うて走った。さながら二つの揚羽蝶が闇の中を飛んで行くように――、溪流に沿うて歩いたり、岩の間を潜ったり、下へ下へと降りる。夜道に馴れない私はただ霊媒の後姿を唯一の頼りにしているだけである。やがて、自然に出来た鍾乳洞に這入った」

(下)

「闇はいよいよ深くなり、岩の間から滴る清水が顔に落ちてはひやりとさす。懐中電燈で足許を照しながら、奥へ、奥へと進む。ふと、頭上で水の流れる音を聞いた、河底である。突如、霊媒はピタリと足を止めた。電燈をさしつけてあたりを見廻した途端、ピカツと眼を射る光、岩を砕いて、穿った穴に、黄金は燦然と輝いている

ではないか。金塊といつても、まるいかたまりではない、竹の一節を縦に真二つに割って、金を流し込んだものと見える。竹はもうすっかり朽ち果てているが、金はその形を残して、一尺ばかりの蒲鉾のようだ。しかし、五億万円の金塊が一ヶ所に納まってあるのではない、十二ヶ所に分けて隠してあるが、それを武田一門の霊が大切に保管していて、妄りに手をつけさせないのだ。

何も知らない探検家達は、この素晴らしい宝物を自分が発見したのだと思うから、いきなり手をかけようとする、と、忽ち見えざる人霊の怒りに触れ、気狂いにされたり、命をとられたりする。私は洞窟の闇に霊と対坐して、彼等の希望を訊いてみたのだが、と云つても、直接話をする事が出来ないから、霊媒をトランス状態に入らせて、彼の口を通して言を伝えてもらったのだ。

あるときが来たら、金塊を是非私に使つてもらいたい、と彼等は云う。あるとき、それはこゝ十年の間には来るそうだが——とにかく、それまでは絶対に手を触れる事を許されない、嚴重に彼等が監視しているのだから、人間の力ではどうにも仕様がなないのだ。しかし五億万円の金塊がある事だけは確かだ、もし嘘だと思ふ者があるなら、いつでも証拠を見せる、金塊ばかりではない、立派な甲冑なども沢山あるそうだ、それ等は段々と調べて行く積りである。皆さんの中で行って見たい人があるなら、私が案内して上げよう、但し慾を出すことは厳禁だよ、が、それも今年も

う駄目だ、秋も中頃となつては寒くて行かれないから、来年お伴をしよう」

二百何十人もの命を奪つた五億万円のお金塊！ 何という恐ろしい魅力であろう。話が終つても、皆は云い合せたように黙つてゐる。私の頭の中は一瞬間、お金塊、洞窟、人霊、発狂などが、くるくると廻つてゐた。そのお金塊が博士の手に取り出されるあるとき、というのは一体いつのことであろう？ 永久に来ないとき、なのではあるまいか、しかし、博士の顔に希望が輝き、何事をか期してられるもののようにあつた。

× × ×

私は日本アルプスの洞窟にさまよう心地で外へ出た。忽ち、電車、円タク、街の騒音に現実の世界へ放り出された。すると、聞いたばかりの話さえも、あとかたのない一つの遠い物語の如くにも思われるのだが、五億万円という言葉だけはどうも忘れられない。

またサツと降り出した雨に、アスファルトがお金塊でもあるように光つてゐた。

素晴らしい記念品

フランスの片田舎に一人の科学者があつた、年はもう五十に近いが独身で、兄弟もなく、友達もなく、淋しい孤独生活であつた。彼の唯一の趣味は絵を描くことである。最初は静物を、後には人物、ことに若い女ばかりを描くようになったが、不思議なことに彼に雇われて行つたモデル女はそれぎり姿を消してしまい、紹介者のところに戻つて来ないのだ。初めは気にも留めなかつたモデル紹介者も、それが五人六人となると少し不審になつて、内々様子を探つてみたが別に変つたこともない。しかしどうも気になるので知り合ひの刑事に密告した。それから間もなく家宅捜査が行われストーヴの中から燃え残りの薪を引き出すと、それに一つまみほどの長い女の髪の毛が、からみついていた、それ以外は何の発見も得られなかつたが、嚴重に訊問した結果、自白したところによるとモデル女を自分のものにした揚句、肉体を溶して薬品につくつたり、絵具につくつたりしていたが髪の毛だけはどうしても溶けなかつたので焼き捨てていた。彼は平然として、

「私の描いた絵を見て下さい、実に不思議な色彩を見出すでしょう？　絵は彼女自身の肖像であり、彼女の肉体を溶したもので描いてやったのです、何という素晴らしい記念品ではありませんか」と云つたという。

支那の何とかいう薬は人間の脳味噌から造つたものだと言ふし、近頃評判の金の薬きんというのも支那から来るもので、これは人間の心臓から取つたのださうだ。このフ

ランスの科学者はどういふ薬品をつくつたか分らないが、いずれにしても形を失つてしまうのだから、捜査上にはバラバラ事件や小間切れよりも、一層始末が悪いだろう。

私がこの話を友達から聞いた晩だった。停留所に立つて最後の赤電を待つてゐると、小柄な、痩せた婦人が前屈みに、ちよこちよこ歩いて来た、何気なく両方で顔を見合せ、私がオヤと思うと同時に先方でもハツと思つたらしく立止つて、「まあ」と大きな声で云つた。それは十年ばかり会わなかつた池谷進吾氏の奥様であつた。お互に挨拶をすますと「その後、——まだ、——池谷さんの御消息は知れませんか？」と私は訊いてみた。奥様は顔を曇らせ、「もう——あなた、——十年にもなりませんもの、⁶歸つて来るものなら、歸つて居りましょう。私はもうどこかで、死んでゐるものと断念^{あきら}めて居ります」と云つて涙を眼に浮べ「主人が行方不明になると間もなく可愛がつていた犬が死にました。姑も三四年前に亡くなりまして、私は遂々たつた一人ぼっちになつてしまいました」

池谷進吾さんは私共の藩主の従弟である。人の好い彼は皆に欺かされて、財産をすててしまい、私の知つていた頃にはお母さんがお琴の師匠、池谷さんが漢学の先生、奥様が賃仕事をしていた。奥様は恋女房だという噂であつた、貧しいが他目に

6 「なりもますもの」はママ

はいかにも楽しそうな、平和な家庭のように見えていた。恰度十年ほど前のある大雨の晩、池谷さんは永川下の叔父さんの家に金を借りに行く、と云って出たがり帰らない。先方へ問い合せると来ないと云う。それぎり消息が絶れてしまったのだ。

捜査願いを出したが皆自分らない。永川下の叔父さんは度々警察に喚び出されて訊問されているうちに、これも行衛不明になった、ところがこの人は五日目に大川から死体となつて発見された。取調べの末、奥様が昔吉原の遊女であつたことも分り、生活が苦しいので主人が承知の上、永川下の叔父さんの妾になつていたということも知れた、が、肝腎の容疑者が死んでしまったので、そのままになつたが、多分叔父さんが殺したのだろうという想像は誰もがもつていた。

果して殺されたのかどうかは分らないが、死体は遂にどこからも上らなかつた。まるで煙のように消えてしまったのだ。

奥様に別れてから、私はまた薬品になつた話を思い出した。池谷さんの体も溶かされてしまったのではあるまいか、などと思ひながら、電車にのつた。

魂の喘ぎ

××新聞社の編集局長A氏は旧侯爵藤原公正から招待状を貰った。彼は次長を顧みて、

「君、これを読んで見給え、特種階級も大分生活が苦しいと見えて、藤原侯が家宝売り立てをやるそうだ」と白い角封筒を渡した。

次長は中味を引き出すと低い声で、

「拝啓、菊花の候益々御多祥奉賀候、就ては来る十月十五日拙宅において、いささか祖先珍重いたせし物、当家としては家宝とも称すべき品々、展観に供え、その節御希望の品も候わば御入札賜わり度、失礼ながら御指名申上げし方々のみに限り御来駕御待ち申上げ候、なお多年皆様方の間に疑問とされし藤原家の秘密も公開仕るべく候

昭和二十二年十月一日

旧侯爵藤原公正

××新聞社編集局長殿

と読み上げてから、ちよいと小首を傾げ、

「藤原家の秘密も公開仕るべく候」と繰り返し、

「親類知己位の狭い範囲ならともかくも、新聞社の人まで招いて発表しようとするその秘密というのは何んだらう？ 彼も相当な売名家だけあって、人を惹きつけることはうまいなあ。秘密公開というこの文句が魅力だよ。こいつあちよつと行つてみたくなる」と笑いながら傍の部長に招待状を見せた。

A氏はピースに火を点しながら、

「君達は知らないのかな、あの公高失踪事件——、大分古い話だが、先代の藤原侯には公高という一人息子があつた、それがつまり藤原家の何代目かの後継ぎだが、十一の時行方不明になつたまままで今日に至っている。その当時評判だつたのでね、その頃僕はまだ駆け出しの記者だったが侯爵家の内偵を命ぜられ調査してみたが表面に現われている事以外には何もわからなかつた。後継ぎがいなくなつたというので、親族会議の結果、南条男爵の三男坊の公正が養子に迎えられ、間もなく増比良伯爵の姫君と結婚した。つまり夫婦養子さ。翌年は先代が亡くなり、三年目に先代夫人が心臓麻痺で死んでいる。不幸つづきの侯爵家もその後は至極無事で、空襲にも免れたという話だ」

折柄昼やすみで数人集つていたが、中で古参の記者の一人が物知り顔に乗り出して、

「その公高つて少年は非常な利口者で、稀れにみる美貌の持主だったそうです、尤もあのお母さんの子だから綺麗なのも当然だが、——僕は公高は見えないから知らないが、母夫人の方は二度見ましたよ。一度は乗馬倶楽部で、飾り気のないさっぱりとした乗馬服を着て栗毛の馬に乗っている颯爽とした姿、もう一度は肌の透いて見えるような薄い夜会服の上に毛皮の外套を引っかけて自動車に乗ろうとしているところ、実にぞっとするような美人だった。僕は体がかたくなって、しばらく見惚れたまま動けなかったのを覚えている。世の中にはこんな美しい女もあるものかとすっかり感心しちやつて、美人の噂が出ると僕は定つて藤原夫人の名を云つたものだった」

「夫人はどこから嫁に来たんだね？」

「それがさ。所謂氏なくして玉の輿に乗った人で、日本橋辺の古い薬種屋の娘で女医学校を卒業し就職を求めにある医学博士を訪問している時、偶然そこへ乗合わせていた先代侯爵が見染めて、親類中の大反対を押し切つて妻に迎えたんだそうだ。薬種屋の両親は娘の出世、貴族と縁組みするのは家の名誉だと有頂天になっていたし、娘の方は映画なんかで見る外国の貴婦人の華やかな生活を連想して古い習慣にとらわれている日本の貴族の生活というものを研究してもみなかった。だから結婚後の家庭生活はあんまり幸福でなかったらしい。彼女の亡くなった時、お通夜に行つ

たものから聞いたが、姑だの、母を異にした——、つまり妾腹だな、そういう小姑が多数いる間に挟まって小さくなり、平民の娘、平民の娘と蔑視さげすまれつづけて、針の蓆にいるような辛い思いをしていたという。ああいう社会で氏のないということが、どんなに肩身が狭く、またどんなに賤しまれるかということ彼女を彼女は全く知らなかったんだね」

「不幸な人だなあ」

「美人薄命という言葉がぴったりくるね。唯一の希望である我が子は行方不明になる、その心痛から病弱になり、生きて行く力を失ったと云って床に就く日が多かったですというからその頃から心臓の方も悪くなるっていたんだらう、突然麻痺を起してあつてなく死んでしまったのが、公高の三回忌を行った夜だったというのが何かの因縁だとも云うんじゃないかな」

「とにかく局長、是非、出席して話を聞いてきて下さいよ」

一同は秘密公開という点に興味をもっているらしかった。

藤原家の売り立ての日は朝から小雨が降つてうすら寒い日であった。

応接室をはじめ各部屋の襖は全部取り除かれ、大玄関の式台にはモーニングを着た家扶と執事が並んで来客を迎えていた。天氣の悪いにもかかわらず徒歩で来る者、自動車で馳せ参じる者、招待状を受附に差出して奥の大広間に案内されて行く人達の中には東北から来たの、関西からわざわざ上京したのという者も少なくなかった。客は廊下にまであふれて定刻には文字通り奥の大広間は立錐の余地もない有様だった。遅れて来た編集局長は人々の間を縫うようにしてやっと入った。そこは藤原家の仏事を行う部屋で、ぐるりの壁には代々の当主と令夫人との油絵の肖像画が掲げてあった。公正侯の思いつきであろう、その時代の当主の使用した物品をそれぞれの前に並べてあった。

先代侯爵と夫人の前には大きな寝観音が安置され、螺鈿蒔絵の経机の上には青磁の香炉をのせて沈香を焚き、細々と立ちのぼる煙はあたりの空気を、清浄なものに感じさせていた。その傍には高蒔絵の御厨子、蝶貝入りの書棚、梨地定紋ちらしの文机等が極めて体裁よく置きつけてあった。どれを見ても欲しいものばかり、侯爵

が特に指名した人に限るとしたのは、商売人の立ち入るのを防ぐためだったろうと一同はうなずいた。

「あら、まあ、何んて大きな観音様でしょう」とびっくりしたような甲高い声がした。それは二三人の貴夫人連であった。

「お立派な観音様、これはね、先代様がシャム国へ御派遣になった時、有名なワット・サーケーという寺院の御住職様から御拝領になったものですよ、あんまり大きいので平常は菱井信託の地下二階の宝物庫にお預けになっていたのを特にこの度お取り寄せになったんです」

と同族の侯爵夫人が云った。

「このお胴の中でお昼寝位出来そうですわ」

「でも、中はがらん洞ではないでしょう。金だか、銀だか、銅だか知らないけれど、いずれむくでしようから」

「金や銀なら今頃まで残っていませんわよ。供出させられてますから、オホホホホホ」

誰でも一度はこの寝観音に眼をとめるらしく婦人連が次の間へ去ってしまおうと、どこどかと四五人の紳士連が周囲を取り巻いていた。頃あいを見て、
「皆様、どうぞ御入札をお願いいたします」

と執事が大きな声を張り上げた。

入札せよと云われても素人ばかりなので、価格がわからない、金額の書きようがないという人が多かった。それでも大騒ぎしてどうやら入札が終った。

「粗茶を差上げますから、御一同様がた、どうぞこちらへ」と来客を食堂へ案内した。

各自の前に紅茶と菓子が運ばれた時、始めて藤原公正が羽織袴で姿を見せた。彼は威儀を正して一通りの挨拶をすませると、

「招待状にもちよつと申上げておきましたように今日は当家の秘密を皆様にお話申上げたいと思います」と前置きして、

「已に御承知の事でしょうが、話の順序として一応申し上げます。私共夫婦は他家から養子に参つた者、当家は公高が継ぐはずでありましたが不幸にも十一才で行方不明になり、彼の生死も分らないままで十数年過ぎてしまいました。当時皆様方の間では昔風に神かくしだろうとか、人浚いの手に渡つて奴隷にでもなっているだろうとか、種々の取り沙汰をされていたのですが、結局分らずじまいで今日に至りました。それがやつとわかつたのです、その御報告が一つと——」公正は言葉を断つて、そこに集っている人々の顔をひとわり見廻わした。

来客は片唾を呑んで聞いていたが、公高の消息がわかつたと聞いて急にざわつい

た。

公正は語をつぎ、

「もう一つは先代夫人、即ち公高の母君の死について申し上げたい。夫人は心臓麻痺で亡くなったのではなく、実は公高の三回忌の法事を行つて後、自殺されたのです」
低い溜息が、あちこちに聞えた。

「私はどうかして、自殺の原因を知りたいと思い、遺書を探しました。しかし発見されませんでした。よくよく整理して死なれたものと見え、文字を書いた一片の紙片すらなかったのです。ところが偶然、この売り立てをいたそうとしたおかげで、この二つの謎が解けたのです。藤原家所有のこれ等の品物が他人様の手に渡つてしまつては、もう再び夫人の遺書を探すよすがもないと私は考え、念のためもう一度全力をあげて探すことを思い立ち長い間かかつて厳密に調べたのです。すると夫人の愛用していたこの文机の抽斗の奥に秘密の扉——、つまりかくし場所のあるのを発見したのです。その扉を開くのがまた非常な困難でありましたが、遂に目的を達しました。そしてそこに一連の遺書が入っているのを見たのです。それによつて始めて夫人の死の原因を知る事を得ました。ここにこの遺書が即ち遺書でございます」
紫縮緬の袱紗に包んだ部厚な封筒を公正は高く捧げて一同に見せた。
「さて、私はこれからこの遺書を読み上げますから、お聞き下さるよう願います」

3

「私は二十四の年に藤原家の人となつてから十四年になります。夢を懐いて妻となつた私、世間知らずの私は楽しい娘時代から一足飛びに現実の苦悶の世界に入ったのです。結婚後数日にして私は已に後悔していました。この結婚に不賛成だった藤原家の人々は私の落度を見つけてそれを口実に夫との間を割き、何とかして別れさせようと、あることないこといろいろと夫へ讒訴したので、二人の間にひびが入り、それがいつか大きな溝になつて面白くない日を送るようになり、私の地位も次第に足許から崩れかけて来た、その翌年公高を生みました。

家柄のない事はこういう社会の人の目には一つの罪悪のようにも映るのでしようか、平民なんかには教育されてはどんな者になるか分らないというので、公高は生れると直ぐ私から引き離され、祖父母の溺愛の中で我まま一杯に六つまで育てられ、戻った時は手のつけられないやんちゃになっていました。しかし機嫌のよい時は実に如才のない、頓智のある氣の利いた子でした。

小学校へ入ると直ぐ級長になり、明朗で頭が鋭いと先生も褒めて下さる。俐口だ、美しい子だと親類中の褒めものになり、そのために私への風当りがすっかり違つてきたのは有難い事でした。ひと様から云われなくとも、子を見ることは親が一番知つています。私は密かに同族間を見廻わしましたが公高の右へ出る男の子は一人もありません。私は得息でした。⁷梅檀は双葉より香ばしいといいますが、ほんとに公高は輝いていて、生れながらにして人の長となる品格を備えています。彼のおかげで平民の娘の価値も上り、危く見えた私の地位も段々ゆるがぬものになつて行きました。

ある日、私がお湯殿から衣裳部屋へ入ろうとすると入れ違いに、小さい者の影がお縁側の方へ走るのを見ました、公高でした。どうして母の衣裳部屋へ入つていたのかと何心なく見ると、ずらりと並べてある箆笥の一つの抽斗が開いていて腕時計のケースがありません。それはダイヤ入りで一番大切にしているもの、私は何という事なしに胸を突かれました。墨塗りの小物入れにも触れたらしく小さい手形がついている、泥に汚れた手で抽斗を開いたのでしよう。帯止の金具類が掻き廻わしている、この小さい手形は公高に違いない、悪戯もこうなると念が入り過ぎているので放つてもおけず、それかといつて家人の思惑もあるので、人に知れないように土

蔵前へ連れて行き、よく訊いてみると、公高はいつか近所の小母さん達——、お神さん達と仲好くなつていて、その人達に唆かされ、大分私の持物を引出していることがわかりました。

無断で人の物を持ち出すのは泥棒と同じことだとよく説諭しました。彼はしよげ返つて涙をこぼしながら首を垂れていました。こんな幼い者をおだてて貴重品を捲き上げるなんて罪悪だと私は憤慨し、小母さん達というのが憎くなり、公高が可哀想でなりません。罪は彼女等にある、彼には何の罪があるろう。今後の事もあるので密かに小母さんの一人を訪ね、罪のない子を罪に陥すようなことになるからもし欲しいものがあるなら、何でも上げますからこれからは直接私に交渉してくれと頼むと、彼女は非常に立腹し、飛んでもないことを仰しやる、若様から頼まれるのでお断りも出来ず、仕方がなしに必要なのに買って上げているのに文句をつけるとは何事だ、御大家と思つて遠慮していればつけ上つて、と逆振です。欺したのがばれたので耻しいからあんな虚勢を張るのだ、浅間しい女とこっちは蔑視んで帰りました。それは公高が八才の時のことです。

その年の秋、外務省からシヤム国へ派遣される夫に従いて私も行きました。帰つてみると僅半年ばかり離れていた間に公高はすっかり変つて妙によそよしい態度をするのです。恰度庭の四阿で友達と遊んでいるのを見たので、お菓子を持つて行

きました、二人は夢中で話していて私の近づくのも気がつかない、聞くとともに話を聞くと、

『自分の息子を放つたらかして、今頃新婚旅行でもあるまいさ。あのべらぼうに大きな寝観音の背中にはうんと土産物をかくしているそうだ、信託へ持ち込まないうちに盗つてやれ、鼻をあかしてやろうじゃないか、一泡ふくぜ』と憎い口をきいているのです。

『鍵をどうしてあけるの?』と友達が訊く。

『わけなしさ。針金一本でどんな嚴重なやつでも開けてみせてやらあ』と威張っている。私は呆れてあとの言葉を聞くのが厭でした。踵を返そうとするその蹙音に気がついて、二人はこつちを見ましたが、

『チエツ。噂の主の御来臨だぞ』と低い声で『うんとおだてて嬉しがらせてやれよ』友達はあどけない顔をして私の傍にまいり『僕、小母様を、××宮妃殿下のお忍びかと間違えちゃったあ』と云うのです。××宮妃殿下は有名な美しいお方であらせられましょう?

公高は私がどんな顔をするかと、じいっと盗み見ているのです。

その頃、女中部屋で頻々と物が紛失する、衣類を始め毎月溜めていた給料をそっくり盗まれた等々の訴えに、執事の注意で一人の小間使に暇をやりました。が私は

もしや公高の仕業ではないかと胸を痛めていると、今度は学校から電話です。あまりに欠席がつづくからとの注意、登校していることとばかり思っていたのにどうしたのでしょうか。よく調べますと悪友に誘われて途中から外れるらしいのでその母君に私からお頼みに行きますと、意外にも先方では公高に誘われるので大困りだとの事、私は情けなくなりました。しかし、その友達だつて何を云っているのかわかりません、公高は私に嘘を云う子ではありませんから――。

誰が何と云おうと私は彼の味方です。母だけはどんな事を人が云おうと公高の方を信じてやります。彼は決して自分から悪い事をするような子ではない、が、意志が少し弱いので、他人の誘惑に勝てないのです。それが可哀想で小叱を云う気にもなれません。

そうした事の続いたある日、私は公高の部屋で思いがけない沢山の物品を見たのです。ダイヤの指輪、女の腕時計、縞刺の紙幣入、その中にはかなりの大金が入っていた、私はかあつとなつて眼がくらくらとしました。ハンド・バッグが二個、一つは鱷革、一つはエナメル、開けて見ると立派なコンパクトやらクリーム入れやら、女の持つものがぎっしり詰っている、私はガタガタ慄るえて、どうにもふるえが止りません。どこからこれだけの物を運んできたのでしょうか、無論買うだけの金は与えてありません、すると――、ああどうしたらいいのでしょうか。私の頭の中は混乱

してしまいました。卒倒しそうになります。

公高の将来にかけた期待が大きかっただけに失望は更に大きかったです。今となつてみると近所の小母さんの言葉もほんとうだったのでしようし、女中部屋の盗難も——、友達を誘惑して学校をサボったのも——、みんな彼がやったことに違いない、私は悲しみのどん底に呻^{うめ}吟きながら、部屋の中をのたうち廻りました。私の血はどんどんと頭へ逆流して物の判断もつかないようになりました。もしそこに公高がいたなら私は彼に飛びかかって首をしめつけたでしょう。

私は両手で顔を覆うて突伏して泣きました。長い間泣きつづけました、この恐しい打撃にもう起ち上る気力もなかったのです。

何故私がこんなに絶望したか、それには理由があるのです。実は私に一人の弟がいました、それは恐らく世間では知らないでしょう。生れると直ぐ他家の籍に入つたのですから——、その弟が公高のように才はじけた頭のいい美しい少年でしたが、年頃になると不良仲間に入り隼の正という名までつけられ、その上、手癖が悪く箸にも棒にもかからなかったが、喧嘩で大怪我をしたのが原因で死にました。その時悲しむはずの肉身達はほっと安心し、最初で最後の親孝行だと父は喜びました。不良性は私の血統にあるらしく、父の兄、私の伯父も大変者だったと申します。

それが頭にあるので私は一途に逆上してしまつたのです。まだ年少の事だから教

育次第で善道に導く事も出来ようと仰しやるかも知れないが、それは私へのお世辞、あるいは同情の言葉です。公高はもう真人間に立ちかえるとはいくら母の慾目でも思われません。あまりにも巧妙過ぎる、先天的の不良だからです。

日頃蔑んでいる平民の娘の生んだ子が不良で盜癖がある、しかもそれは血統だとあつては私の救われる道はありません。公高のおかげで築きかけた地位は忽ち崩れ、私は奈落の底に突き落されてしまうのでしょうか、そればかりでなく、大切な大切な藤原家の血統に不良の血を残したとそれこそ多数の人の憤りを浴びなければならぬでしょう。それはともかくもこういう少年が成長したところで碌な者になるはずはない、家名を汚し親の名を耻しめ社会に害毒を流して他人に迷惑をかける。また彼自身の将来も暗澹たるものでしょう。

私はすべてに希望を失いました、希望を失つたものものとするべき道——、ああ、それは云わずと知れています。私は公高をほんとに愛しています、愛していればこそ、彼を私の手で始末してやろう、彼を殺して私も死のうと決心したのです。

私は気が狂つたのでしょうか。

何事にも小器用な公高は小鳥を飼ひ馴らすのが上手でした。恰度おそまきの癩疹を患つてそれが癒つたばかりの時でした。屋上庭園で文鳥を放して遊びたいと云つてききませぬ。

その日は偶然みんな外出して家の中には私と彼と二人だけでした。こない機
会がまたとあろうか、と誰かささやくような気がしたのです。四辺を見たが誰もい
ません。チャンス逃がすな、と、また――。私は自分の耳を両手で覆いました。

公高は屋上で文鳥を放し、空を仰いで手を叩き口笛を吹いて呼んでいたが、病み
上りのところへ強い日光を浴びたので眩暈がしてよろめき庭園の棚に掴まったのを
私はいきなり突き落そうとしたのです。彼は落されまいと必死に棚にしがみつくと、
私は夢中になつてその手をふりほどくと、彼は死者狂いで私の髪の毛を掴みました。
黒髪は解けて公高の手に蛇のようにならみついた、私は頭を後へ引きざまどんと胸
を突いた、あつと一声叫んで彼は墜落しました。実に一瞬間の出来事です。

私は夢みているようにぼかんとして、ただ呼吸いきをきつて喘いきえいでいました、が、
急にはつと我に返ると、疾風のように庭へ駆け降りました、しかし、後頭部をした
たか打った彼は已に息を引き取つておりました。

自分で殺しておきながら何んという矛盾でしょう、私は公高を抱いて私の居間へ連
れて行き夢中で人工呼吸を行ったのですが、もう駄目でした。すると急に犯した罪
が恐しくなつて慄え上りました。殺人！ まあ何という大それた事をしたのでしょ
う。

公高がいくら悪いと云つてもまだやつと十一になつたばかり、それをむぎむぎと

——、取り返しのつかぬことをしてしまいました。私は死体を抱き上げ、声をあげて泣きました。今にも物を云いそうな可愛い顔をしています、私は頬ずりしながらじっと眺め、せめてこの美しさだけでも永久に残してやりたい、と思ったのです。私は女医でしたし、学校を卒業して家庭の人となつてからもいろいろ研究していた事があるので、早速それを応用してみようと、大いそぎで、ある薬品を調剤し彼の股間静脈に小さいポンプで二千グラムもの液を注射したのです。それは死体の腐敗を完全に防ぐものなのです。

そうしておいてから始めて死体をかくす場所を考えたのですが、どこにもありません。散々悩んだ揚句、ふと思いついたのは信託の地下二階に保管を頼んである寝観音でした。あれの背中に納めてやりましょう。いい思いつきではありませんか、生前は悪魔の心を持った少年、死んで仏身になるとは有難いこと、私は涙が出るほど嬉しくなり、この名案に感心してしまいました。

私は衣類の入れ替えと称して茶箱の中に彼を入れ、自動車で運びました。大きい荷物の出し入れは毎度の事なので信託の人々にも怪しまれず、始末が出来ました。観音のがらん洞の背部に彼を寝かせ、そのぐるりの隅々にまで隙間なくぎつしりとアドソールを詰め込み、密閉して鍵をかけ、なおめばりまでどこして外部からの空気の侵入を防ぎ、これでよしと見定め、安心して帰宅したのです。

私は公高の死体を人工ミイラにつくり上げるつもりだったので。自然ミイラの如ききたならしいものでなく、彼の美しさを永久に保存する人工ミイラです。実は私自身死んだらそれを行ってもらいたい願いで、多年研究していたものです。

さて、公高の死体も現われず、さればと云つて生きている証拠もないので行方不明ということになりましたが彼が発見されるまでは失踪の日を命日とすることに定めたのです。

三年目の祥月命日、即ちこの遺書を認める前日私は信託へまいり、寝観音を聞いて見ました。私の製造した人工ミイラ！ ああそれは美事に成功していました。生けるが如き彼の美しい顔は生前と少しも変わりません。私は感激の涙を流しながら、新らしいアドソールと古いのを入れ替えもとの通りに封じて帰りました。公高は仏の中に生きています。永久に——。

それを見届けてから、私は自分の罪にふくす、それは最初からの覚悟でございました。

藤原公正様

藤原冴子」

4

公正は遺書を読み終ると徐ろに席を起つて、

「実はこれから皆様と御一緒に観音の背部を開けようと思うのです。私共はまだ何も手をつけておりません。では——、どうぞ」

彼を先頭にして客はぞろぞろと従いて行つた。まるで墓を発きでもするような気持ちだったので、多少の好奇心はあるものの、誰一人口をきく者はなく、ただ登音のみ長い廊下を續いていた。

やがて、公正の指図で家扶と執事は寝観音の後ろへ廻わつて封を切り、鍵を開けた。二人が背部へ手をかけようとした時、「ちよつと、待て！」と公正は制し、一同に向つて、「皆様、ずっと近よつて下さい。只今、観音を開けますから——」と云つてから、兩人へ合図の眼を向けた。

緊張した顔を並べて一同固唾を呑んだ。重苦しい空気が室内に充満した。

ガチャリ！ 背部はぱつと開かれた。

「あらッ!!」

「まあ！」と呆れたというような声がした。

「やあ、これは——、これは——」公正は呆然として顔が蒼白になった。

「何んだ！ 人形じゃないか」編集局長は囁んではき出すように云った。

美事な人工ミイラを想像していた人々の前に現われたのは、よにも可愛らしい水兵服を着た男の子の人形であった。

公正は事の意外に面喰つて、弁解の言葉もなく、途方に暮れている時、ふと人形の胸に抱いている第二の遺書らしきものを見た。

彼は救われた、ほつとして、これを手にとり上げ、

「皆様！ ここに別な遺書がありました。さあ、これを読んでみましょう」

さつと封を切った。

「人工ミイラをつくりたいと思つたのですが悲しい事に女一人の手ではどうにも所置が出来ません。それで已むなくあきらめて、この邸内の雑木林——、そこは蛇が出るので家人の近寄らないところですよ——、の梅檀の樹のもとに穴を掘つて埋めてやりました。今頃はもう醜い白骨になっていることでしょう。美しい人工ミイラに出来なかつた事はかえすがえすも遺憾です。それでせめてもの心やりに懇意な人形

師に頼み、公高の似顔をつくらせ、それを時折眺めに信託にまいり、僅かに慰めていたのです。

藤原公正様

藤原冴子」

公正の命によって、直ちに雑木林の梅檀の根元が掘り返えされ、間もなく公高らしい少年の白骨が現われたと執事によって報告されたのだった。

鉄の処女

寒い日の午後だった。

私は河風に吹かれながら吾妻橋を渡つて、雷門の方へ向つて急ぎ足に歩いていた。と、突然後からコートの中を突つくものがあるので、吃驚して振り返つて見ると、見知らない一人の青年が笑いながら立っていた。背の高い、細長い体に、厚ぼったい霜降りの外套を着て、後襟だけをツンと立てているが、うす紅色の球の大きな口イド眼鏡をかけている故か眼の下の頬がほんのりと赤味をさしている。彼は吸いかけの煙草をぼんと投げ捨てて、つと私の傍をすりぬけて、一間ばかり行つたかと思うと、何と思つたか、今度はくるりと踵を返して後戻りして来た。私はその顔を見てハツと思つた。

「S夫人！」

夫人の変装術に巧妙なのは知っているが、こうまで巧みに化け了せるとは思わなかった。しかし他人ならいざ知らず、助手が見破れなかつたのは少々心細い、私は何だか気まりが悪くなった。

「どこのよた、もんかと思ひましたよ。私の後をつけたりなすつて——」

照れかくしにちよつと夫人を睨む真似をした。夫人は可笑しおかそうにくすくす笑いながら、

「ほんものの不良らしく見える？ 実は今日はね、よたもんになりすましてある事件の調査に出かけたの、今その帰りなんですよ」

私はつくづく夫人の姿を眺めて感心した。ほんとに巧いものだ。どう見直したつて男だ。態度だつて、表情だつて、すっかり男になり切っている。女らしい影はどこを探したつて見出せやしない。

S夫人と私はどつちから誘うともなく仲店に入り、人込みにもまれながら肩を並べて歩いていた。

観音様の横手の裏通りにはサーカスがかかっていた。その広告びらの前に夫人は立ち止つて少時しばらく見ていたが、急に入つてみようと言出した。事件の調査に来たと云うのにどうしたつていうんだろう。私がちよつと返事に躊躇しているのを見ると彼女は誘いかけるように云うのだった。

「面白そうじゃないの。南洋踊り、鉄の処女、ほら人喰人種もいますよ」

「鉄の処女つて何の事でございますの？」

「昔死刑に用いられたものですよ。大きな箱のようなものの内側に劔の歯がいつぱい突き出ている、囚人をその中に入れ、扉ドヤを閉めると同時に体中に劔が突き刺ると

「う仕掛けなんですよ」

「面白そうでございますわね。じゃ入ってみましようか」

「人間は誰だつて残虐性をもつてるのね——」

夫人はちよつと皮肉そうに云つて笑つていたが急に真面目な顔をして附加えた。

「実をいうとね、ある女を探しているんです。サーカスにいる花形なんですがね、しかしどこのサーカスにいるかは分らないんです。だから貴女の気がすすまないなら私一人でも入つてみるわ」

二人は早速入場券を買つた。

舞台では南洋踊りというのがもう始まつていた。獐猛な顔付をした逞しい男が五人、真赤に染めた厚い唇を翻えして訳のわからない歌を怒鳴りながら、輪をつくつて踊っている、その真中に酋長の娘とでも云いたいような、若い女と一疋の**大狒々**びき おおひびとがふざけ散らしながら、お客さん達に盛んに愛嬌をふりまいている。滑稽な身振りをして見せるものだから、見物人は大喜びだ。

「あの狒々の野郎うまくやつてやがらあ」

「ほんもの真物かな」

「さあ？」

「奴さん、なかなか味をやるじゃねえか」

「しかし——。巧いぞ、男かね、女かね」

「女だつたらどうする？」

「別嬪べっぴんなら取つて喰うか」

「馬鹿野郎、別嬪が何もわざわざ狒々の皮を被るかよ」

「女にしたところでどうせ醜婦すべたさ。見やがれ。二度びつくりだ」

こんな会話に氣を取られているうちに、いつか踊がすんで、舞台にはピエロが出
てしきりに口上を述べている。それによると美しき會長の娘に思いをよせた狒々は、
余り浮かれ過ぎて悪巫山戯わるふざけをしたので、遂に會長の憤いりを買って捕えられ、『鉄の処
女』の刑に処せられることになった。死刑執行の後、扉を開いてみると狒々の姿は
消え失せてどこにもない、という他愛のない筋ぎを迎々きょうきょうしくしゃべったピエロが引込
むと入れ違いに、荒縄で縛られた狒々は土人にひかれてしおしおと足どりも乱れ勝
ちに出て来た。

私達はかれこれ一時間余りも見物席に納まつていたが、夫人が探し求めていると
いう肝心の女は遂々とうとう見出せなかつた。

「でも根氣よく探していれば、どこかで見つかるわ。それに女は独身者ひとりものじゃないん
だから」

「亭主がごぞいますの？」

「亭主と共謀くわくでよくないことをやってるんです」

二人はそこを出て小屋の後を廻り、楽屋裏を通りかかると、猛獣でも懲こしているらしい物凄い鞭の音がピシリ、ピシリと耳を打った。同時にヒーと泣き出す女の声、私はぞつとして夫人に倚より添そいながら、囲かこいの破れ目から楽屋の中を覗のぞいて見た。

緑色のけばけばしい乗馬服を着た団長が向うを向いて鞭を振り上げている。その足もとには若い女がまるで叩き潰されたように平伏ひらしていた。それは先刻さつき見た一座の花形で、しまうまに乗のり乗りつていた女に違ちがいない。

団長は怒りに震えた声を、浴びせかけるようにして怒鳴どった。

「狒び々のあとばかり追おっ馳ちけやがって——。このあま！ 叩たたき殺ころすぞ」

その声の終るか終らないうちに表の方で急に拍手の音がして、楽屋口から四五人の男女がどやどやと入いって来たが、団長の姿を見ると皆隅すみの方へかたまたまってこそそと私語ささやいていた。

「また嫉やいてるんだよ」

「可哀想あはれなに！ 殴うらないだだっていいわ」

「団長だだって気がもめるさ」

少し離れた処ところからこの光景ありさまを横目で見ながら、静かに狒び々の毛皮けを脱ぬいで一ひとと休息やすみしようとしている男がああった。上品な立派な容貌ようばうと、スポーツマンのような美事うつくな

風采とに私達は目を見張った。

「狒々の毛皮なんか被らないで、素顔で出た方がもつと人氣が立つだろうに——」
夫人の言葉に私は思わず笑った。二人はまた仲店へ出て人に押されながら歩いた。あたりはもうすっかり暮れかかっていた。雷門の処まで来ると、夕方の雑音に交って、消魂けいたましい夕刊売りの鈴の音が響いていた。

私は直ぐ一枚買って、夫人と顔を突き合わせるようにして開けて見た。その瞬間、オヤと思った。

「他殺か、自殺か、奇怪極まる東伯爵夫人の怪死」
という題で、夕刊は彼女の死を伝えているのだ。

東伯爵夫人の名は余りにも有名である。非常な美人で、社交界の花形であるばかりでなく、社会事業家としても相当の手腕うでを有もっているので、××次官の夫伯爵よりも、反って彼女の方が世間からは知られている。

「あの奥様が死んじゃったんですか。それも自殺したとは驚いた——」

私はほんとに意外の感に打たれて夕刊を覗き込んでみると、夫人が、
「あの方とは長いお交際つぎあひでしたから相当親しくしていましたのよ。殊に最近はある事で——」

とちよつと云いよどんだが、思い切ったという風で、

「実は探しているあの女。サーカスにいるその女の事で、——。ちよつとお頼れ^{たのま}して、度々お会いしたんですが、立派な奥様で、頭のいい、美しい方でしたがねえ」

夫人もさすがに感慨無量という風に深い沈黙に陥ってしまった。

2

私は翌日の朝刊を待ちかねた。東伯爵夫人自殺の詳細を知りたかつたからだ。果してどの新聞にも美しい夫人の写真と一緒に詳しい記事が出ていた。

それによると伯爵夫人は一週間ほど前から箱根のふじやホテルに滞在中であったが、一昨夜深更に帰宅して、玄関を上るや人事不省に陥り、そのまま息を引き取ったというのだ。

議会開会中の多忙の折柄とて、伯爵は不在であつたそうだ。その後、伯爵家執事の談として、

『奥様はお出先からお帰りになります時は、必ず前もつてお電話を下さることになつ

て居りました。そしてお邸からはお迎えの自動車を停車場まで廻しますのに、昨夜にかぎつて、突然、しかも夜更けてお帰宅遊ばし、いきなり御重体におなりになりましたので、私共はただもう夢のようで、どうしても奥様はお亡くなり遊ばしたような気がいたしませんのでございます』

更に玄関へ出迎えた小間使の談として、

『後になつて考えますと、お玄関のベルをお押しになつたのは奥様ではなく、円タクの運転手だつたような気がいたします。私がお玄関の扉を開けますと同時に、黒い影が表御門の方へ走つて行き、間もなく自動車の走り出す音をききました。最初奥様はお玄関をお上りになると、白い壁に添つて二足三足よろよろとお歩きになり、壁につかまろうとお手をお延ばしになつたまま、くずおれるようにお倒れになりました。この頃はちよいちよいと脳貧血をお起しになりますので、またかと存じたのでございませう。それに御近親にご不幸があつて御喪中で、御洋装の時は黒の濃いヴェールを被つていられますので、お顔色などもさっぱり分りませう、お寒い外から急にスチームの通つているお暖いお家の中にお入り遊ばしたので、めまいが遊ばしたのだらうくらいに軽く考えて居りましたのに――』

西医学博士談（博士は夫人の実兄である）

『私が馳けつけた時には、もう已すでにこときれていて手の下しようもなかつた。妹は

冷静な女で、決して自殺するような弱い女ではありません。子供こそないが、夫婦間も至極円満で親類中での羨望の的になっていた位です、それに第一自殺しなければならぬような原因は何一つありません。しかし近頃少し健康を害したと云つて、よく宅へ来ると、薬局から睡眠剤をつくらせて帰りました。医者のお娘ですし、薬の事など相当に心得てはいますが、原因もなく、厭世自殺などするような女では断じてありませんが、虚名を売っているために相当敵はあつたようでした。死の直接原因は勿論極量以上の薬を服んだためです。服んだのか、吞まされたか、それは私の申す範囲ではありません。屍体は帝大の方で解剖することになっています』

なお二三の新聞は夫人が投宿していたふじやホテルの支配人の談として、『伯爵夫人は昨日の午後、伯爵からお電話があつて、途中までお迎えに来ていらつしやるからと仰しやつて、お元氣にお出ましになりました。いつもはホテルの自動車でお送り申上げるのですが、昨日はお天気もいいし運動がてらと仰しやつて、お歩きになつてお出かけになりました。私共はあのお仲の好い御夫婦の事でいらつしやいますから、御一緒に御散歩でも遊ばすのかと思ひ、氣にも止めませんでした。が、うんぬん云々』

当の東伯爵の談としては、

『何人が私の名を騙り、妻に電話をかけたのか見当もつきません。妻自身が電話口

に出たとすれば、声でも私か、私でないか分りそうなものです。誰かに誘い出されて、どこかで毒を吞まされ、送りがえされたとしか思われませんが、しかし妻は冷静な沈着な女です。無暗に他人に欺さたりする⁸ような事は断じてありません、が、また決して自殺するような類の女でもありません、近頃少し健康を害してはいましたが、新らしく起したある社会事業の方に熱中し、頻りに奔走してましたし、子供がないので、事業を子供だと思つて、全力を挙げて育てるのだと申し、希望に満ちた生活をしていた際ですから、少し位健康を害していたと云つて、それを苦にしてどうのこうのというような事ありません。突如として最愛の妻の生命を奪われた夫の立場として、云い度い事は沢山ありますが、今は何も申しません。ただ警視庁の方々のお力を頼み、かつ信じているばかりです』

S 夫人はその時ふと新聞から眼をはなして云つた。

「私が探しているあの女ね」

「サーカスにいるつて女でございましょう？」

「その女の事について、伯爵夫人から秘密の相談を受けていたんですよ」

「秘密の相談？ あれの奥様にも何か秘密がおりになつたんですの？」

「奥様の秘密というよりは、御主人の方の秘密ですの。重要会議で伯爵が巴里に滞在

中の出来事なんですが、どこの土地でも、どこそこ通と名のつく道楽者が一人や二人はいますわね。その一人で長年パンションにころがつている独身者の画家があつたんですって、それが伯爵の学生時代からの友人でしてね、その人の案内で、あるいかがわしいダンスホールにお忍びで出掛けたというわけなんです。そこでその女と知り合いになり、大分深入りしてしまつてから、後になつて始めてその女に亭主のあることも、サーカスに出ている女だという事も分つて、伯爵は急に厭気がさしたんだそうです。それでうまく別れようとしたんですが、先方に見ればせつかく引つかかつたいい鴨なんですから、なかなか逃しやしません、何のかのと付き纏つて離れない。そして遂々日本まで従つて来てしまつたんです。で、その身元調査を奥様から私がお引きうけたわけなんです。その当時調査した処では、サーカスの奇術に出ている一座の花形で、亭主はあるにはあるがお金で何とでも解決のつく女だつたんです。ところがその女が図々しくも奥様を訪問してね、かなりまとまつたお金を取つたんです。勿論日本を去るといふ条件でね、そしてシンガポールへ行つたということになつてはいるんですが、それは表面で、実際は内地にうろついているので、奥様は私に監視していきくと云われるのですが、どのサーカスにいるのか分らないんでね」

S 夫人はそう云いながら、机の引出しから小さな写真を出して見せてくれた。

「余り別嬪じゃございませぬね」

私は写真を返しながら云った。

「処が男の眼にはどこかいところがあるんでしよう。この女には随分悩まされて非道いめにあつた人が沢山あるんですよ」

夫人は写真を大切そうに納しまつてから言葉をつづけた。

「伯爵夫人を訪問してお金を受取つてから、その女は急に気持が變つたらしいんですよ。つまり夫人が余り美しかったのと、想像以上に豪華な生活振りだったのとで、嫉ねたましくもなり、一方ではお金で外国へ追つぱらわれるというような僻ひがみも出たんでしよう。『私はこうして旅から旅を渡り歩いて日を暮す女ですが、これでも亭主持ちなんです。伯爵のおかげで私の家庭はめちやめちやにこわされてしまいました。夫は二人の關係を嗅ぎ付けて、殺すの生かすのと狂氣きちがいのようになって騒さわぐんです。そして遂々後を追っかけて、二三日前にひよつくり小屋へやつて来ました、迎むかも執念深い男ですから、私の口一つでどんな悲劇が演じられないとも限らないし、憚りながら御主人の地位にも関するような大事を惹き起さないと云えません。僅かなくされ金で片附けたと安心していらつしやると大変ですよ。私もせいぜい事なかれと氣をつけては上げますがね』と云つて笑つたんですって、それ以来奥様は氣味が悪くつて、始終こう何だか狙われてでもいるような氣がして、不安で不安でたま

らない、何とかして禍を未然に防ぎたいというので私に相談されたんです」
それを聞いて、始めてS夫人がサーカスの女を探している理由が分った。

3

事件が他殺か自殺かさえ分らず、殆んど迷宮入りになりかけた頃だった。ある日、S夫人は神田の事務所にも東伯爵の訪問を受けた。

「もうこうなつては警視庁ばかりを頼みにしてはいられなくなりました。どうか一つお骨折りを願いたい、どうしても犯人を探し出さなければ殺された者が可哀想です」

伯爵は頻りに他殺説を主張して、ある秘密をさえ夫人の前に語つたのだつた。

それによると、二三月前から伯爵夫人の身辺に影のように付き纏つていた男があつたのだそうだ。彼女が近頃健康を害していたのも、実はそれが原因で、彼女は
その男を非常に怖れていたという。

「例のサーカスの女の亭主じゃないんですか？」

S夫人は伯爵夫人の依頼から咄嗟に想像して訊いてみた。伯爵はただ唇にちよつと寂しい笑いを浮べたきり、それには答えないで、費用はいくらでも出すから、是非犯人を捜し出してもらいたいと、繰り返し繰り返し頼むのだった。

伯爵が帰ると夫人は直ぐ外出の仕度をし、助手の私を連れて、念のためもう一度浅草のサーカスを調べに行くことになった。伯爵の口ぶりから察すると、どうやらその亭主が怪しいように思われる。S夫人も最初の考えを翻えして、あの女よりも亭主を探す積りなのではあるまいか。いずれにしても女か男か片一方を発見すれば、それによつて事件の糸口がたぐり出せるかも知れない。

仲店の雑沓の中を、夫人は黙々として考えながら歩いた。私も無言で彼女に遅れまいと足早について行つた。

二人はいきなり楽屋口へ行つて、名刺を出し団長に面会を求めた。団長は直ぐ飛び出して来て、にこにこ笑いながら中腰を屈めた。これがあの仁王様のような恐しい、楽屋裏の暴君かと、思わず私は夫人の顔を見て苦笑した。

団長はしきりに小首を傾げて考えていたが、

「どうもこの中にはそういう女も男も居りませんな、シンガポールから来たつて奴はいるにはいますか——」

と云つて楽屋の隅へ眼をやつた。そこにはいつぞや見た狒々の男が脱ぎ捨てた毛

皮の横に蹲うずくまっていた。

「あの人ですか、シンガポールから来たっていうのは？」

夫人の言葉に狒々の男はハツとしたらしく、二人の方を凝じと見た。

夫人は団長に耳打ちすると、つかつかとその男の傍へ寄つて、何事か小声で囁いた。男はちよつと狼狽したらしかつたが、夫人はそれには構わず、団長に会釈し私を連れて外へ出た。

少時待っていると、臆やぶて洋服に着換えた狒々の男が、おずおずと私達の方へ近づいて来た。見るからに憔悴した顔をして頬骨の突き出たのが目につくほど目が落ち窪くぼんでいるが、しかしそれにしても割合に整った風采のいい顔や、熱帯地方に長くいたらしいその皮膚の色は、どこかで一度見たような気がする、が、どうしても思ひ出せなかつた。

夫人は突然、サーカスの例の女の写真と東伯爵夫人の写真を彼に突きつけて、語尾に力を入れて云つた。

「貴方はこのどちらかを御存じですね？」

と、男は黙つて下を向いてしまった。が、やや間を置いてから、やっと顔を上げてどもるように云つた。

「こつちは存じませぬけれど——」

とサーカスの女の方を指した。夫人はおつ被ぶせるように云った。

「じゃこっちは知ってるんですね？」

「知っていますとも、可哀想なことをいたしました」

「どうして御存じでしたの？」

「どうして？」

男は夫人と私の顔を等分に見ながら、淋しい笑い方をした。

「智恵子は私の許嫁いいなすけだった女です。そして現在は弟の妻、東伯爵夫人となっていたのです」

夫人もこの意外な話にはひどく驚いたらしかった、私は片唾かたずをのんだ。

「では貴方は、東伯爵のお足さんだとも仰うしやるんですか？」

「兄なんです。南洋で虎に喰われて死んだという事になっている兄は私なんです。しかし実際はご覧の通り生きています。弟にとってはたった一人しかない兄弟、血を分けた兄なんですよ」

私達は何が何だか分らなくなつた。そう云われてみれば、東伯爵によく似ている。どこかで見たような気がしたのは、彼に似ているためであつたのだ。

しかし東伯爵に兄があるという噂は聞いたこともない、面ざしがちよつと似通つ

ているというのを聞き伝えて、渡り者の男の事だから、何かためにしようとするのかも知れない。人の好きそうな顔付はしているがサーカスにいるような男の言葉を、真向から正直に受取ってしまったては、それこそどんなことになるかもしれない。しかし一応は彼の身の上を訊いておく必要もあろう。何かの参考にならないものでもない。夫人はそう考えたであろう。男の方へ向き直って云った。

「団長にはお断りしておきましたからいいでしょう？　どこかで御飯でも食べながら、ゆっくり貴方のお話をお聞きすることにしたんですけど――」

4

夫人は食事もろくくしないで、その男の話聞いていた。

「私と弟とは二人きりの兄弟ですが、母異ちがいで、弟は私の実母が死んだ後に来た母に生れたのです。」

今考えると継母と継母の実兄、つまり私の伯父にあたる人ですが、その二人は腹を合せていて弟に伯爵家を相続させ、同時に全財産を弟のものにしたかったんだと

思います。

私は継母や伯父に甘やかされて育ち、弟は厳格に育ちました。継母は私に対しては実に優しく、何でも云いなり放題になってくれます、お小遣は父に内緒でいくらでも呉れますし、何事によらず私は自分の思うままに振舞って、実に我儘一杯に育ちました。

中学を卒業する一年ほど前、当時ジョホールで大農園を経営していた伯父は何年振りかで帰朝いたしました。伯父は実の甥の弟よりも、私の方を大変可愛がってくれまして、どこへ行くにも私を連れて歩きました。遊びを覚えたのはその時が最初でした。しかも指導者は現在の伯父ではありませんか。

私は金が自由になると身分があるのとで、どこへ行っても大いにもてました。若様々と大切にされ、いい気持になって遊び暮らして、果ては外泊する事さえあるようになったんです。厳格な父の手前は母がうまくつくろってくれ、陰になり日向になりしてかばっていてくれるので、父は何も知りませんでした。

中学へ遅れて入学した私と、早く入学した弟とは同級だったのです。

火花を散らすような勉強を強いられる者と、酒色にふけて学校なんかろくすっぽ行かない者とその二人が一緒に一高の試験を受けたわけなんです、弟が美事に及第して、私が落第したつて別に不思議はないはずなのに、私は非常に憤慨して、

彼を恨みました。

少しくやけになつてゐる処へ、何も知らない父は弟がよく出来るというので、私よりも次第に彼の方を可愛がるようになり、私の事はなま懶け者だの、低能だの、と顔を見る度に罵倒するので、我慢しきれなくなつて、恰度ジョホールへ帰ろうとしてゐる伯父に従いて、私も南洋へ行つてしまつたんです。

なアに日本にばかり陽は照らないさ。という伯父の言葉は大変に嬉しかつたんです。

私は自分の悪い事はすっかり棚に上げ、父をも母をも弟をも恨んでいました。

ジョホールに着いて間もなく、伯父は私を慰めてくれる積りだったのでしよう、虎狩に連れて行きました。山蛭やぶづるに悩まされた記憶はいまだに忘れられません、それよりもなお一層忘れられない恐しいことがあつたのです。それは一緒に連れて行つた苦力クリが逃げ遅れて、虎に喰ひ殺された時の光景です。実に今思い出してもゾツといたします。

伯父は、お前が虎に喰ひ殺された。と云つて、東京の家の者達を驚かせてやつたら面白からう、と冗談交じりに云いました。そいつはうまい考えだと手をうつつ喜んでものです。

——家の奴等、どんな顔をしやあがるか、愕おどろくかな、悲むかな。

そんな詰らぬ事を考えながら、うかうかと伯父の口車にのって私が死んだと知らせてやったんです。そしてひそかに皆の驚く顔を想像して、愉快で、愉快でたまらなかつたのです。生きていて、自分の死んだ後の皆の態度を見ていてやる、何と面白い計画ではありませんか。

伯父の妻はイタリー人でした。子供はありませんでした。伯父は伯爵家なんか相續せずとも、俺の家を継げばいいじゃないか、爵位なんかに縛られて狭い日本で暮らしたって始まらない。金さえあればどこへ行つたつて面白可笑しく自由な生活が出来ると申します。なるほど伯父の家は大変な金持でした。

聽て東京から弔電が来たり、死亡広告が大きく出た新聞を送つて来たりしました。継母は日々泣き悲しんで、大切な相續人を当人の希望とはいえ、南洋なんかへやるんじやなかつたと悔み、これが弟の方だつたらまだあきらめもつくが、と歎いた手紙をよこしました。私はちよつと痛快でした。早速遺骨になりと逢いたい。弟が自身で受取りに行くと申してきかない、などという音信たよりがある度毎に、自分の死んだ後のありさまを、目のあたりに見る愉快さに、夢中になつて居りました。

弟に来られては大変だというので、早速死んだ苦力の白骨を、伯父が携えて上京したものです、私は自分の狂言がうまく当つたのに北叟ほくそえ笑んで、その後の成り行きを眺めておりました。

そして相変らず遊んでいました、土人の娘を引張つて来たり、西洋人と同棲してみたり、放蕩のかぎりを尽していたのですが、そういうただれた私の魂にも、一つ忘れられない清らかな、心を洗われるような想い出があったのです。それは幼少の頃からの許嫁だった従妹いとこの智恵子の事でした。

智恵子はどうしたろう。と思うのですが、こんなすれっからしになった私ですのに、智恵子の事だけはどういふものかはずか耻しくつて、伯父にもその消息を訊けませんでした。

夢のように十年が過ぎました。

伯父は脳溢血で突然、遺言状も残さずに死にました。私の相続はまだ正式になつてはいませんでした。遺産は全部妻おぼの所有となり、妻はあと片附けをすっかりすませると、故郷くにのイタリーへ帰つて往つてしまいました。そして私はまるではだか、で、ジヨホールにたった一人取り残されてしまったのです。

それからの私の生活は、お話にも何もならない、惨憺たるものでした。

5

何年かまた経ちました。

ある時あちらの新聞を広げて何気なく見て居りますと、重要会議で巴里へ行く一行の中に弟の名を発見しました。私は急に懐しくなり、何んとかして逢いたいと思ひ、いろいろと金の工面をして、シンガポールへ出て来て、日本人会の人を通し、弟に面会を求めたのですが、会う機会さえ与えられませんでした。それどころか、誰も私の申すことなど信じてくれずでんで相手にもならないのです、彼の実兄だと主張する私をただ蔑んだ眼で見笑うばかりでした。その時始めて、弟と私との間の大きな隔りを知り、情けない思いに一夜船を見ながら泣き明しました。

半年後、帰朝の途にあつた一行は、再びシンガポールに一泊することになりました。

こんどこそはと決心して、物売りに化け、彼の船室に入り込んだのです。

港へ船が着くと、よく土人や支那人が名産物を持って、ガヤガヤと入り込みます。私はその中に交って、弟の室に入り、中から自分で鍵をかけたのです。

弟は最初私を見て大層驚き、顔色を変えていきなり手近かのベルを押そうとしま

したので、その手を押えますと、弟は蒼い顔をして睨みつけながら、

『無礼な真似をするな』

怒鳴りつけましたが、何を思ったのか急に低声こしえになって、こんな事を云いました。

『彼女あれと一緒にやないよ、誤解してくれちゃ困る』

と云つて苦笑しました。弟の態度が和らいできたので、私も幾分軽い気持ちになり、

『何云っているんだよ、オイ、僕だ』

私は彼の肩へ手をかけますと、彼はまた二三歩後へ下つて、

『君はあの女の亭主じゃないのか？』

と云つて額の汗を拭い、夢からさめたようにほつと溜息を吐いて、云い訳でもするようだったのでした。

『どうもいろんな奴がやって来るもんだからね、僕はまた暴力団かと思つたんだ。アハハハハハ。して君は一体どなたでしたっけ？』

漸く落付きを取り戻し平静にかえつた弟は、静かに私を眺めて姓名を思い出そうとしていましたが、聽てはツとして息を吸い込み、穴の開くように私の顔を見詰めました。今度の驚愕おどろきは前の如きものではなく、その大きな眼を一杯に見開き、唇は痙攣けいれんして引きつり、低い呻吟うめくような声が咽喉のどから押し出されました。

『あッ兄さんだ！ 兄さんだ！』

『ウン。僕だよ』

『兄さん！』

彼は危なく卒倒するところでした。それもその道理です。今まで死んだと思ひ込んでいた人が、突然目の前に現われたのですから、誰だつて胆をつぶすのは当然あたりまえです。

二人は長い間ソファーに倚りかかつて話し合いました。たった一人しかない兄弟ですから、たとえ落魄しているとは云え、兄が生きていたということは、大變に弟を喜ばせたようでした。しかし表面は私はもうこの世にない人間になっているので、兄弟だと突然発表も出来ないから、今はこのままにしてそつと別れ、そして一足おくられて次の船でもかくも東京へ帰つたらよからう。その上で後々の相談にも応じるからという彼の言葉に従つて、私はひとまずひきあげました。弟は旅費は勿論当分の小遣まで渡してくれましたので、やはり何と云つても兄弟だなど染々しみじみ思いました。私は約束通り次の船で日本へ帰りました。横浜まで出迎えに来てくれた弟と連れ立って、懐しきと、云いようなない喜びに胸をおどらせながら、東京へ入りました。

ところがどうでしょう、彼は私を欺いたのです。自分の邸へ連れて行くのだと申

して、市外のある私立精神病院へ連れ込んだではありませんか。

私はその時始めて弟の悪辣な計画を知って憤り、彼が時機を見て発表するからそれまでは秘密にしている、と堅く口留めしました自分の身分をすっかり院長に語ってしまいました。そして本当は私が伯爵家を相続すべき人である事まで委しく説明したのですが、院長はにこにこして私の話をただ聞いているだけで、一向取り上げてくれず、その日から私は伯爵様というニックネームで、狂人としての取り扱いを受けるようになりました。

嚴重な監視のもとに幾月かを過しましたが、弟はそれきり一度も訪ねても来ませんでした。私は憤りに燃えました。そして毎日彼への復讐をのみ考え暮らすようになりました。後になって聞いたことですが、私の一生涯の入院料は、彼の手から院長へ前納してあったのだそうです。

私はある夜、看護人の隙を狙って病院を脱け出しました。

道案内も分らず、あてもなく歩いている中に、いつか夜が更けてしまいました。どこをどう歩き廻ったかよく記憶して居りませんが、ふと小屋掛の建物にまだ灯が見えているのを見て、疲労しきっている私は夢中でその中に飛び込んでしまいました。それが今いるサーカスだったので。人目を怖れ、弟の搜索の手を逃れるために大きな狒々の毛皮の中に姿をかくしているのです。南洋踊りだなどと出鱈目な踊り

を踊る浅間しきも、その日を食べてゆくためには目を閉ぶって我慢しなければなりません。しかし鉄の処女だけは私から買って出た芸なのです。何も悪い事をしないのに、狂人として精神病院へたたき込まれるよりは、むしろ残忍極まる処刑でも、鉄の処女の方がまだしもだと思うので、弟に対する怨恨の薄らがないように、毎日あの恐ろしい鉄の扉の中に入るので。彼は私の資産を横領したのみでなく、私の一生を葬り去ろうと企んだ、それだけだつて許し難いのに、その上なお最愛の女をも奪つてしまつていたのです。

ふとしたことから、智恵子が弟の妻になつてゐる事を知りました。私は一目でいから彼女に会いたい、会つてこの顛末を物語り、智恵子の口から慰めてもらいたいと思ひました。しかし彼女に会う機会はなかなかまいりませんでした。

6

やっと私の願いが叶う日が来ました。上野の寛永寺にお茶の会がありました、智恵子がそこへ行くといふことを、新聞で知つたのです。早速上野へ参り、寛永寺の

附近をうろついでいて、永い間あこがれていた彼女の姿を見ました。この機会を外してはもう永久に会うことは出来まいと思ひ、見えがくれに従いてゆきました。智恵子は運転手に何か云っていましたが、聴てたった一人で寛永寺の門を出て、静かに帝展へ入りました。

三十年も過ぎると流行はやりというものは再び戻つて来るものでしょう。私の目に残っている智恵子はよく藤色矢やがすり紜のお召の着物を着ていました。それがまたよく似合いました。前髪を肩の上まで切り下げて、細面を幾分か丸く見せて居りました。

処がどうでしょう。今日の智恵子はやはり藤色矢餅の着物を着ているではありませんか。そして前髪も縮らせて下げています。三十年前の懐しい姿そのままの智恵子は、いま十歩を隔てぬ処にいます。私はなつかしさに思わず震えました。余り嬉しくつてじつと黙つて眺めているだけでは我慢が出来ませんでした。

夕方の人氣が少なくなつたのを見計らつて、そつと後に従いて歩きました。

別館には殊に人が少のうございました。智恵子が選手の立像の前に立つて、その男性的な筋肉に見入っている時、たまらなくなつた私はふいに智恵子の前に姿をあらかわして云いました。

『智恵子さん、私ですよ。お見忘れになりましたか？ ジョホールで死んだことになつている私ですよ』

智恵子は少しの間棒立ちになったまま、身動きもしませんでした。

日にやけたこの顔も、この声も、彼女の記憶を喚び起すには充分であったほど、その瞬間の私は昔の私にかえっていたのでした。

智恵子の顔は見る見る蒼ざめ、しつかり握り合せている両手が、ぶるぶる震えているのがはつきりと分りました。

『お憶い出しになりましたか？ 私はこうして生きていたんです。あなたの目の前にいる私はお化けでも何でもありませんよ』

彼女は額に手を当てていました。前髪の毛が微かにゆれていました。

『何だか私にはさっぱり分りません。どうぞ宅の方へ入らして下さいませ、こんな処ではお話も出来ませんから』

そう云うと智恵子は踵を返して、足早やに歩き出しました。ところでその邸へ行つては、またしても掴つて精神病院へ打ち込まれるに決っている。私は慌てて云いました。

『弟にはまた改めて会います。今日はあなただけにお話がしたいんです。智恵子さん待って下さい。東伯爵夫人！ 智恵子さん！』

私は故意と大きな声を出しました。彼女が四辺あたりの人に聞えるのを怖れるだろうと思つたからです。果してどきりとしたと見えて、周囲を見廻しながら立ち止つて、

『ではとにかく、外へ出ましょう。外へ出てお茶でも頂きましょう』

伯爵家の定紋のついた自動車は出口に横附にされていましたが、運転手の姿は見えませんでした。多分彼女の出て来ようが余り早かったからでしょう。

二人は連れ立って、人の余りいない精養軒のガーデンに入りました。

そこで智恵子に何もかも話してしまいました。彼女はただ驚いていました。勿論何も知らなかったのです。弟は私の事については一言も話してなかったと見えます。『今更もう取り返しもつきません。弟の家内になつて幸福に暮しているあなたをどうしようと云うのでもない。しかし弟は実に怪しからん非道い奴です。私の出現がどれほど彼を苦しめたか知れないが、私を生きながら葬ろうとした罪は宥せません。私を欺いて、東京へ呼び寄せ、いきなり精神病院へたたき込んで、永久封じ込めようなんて——』

『私はほんとに何も存じませんでしたの。お宥し下さいと申上げたつて、お宥し下さるわけはありません、が、またお許し下さいなどと厚かましいお願いの出来る身ではございませんけれど——』

智恵子の声は打ち沈んで、苦悶の色がありありとその美しい顔に現われていました。

『許すもゆるさないもない、もう皆片づいている今日じゃありませんか、アハハハ

ハハハ』

私の声はうつろのように響きました。

『では、どうしろと仰しゃいますの？』

『それは貴方がたのお考えに任せましょう』

智恵子は青褪めて、

『はい。よく分りました、改めて主人から貴方へお詫びを致させます。そして今の地位財産を貴方のお手にお返し申上げなければなりません。どうぞ、私をお信じ下すって暫時しばらく我慢遊ばして下さいませ』

『貴女のお心は昔に変わらないが、弟は何というか分かりませんよ。また私を掴まえようとするでしょう』

『もうそんな怖い事は仰しゃって下さいませな、私が責任を負います。そして只今のお住居は？』

『お住居？ アハハハハハ。それはちよつと申せませんな』

『ではどうしてお返事を申上げたらよろしゅうございましょう？』

『御用があつたら新聞へ広告を出して下さい、暗号でもよろしい。しかしこのまま逃げてしまおうたって、逃がしやしませんよ。あなたの蔭には私がいつでもついていると思つて下さい。どこからか、あなたを凝と見ていますから』

智恵子は夕闇の中で身慄いしました。

7

その日きり私は智恵子を見ません。随分注意していたのですが、恐らく彼女はそれ以来外出もしなかったのだらうと思っていました。

一ヶ月ほどたつても智恵子からは音信がないので、私は彼女の心を疑い始めました。私に会った時は何しろ突然の事ではあり、驚きの余り一時逃れにああは約束したものの、さて考えてみれば馬鹿々々しい、せつかく自分達のものになつてゐるのに、むぎむぎと返してしまふなんて詰らない、という欲心が起つたかも知れない。事によると、弟と一緒になつて自分を欺く気かも知れない。私はうかうかしてはいられません。ああいう人達の事ですから、どんな悪計をめぐらすかも分りませんから。人知れず搜索の手を延し、いきなり掴めるのではないかと思うと心配になつて、何となく身に危険の迫つてゐるのを感じます。しかしまたこうも考えるのです。智恵子は病氣じゃないか知ら、上野で会つた時も顔色は余りよくなかつた。そう思

うとこんどはまた違った意味で心配になり出します。

ある夜、私は思案にあまつて遂々伯爵の邸内に忍び込みました。

来客があつたと見えて、方々の部屋には灯がついていましたが、夜が更けていたので中は森しんとしていました。私は家の中の案内はよく知りぬいているので、こんもりとした植込みを通りぬけ、泉水をまわつて智恵子の居間の方へ行きました。

幸いその一つの窓のブラインドの下の方が二寸ばかり開いていましたので、私はじつと室内を覗き込みました。

客の帰つた後で夫婦は暖炉にあたりながら、頻りに話し合っていました。が、二人の顔には云いようなない当惑の色がただよつて見え、何となく憂鬱な空気にとざされていました。殊に智恵子は一ヶ月余り見ない間にすっかり瘦やせれ果てて、物凄ものいように青ざめていました。私は中の話を聞ガラスこうとして硝子ガラスに耳をびたりとつけて、きき耳を立てていました。

『私はどうしてもこの儘ではいられません、何もかも分つた今、貴方のお心が翻えらなければ、私には私の決心がございます』

智恵子の声は悲痛を帯びていました、弟は吸いかけの葉巻をポンと暖炉の中へ投げて、眉を深く寄せながら云いました。

『今更そんな馬鹿なことが信じられるか。兄はあの時死んだんだ、遺骨まで届いて、

立派に葬式もすませている、兄は確かに死んだんだ。この世にいないんだ、いいか。分ったか。もう二度とその話はするな』

『でも生きていらっしやるんですもの。私はすっかりお話を聞いてしまったんですから、貴方がどうしても私の言葉をお信じ下さらないなら、お兄様をお連れしてまいりますよ』

『今頃兄だなんて、突然現われて来たって誰が信じる。そんなくだらない事に取り合っちゃいられない、もうお前もそんな馬鹿げた事を真面目になって、心配するのは止しなさい。兄は本当に生きているはずはないんだからな』

『だって確にこの眼で見て、この耳でお声を聞いたんですもの』

『空耳つてこともある、幻想を見ることもある。この世に生存していない人間が見えたりするようじゃ、よほどお前も気を落ち付けないといけないぞ』

『狂人だと仰しやるの？ ついでに私も精神病院へ入れておしまいになるといいわ、一生涯の扶持をつけて——』

智恵子の声は剣のように鋭く、伯爵の胸を刺したらしかつたんです。

弟はすつくと立ち上つて、智恵子の方へ一歩進みました。彼の顔に怖い表情を見た私は思わずアツと小さい叫び声を出しました。弟は気が付かなかつたようでしたが、智恵子は窓の方を振り向いて、そこに私の顔を見たのでしょうか、よろよろと

立ち上りましたが、直ぐまた椅子の中に倒れてしまいました。

氣絶したのでしよう。弟がベルを鳴らしたり、女中を呼ぶ声がしたりして、俄かに家の中が騒々しくなりました。

私は裏口からこつそり逃げ出しました。

それきり伯爵邸へは行きませんでした。それから十日ばかり過ぎましたら、智恵子が死んだということが新聞に出ていましたので、非常に愕きました。他殺か、自殺か、とありましたので、思わずはっと胸を打たれました、他殺なら別問題ですが、もし自殺だったとしたら、彼女を死に導いたものは私なんです、智恵子は私との約束を果し得ず、責任を感じて、死んで謝罪する積りだったとしか思われななんです。そう考えると警^たえ直接手を下さないといつても、私が殺したも同様ではありませんか。あれ以来日夜良心にせめられて、苦しくて、苦しくて堪らないんです。私が智恵子に会いさえしなければ、何事もなかったんです、イヤ智恵子ばかりじゃない。弟にも会わなければよかったのです。私の生涯はもうとうの昔に終ってしまつていたはずなのですから、未練にも生きているばかりに飛んだ罪をつくつてしまいました。ジョホールの土になる気でさえあつたら、智恵子を死ぬほど苦しめるような事もなかったでしょうし、弟をあんな悪者につくり上げずともすんだのでしよう。一旦死んだ人間が生きているという事が抑^そも間違いの原因だったのです」

男は語り終ると悄然として首を垂れた。その顔には苦悶の表情がありありとあらわれていた。

S夫人はいつの間に取りつてあつたものか、ハンド・バックから戸籍謄本を出して、彼に見せながら云つた。

「では、この死亡となつているのが貴方なのですか？」

「はい。明治十七年生で、明治四十一年に死亡したことになつてはいます」
それだけ聞くと私達は彼に別れた。

ともかく一応事務所へ帰ろうと思つて、二人は足早やに電車道まで出て来ると、そこに一人の運転手風の男が、待ち受けてでもいたように、つかつかと前に来て帽子を脱いで頭を下げた。私はその男の顔に見覚えはなかつたが、夫人とは知り合ひだと思つて、

「直き後から帰りますから、あなたは一足お先に事務所に帰つていて下さい」
そういうなり夫人はその男と一緒に夕方の賑やかな町の中に姿を消してしまつた。

8

翌日夫人は暮れ方近くまで遂々事務所へ姿を見せなかった。

どんな忙しい時でも、朝はちよつと顔を出す例なのに、どうした事だろうと思いつながら調べものをしてゐる処へ、突然後の扉が開いて支那服を着ぶくれた大男がそくそく入つて来た、勿論それはS夫人だった。

「やつと探している、あの女の居所を見付けましたよ」

「サーカスの女でございますか？ どうしてお分りになりましたのですの？」

「貴女に話してなかつたけれど、私、実は伯爵家の運転手を買収しておいたんですよ」

そう云えば昨日見た男、あれは伯爵家の運転手だろう。円タクのにしては服装が立派だったし、態度にもどこやら丁寧なところがあつた。

「その運転手が一々伯爵の行動を報告してくれていました。伯爵が足繁げく行く家が麴町辺にある事、五番町附近で自動車を乗り捨て、徒歩で出かけるが、ある時は四五時間も待たされる。帰りには必ず『どうも狭い横町に住む奴の気が知れんな』とか『訪問者泣せだよ』とか云い訳らしく愚痴をこぼす。少し変でしょう？ どう

もその家が怪しいと思つて探らせてみたら何の事でしょう、馬鹿々々しいそこに私の探しているあの女が囿つてあつたんですよ」

「どんな女でして？」

「妖婦型のあくどいような女でした。道楽をしつくした男でも、その女にかかつたら離れられないそうですから、女遊びを知らない伯爵が夢中になるのも無理はないでしょう。シンガポールに出発したように奥様の手前をつくつて、実は目と鼻の処へ家を持たせ、豪華な生活くらしをさせているんです」

「伯爵も隅に置けませんわね」

「しかもその女には支那人の情人があるんです。同じサーカスで奇術に出ていた優男やさわとこなんです、今上海シャンハイで興業しているんです。伯爵は無論そんな男のあることは知らないし、女の方でも秘密にしているということが分つたから、私は今日その男の友人だと云つて訪問したんです。女は喜んで直ぐ会いましたよ」

いつもながら夫人の大胆なものには敬服してしまった。私はちよつと冗談のように云つた。

「化の皮がはがれやしませんでしたの？」

「そこは都合がいいんです。支那語と日本語をまぜっこぜにして、饒舌しゃべつてやつたもんだから、奴さん、すっかり真物の支那人だと思ひ込んじゃつたんです。それが

ら突然私は威嚇してやったの、伯爵夫人を殺したなア貴様だなツ——て」

「えッ？ その女が殺したんでございますか？」

私は吃驚して訊きかえした。夫人はその問には答えないで話をつづけた。

「すると女は青くなつて弁解するんです。殺したのは私じやない、憎い憎いと思つてたけれど、私は何もしませんっていうんです。私はぐんぐん取ツちめてやると女もなかなかの強者したかもので、策略家ですよ。咄嗟に考えたんでしようが、金庫からお金を出して私の懷中に押し込み、殺したのは伯爵ですよ。と耳もとへ口を寄せて囁きました」

「まア！ 伯爵だったんですの？ なるほどそうかも知れませんわ。きつと奥様が邪魔になり出したんでしよう、それでなくてさえ財産をお兄さんに返してくれとやかましくせめていたし、伯爵は慾があつて返す気はない、しかしこの儘捨てておいたら、あの奥様が承知するはずがありません。女中なんかの噂には、この頃は始終御夫婦で何事か云い争いをしているといいますから、伯爵は奥様を持てあましてらしたんじやありませんか、そこで密かに毒殺して、その罪を蔭の男、即ちお兄さんに塗りつけ、こんどは殺人罪で永久にこの世から葬り去ろうという計画だったのでございましょう。恐しい人ですわね」

夫人は私の説を笑いながら聞いていたが、

「まだ犯人を伯爵だと断定するわけにはゆきませんよ。最初から私には九分通り判断はついていたんですが、あとの一分が分らないために苦しんでいるんです。まあ自然に解決がつくまで待つていらっしやい」

そこへ給仕が夕刊を持って来た。

夫人は直ぐそれを広げて見ていたが、無言のままくると差向^{さしむ}けて、ある箇所を指で押え注意を与えた。

「まあ！」私は思わず驚きの眼を見張った。

そこには『狒々の怪死』という題で、僅か数行の文字が書かれてあつた。浅草で興行中のサーカスの愛嬌者、狒々男が評判の『鉄の処女』を演じている最中、おとしあな陥穽から脱け損い、心臓を剣で突き刺れて即死したというのだ。過失だともいうし、またある一説には人気を嫉む者か、あるいは女関係の恨みから、肝心の脱け穴をこの日に限つて作つておかなかつたためだとも云う。取り調べ中だとあるが、夫人と私の頭には偶然か故意か、何かしら、そこに分ることがあるように思えた。

9

何事か深い決心をしたS夫人はその晩遅く、助手の私を伴って、伯爵を訪問した。伯爵は直ぐに自分の居間に通して、

「何か、手がかりでもありましたか？」

心配そうに訊くのだった。恰度二人がその部屋に入った時、伯爵は等身大の亡き夫人の肖像画の前に座って、香を焚き冥福を禱いのっていた。香の煙は美しい彼女の胸から顔へ、うつすりと立ちのぼっていた。

私はその空々しい、殊勝しゆしょう気な行いを侮蔑の目で眺めた。

S夫人はいつもの優しい態度で、静かに伯爵に云った。

「伯爵、もう好い加減な処で幕に致たそうではございませんか」

「――」

「あなたのお兄様はこの通り自殺しておしまになりました」

夫人は懐中から夕刊を出して、赤い線をひいた処を指した。

伯爵の顔色は見る見るうちに変わった、夫人は穏かな調子で、彼の口から物語られた一什いちじゅう始終を話した。

伯爵は沈黙^{ひそし}久ゆうして後、額の汗を拭いながら云うのだった。

「妻を殺したのは兄でもなく、また私でもありません。実は自殺なんです。上野で
凶らずも兄に出会って、すべての物語りを聞かされ、正直な妻は兄にすまない、せ
めて自分達の財産全部を返して、お詫びしなければならぬと云ってきかないので
す。私は慾に目がくらんで我意を通そうとする、その板挟みになって苦しみ、悶え
ぬいた揚句、自殺してしまつたんです。妻は私よりもつと苦しい立場にありました、
結婚こそしないが、死んだと思つていた許嫁の夫が、現在生きていて、しかもああ
した惨めな生き方をしているとあつては、迎も見ていられなかつたのでしよう。私
と顔を合せると妻は直ぐその問題を持ち出しては、責め立てるのです。」

ふじやホテルに電話をかけたのは私でした。妻はどうしても急に会い度い、と云つ
て聞かないで。途中まで迎えに行つて、二人は横浜へ行つたのです。

途中からもうその問題が始まつて、妻は相変らず自分の主張を少しも曲げない、
私は私で、自分の云う事を頑張り通したのです。最後には私も疝癪^{かんしゃく}を起して、もう
一度兄を探し出して精神病院へ入れてしまふんだと云いました。

妻は悲しそうな顔をしていました。

聽て夕飯を食べるために、グランド・ホテルの食堂へ行きました。客は殆ど西洋
人ばかりで、知り合いの人には誰れにも逢いませんでした。

食事中妻は一言もいりませんでした。深い決意の色があらわれているのを見ましたが、打棄うつちやっておきました。私も腹を立てていたので、私の目の前で妻が薬を出したのを見て、私への面当つらあてにそんな真似をやるのか、勝手にしろと思っていました。処が狂言ではなく、妻はそれを一と息に吞んでしまつたんです。唇の処へ持つて行く時、ちよつと恨うらみをふくんだ眼をして、私を見ました。私はいきなりその手を押えようと思つて、フと気がついたので、四辺の食卓には多数おおぜいの人がいるではありませんか、ボーイも背後に敬々うやうやしく立つて見えています。そんな処で騒ぎ立てたら、それこそ私の身分も分り、早速新聞種です。そしていろいろの事をほじくり出されては堪りません。妻も生き恥を晒すことになります。体中に油汗をにじませながら、黙つて凝と見守つていなければなりません。私のような冷血な男でも、最愛の妻が目の前で毒を仰ぐのを見ながら、手を束つかねていなければならぬというものは、何という恐しい事でしょう。

私の体は凝結したように強張こわばつて、頬は痙攣して引きつってしまいました。こんな残酷な刑罰がありますか、後になつて考えたことですが、賢い妻は尋常一様の事では、到底私の意志を翻えし得ぬと知り、反省を促す最後の手段として故意とこういう場所を撰んだのではないかと思ひます。

サロンへ戻つてからも妻は口をききませんでした。ホテルを出る頃はよほど苦し

そうでしたので、円タクを拾い、横浜から邸まで付き添って、私が門内まで送り込んだのです。

殆ど意識を失いかけている妻を無理に引き立てて、玄関の扉の処まで歩かせ、ベルを押して私は門の外へ逃げ出し、そこから見ていました。すると小間使が出て来て、妻がすうつと扉の中に吸い込まれるように入ったのを見届けてから、安心して、そのままクラブへ参り夜を更しました。

なお万一の場合を考慮し、疑いを避けるために妻と一緒にいた時間を、五番町の妾宅に居ったように、よく妾に云いふくめておきました。

しかし妻が自殺したとなると、ちよつとまた困ることがあるのです。いずれ家庭内に何かあったと怪しまれるでしょう？ 結局兄の問題などが表面に出て来て、暗闇の耻を明るみへ晒さなければなりません。私はそれを何より怖れたんです。そこで策略をめぐらし、他殺にしてみました。犯人として兄を掴まえてもらおう。そしてどこまでも狂人としてしまえばいいと思っていました。

何しろ兄の行衛ゆくえが分らないということは、私にとって非常な不安なので、S夫人に探し出して頂いて、直ぐ警察の手で捕縛させ、精神病院の院長に鑑定させれば、何もかも私の思い通りになると考えたのです」

S夫人は最後まで静かに、微笑を浮かべながら伯爵の話聞いていた。彼女は多分

初めからこうと見透しをつけていたのだろう。私達の仕事はこれで終った、あとの事は伯爵自身に任せることにして、二人は邸を辞した。

鳩
つ
か
ひ

悪魔の使者

「くそツ！ また鳩だ。これで四度目か」

立松捜査課長は、苦り切った表情で受話機を切ると赤星刑事を顧みて、吐き出すようにそう言った。

平和の使者と言われる鳩が、悪魔の使となって、高価な宝石を持つ富豪の家庭を頻々と脅かしているのである。

この訴えを聞いてから早くも一カ月余りになるが、未だに犯人の目星さえつかず、あせりにあせっている矢先、またしても今の訴えだ。

「今度は誰です？」

赤星刑事は、眼を輝かしながら、急ぎ込むように尋ねた。

「杉山三等書記官の処だ。氏は目下賜暇帰朝中で東京にいるが、明後日の東洋丸で帰任することになっている。君も知つての通り米国娘と婚約中なので、お土産に素晴らしいダイヤを銀座の天華堂てんかどうから買ったんだ。それが昨日の午後だ。ところが今日五時頃外出から帰ってみると、大きな包みが届いている。それが君、例の鳥籠なんよ。中にはお定まりの伝書鳩が一羽入っていて、その脚に手紙と小さな袋ぶくろが結え

てあり、

汝が昨日求めたダイヤをこの袋に入れ、鳩につけて放すべし。もしこの命令に反かば、汝の生命無きものと覚悟せよ。

と例の凄^{しみ}い脅^{おそ}し文句^{ぶんこう}が書いてあると言^いうんだ」

捜査課長は立上りながら、外套に手を通すと、

「さ、これから杉山氏の処へ急行だ。君も一緒に頼む」

緊張に面を硬ばらして言った。

二十分の後。

立松は赤星刑事を伴って、グラランド・ホテルに杉山書記官を訪ねたのである。

そこには例の鳥籠^{とりかご}を囲んで、早くも二三の人が、騒^{さわ}がしく話し合っていた。

瀟洒^{しょうしや}な服装をした背の高い男がこのホテルの支配人、でっぷり肥った五十がらみ

の赤ら顔が宝石を売った天華堂の主人、三十七、八と思える洋装の美婦人が保険会社の外交員岩城文子である。

「僕は、僕は、こんな脅^{おそ}し文句^{ぶんこう}で絶対に出すのは厭^{いと}です、昨日ダイヤを求めると、すぐ保険を附けたのです。ですから、この手紙を受取ると、天華堂さんと、岩城さんに急いで来て頂きました——」

杉山は、すっかり興奮していた。別段紹介したわけではないが、天華堂主人と岩

城文子とは立松と赤星の方を向いて丁寧^{ていねい}に頭を下げた。赤星はこの二人を注意深く見た。天華堂の節くれ立った大きな太い指には三カラットもありそうな立派なダイヤが光っていたが、岩城文子の華奢^{きゃしゃ}な細い奇麗な指には一つの指輪さえなかつた、こんな指にこそダイヤも引立つだろうのに——、と思った。赤星にじつと見られて、彼女は心持ち顔を赤くしながら、微笑してつつましく控えていた。

立松は、鳥籠及び白絹の小袋、手紙を丹念調べていたが、

「これを持って来た者の人相その他は分りませんか？」

この間に、支配人が一膝乗り出した。

「御出発前の杉山さんには、毎日色々の贈物が届けられますんで、別に気にも留めず、ボーイが受取ったようですが、眼の下に青い痣^{あざ}のある大きな顔の男だと申して居ります」

この時杉山は立松の方に向をかえて、

「いま、天華堂さんから鳩に就いての恐い話を聞かされたところですが——、一体事実なんですか？」

表面平気を粧^{すくま}いながらも、内心の慄^{すくま}からざる不安は、その面持でハッキリ見てとれる。

立松は眉を顰めながら首肯^{うなづ}いて、

「困った事ながら事実です——一ヶ月ほど前有名な実業家富田氏が、高価なダイヤを求めた数日後、同様の方法で脅迫されました。氏は警察の保護を受けてその要求に応じなかった処、無惨にも何者かに殺害されました。」

続いて同じ手段でまた一人、そして第三番目が、百万長者宝田銀造さんの夫人です。この人は先方の要求通り、鳩にダイヤを附けて放したため、未だに無事です。で、貴君が四番目に見込まれたというわけです」

額を押えていた杉山氏の手は、俄に身辺の危険を知って、微かに震え出した。

「何とか、——何とかお助け願えないでしょうか？」

「全力を挙げています」

「鳩を飛行機で追いかけたら、どうでしょう？」

「海か沙漠ならいざ知らず、東京及びその近郊では絶対不可能です。犯人はこの弱点を巧におさえている強^{した}か者、いかにすれば犯人を誘^{おび}き出せるかが問題です」

立松は思い出したように煙草に火をつけて、

「このダイヤを買ったのを知っている人は何人ありますか？」

杉山に訊問するように聞いた。

「僕と天華堂と岩城さんと——」

この時天華堂が横から口をはさんだ。

「手前共の店員は大抵存じて居ります。それから——、もう一人——」と云つて、ちよつと廻りを眺めて、天華堂主人は何か躊躇した。

「もう一人は誰だ？」

「さえきだ佐伯田博士でございます。——鳩の脅迫が評判になつてからは、店へ出入する者には特別の注意をしています。昨日、杉山さんがダイヤをお買い上げになつた時でした。一人の立派な紳士がずっと入つて来られ、『ショー・ウインドウにある真珠の頸飾を見せてくれ』と云うのでお見せしたら、『僕はこれと恰度同じようなのを買ったから、値段と品質とを較べてみたいと思つたんだ』と、見ただけでさつさと歸つて行くので、時節柄怪しいお客さんだと思ひ、調べたら佐伯田さんというお金持の弁護士さんで、手前共仲間の大きい店へは悉く行つたそうです」と、天華堂主人は少し得意になつて説明した。

赤星は天華堂の顔をじつと見ながら云つた。

「その佐伯田博士というのはどんな人だつた？」

「瘦せた背の高い、がっちりした人です。鼻眼鏡をかけていて、ちよつと西洋人みtainな顔をしていました」

「店員の他に知っているのはその人だけだな、イヤ有難う」と立松は質問を打ち切り、「して、杉山さん、貴方はどうなさいます？」

と訊いた。

「この鳥籠は気味が悪いから警視庁で預つて下さいませんか。——脅迫状態で予定変更も余り意気地がない。僕は、断然明後日出発します」ときっぱり云つたが、その顔は青褪めていた。

「ああそうですか。貴方が安全に船に乗込むまで、警察の方で保護します。赤星君、万事君に任せる、無事に出発させて上げろ」

杉山はほっとしたように微笑して言った。

「いやどうも、有難うございます。そうして下されば全く安心です」

天華堂は眉をよせて心配そうに、

「次ぎの船になすつたらいかげす？ この際外出が一番危険です、当分家の中にいて様子をごらんになったが安全だと思えますがね」

「まさか途中で殺されることもあるまい。それに赤星さんがついていて下さるから、心配はないよ」

と杉山は幾分朗らかになった。

人垣に囲まれて

赴任の朝、グラランド・ホテルの玄関に警視庁の自動車差廻され、彼の部屋では赤星が元気な声で話していた。

「横浜まで、刑事二人と私と、都合三人で護衛して行きますから、大丈夫ですよ」

杉山はうかない顔をして、

「ご厄介になつてすみません。——臆病のようですが、どうも気になつて、昨夜も遂々眠れませんでした。夜中に誰か忍び込んで来るような気がしたりしてね——」
と云つて笑つたが、その声は空虚のように響いた。

自動車に乗る時、杉山は赤星の指図に従つて彼と刑事との間に腰かけた。

「前の補助椅子にもう一人の刑事を乗せるから、杉山さんは人垣に囲まれるわけだ、これなら安全でしょう？」

三人の刑事に保護され、無事にホテルを出た。しかし出帆までにはまだ大分時間があるので、運転手は気を利かせ徐行していたので、後から来る幾台もの自動車に追い越された。京浜国道を真直ぐに鈴ヶ森まで来た時、突然、ボツーンと物凄い音、アツと思う間に車体はガタゴト揺れ出した。杉山は前にのめり忽ち死人の如く青褪

め、一人の刑事は窓硝子ガラスに頭を打ちつけ、一人は掴まっていた金の棒で強たか額を打った。

「タイヤを調べていた運転手は愕いて叫んだ。

「タイヤだ、タイヤをやられた！」

「やられた？」

赤星は吃驚びくりして訊き返した。

「射ちやがったんだ、後から——、穴があいている、穴が——」

「えッ！ 穴があいてる？」

杉山の右側にいた刑事は車から飛び降りて見に行こうとした、「降りちやいかん、中に入ってる！」

刑事は夢中だったので赤星の声も耳に入らなかつたと見え、運転手と並んで一心にタイヤを見ていた。その時、反対の方向から一台の大型自動車がやって来た、誰も乗っていない空車のようにみえたが、擦れ違う時に窓から白い手が、すうツと出た、と思った時杉山がアツと声を揚げ、

「やられた！」と叫んで、肩を押えた。その掌にはべつとりと血が付いていた。彼はよろめきながら赤星の陰にどつと打ち倒れた。

白い手

赤星の報告を聞いていた立松捜査課長は憤然として立上り、室内をあちこち歩きながら続けざまに舌打ちした。赤星は彼の怒りを額に感じながら俯向いて言葉をついだ。

「犯人は自動車で吾々の後を尾けていたんだ。皆の体が邪魔をして杉山氏を射つのは難しいと知るや、車をぬきながらまずタイヤをピストルで撃つてその方に心を奪わせ、今度は悠然と後戻りして来た。刑事が車から降りたので杉山氏の体は完全に射撃の的になったわけだが、まんまと敵の罠に掛つたのが残念でたまらんです」

「白い手だけしか見なかったのか？」

「見えなかった」

「円タクか、自家用か、運転手の姿も見ないのか？」

「杉山氏が起ち上つたので、体の蔭になってよく見えなかったのですが、四角ながつちりした肩つきだけは目に残っている。何しろ咄嗟の事で——」

「自動車番号は？」

赤星は額の汗を拭い、忌々しいまいまそうに、

「それが——、分らないんだ。番号札の一方の螺旋釘ねじが外れていて、ぐらぐらと縦に揺れるもんだから、数字を読むことがまるで出来なかつた——」

立松は苦り切つて黙つてしまった。机の上には昨日の新聞が広げてあつた。

またしても鳩の脅迫！

というみだしが、まるで自分を嘲つていようように赤星は感じた。

「必ずこの失敗は取り返す。どんなことがあつても——、犯人を捕えずにはおかない。どうぞ、暫く辛棒して下さい」

そこへ給仕が一葉の名刺を手にして入つて来た。

「赤星さん、この方が、至急何かお知らせすることがあるそうです」

赤星は課長室を出て行つたが、間もなく戻つて来て立松の前に名刺を置き、

「本田桂一という学生だが、杉山氏が射たれた時恰度通りかかり、犯人の顔を見たつて云うんです。委しく聞いておきました。その学生は鈴ヶ森の近所の小さなアパートで自炊しているそうです。——今、階下で新聞記者連に取巻かれてるからきつと、夕刊にその記事が出るでしょう、ただ顔を見た、という事だけは云つてもいいが、その他の事は決して話してはならぬと嚴重に口留めしておいた、その記事を見たら犯人が狼狽うろたえるだろう」と云つて、赤星は急に活気づいた。立松は焦り焦りし

ながら皮肉な笑いを唇に浮べて、

「売名だろうよ。殊に犯人の廻し者かも知れない、迂闊に信用すると赤ツ恥をかくぞ」

赤星は黙っていた。部屋の隅では鳩が不安そうに羽ばたきしている。

「ちよつと、鳥籠を借りて行きます」

立松の返事も待たないで鳥籠を風呂敷に包んで出て行った。

二時間ばかりして戻つて来た時には課長はもう部屋にいなかった。鳥籠だけをもとのところに返しておいた。

赤星は杉山を見舞いに行く途中で夕刊を一枚買った。果して今朝の出来事が大きく出ている。犯人を見たという学生の写真をじつと見詰めていたが、やがてにっこり笑うとそれをポケットに押し込んだ。

病院の薄暗い廊下の曲り角で一人の婦人に出遇つた、それは思いがけない岩城文子であった。彼女はこやかに会釈して、

「杉山さんとはんだご災難で——、夕刊を見まして吃驚したんですの、それでちよつとお見舞に出ました」と言った。手には美事な花束を持っていた。

「杉山氏は面会謝絶で会えませんが」

「まあ、そんなにご重態なんですか?」と声を落して心配そうに眉をよせ、「赤星さ

ん、直ぐお帰りになりますか、私この花束だけをお届けしてまいりますから、ちよつとお待ち下さいませんか？ 杉山さんのことでお話もありますから——」と云い捨てて病室の方へ急いだ。

赤星が長い廊下をぶらぶら歩いていると岩城文子は直きに引返して来た。

「犯人を見た人があるそうで、私ホツといたしました。どうぞ赤星さん、一日も早く逮捕して下さいませ。先刻天華堂さんとも話し合つたのですが、こんな事が度々あると私共の商売はあがつたりですわ、ほんとに困つてしまいますのよ」

「よく分つています」

少し間を置いて赤星が言った。

「杉山氏についてのお話をうかがいましうか」

「天華堂さんから聞いたのですが、杉山さんは外務省でも評判のいい方だそうですの、美男子で、手腕家で、お家柄もいいというので——、奥様になりたい人が沢山あるそうですの、だから外国人との結婚に不満を懐いている者の仕業ではないかかというんです」

「そういう人の心当りでもあるんですか？」

「いいえ、別に——、ただ御参考までにお話しするんですよ。思いつめた若い人は何でもやりますからね。——さもなければダイヤ狂の仕事だろうと思ひます。殊

によるとこの犯人は高価な品を奪ってお金に替えようというのではないかも知れませんがね」

「何故ですか？」

「だって、——奪ったダイヤはどこからも出て来ないっていうじゃありませんか」
赤星は苦笑して、

「貴女は今でも宝石がお好きですか？」

「いいえ、嫌いになりました。何故と言つて、お金を宝石に替えて持っていました。が、いざ売ろうとすれば、やれ旧式だの疵があるの、色が悪いのとケチをつけて踏み倒されてしまいました。私はダイヤを買つておいたばかりに全財産を失い、こんなに貧乏してしまいましたのよ。だからあんなものを持つものではありません、いまでは見てもぞつとします、買う人の気が知れませんか」

なるほど、それでこの人が指輪をはめていない理由が分つた。細そりとした、いい恰好のこの指に宝石夫人といわれるほどのダイヤをはめていたのかと思ひながら、赤星は美しい彼女を眺めた。

二本の細い足

夜になって本田桂一は、漸く鈴ヶ森のアパートへ帰った。宿の主人は夕刊を手にして彼の部屋にやって来た。

「この写真はちつとも本田さんに似ていないな」と云いながら、しきりに夕刊に出ている写真と実物とを見較べて首をひねっていた。しかし主人は自分の家の名が新聞に出ているのをひどく喜んでいようだった。

「僕の留守中に誰か訪ねて来なかった？」

「珍らしく幾人も来た、中には本田さんのお部屋はどこですか、なんて訊いて帰った人もあった。大層有名になったもんだ、だが、ほんとに犯人の顔を見たのかね、どんな奴だった？」

「それや言えないさ。絶対秘密だからな、警察から堅く口止めされているんだ。それから小父さん、今夜はひとつ夜中よるじゅう起きていてもらいたいんだがなア、犯人が掴まると直ぐ警察から呼出しが来ると思うから——」

「冗談じゃない、そんなに早く掴つてたまるもんか、顔を見られたと知りや犯人だつて油断をしまいからね」

「警察じゃ直ぐ非常線を張るって言ってたぜ、目星がついたらしいんだ」

「へえ、ほんとに？——じゃ起きてるとも、家に泊っている人の口から犯人逮捕の端緒を得たなんていうと名誉だからね。また新聞に出るよ」

主人は新聞を畳んで大切そうに懐中にし、たてつけの悪い扉をガタピシやりながら出て行った。

本田は部屋に蒲団を敷いて、着のみ着のままでごろりと横になった。低い天井が顔に被ぶさるようを感じる、電燈を消して眼だけは閉ぶっていた。帳場の柱時計が十二時を打った、やがて一時を聞き、二時を聞いた、カーテンのない窓ガラスに三日月の淡い光がさしている。

ふと彼はかすかな物音を聞いた。屋根の上を忍び歩いてでもいるような、猫だろうか？ それにしては少し重みがあり過ぎる、本田は蒲団を脱け出して暗い隅に蹲った。物音はぴたりと止り、またもとの静けさに返ったが、少時しばらくすると今度は細い蛇のようなものがぶらりと窓に垂れ下ってきてゆらゆらと動いた、よく見ると蛇ではなくて、黒い綱だ。するとまた頭の上でミシリミシリと音がした、続いて綱よりは太い二本の足がぶら下り、綱を這うすくちやみってすると降り、窓枠を足がかりにして苦もなく室内に忍び入った。薄暗闇うすくらやみなので、その男の年齢も容貌もよくは分らないが、片手に縄を持ち、片手に磨とぎ澄とました大きな海軍ナイフを握りしめ、蒲団の上をきつ

と睨んだ、やがてナイフを逆手に持ち直し、息を吸ったと思つたら、ハッシとそれをたたきつけた、刃物は蒲団の上にならずりと突立つた。本田は敢然と起立つて飛びかかり、全力をこめて組みついた。真黒い二つのかたまりは上になり下になり、もみ合った。

「畜生！」

本田は相手を振り伏せ、力まかせに横面を張り倒した。男は唸り声を立てて動かなくなつた。彼は息を切つて、ナイフを拾い上げ、電燈をつけた。ぱつと明るくなつたので男は気がついたがもう抵抗する力はなかつた。二十四五歳位だろうか、ぼろ洋服に破れた毛編のジャケットを素肌に着ていた。鼻から耳へかけて大きな切疵のあとがあつた。

「起きろ！」

本田はナイフを握りしめて怒鳴つた。男は流し眼にじろりと見上げたが、それでも素直に起き上つて坐つた。両方の膝頭はぶるぶると震えている。青い顔に赤い疵が目立つた。

「貴様、俺を殺しにやって来たのか？ 誰に頼まれたんだ？」

男は答えない。

「何故黙っているんだ、云え！ 云わないと打ち殺すぞ！」

相手は強情に黙りこくつて答えない、本田は跳りかかつて、

「この野郎、何故口をきかないんだ！」

襟首を掴んで、ぐいぐいしめつけた。男は苦しそうにもがきながら、咽喉を指し、頭を垂れた。

「なんだ、貴様、唾わか？」

男は哀れつぽく黙首うなずいた。半信半疑だがとにかく、主人と二人で始末をつけようと帳場へ引立てた。

「さア、先に立つて歩け！ 静かに梯子段を降りろ、振り向くとこれだぞ！」

ナイフを振り翳して見せた、しかし、別段逃げ出そうとするでもなく、おとなしく命令に従い階段を降りて帳場の方へ行つたが、起きているはずの主人は雷のような躰いびきをかいて眠こんでいた。

「小父さん、起きてくれ、小父さん！」と喚んだが、なかなか眼を覚まさない、唾の男は両手で頭を抱え床の上に帰伏しているの、本田はちよつと気をゆるした。帳場に入って主人をゆり起そうと屈むと、

「生意気な真似をしやがる、赤星の野郎！」

という声があった、ハツと思つて振り向こうとした途端、後頭をがんと破れるように殴ぐられ、それなり意識を失ってしまった。

唾の権

「気がついたかね、赤星君、酷いめに会ったなあ、僕はよもや君が本田という学生に扮はけているとは思わなかった。怪我をしているのは赤星刑事ですよって云われて驚いて来たんだが、——君は犯人を誘き寄せるには成功した、しかし、惜しいことだった」

赤星は黙っていた。傍にはこれも同じく頭を繃帯でくるくる巻いた主人が横たわっている、言葉をかけようとしたが舌が重くって物憂い、体を起しかけたら忽ち眩暈めまいがして前倒のめりそうになった。立松が葡萄酒を飲めと云った。少し飲んだら幾分明瞭はつきりした。「よほど長い間気を失っていたんですか？」

「さア、主人は午前四時頃警察から来たと言つて叩き起され、門を開けようとするど、いきなり棍棒で殴られたんだそうだが——君はその前にやられたんじゃないかな」

「それじゃ僕を二人がかりで殺そうとしたんだ。一人は門から入り、一人は屋根伝

いに窓から入って——」

立松は驚いて、

「二人だって？」

赤星は溜息を吐いた。

「僕はこの計画に自信をもってはいなかった。だから誰にも話さなかったんだ。しかし、鳩の追跡は鷹でもない限り到底不可能であるから、犯人を誘き出して捕えるより方法はないと考えた。で、十日ほど前から本田桂一と名乗ってこのアパートを借り受け、密かに次に起る事件を待っている、果して杉山書記官が襲われた、そこで本田という学生が犯人の顔を見たと新聞に書き立てさせたのです。多分犯人は本田を襲うだろうと思つたから——。何故自分の家を用いず、アパートを舞台に選んだかというのに、アパートには人が多勢いるからこつそり始末をつけにやつて来るだろう。それがこちらの望む処で、一人や二人を相手なら警官の手を煩わさなくてもすむ。来るか来ないか分らない犯人を待つのに大騒ぎするのはイヤだ。僕一人でやつつけよう、と高を括つたのが失敗だった。しかし、この次ぎこそはうまくやります」と言つて昨夜の出来事を簡単に語つた、立松は膝を叩き、

「鼻から耳へかけての切疵、——唾、——海軍ナイフ、——唾の権だよ。やはり彼奴等の仕業だったのか」

「彼奴はほんとの唾かね？」

「偽唾さ。始末にならない野郎なんだ」

「ずきずき痛む頭を押えながら赤星はふらふら起ち上り、

「居所が分つてますか？」

「分つてる。が、恐らく彼奴は鳩つかいの手先だろう。あるいは君を殺す仕事だけを請負っているのかも知れない。とにかく彼奴を捕えて泥を吐かせたら何か得るところがあるだろう」

「もう唾の権は易々とは見つかりませんまい、鳩つかいは彼奴を隠すに定まっているから」と云つて今度は主人に向い、

「小父さんはどんな奴に殴られたんだ？」

「アツという間だったから、よく見る暇も何もありません、大きな顔で、眼の下に痣があつただけは覚えてる」

「眼の下の痣——杉山氏へ鳩を届けた男も眼の下に痣があつた。——とにかく唾の権を捕えることだね、僕は早くこの頭の痛みを癒して、これから大学の研究室に行かなければならない」

「無理をしちやいかん。医者は絶対安静を申渡して帰つたんだ」

「ですが、今日行く約束なんだから」

「事情を話して代理をやり給え」

「イヤ、行つて来る。鳩の研究を頼んであるんだから、代理じゃ駄目ですよ」

ボカ士

農学部研究室を出て来た赤星の顔にはかくしきれぬ喜びの色があり、頭の痛みさえ忘れる位元気になった。家へ帰ると火鉢の前にどっかと坐り今朝の新聞を広げて見た。鳩に関する記事は何より先に目に入る。

一時重体を伝えられた杉山書記官は幸にも経過良好で数日中に退院するという。氏は再度の危険を怖れて立松捜査課長等の反対にもかかわらず、退院と同時に問題の鳩にダイヤをつけて放すことになった。

他のページには大の男が負けて鳩にお辞儀をしている漫画が出ている。赤星は舌打ちをしながらその新聞を放り出した。そこへ立松が訪ねて来た。

「気分はどうだね」

赤星はちよつと頭を下げ居ずまいを直した。

「癪に触るじやありませんか、この漫画——」と云つて、投げた新聞を拾つて漫画のところを示しながら、

「吾々が生命を賭して戦っているのを、世間はちつとも汲んでくれないんだ」

「仕方がないよ。——時に、今、杉山氏を見舞つて来た。鳩は何日頃放したらいいか君に訊いておいてくれ、と云つていたよ。君、ダイヤをつけてやっても大丈夫かね。どういふ戦術が君にはあるんだか知らないが——」

赤星はにこにこ笑いながら、

「余り失敗ばかりするんで残念で堪らない。しかし、今度はうまくやる積りです。万事最後に話しますが、ダイヤは偽物を造つてあるから、奪われたところで大した損害にはならないんだ」と云つたが、急に話を変え、

「唾の権の居所は分りましたか？」

「居所は分つてる。お茶の水の橋の下だが、昨夜出たぎり帰らないんだ」

「そんな事だろうと思つていた。もう彼奴はそこへは帰らないでしょう」赤星はそれなり口を噤ぐんで考え込んでいたが、ふと顔を上げると少し改つた口調で、

「僕はやつとの事であの鳩がどの辺からやつて来たか、略々見当がついたのでこれから調査に出かけるんだ。それで鳩を放す日は僕に定めさせてくれませんか。当日数名の刑事と共にそこへ先廻りしてはり込んでいようと思ふんです」

「どうして鳩舎のある場所が分ったんだ？」

「まだはつきりとは分っていないんだが、松本農学博士に調べて頂いた結果、おおよそ大凡の見当はつきまりました。あの三つの鳥籠は鳩が来た時にはきれいだが、一日、二日と経つと不思議なことに隅の方に真黒い灰のような煤のような軽いものが溜つて籠の中は段々薄黒くなる。その黒いごみを掻き集めておき、それから鳩の脚だの指の間だのにこびり付いていた土を落し、一緒に博士の処へ持って行って調べてもらいました。ところがそれは灰でも煤でもなく土だった、黒土、——土地の者はボカ土と云っているが、東京附近のある処一帯はこのボカ土なんだ。風の吹く日はそれが空中に舞い上つて、四辺は真暗くなる事さえある。鳩の翼の間にもぐり込んでいたものが自然に落ちたり、羽ばたきする度に落ちたりして、それが籠の中に溜るんだね。それから最初に来た鳩の胃袋から出た軍配虫、それ等から想像して見当がついたが、どこに鳩舎があるかという事はこれから探さなければならぬ。確定した時杉山氏に鳩を放して頂きましょう」

放し鳩

肩の疵もまだ癒えず、繃帯も脱れないのに杉山は退院し、その日の夕方には鳩を放すことに決定した。それが新聞に出ると問題の悪魔の使者を見ようという人達が早くもホテルの前に集った。見物人に交つて共犯者も見に来るに違いない、表面飽くまで鳩を放つことに反対を唱えていた立松は群衆に姿を見られるのは面白くないので、杉山の室にかくれていて何かと指図をしていた。

オドオドとしている鳩を押え、立松と杉山は三人がかりでダイヤ入り的小袋をしつかりと縛りつけたので、一層驚いて恐がり狭い籠の中でバタバタ暴れていた。

立松は何気なく鳥籠を抱え屋上庭園へ昇りかけたが急に思い出してそれを杉山に渡し、自分は人目につかないところに立って低声こゝえで合図をした。

「さア、杉山さん、放して下さい！」

杉山は籠を開けて鳩を掴んでパツと空へ向つて放した、鳩は一二度羽ばたきをしたが、空中に大きく円を描いてどこともなく飛び去った。

中洲の森

グラント・ホテルの屋上から鳩を放そうとしているその同じ時刻に赤星と数名の刑事を乗せた二台の自動車は甲州街道を真鷲地まっしぐらに目的地へと急行した。

「赤星君。君はどうして鳩舎を突とめた？」と一人の刑事が訊いた。

「伝書鳩を飼育している家は沢山ないからな。だが、僕は最初犯人自身が鳩舎を持っているものとはばかり思い込んで、まさか他人の鳩を盗んで使つていようとは気がつかなかつた。——ある金持の若夫婦が道楽に十数羽飼つているが少し飽きたので、地所続きの『中洲の森』という淋しい森の中に鳩舎を移したところが、最近頻りに盗まれる、もう五羽もいなくなつた、という噂を聞き込み早速その家を訪問して主人に面会を求め、盗まれた鳩の年齢、特殊の習慣、羽色等について委しく訊いてみるとびつたり符合していたんだ」

「頭のいい鳩つかいだね、それじゃ丸儲けだ」

「盗んだ鳩を使つていられちや捜査は一層困難だからね」

「だが、君、杉山氏は夕方鳩を放すんだらう？　もう鳩舎に帰つていやしなかなあ、一分間に七町位飛ぶそうだから——、吾々が先方へ着いた頃には、已すそに犯人は

ダイヤを握つて立ち去つた後だつたなんて事になりやしないかな」

「大丈夫さ。伝書鳩なら鳩舎に帰るだろうが、杉山氏の放すのは土鳩だよ。僕が買った鳩だから帰るとしたら鳥屋の店だ。いつまで待つたつて『中洲の森』には帰りつこないから安心さ。今頃犯人はまだかまだかと首を延ばして待つてるだろうよ」

「君、鳩をすりかえておいたのか？」

「そうさ。この捕物は日が暮れてからでないと駄目だし、鳥は夜放すわけにもゆかないからね」

思い思いの服装をした五人の刑事は自動車を途中で乗捨て、赤星を案内役に闇の深い森の中に踏み入つた。樹木は星明りを遮つて四辺は真暗だ。刑事等は手を差し延べて樹にぶつからないように用心しながら、奥へ奥へと進んで行つた。

赤星は突然立ち止り、行手を指し緊張した声で言つた。

「灯が見えるぞ！」

朽ち果てて倒れそうな小屋の中で、二人の男が消え¹¹かかつた焚火にあたつてゐるのが見えた。

10 「中に」は底本では「中た」

11 「男が」は底本では「男か」

「待つてるんだな」

「鳩の帰るのを——」

彼は刑事等を顧みて言った。

「小屋を囲むんだ。僕が合図したら一斉にやつつける、感付かれないように、——
静かに歩いてくれ」

風に竹の葉が鳴っている。草叢の中に身を沈め、じりじりと小屋のぐるりに進み寄った。

赤星は突然合図の右手を挙げた。

一同は小屋を目がけてどっと躍り込んだ。不意を食った二人は狼狽し相手を突き退けて逃げようと焦った。焚火の燃えさしがぱつと飛び散り、一羽の鳩が屋根の上に舞い上った。

赤星は怒鳴った。

「貴様、唾の権だな」

権はナイフを振りかぶって向って来たが、忽ち組み敷かれ、両手を縛り上げられた。

一人の刑事が飛んで来て、

「アツ、危ぶない！」赤星の体を押し退けた、途端、ピストルの音がして、弾丸が

彼の耳をかすった。

男は狂気のようになり、無茶苦茶に、弾丸のあるったけを続け射ちにぶつ放した。一人の刑事は腕を傷けられ、一人は膝を撃たれた。が、やがて男も血に染つて倒れた。

こうなつては権も偽唾をやつてはいられない、大声を揚げて罵り喚き立て、怒鳴り散らしながら暴れている。赤星は俯伏せに倒れている男を抱き上げて顔を見たら、眼の下に大きな青い痣があつた。

これが犯人？

即ち鳩つかいなのだろうか？

がっちりした四角な肩や太い首筋には見覚えがあつた、あの怪しい大型自動車の運転手には違いないが、あの時窓からすうつと出た白い手は無論この男のものではない、すると真犯人はこの二人の他にあるのだ。

「権、この野郎は親方か？」と死体を指して赤星が言った。

「親方なもんか、これや青痣の吉公ツて奴だ。親方は別にあらア」

「親方は何んで奴だ？」

「知らねえよ」

「どこにいるんだ？ 白状しろ！」

「俺や知らねえ、名前も知らねえ、顔も知らねえんだが、素晴らしい豪い人だつて事だけは吉公から聞いている」と云つたが、急に莫迦ばかにしたような眼で赤星を見上げ、「親方を知っているのは吉公たった一人だよ。その大切な奴を殺ばどしちゃつたんだから、お気の毒だが、もう分らねえよ。旦那方がいくら足搔あがいたつて金輪際知れつこありやしねえ」

と嗤わらつた。

唾の権と青痣の吉公を刑事等に任せ、赤星は一人で何処へか行つてしまった。

偽博士

警視庁へ帰つてきた刑事等は事の顛末を立松に報告した。

「いや、御苦労さま。君達も疲れたろうが、僕もこの事件には全く手古摺てこずつたよ、と
いうのは、弁護士佐伯田博士の処へまた鳩が来たんだ」

「えッ！ またですか？」

「僕は佐伯田博士が臭いと睨んでいたんだが、その博士が脅迫されたとなると全く

もう分らなくなつてしまつた」と云い終らないうちに、卓上電話のベルが急遽けたたましく鳴つた。出てみると赤星の声で、

「すまんが、刑事を二三人連れて、東京駅の乗車口まで大至急来て下さい、佐伯田博士の処へ鳩が来たそうだから——、早くしないとまた失敗する。——委しい事は後で話す」

「ヨシ、じゃ直ぐ行く」

立松は刑事と共に東京駅に駆け付けた。乗車口の前に赤星は待ちかねたように突立つていて、車が停らぬうちにひらりと飛び乗り、扉を開けて入りながら運転手に、「赤坂のフジヤマ・ホテルだ。手前で停めてくれ」と云つて、立松の隣りに腰を下した。

「向うへ着かない前にギアツと始めから話しておきましょう。鳩つかいに興味を持つている佐伯田博士はたつた一人でこの事件を研究していたんだ。皆も知つてる通り、鳩つかいはダイヤを買い取つた人やその真価をよく知つている。こいつあ宝石商と共謀ぐかあるいは関係のある奴の仕業だと睨んだ。殊によると宝石商自身であるかも知れない。杉山氏に鳩が来た前日、彼は東京中の有名な宝石商の店に行き、ショー・ウィンドウに飾つてある宝石を見せてもらい、値段を訊いて歩いたが一つも買わなかつた。博士は一軒一軒違つた品を見せてもらった、まず天華堂では真珠の頸飾、

香取の店ではダイヤの指輪、田屋ではルビーの帯留、玉村ではエメラルドのピン、というように、——博士の考えはこうだったんだ。どの宝石商にもこの人は宝石を買ったなと思わせ、自分の処へ鳩が来るのを待っていた。もし鳩がダイヤを要求すれば香取を疑い、ルビーと云えば田屋を、——ところが天華堂の店で尋ねた真珠の頸飾を所望して来たんだ。そこで、これは天華堂自身か、あるいはその店の者か——と云いかけてみると、立松はポンと赤星の膝を叩いて、

「じゃ君が、君が佐伯田博士だったんだね？」

「変装していたんだ。勿論博士の承諾を得てやったんだがね、鼻眼鏡をかけ、頬髯を付けてね——。その偽博士が天華堂に行ったとき、店には杉山氏、主人及び店員四人、保険会社の岩城文子の七人がいた。犯人はこの七人の中にいなければならぬ。第一に怪しいと思つたのは天華堂主人だ。で、彼を電話口に喚び出し、『いま、『中洲の森』で唾の権と青痣の吉公が大喧嘩をおつ始め権の野郎は逃げたが吉公は大怪我をして死にかかっている、是非手渡したいものがあるから貴方に来てもらいたいんだが——』と、云うと、主人は怒つたような声で『間違いじゃないか、俺はそんな名を聞いたこともないよ』と言つたので、こんどは他へかけて同じ言葉を繰り返してみた。すると『どうして電話番号を知つたか』と話の返辞より先に詰問だ。しめた！』と思つて『吉公が教えた』と出鱈目を言うと、『馬鹿！ 仕様のない

奴だなア、明日行くよ。今夜は行かれない、もう電話をかけちゃならない。かける
と承知しないよ』と言って、『どこからかけているのか、お前は何者だ？ 吉公の友
達か、名前は何と云うか』などとしつこく質問していたが、好い加減な答えをして
電話を切っちゃった」

「それや一体誰なんだ？」

「保険会社の岩城文字」

「えッ！ 岩城文字？」

「あの女は職業上宝石商の間に入出し、誰が何を買ったかよく知っている。真価も
知っている。この頃は宝石に保険を付ける人が多くなったからね」

「しかし、どうしてあの女が——」

「あんな優しい顔をしているがなかなか凄いなんだ。この間病院で出遇った時僕
に出鱈目の話をして恋敵が杉山氏に鳩を送ったんだらうと云ったり、自分はダイヤ
が嫌いだと云い、嫌いになった理由まで物語った。僕はこれは臭いナと気がついた。
それとなく注意をすると細そりした綺麗な指には微かだが指輪の跡が残っている。
ハテナと思ひ、始めて疑いを懐き彼女を洗つてみる気になった。一時は相当な生活
をした宝石狂であつた夫に死なれ、段々貧しくなつたので、一つ一つ宝石を売つて
生活していた、指にさす一つの指輪もなくなつた時、彼女は嘗て読んだ外国のある

小説を思い出し、その本からヒントを得て鳩つかいを考えたんだよ」

「そこまで分っているのに何故早く捕まえなかつたんだ？——高飛びしたらどうする？」

「逃げやしない。利口な女だから逃げりや自分に疑がかかる位は承知している。——

僕の話は半分想像だからね、確証が掴みたかつたんだ」

「じゃ、どうして天華堂を疑って電話なんかかけたんだね？」

「彼女と共謀じゃないかと思った」

車はホテルの手前で停った。

「保険会社の女外交員が、こんな立派なホテルに住んでいるのか？」

立松は呆れて眼を瞠った。赤星は笑いながら、

「これは彼女の隠れ家だ。ここでは岩崎文代と称している。このホテルは西洋人が多いから、ダイヤを売るには何かと都合がいいんだろう。岩城文子としての住居は小さなアパートの一室なんだ」

一同はエレベーターで五階に昇った。岩城文子の室の前に立った、赤星は扉を静かにノックした。

室内はひっそりとして、人がいないようだったが、少時すると床を歩く衣擦れの音がして、内から扉を細目に開けて廊下を覗こうとした処を、素早く一人の刑事が

肩で押し開けて中に入った。立松と赤星はその後に続いた。文子は真青になって下唇を噛み、恨めしそうに赤星を見ながら、顔にかかる遅れ毛を耳の後へ掻き上げた、その細い指には眩しいようなダイヤの指輪が輝いていた。

「何の証拠もないのに——、私に疑いをかけるなんて余り卑劣じゃありませんか。そんな人達の手にかかって捕縛されるよりはむしろ——」

と言つてじりじりと後退りながら、やにわに左手の指輪をぬいて、ハッシとばかり赤星の顔に投げつけ、飛鳥のように窓際へ馳け寄り、白い手を高く挙げたかと思つたら、身を跳らせて窓から下へ飛び降りてしまった。下の敷石の上にはまるで緋牡丹の花束を投げたように、文子の体が粉碎されていた。

赤星が投げられた指輪を拾つてみたら、それは宝田夫人から奪つたものであった。

美人鷹匠

九年前の出来事

小夜子は夫松波博士の出勤を見送って茶の間に戻ると、一通の封書を受取った。裏にはただ牛込区富久町とだけ書いてある。職業柄、こうした差出人の手紙は決して珍らしいことではないが、これは優しい女文字でしかも名前がない、彼女は好奇心にひかされて主人宛の親展書であるにかかわらず、開封した。

「旦那様！」という書き出しにまず眉を曇らせ、キツとなって読み始めた。

「あなた様は突然こういうことをお聞きになってもお信じになれないかも知れませんが、どうぞ、私の申上げるこの偽りのない物語を最後までお読み下すつて、切なる私のお願いをおきき下さいませ。

今から九年前、お小間使として上っていた花と申す少女のあったことはいまでもお胸の底にハッキリとご記憶遊ばしていらつしやるだろうと存じます。その花は旦那様のお気に召したばかりに、奥様の御機嫌を損じ、遂々とうとうお暇を出されてしまいました。

半年後、お家付きの奥様は玉のような若様をご安産遊ばしました。一日違いで、花もまた男児を産みました。同じ父君を持ちながら、一方は少壮弁護士として羽振

りのよい松波男爵の御嫡男達也様、やがて立派なお家を御相続遊ばされる輝かしいお身柄。一方は生れながら暗い運命を背負つて、荊棘いばらの道を辿らねばならぬ貧しい私生児。

花の児には父君にあやかると、且那様の御姓を無断で一字頂いて、松吉という名をつけました。せめて一目でも見てやつて頂き度いと、再三お願いしましたが、且那様は無情にもそんな覚えはない、と、一言のもとに吻はねつけておしまいになり、可愛い松吉の顔を見て下さらないばかりか、最後には脅迫だとして、花の父を警官の手にお渡しになりました。

その冷めたいお仕打ちを花は心から恨みました。無念の齒を喰いしばりながら、散々考えた揚句、ある復讐を思いつき、ささやきますと、お人好しの父は震え上り、その無謀に驚いてなかなか取り合つてくれませんでした。且那様が余りにも冷酷な態度をお示しになるものですから、父も遂いに意を決し、同意してくれました。そして、それを実行しました、というのはこうなのでございます。

ある夕方、父と花とは案内知ったお邸内に忍び込み、様子を覗いていました。それは恰度お宮参りの日で、お屋敷はお祝いのお客様で大混雑、応接室の方からは晴れやかな笑声が絶えず聞えて居りました。やがてお客様達がお食堂の方へお入りになると、乳母ばあやさんは達也様を抱いて、静かなお離室はなれへやつて来て、一息吐ついていま

した。少時しばらくすると乳母やさんは達也様を小さい寝台の上にねかしつけ、ツト、起たつて廊下へ出ました、たぶんご不浄へでも行ったのでしよう。

その隙に、素早く、花は抱いていた松吉と達也様をすりかえてしまったのでございます。幸か不幸かその当時の二人は瓜二つでした。

そこへ戻ってきた乳母やさんは愕おどろいて身動きも出来ず、棒立ちになってしまいました。父はいきなり短刀を突きつけ『声を出すと命はないぞ！』と脅しました。しかし、乳母やさんは存外落ち付いたしっかり者でした。もうこうなつては仕方がありません、泣いても、騒さわいでも、若様のお姿はそこにはない、おくるみに包まれて眠ねっているのは汚うぶぎない産衣を着た松吉で、達也様は花の手にしっかりと抱かれ、泣きもせず、もう先へ逃げてしまつていたのですから――。

声を出して殺されるか、主人に不注意を叱られるか、どちらかです、ところが乳母やさんは何も云わず、松吉の衣類を脱がせて父へ渡し、お戸棚から新らしい白絹の産衣を出して着せたのです。そしてまんまと松吉は達也様になりましたわけなのでございます。

その日から幸福な松吉は男爵家の若君様として、大切に育てられました。

達也様の方は松吉となつて、トンネル長屋の隅で大きくなりました。（これから若様の事を松吉と申します）花は人のすすめる結婚話などには耳を貸さず、只管松吉ひんすら

の成長を楽しみに、父と二人で働きました、ところが、昨年の冬、ふとした感冒がもとで松吉は肺炎になりました。

実子ではないが、大変可愛がつて居りましたので、どうかしてなおしたいと思い、身分不相応なえらいお医者様にも診て頂いたり、高価なお薬を買って飲ませたりしました、貧乏な者達にとつて、それは一方ならぬ苦しみでございました。

お金さえあつたら！ 松吉の命は助かるのに——、と思うと堪らなくなつて、悪い事と知りながら花は人様のものを盗みました。忽ちそれが露見して、捕えられ、刑務所へ送られてしまいました。悲しいことにはその留守の間に、可愛い松吉は死んだのでございます。花が罪を犯してまで助けたいと希つた命は、奪われてしまいました。

ああ思つても気が狂いそうです、死のう！ そうだ、自分も後を追つて死のう、と、さえ思いつめました。愛児を失つた悲しみ！ それは経験のある方でなくては到底お解りになるものではございますまい。

その時、ふと頭に浮んだのは達也様のことでした。死んだのは自分の児ではない、ほんとの児は生きている、この世にまだ生きているんだ、現に、男爵令息として学習院に通つてゐるではないか、と、思うともう一刻も我慢が出来なくなり、その時からお屋敷の附近を彷徨うろたき始めました。何日目かできつと若様にお目にかかれまし

た、それはランドセルを背負った学校帰りの可愛いお姿でした、飛び付きたいような心をジツとおさえ、甦ったような喜びに胸を跳らせながら花はお顔を見詰めて居りました。が、もう只今の花は、遠くからお姿を見て満足しているだけでは我慢が出来なくなりました、自分の児を他人様の児として眺めている気にはなれなくなりました。若様、いや、達也様は花の児でございます、花の児です。花は自分の児をぎゅつと抱きしめたくなりました、抱きしめて、抱きしめて、離したくない、もう誰にもやるのはいやです。

どうぞ、旦那様、花の児をお返し下さいませ、私の申すことが嘘だと恩召すなら、証拠をあげてみましょう。

達也様には腋わきの下に小指の先で突いたほどの赤痣あざがある、花と同じように下唇に黒子ほくろもあるはずです、しかし、それ等は外から見てわかる事で、云いがかりだと仰しやられてはそれまでですが、体質の遺伝については争うことが出来ないだろうと存じます。旦那様も奥様もご立派な御体格で、失礼ながらお色はお白い方ではいらつしやいませ。それですのに、達也様は腺病質で皮膚が青白く滑すべつこい、それにもう一つ、これだけは永久に秘密を守ろうと決心していたのですが、こういう場合ですからお打ち開けいたしましょう。

不幸な者はどこまで不幸なのか、花の血統には、ああ思っても恐しい、汚れた血

が流れているのでございます。母方の祖母は発病と同時に家を追われ、旅に出たまま行衛不明になってしまいました。そして母もまた花が三つの時、花を父に頼んで永久に姿をかくし、生死さえも分らないのでございます。結核質に加えて――。

このいまわしい血を受け継いだ達也様が、由緒正しい、立派なお家柄を御相続遊ばすお身の上だとお知りになったら、よもや、返すのをいやだと仰せられますまい。

花の手に育った松吉はそれに引換えて色黒で頑丈なすっかりした児でした。しかし、花は弱くつても、悪質の遺伝を持っていても、やっぱり自分の児が欲しゅうございます。当時の証人としては、嘗ての乳母やさんがいつでも出現して下さるそうでございます。どうぞ、旦那様、花の児を返して下さいませ――」

小夜子はもうそれ以上読み続ける勇気がなかった、思いがけないこの手紙は、彼女の心を真暗にしまった。

花という小間使のいたことは記憶している、緋桃の花のような可憐な美少女だった、その少女がいるために御用聴きの若者達が台所口を離れなくて困る、と、醜い顔の他の女中が度々訴えたことも覚えていて。十七にしては少しませていたが、気の利いた賢い娘だったので彼女も愛していたが、夫にも大變気に入っていた。小夜子は悪阻つわりのあとの衰弱がひどかったので、暫時箱根の別荘に静養しほやくしていたその留守の間に、花は暇をとって帰ってしまった、どうい理由で帰ったのか、別に詮議立

てもしなかったの、それについては何も知らなかった。

小夜子は今の今まで、あの謹厳な夫がこんな醜い半面を持つていようとは夢にも思わなかった。刑務所から来たものだから囚人の手紙に違いない。事によると、これは夫の弁護に不満を懐いた女の捏造で、家庭の平和を破壊してやろうという蛇のような復讐かも知れない、うっかり乗つてはそれこそ物笑いだと、心で打ち消すあとから、あるいは——とまた疑う心が頭を持ち上げて来る。

半信半疑だが、全然無根だとも思えない、それが小夜子の心を憂鬱にさせる。なるほど達也は腺病質で弱い、夫婦とも壮健なのに不思議だ、と、主治医も常に首を傾げている、するとやっぱり——、彼女の胸には疑念が湧いた、が、それにもかかわらず、その手紙を夫へ見せようとも、また訊きただしてみようとも思わなかった。というの、松波博士と夫人とは非常に仲の好い夫婦だったので、小夜子はひそかに自分一人で何とか始末をつけ、夫の耳には入れまいと考えたのだった、殊に今、ある有名な事件の弁護を依頼され、日夜そのことに没頭している際でもあったので、こんな煩わしい、偽か真実かさえも分らぬような話で、夫の頭を掻き乱すに忍びなかった、たとえそれが事実であつたとしても、全く一時の過失に違いない、それなればこそ、花の申出にも拒絶してはいないか、一時の過失位は笑つて許すのがほんとに夫を愛する妻と云えよう。

「どうせ、過失のない人間なんてありやしないんだから——」と、小夜子は自分に云つて聞かせるように言つて、手紙を筆筒の中へ納しまい、ピンと錠をかけてしまった。

菅編笠の女

一週間後に、小夜子はまた同じ手紙を貰つた、今度は刑務所からではなかつた。

返事をくれないのなら若様を誘さら拐らつてやるの、よい家庭の裏面として松波男爵家の秘密を世間に曝露してやるの、と、脅迫めいた言葉が連ねてあつた。

小夜子は直接花に会つて話したいと思ひ、居所を探したがまるで分らなかつた。立派な人格者と評判されている夫が、小間使に子供を産ませたなどと、そんな不行跡を明るみに晒さららされてはたまつたもんぢやない、夫の不名誉は妻の不名誉でもあるから——。

煩悶の日が続いた。

小夜子は遂いに思い余つて、芝で開業している従妹いとこの女医を訪れ、體質の遺伝についていろいろ質問してみたが、その結果は反つて彼女の心を暗くするばかりであつ

た。

何も知らない従妹は小夜子の真剣な顔を不思議そうに見て、

「また神経衰弱じゃない？ そんな事を気にして——、今ツから達ちゃんのお嫁さんでも定めておこうツて云うの？ オホホホホ。余り気が早いわ。まだ九つでしよう？」と笑った。小夜子も仕方なく笑顔をつくつたが、「遺伝しているかどうか、外から見分らないものか知ら？」とまた真面目に訊くのだつた。

「分ることもあるし、分らないこともあるわ。とにかく、松波家の相続人だから婚約しておくとしても、相手の家の血統はよくよく調べておく必要はありますよ。——
恐いからねえ」

そこへ患家から迎えの自動車が来た。

「小夜子さん、私、直ぐ帰つて来ますから——」

と起ち上り、

「待っている間に薬局で催眠剤でもつくらせて、少しお飲みなさいよ、大分、神経が疲れているようだから——」

従妹を玄関に送り出したそのついでに薬局へ入つてみたが、生憎誰もいなかった。彼女は薬を宅へ届けてくれるようにと、頼んで従妹の家を辞した。

小夜子は九年前の記憶を辿つて、その頃一緒にいた仲働きのきよという女をよん

で、当時の事をいろいろ訊いてみた。しかし、花のその後の消息は知らなかった。

もし手紙にある如く、達也が小夜子の実子でなかったとしたら——、無論この家の相続はさせられない。相続人は親類の中から誰か貰らわなければならぬが、それを親族会議に持ち出すのが辛い、その理由を語らねばならないから——。

彼女の頭の中にはその問題がこびりついていて、一刻も忘れられず、絶えず悩まされつづけていた。

あの日以来、小夜子は始終注意の眼を達也に向けるようになった。品のいい、どこから見ても大家たいけの若君らしい容貌、それ等はどうしても小間使風情の子とは思われない、お母様似だと他人様ひとさまは仰しやる、達也は誰が何と云つても自分の児だ。あんな虚弱的な児を真実の親でなくてどうして育て上げられよう。小夜子の頭には幼い頃からの数々の病氣や、幾夜眠らずに付き添って世話をした記憶が、つぎつぎと浮んでくる。看護婦にさえ出来ない看護をしてやった、それが血を分けた親でなくてどうして出来るものか。

「お母様、——ただいま」

バタバタと達也が茶の間に飛び込んだ。ランドセルを背負ったまま、母の膝へ寄りかかり、甘えるように顔をすりつけて云う。

「お母様、鷹狩見に行ってもいい？」

「どこへ行くの?」

「横町の空地。——お母様も一緒に行つて頂戴、僕も鷹狩やつてみたいなあ」

母は達也の首からランドセルを外してやり、

「鷹狩つてどんな事をするの? 危ないの?」と訊いた。

「危ないもんか、——迎も愉快なんだ」

「そう? じゃお母様にも見せて頂戴」

「皆がやるんだよ、お母様、鷹を放して雀や鳩を捕らせるの、迎も面白いんだ、まるで昔の武士さむらいになつたような氣持がするツて、武田君が云つてたよ」

小夜子は達也に急せき立てられて出かけた、なるほど空地の真中は一杯の人ばかりだつた。人垣を覗いてみると、最近勃興しかけた鷹狩を真似て、芸人風の男女が子供相手の商売をやっているのだった。

そこは大きな屋敷跡で、庭になつていたところにはまだ樹木がそのまま残つていて、松の樹の根方には菅編笠を被つた若い女が、きりりとした身拵はしよえで立つていた。故意わざとだろう、古風な装いをして、紫被布ひふなんか着て、短かく端折はしよつた裾から浅黄色の足袋をのぞかせ、すつきりとしたいい姿を見せていた。笠の赤い紐あじが白い頤あじにくびれ込み、いかにも奇麗な女らしく思わせた、物珍らしいので見物の眼はこの美人鷹匠に吸いよせられている。

大勢集つたところで、撞木しゅもくに止つてゐる蒼鷹を彼女は手に移し、声を張り揚げた。

「呼上げ、呼下し、最初にまずそれを御覧に入れましょう」

松の樹の上に鷹を放ち、餌箱をカタカタ鳴らして自分の腕に呼び下したり、また松の樹の上呼び上げたり、一通りやつてから、

「こん度は振替渡り——、さあ、どなたか肩を貸して下さい。鷹が飛び移りますから——」

群集の中からモジリ外套の男が飛び出した。鷹は忽ちばさりと厚ぼつたい羽音をさせながら、その男の肩へ飛び移つた。見物は喜んだ。

訓練法がすむといよいよ鷹狩だ。後方うしろに蹲踞しゃがみでいた五十余りの男はその時ツト起ち上つて、

「さア、皆さん、雀にしましうか、それともぐツと奮発して鳩とやりますか、——雀が十銭、——鳩が三十銭、——坊ちゃん、嬢ちゃん、さア、さア、お土産に生捕つて下さい！」

と声を枯らして叫んだ。その男の足許には風呂敷に包んだ鳥籠があつた、その中には鳩や雀がぎっしりと目白押しに並んでゐる。

見物の中から声が出た。

「雀！ さア、十銭——」

カチリ！ 白銅が小石に当った。男は早速風呂敷の隅をめくつて、一羽の雀を掴み出した。美人鷹匠は十錢投げた子供の方へ近寄つて、心さな手に革の手袋をはめてやり、自分の左手に止っている蒼鷹を子供に移した。

「坊ちゃん、あの小父さんが雀を飛ばしたら、勢よく、パツと鷹をお放しなさい。鷹狩の気分を出して——。よござんすか」¹²

子供は恥しそうに顔を真赤にして照れていたが、見ている連中はみんな羨しそうだ。

男はかけ声をしながら、晴れ渡つた青空へ向けて、勢よく雀を放つた。同時に鷹も子供の手を離れた。

見物はアレアレと騒いでいる間に、鷹は心得たもので、悠々と雀を追つて地上に舞い戻り爪で押えた、よく馴らされているので、雀に疵を負わせるようなへまはやらなかった。

美人鷹匠は走りよつて、鷹から雀を引放し、子供の手にもれを持たせた。

「さあ、お土産です。坊ちゃんがお捕りになつた小雀、鷹狩の獲物ですよ」

子供は雀を持つて意気揚々と帰つて行つた。達也は興奮して母の手を握り、足を

12 「よござんすか」は底本では「よござんすか」

バタバタやって見ていた。その時、ふとした表情に小夜子は花の俤おもかげをはつきりと見た、彼女はハツと胸を打たれて、握っている達也の手を思わず振り放した、顔ばかりではない、夢中になって跳ねている姿が、やっぱり花そっくりだ、彼の全身到る所に花の面影がある。

小夜子は軽い眩暈めまいを感じた。もしや、夫がその面影を人知れず懐しんでいるとしたら——と、思うと、彼女は堪らなかつた。

見物は面白そうに、他愛なく喜んでゐる、その中に、小夜子一人は深い物思いに打ち沈んでゐるのだった。

「達ちゃん、もう帰りましようよ」

「お母様、僕、まだ帰るのいやだよ」

達也はなかなかその場を離れようとしなかつた。

鷹の爪

その日を始めとして、美人鷹匠はその仇あだめいた姿を毎日空地に現わした。夕方引

揚げる時には鳥籠は空つぽで、雀も鳩も売切れという繁昌はんじょうぶりだった。

達也の鷹狩熱はなかなかさめなかった。毎日雀を一羽、二羽、と捕って帰った、捕った雀は新らしく買った大きな鳥籠に入れて飼っておいだが、どういふものか、次ぎ次ぎと死んで行つた。

鷹匠が現われてから恰度七日目だった。

小夜子は外出から戻つて内玄関へ上ろうとすると、俄かに門前が騒々しくなつて、小砂利の上を馳ける大勢の蹻音が、ただならぬ出来事を語つた。「何だろう？」脱ぎ捨てた草履をまた引掛けて、内玄関を出ようとすると、一人の男を先頭に沢山の子供達が門内へ駆け込むところだった。真先にいる男が重そうに抱えているのは達也だった。達也は顔から首筋を血だらけにして、ぐったりと男の腕の中に倒れていた。ぞろぞろと従ついて来た子供達は不安そうな眼で、互いに何かささやき合っている。

「達ちゃん、達ちゃん」

小夜子は走り寄つて、男の手から達也を受取りかたく抱きしめながら、彼の名を喚よんでみた。達也は細く眼を開いて、母の顔を見上げ、微かに口許に笑いを浮べたが、そのまままた眼を閉じてしまった。

彼女はハンケチで流れる血を押えながら、

「早く、早く、お医者様を——、一体、まあ、どうしたの？」

誰に訊くともなく云うのを聞きつけて、子供達は一緒に声を揃えて答えた。

「小母さん、鷹の爪に引掛けられたんですよ」

「今日は鷹の御機嫌が悪るかったんだ」

「鷹が悪いんじゃない、雀が悪いんだわ、雀が逃げ場を失って達也さんの肩に止つたの、そこへ鷹が降りて来て——、達也さんが動かないでじつとしていればよかつたんだけど、吃驚して騒いだもんだから、鷹も驚いて、雀を引摺ひっつかまえる拍子に達也さんの咽喉のどに爪を立てちゃつたんですよ、小母さん」ませた小娘が事件の顛末を説明した。

松波博士は急報に驚いて帰宅した。医者が駆けつけた頃には達也は幾分元氣になっていた。

小夜子は青い顔をして枕許に附添っている。

「達ちゃん、しッかりして頂戴、これんぼツちの疵、何でもないんだから」と元氣づけた。

「そうだ。達也は男子おとこだからな、これ位のことには負けちゃならんぞ」

と云いながらも、父の顔には不安のいろがありありと現われていた。両親は医者おともの顔色ばかり眺め、彼の眉一つの動きにも胸をドキリとさせた。

手当をすませてから医者おともは徐ろに口をきつた。

「これで、お熱さえ出なければ御心配なことはないと思います」と云つて帰つた。小夜子は頼みつけの看護婦会へ電話してみたが、生憎馴染みの看護婦はいない、明朝まで待つてくれれば何とか都合すると会長が云つた。神経質の達也が知らぬ看護婦で納まるはずはない、仕方がないから明朝まで待つことにして、今夜は小夜子が寝ず番をしようと腹を定めた。

「奥様、美人鷹匠がお詫びに参りました。若様の御容体を委しく話してやりましたら、すまない、すまない、と申して泣いて居ります。是非お目にかかつてお謝罪わびがしたいから、奥様へお取り次ぎして頂きたいと云つて、お台所に居りますが、——どういたしましょう？」と女中が云つた。

小夜子はうるさそうに、

「取り込んでいて会えない、と、云つて、帰しておしまい！」

松波博士は警察へ電話をかけて、事の顛末を知らせた、ついでに美人鷹匠が謝罪に来ていることを話し、一応取調べてもらいたいと訴えた。

間もなく警官が来て鷹匠を連行した。

小夜子は達也の額に手を触れてみて、

「大丈夫、この分なら熱は出そうもないわ」と云つて、ほつと溜息を吐いた。

が、彼は遂々発熱した。

うとうとしたかと思うと、急におびえて眼を覚まし、

「鷹が——、鷹が——」むっくり蒲団の上に起き上って、恐しそうに叫んだ。

「落ちついて頂戴。達ちゃん、鷹なんていやしませんよ」

火のような頭をそつと氷枕の上におさえつけ、額にも氷嚢をあてがった。

達也は夜中譫言うわごとを云いつづけて、ひどく苦しみ悶えた。

暁方近く、医者が馳けつけて来た時には、もう何とも手のほどこしようもなかった、達也は深い眠りに陥ったまま、遂いに危篤になった。

腕を組んで、暫時考え込んでいた医者は、言い難そうに、

「傷口から黴菌が入って敗血症を起されたとしても——、とにかく、少し腑に落ちないところがありますので、——どなたか他の先生にも一応御診察して頂いて下さいませんかでしょうか、あるいは立ち合つて頂いても結構ですが——」

と言葉を濁した。

医者が死亡診断書を書くのを拒んだのも当然だった、やがて判明したところによると、ある恐しい毒薬が傷口から入ったものだという事であった。

鷹の爪に毒を塗つてあつたものではないかとの疑いで、一度釈放された美人鷹匠へ捜査の手がのびた。女は已すでに行方を晦くらましていたが、ほどなく三河島の百軒長屋

から挙げられた。

嚴重な取調べが行われたが、ただ泣くばかりで、何も答えなかった。

一人の刑事は女の身許を洗つて来て、司法主任へ報告した。

「岩下ハナ、二十七歳、前科があります。窃盜犯で、出所したばかりです」

「連れの男は亭主か？」

「いいえ、父親です。正式の結婚は一度もしていませんが、私生児が一人ありました」

「男か？ 女か？」

「男の子です、が、死亡しました。——以前には相当にやっていた小鳥商だったのですが、その店もたたみ、この数年はひどく困っていたらしいのですが、最近子供相手のああいふ商売を始めたのです。自分では先祖に鷹匠があつたので、それを縁に始めたのだと云っていたそうです」

「鷹狩で相当の収入を得ていたのか？」

「大分あつたらしいんですが、借金があつてその方に引かれてしまうので、稼ぐ張り合いがないと近所の者にこぼしていたそうです。何でも子供が大病して、その時出来た借金に苦しめられていたらしいです」

「子供は何歳で死んだんだ？」

「九歳」

「フウム」

司法主任は美人鷹匠を喚んで、優しく訊問を始めた。

「お前はどういう理^{わけ}で、松波博士の令息を殺害する気になったんだ？」

女は吃驚して、美しい眼を一杯に見張り、

「殺す気ですッて？」

「ウム」

「飛んでもない。どうして——、私が、そんな恐しいことを——」

「やらないと云うのか？　しかし、松波博士の令息はあの暁方亡くなられたんだぞ」

「えッ?!」

見る見る蒼白になって、ふらふらと起ち上ったが、よろめいて、椅子の背に掴まった。

「旦那、そ、それは——、ほんとですか？」

「鷹の爪の毒、イヤ、爪に塗った毒薬で殺されたんだ。お前は故意と爪を引かけたんだろう？　どういう理由があつてそんな事をしたんだ。わけを話せ。正直に白状しないと、お前ばかりじゃない、お前の父親にも恐しい共犯の嫌疑がかかるんだぞ」

「旦那、御冗談仰しやっちゃ困ります。私は毒薬なんか塗った覚えはございません。」

ああ、——でも、どうしたらいいだろう、——あの若様はほんとお亡くなりになつたんでございますか、それは——、ああ、それは、ほんとの事でございませうかねえ」

「ほんともさ。今日は告別式だ」

女はわつと泣き出した。長い間泣きつづけていたが、やがて、涙で魂まで洗らい上げられたかと思われるような、清らかな、美しい顔をあげ、微笑さえ浮べてじいつと司法主任を見上げた。その麗わしいうるんだ眼には深い決意のいろが現われている。女は青白い唇を噛みながら、きつぱり云つた。

「旦那、申訳ございません。白状いたします。若様を殺したのは——、たしかに私です」

「何故殺したんだ？」

「私は以前あのお屋敷に御奉公していた者でございます。その時出来た子供があ若様と同年の九ツで、先頃亡くなりました。自分の児が死んだ。しかも、貧乏のためろくな手当も出来ず、みすみす助かる命を死なしてしまいました。同じ時に生れたあ若様はしあわせお幸福で、あんなにお立派に育つていらつしやるのに、私の息子は——、と思うと羨しいやら、嫉ねたましいやら——、それでも私は自分の死んだ児が見たくなるとあのお屋敷の附近をぶらついて、若様のお姿を見て居りました。鷹狩の商売を

始めてからはあの空地で毎日若様を見ることが出来、時にはお話する事さえありました。どんなにそれは嬉しい事でございましたでしょう。私はまるで若様一人を待たために、あすこで鷹狩をやっていたようなものでした。若様は面白がつて毎日来て下さいました、私はほんとに死んだ息子に会うような喜びで、あの空地へいそいそと出向いたものでございます。自分の児も、もし若様のように立派なお屋敷に生れ、立派な父君を持つていたら——と、思うと、不憫で不憫で堪らなくなりました。その思いが段々こうじて、果ては若様が憎くさえなってきたのです。それは嫉妬なのでございましょうか、私はある日、若様がお母様と御一緒に見に来て下さった時、何という事なくむらむらと腹が立つて、気狂いのように鷹をけしかけたのを父に叱られました。私は若様が憎いというより、奥様の態度が癩に触ったのでした。私が若様に近寄つて革の手袋をはめて上げながら、余りのお可愛さに思わずちよつとお頭を撫でました。すると奥様は眉をしかめ、さもさも汚ないと云うように私の手を払い退けて御自分で手袋をはめて上げ、若様のお体に私のような者の指一本も触れさせまいとなさいました、その御様子に私はカツとなり、若様を殺してお母様に私と同じ悲しみを味わせて上げようと思つたのでした」

「お前は一度も正式の結婚をしていないが、子供の父親は誰なんだ？」

女はハツとしたように眼を上げ、少時黙っていたが、急に捨てばちになり、

「御用聴きの若衆さんで——、それや逆も綺麗な男でしたわ、オホホホホホ」とヒステリックな声で笑った。

遺書

小夜子は一人息子の達也を失って以来、すっかり気を落して、一室に閉じ籠り、悲歎にくれていた。

犯人は美人鷹匠、即ち以前の召使花であると聞いて、松波博士は非常に驚いた。小夜子は彼女にどんな判決が下されるものだろうと、訊いてみた。

「無論、極刑だ。——怪しからん。あんな女が死刑にならないでどうする——」
夫人は卒倒してしまった。

その夜、小夜子は自殺したのだった。

打ち続く不幸に、世間では博士に痛く同情した。新聞は夫人の自殺を、愛児を失った悲しみから、極度の神経衰弱に陥ったためであると報道した。

無論博士自身もそう信じきっていたのだったが、はからずも手箱の中から一冊の

洋書と遺書とを発見したことによって、死の原因は根本から覆えされてしまった。洋書は鼠色の表紙にフランツアーベル著、トキシコロギーとあって、九十二ページのところ折つてあつた。

松波博士は胸を轟かせながら遺書を開封した。

「同封の書面をお読み下さつたならば、私の申上げることの偽りでないことがお分りになりましょう」

と、いう文字を冒頭にして、小間使花からの手紙が二通巻き込んであつた。博士はまずそれを読んで、愕然とした。

小夜子の遺書にはその手紙を読んで以来の苦悶を細々と認めてあつた。そして最後にこんなことが書き加えてあつた。

「私は密かに、一人で何もかも調査しました。最初半信半疑であつたことも残念ながら事実であり、私が箱根の別荘に行つていた間に、後々問題を起さぬという約束で十二分の手当を与えて花との手をきられた事も、すべて仲働きのきよから聞きました。申すまでもなく達也は花の児で、花の家に恐しい汚れた血の伝わつている事実もたしかめました。私はこの由緒正しい松波家の血統に汚点を残すに忍びません、御先祖様に対して申訳ないと考えました。そういう體質を受けついで生れた達也自身も決して幸福な生涯を送ることは出来ません、家を思い、達也

の将来を思い、私は心を鬼にしてこの忌わしい汚れを取り除く覚悟を致しました。花からこうした脅迫を受けていることが万一世間に知れたらば、あなたの御名譽はどうなるのでしょうか、達也さえいなければ脅迫の材料がなくなります。私は深く決心を致しまして、ひそかにフランツアーベルの著書を読み、なお薬物学及び毒薬学の研究を致しました。それは決して罪の発覚を防ぐためではありません。どうしたら最も楽に、眠れるようにこの世を去らせてやれるかという、達也を愛する心からでした。達也が鷹に爪をたてられて怪我をいたしました時、ふと、この機会にと思いつき、かねて用意してあった——それは過日従妹の薬局から盗み出しておいたものです——毒薬を夜中傷口に塗りました。

達也を殺したのは私でございます。花は何も存じません。彼女が達也殺しを白したと承わった時、恐しくなりました。賢い花は私の心を見破り、自分で罪を負う決心をしたものと思います。

もし罪のない花に極刑が下るようでしたら、それこそ私は死んで謝罪しても追いつきません。自分の愛児を殺された上に、その犯人を庇護かばつて自ら死刑になろうとする、花の心に私は打たれました。そんな事をさせてはなりません。私は死んでお謝罪を致します、どうぞ、達也を殺したことをおゆるし下さい、愚かな私の心をお憐れみ下さって、せめて、あなただけは私を理解遊ばして下さいませ。

重ねて申し上げます。花には何の罪もございません、どうぞ、彼女を救ってやって下さいませ、これが私の最後のお願いでございます」

松波博士が美人鷹匠に面会した時、最初に発した一言は、

「何故、お前は達也を殺したと偽りの自白をしたのか？」という質問であつた。

花は顔も上げないで泣きながら答えた。

「せめて、そうでもしなくつては奥様に申訳なかつたからでございます。——考えますと私位悪い女はありません、つくづく愛想がつきてしまいました。自分の都合のよい事しか考えない、松吉を取りかえたのも自分の子供に幸福を与えたいばかりで、人様の御迷惑も考えず、恐しい罪を平気で犯してしまつたのです。そしてこの度はまたそれを種に脅迫し散々奥様をお苦しめました。それなのに、私をお恨みにもならず、お咎めにもならず——、ほんとに何という優しいお心の方でしょう。達也様がお亡くなりになつたと承わつた時、ああ悪いことをした、と、始めて眼がさめました。そして心から掌を合せて奥様を拝みました。私には奥様のお心がはつきりと映つたのでございます。ここまで追い詰めたのは私ですもの、原因はみんな私からで、手を下さないばかりで私が殺したも同然です。達也様も松吉も死んでしまい、私も生きてゐる気もなくなりました。せめてもの罪ほろぼしに殺人罪を引受

け、死刑にして頂き度だったのでございます」

法曹界きつての敏腕家松波博士が令息殺しの犯人美人鷹匠のために、義侠的弁護を買って出たという記事が新聞を賑わしたのは、それから間もなくのことであった。

梟の眼

ポケツトのダイヤ

陽子は珍らしく早起きして、朝のお化粧もすませ、ヴェランダの籐椅子にながながと両足を延ばし、ココアを飲みながら、頻りに腕時計を眺めていた。

客間の置時計が九時を打つと、それを合図のように玄関のベルが鳴って、貴金属商の杉村が来た、と書生が取りついた。貴金属商というのは表面で、実は秘密に婦人達の間を廻り歩いている、損料貸しなのである。指輪や時計の交換などもやるので、重宝がられているのだった。彼は如才ない調子で、お世辞を振りまきながら、女中が茶菓を運ぶのに出たり入ったりしている間は、ゆつくりと鞆から一つ一つ指輪を取り出して、テーブルの上に並べていたが、女中の姿が見えなくなると、懐中から別に持っていたのを出して、

「パリーで買ったものだというんですが——、カットも新しいし、これだけの上物は滅多にごぎいませぬ。——いかがでしょう？　二千五百円じやお安いと思えますが——」

三キヤラット以上もありそうな、純白ダイヤ入りの指輪だ。陽子は蠟細工のような細い指にはめてみて、じつと眺めた。欲しいな、と思った、欲しい！　しかし、こ

の指輪に換えるだけの宝石を、残念ながら、持ち合せていない。もし是非ともこれを望むとすれば、纏まとつたいくらかの金をたしまえとして渡さなければなるまい。結婚してからまだ半年にしかならない二十一歳の若夫人の身では、それだけの金の工面は少し難しかった。欲しくつて、欲しくつて堪らないが、これは我慢しなければならぬので、その代りに小指にはめるマルキイズを借りることにして、ルビーの指輪に若干の金を添えて話をつけた。

杉村は鞆の中に指輪を納しまいながら、

「米国観光団の大舞踏会があるそうでございますね。ご出席なさいますんでしよう？」

「ええ、招待状が来ているから、行く積りよ」

「そのために——、皆さん、大変ご苦勞をなさいます。これは内々のお話でございますが、——私共の上等品は大部分当日のために出払つてしまいました」

陽子は杉村が帰つた後も、三キヤラットのダイヤが眼の前を離れなかつた。梅田子爵夫人ともあろうものが、あれ位のダイヤ一つ持っていないとは情けない、何とかして買いたいものだと思ひながら、ぼんやり庭を眺めていると、縁側に忙しそうな足音がして、実家の次兄、平松春樹が訪ねて来た。

「あら、お兄さん」

兄の顔を見ると急に甘えるような気持ちなつて、何ということなしに涙ぐんだ。ダイヤが欲しいのよ、と、口先にまで出かかったのを、ぐっと押えて、陽子は唇を噛んだ。それは云つてはならぬことであつた、こんなにまで欲しがつてしていると知つたら、この妹思ひの春樹が、黙つてみているはずはない。どんな無理をしても、きつと、ダイヤを持って来てくれるに定きまつてゐる、その無理が——、彼女には恐しかった。

「お兄さんも舞踏会に行らつしやるんでしよう？　西洋婦人が沢山来るそうですから、さぞ、奇麗なことでしようねえ」と云つた。

「米国人が半数以上だつていうから、ダイヤが踊つてるようだろうよ。君なんか、宝石をつけて行かない方がいいぜ。ケチな指輪をはめて行つちや、反つてみすばらしいからな」

兄の言葉もまるで耳に入らないように、陽子はじいツと考え込んでいたが、何を思つたのか、急に元氣づいて、起たち上り、

「どうせ買えないから、と思つて断念あきらめたんだけれど、——お兄さん、私、これから三越へ行くわ。あそこは月末払いだから、——その時はその時の事で、どうにかなるわ。ほんとにうまいところに気がついた。三越へ行つて、——ダイヤを見て来る。定めた！」

「馬鹿！ 止せて云つたら——、小ッぽけなダイヤなんかみつともないぞ——」
「だから、——大きいのを、買うわ」と、勢よく化粧室に飛び込み、パツフで顔を叩いて、外套に手を通しながら、浮き浮きとして出て来た。

春樹は苦笑して、煙草に火を点け、

「じゃ、俺も一緒に出かけるとしようかな」

二人は連れ立って出た。

三越の前で陽子は兄に別れ、軽い歩調でエレヴェーターの中に入った。彼女はもうダイヤの事しか何も考えていなかった。

エレヴェーターを出ると傍目わきめもふらず、真直ぐに、貴金属部へ靴先を向けた。シヨウ・ウインドウを覗くと、パツと眼に入った大きなダイヤがあった。沢山の指輪に取り巻かれた真中に、それはまるで女王のように輝いていた。杉村の持っていたのなどより、ズツと立派なものであった。早速、馴染みの店員を招よんで、硝子ガラスの上をトントン指先で叩きながら、

「ちよいと、この指輪、見せて下さらない？」と云った。

店員は五千八百円という正札を、ぶらりと下げているその指輪を陽子に渡し、なおそのほか気に入りそうなのを五つ六つ並べて見せてくれた、彼女はそれを一つ一つ指にはめては見惚れていたが、やはり最初目についた五千八百円が一番気に入つ

た。欲しいなあ、と思うと我知らず溜息が出る。お金をどうしよう？——仕払いの時、もし、出来なかつたら——、と思うと眼の先が真暗になる。だが、——どうにかなるだろう、構わない、買っちゃまえ！ 彼女は顔をほてらせて、凝とダイヤを見ているうちに、何だか頭がぼうつとした。ふと我に返るとはツとして、また考えた。そんな無茶なことをしてどうする？ 到底それだけお金が出来るはずがないのに、——無謀な考えを起したら、それこそ月末は大変だ、やっぱり——、断念めるより仕方がない。彼女は名残り惜しそうに指輪をぬいて、箱に納め、力なく返そうとしたが、傍にいた店員の姿が、どうしたのか見えなかつた。四辺を見廻すと、自分の側に、やはり同じように、指輪に見入っている婦人があつた。ちよつと見た時西洋人かしらと思つたほど、洋装がしっくりとよく似合い、帽子から、靴まで薄墨色であつた。背が高く、スマートな、好ましい姿だ。と陽子はつくづく眺めた。余りじろじろ見たせいか、その婦人はすうツと向へ去つてしまつた。そこへ店員が戻つて来たので、指輪を渡し、

「また出直して来ますわ。気に入つたのが、——あることはあるんだけど——」と云つて悄然と三越を出た。

銀座を歩いてるうちに夕方になつたので、円タクを拾つて家へ帰つたが、外套を脱ぐのも億劫な位、がっかりした。考えれば、考えるほど、気が滅入る。

「ああ、あのダイヤが欲しい！」

溜息と一緒に、ツイ口に出してしまつてから、急に恥しくなり、顔を赤らめて起ち上り、ポケットからハンカチを掴み出した、カチリ！ 床に落ちたものがある。オヤツと思つて、見ると、白っぽい、光つた小さなものがころころと転がって、室の隅の壁際で停り、電燈の灯を受け、ピカツと眼を射た。

ダイヤだ、ダイヤの指輪だ！

三越の店員に慥かに渡したと思つていた五千八百円の指輪だ。彼女は頭の前から足の先まで、ジーンと電気でも伝つたように感じ、体が硬直つて身動きも出来ない。

どうして、ポケットの中に、あのダイヤが入つていたのだろうか？ 欲しい！ と深く思い込んだあの刹那の念力にひかれて、転げ込んだものではあるまいか。まさか——そんなことがあるとは信じないが、嘗てある霊能者の物品引寄せというものを見たことがある。もしああいう事が、実際に出来るものだとしたら——、あるいは——。

陽子は怖くなった。

今にも、三越から何とか云つて来やしないだろうか。たとえそれが意識してやつた事でないとしても、ポケットに入れるところを誰かに見られはしなかつたらうか。訴えられたらどうしよう？ 一層返しに行こうか。——それも変だ。反つて疑われ

るかも知れない。——では、このまま、黙って、知らぬ顔をしていようか——。

彼女は指輪を半紙に包んで、取り敢えず人目に触れない筆筒たんすの抽斗ひきだしの奥に入れて、錠を下し、熱した頭を冷す積りでヴェランダに出た。夫に打ち開けて相談してみようか、しかしそれも心配だった。潔癖な彼が、どんな風に誤解しないとも限らない。それにもう一つ、陽子の胸を刺すような心痛があった。それは他でもない、兄のことである。

春樹は風采も立派、学校の成績も良く、才物であったが、どういうものか、幼少の頃から盜癖があつた。が、彼に云わせるところだ。世間の人は皆間抜けで、馬鹿揃いだ。すきだらけだから盜まれる。盗んでくれと云わんばかりな顔をしているのに、自分の不注意を棚に上げて、人に盜癖があるなんてチャンチャラおかしい。その気持ちは彼女にもよく分つた。

それに春樹は物を盗んで、それをどうしようというのでもない、ただ、他人が後生大切に身につけているものを、こつそりと掏すり取る、それが愉快なのだ、その瞬間、実に何とも云えない快感を覚える、それを味いたいばかりに、罪を重ねているのだが、盗んでしまえばそれぎり、品物に執着がないのだから、持主の住所を調べたは、送り返してやる。まさか、平松子爵の次男がスリだとは何人も感付かないだろう、知っているのは妹一人位のものだと彼は考えていた。しかし、その愉快な遊

戯も、陽子が梅田家へ嫁いだ日を限りに、きっぱりとやめたはずである。が、もしも盗癖というものが血統にあるのだとしたら——、知らぬ間に心のどこかに芽生えていたとしたら——、と、考えると、彼女は身も世もあらぬほど苦しくなった。

薄墨色の女

警察から喚出よびだされた夢を見て、陽子は眼を覚ました。ガーゼの寝巻は汗で肌にはりついている。

夫は起きて、新聞を読んでいた。何か出ているのではないか知ら、とと思って、上目使いに顔色をうかがった。

「何だか、寝言を云つてたよ」

ギョツとして、面を反向け心を落付けてから、何気なく、

「新聞に——、何か面白いことでも、出ておりまして？」と訊いた。

「ウム。『省電の通り魔』ツて題で、スリの一味が就縛された記事があるが、それを捕えた山梨刑事の写真が出ているんだ、この男、この間会社へやって来て、僕と

暫時話したからよく知っているんだがね」と云つて、新聞記事を読み上げた。刑事を知っているのです、特別に興味を感じているらしかったが、陽子は何だか厭な気持ちが出た。だが、黙つていても悪いと思つて、

「山梨刑事ツて、どんな方？」

とお世辞に訊いてみた。

「まだ若い、なかなかの敏腕家だよ。庁内きつての美男子で、女のような優しい顔をしている、スリ仲間じゃ、鬼山梨で通つていそうだ」

「そんな奇麗な人を、鬼だなんて可哀想ねえ」

陽子はその話をいい加減に打ち切つてしまいたかつたので、枕時計を見て、

「あら！ もう、八時過ぎてるわ」と吃驚したように飛び起き、急いで寢室を出た。次の間の大きな姿見鏡に、彼女の顔が真青に映つた。頭がずきずき痛む。

夫が外出したら実家へ行つて、春樹に相談しよう。こういうことは何人よりも、彼が一番よく理解してくれるだろう。助けてもくれるだろうし、きつと好い智恵も貸してくれるに違いない。

彼女は心の苦しみをかくし、つとめて元気らしく装つていた。聴て夫を玄関に送り出すと、早速実家へ電話を掛けてみたが、兄はまだ起きていなかつた。急用が出来たから、後刻行く、と云い残して、電話室を出ようとしたら、扉の前に女中が待つ

ていて、

「奥様に、是非、お目に掛りたいと仰しやつて、ご婦人の方が、おいでになりましたが」と云つた。

陽子は何がなしに、ハツとして、

「何？ ご婦人の方だつて？ お名前は？」

「仰しやいませんが、お学校のお友達だから、お目にかかれ分りますつて——」
「どんな方？」

「モダンな、お背のお高い、大きなお眼のお美しい方でございます。薄墨色のご洋装が、逆とどもよくお似合いで——」

聞いているうちに、彼女の膝頭はガタガタと慄え出した。薄墨色の女！ 背の高い、眼の大きな、あああの人だろう。三越の貴金属部で、自分と同じように指輪に見入っていたが、あれはお客さんではなかったのか知らず？ 洋服部あたりには、よくああしたモダンな人を見受けるから、あの女もやはり店員の一人だったのかも知れない。と思うといよいよ不安になった。三越にしても梅田子爵夫人という身分に對して、滅多な真似は出来ないから、まず最初は穩かに話をつけようと、店員をよこしたのかも分らない。

用件を訊かずに、知らぬ人と会つてはならぬ、という夫の日頃の吩咐いひつけけも忘れて、

名前さえ云わない、その未知の婦人を応接室に通させた。

「お茶だけでいい。ベルを鳴すまで、——来ちやいけないよ」と我知らず、きつくと云つて、陽子は胸をドキドキさせながら、応接室のドアをさつと開けた。果して——薄墨色の女は、にこやかに笑いながら一礼して、

「昨日は失礼いたしました。突然で——嘸ぞ吃驚なすつたでしょう？」

と馴れ馴れしく云う。陽子は早く用件を云ってもらいたかったので、ただ、「いいえ」と云つて、微笑したがり黙っていた。

婦人は燐寸^{マツチ}を磨り、器用な手つきで巻煙草に火を点けた。何を云い出されるかとハラハラしながら、煙の行衛^{ゆくえ}を見ていると、薄墨色の女はやがて煙草の喫いかけをぐつと灰の中にさし込んで、

「突然、伺ツた用件、——奥様、——もうお分りでございましたか？」と意味ありそうな眼をして、にやりと笑つた。

陽子は唇を震わし、眼を膝に落して、

「何ですか、私には、——ちツとも——」と微かな声で答えた。

「あら、まだお分りになりませんか？ 昨日、お預けしておいたものを——、頂戴に上つたんですよ」

「？」

「オホホホ。とぼけていらつしやるの？　奥様、お人が悪いのねえ。あのダイヤの指輪、——ポケットの中へ入れておいた——」

彼女は一時に呼吸が止ったかと思うほど、驚いた。ダイヤの指輪は、この婦人のものだつたのか。

「オホホホホ。そんなに吃驚しないだツていいわ。貴女は何もご存じない。否え、何の罪もおありにならないんですのよ。あのダイヤは私が盗んで、ちよつと奥様のポケットを拝借したんですわ。私達仲間ではよくやることですが、——素人の方のお借りしたのは、私、始めてです。どうぞ、返して下さいね」

陽子は呆気に取られていたが、この女は三越の店員でも何でもなく、女掏摸すりだったのかと思うと、いくらか安心した。盗んだ人が分れば、もう自分に嫌疑がかかるはずもない。三越から何とか云ツて来たら、この婦人のことを話してやればいいんだ。

彼女は指輪を返して、ホツとした。

薄墨色の女は嬉しそうに、それを掌の上のせて見惚れていたが、

「奥様、私なんかの手並に驚いていらつしやるようじゃ駄目ですわ。明晩の舞踏会に無論ご出席なさるんでしょうが、あの観光団の中には世界的なスリの名人がいるんだそうですよ。非常な美人で、誰が見ても高貴な婦人と思われなんでしょう。——何しろ世界中のスリ仲間から、女王のように崇めあがられているんですから、

素晴らしいじゃありませんか。私もせめて、一目拝みたいと思ってるんですが——」
とすっかり隔てがとれて、まるで仲間同志に話しかけているような調子だった。
あれほどまでに思い込んでいたダイヤだのに、どうしたものか、今はもうちつとも欲しくなくなつた。返してしまつてからは、反つてさばさばとして、心が軽くなる位であつた。

薄墨色の女が帰ると直ぐに陽子は実家へ行つて、春樹に会い、昨夜からの出来事を話し、

「ダイヤを渡してやツたけれど、——大丈夫でしょうか、私、補助罪になりやしないかと思つて——」

「現行犯でなければ大丈夫さ。尤も前科があれば別だけれど——、とにかくそれほど女だ、心配はないよ。——そして、何かい、世界的の奴が観光団に交つて来ているんだつて？ そいつあ愉快だな、その女を俺に紹介してくれないかなあ」と春樹は眼を輝かせて云うのだった。

世界的の名人

観光団歓迎の大舞踏会は、グラランド・ホテルの大ホールで開かれた。

平松春樹は瀟洒たる服装で、美しく着飾った妹の陽子を伴い、会場へ急いだ。入口には主催者側の紳士淑女がずらりと十数名一列に並んで、来客を受けていた。陽子はちよつと気後れがしたように躊躇っていたが、兄を顧みて口早に云うのだった。

「皆さん、お立派で——、私きまりが悪いから、——はやく、このネットワークスをとってしまつて頂戴よ」

春樹は苦笑して、

「馬鹿だなあ。だから、止セツて云つたんだ」

と云いながら、ルビーと真珠を鑲めたネットワークスの環を外してやった。

陽子は春樹の先に立つて、その列の前を通りながら、一人々々挨拶をした。中ほどのところまで来て、何気なく次ぎの女の顔を見た。彼女は驚いて足が竦んでしまった。それは昨日会った薄墨色の女ではないか、しかも、その左の指に煌々と輝いているダイヤ——、それは慥かに見覚えのあるものであった。スリがどうして主催者側の一人として立っているのだろうか？ 余りの不思議さに暫時棒立ちになっている

と、先方から陽子の手を握つて嬉しそうに微笑み、「昨日は失礼、——今晚はよくいらつしやいました」と愛想よく云つて、隣の夫人へ、梅田子爵夫人であると紹介した。春樹は妹の後にいたので、名も知らない薄墨色の女に握手もし、自己紹介もした。

列を通り越してホールの中に入ると、陽子は周囲を見廻しながら、兄の耳に口を寄せた。

「大変ですよ。お兄さん。あの薄墨色の女はスリです」

「えッ、だつて、主催者のリスイヴング・ラインに立っていたじゃないか。人違いだろう、うっかりスリだなんて云うと大変だぞ」

「でも——、昨日は失礼と云いましたよ。確かに間違ひではありませんわ」

「もしか、それがほんとうだとしたら、——痛快だな。——どんな女だか、僕ももう一度見てくる」と云つて、止めるのもきかないで、また入口の方へ後戻りしてしまつた。

陽子は呆れて、兄の後姿を見送つていたが、聴て自分達のグループの方へ行つた。春樹のシイクな風采とスマートな社交振りとは西洋人の氣に入り、殊に若い女達の間には大もてだった。忽ち番組のカードは予約で一杯になつた。

噎せかえるような強い香水、甘たるい皮膚の香、柔らかそうな首筋、クリーム色の

ふっくりした胸、それ等は彼に何の刺戟も与えなかつたが、ダイヤの魅力には時々自製の念を失うような、恐しい誘惑を感じた、春樹は寶石に眼を反らせて、ホールの中を踊り歩いているうちに、幾度も浮墨色の女と廻り合つた。最初は黙礼を、次ぎには微笑を、終いには眼で合図するほど親しくなつた。その眼がまたよく物を云う。偶然にバツタリ瞳が合う時など、春樹は身内がすぐむような気持がした。日本人だろうか、西洋人だろうか、あるいは雑種あいのこ児かも知れないが、いずれにしても不思議な魅力を持つ眼である。

世界的のスリの名人、それがこの中にいるというのだが、皆立派な人ばかりで、怪しげな者は一人もない、が、春樹はどうかして探し当てようと思ひながら、次ぎから次ぎへとかわつて行く相手の女に、注意深い眼をそそいでいた。

十二時を打つと同時に、ドラが鳴つて、食事を知らせた。デザートデザートのフオークを置くともう音楽が始つた。忙しい、と口小言を云いながらも、皆愉快そうに、ナフキンをテーブルの上に投げ捨てて、ホールへ馳せ参じた。シャンペンに元氣づいて、ふらふらする足を踏みしめながら、春樹は薄墨色の女と踊つていたが、その次ぎの時には、銀髪の肥った貴婦人の手を取つていた、見るからに金持らしいこの人は、年にも似合わぬ派手なネックレースをしていた、大粒のダイヤがぶらりと胸に垂れ下つて、これみよがしに光っている。

酒の酔いが手伝つて、すっかり大胆になつていた彼は、夢中に踊っているふりをしながら、背中に廻していた片手で、首筋に喰い入るようになり込んでいる細い鎖を探ぐつて環を外した、と、思つたら、するするとネックレスをポケットの中に^す込めり込ませてしまった。銀髪の婦人はいい気持ちに踊っていたので、少しもそれを知らなかった。幾分か過ぎた後、フト胸のダイヤの失くなつてゐるのに気がついて、騒ぎ出した。

急にホール内がざわめいて、困惑したような青い顔の支配人は、銀髪の婦人を別室に伴つて行つた。

何事だろう？ と次ぎから次へ、訊いたり答えたりして、噂は忽ち拡がった。貴婦人達は各自に云い合せたように、自分の寶石が失われてはいないかと、改めてみた。「シャンペンに、大分酩酊していらしたから」

と一人が云つた。

「どこかに、落したんじゃないでしょうか」

「いいえ。盗まれたんですのよ。あの方、米国の大金持なんですつてねえ」

舞踏会はすっかり白けてしまった。

ネツクレース

ネツクレースの紛失で大騒ぎをやっている頃、平松春樹は地下室のバアで愉快に酒を飲んでいた。彼は何となく嬉しくつてたまらなかつた。ボーイを掴まえては冗談を云つたり、酒を注いでやつたりしていたが、相手がいなくなると急に淋しそうに、ぼつとして、ちびり、ちびりと飲みはじめた。すると後に軽い靴の音がして、薄墨色の女がすいと入つて来た。

「ラム酒を頂戴！」と云つて、どこに腰掛けようかというように、ボックスを眺めていたが、ふと彼の顔を見るとにツと笑つて、いそいそと傍へやつて来た。春樹は慌てて半席を譲つた。

「お一人でこんな処にいらしたの？　いつホールを脱け出しておしまいになつたか、私、ちつとも知らなかつた。ご一緒に飲むお約束をなすつたくせに、おいてきぼりするなんて、酷い方ねえ」

「くたびれちゃつたから——、少し休んでまた行く積りだつた。酒でも飲んで、元氣をつけてね、——さア、どう？　もう一度僕と踊らない？」

女は吃驚したように、

「まあ、あなた、何もご存じないの？ もう舞踏会はお終いになっちゃったんですよ。悪い奴がいて、銀髪の奥さんのネックレスを掏ったんだそうですわ。ホールの中は、いま、その事で大騒ぎしているの」

春樹はプツと吹き出して、

「誰がやっただらうな。またどこかのポケットにでも入れてありやしないか知ら？」

「オホホホ、お妹さん、もう話しちゃったのね、いやだわ」と女は笑いながら、大きな眼で睨んだ。彼はちよつと真面目になって、

「だが——。あの話は少し変だね。僕は妹から聞いて、直ぐ三越に電話で問い合わせてみたが、ダイヤは一つも紛失して居りませんって云ってたぜ」

「それや不思議はないわよ。三越のダイヤなんか手につけやしませんもの。ありや私が持っていた偽物ですわ。それを使ったのよ」

「用意周到だなア。しかし、偽物を返してもらったって、儲からないじゃあないか」「あの場合には目的が別にあつたから、儲けなくつてもよかつたんですわ」

「どんな目的？」

「あなたにお会いしたかつたからよ。お妹さんに御紹介して頂こうと思つたの、そのためにあんな苦勞して、狂言まで書いたんですわ」

春樹は少し撥くすくつたかったが、それでも悪い気持はしなかった。

「今夜は君の話につられて来たんだが——、世界的のスリなんて、どれがそうだから分りやしない。失望しちゃったよ」

「まあ！ 妙な事に興味を有もつてるのね。世界的の名人つて、大抵知れてるわ。私なんかの眼から見りや——」と云いながら、ちよつと起ち上つたが、どうした拍子にか靴を這はべらせて、危ぶなく前へのめりかけた。彼は中腰になつて、肩を支えてやつた。彼女は起ち直ると顔を赤くしながら、

「これは、——私が頂きましたよ」と云つて、彼の掌の上に、冷めたい、シャリツとしたものを載せ、「ダイヤのネックレス！」と力をこめて云つた。春樹は胸がドキンとした。夢中でそれを睨にらんだ。薄墨色の女は誇らしげに細い鎖を撮み上げていたが、低い、小さい声でアツと叫んだ。それはネックレスには違ちがいなかったが、ダイヤではない、ルビーと真珠を鏤くめたもので、銀髪婦人のと似てもつかぬ安物であつた。春樹は顔を赤らめ、それを奪い取つて自分のポケットに押し込み、

「生意気な真似をしやがる、だが、これは俺のものじゃないんだ」

「じゃ、誰のものなの？」

「妹のさ。陽子の奴、俺が止せて、あれほど云うのもきかないで、こんな安物を首にぶら下げて来たもんだから、ホールの入口まで来ると恥はしくなつて、とつてし

「まい、俺に預けたんだ」

彼女は失望のいろを顔に浮かべながら、苦笑いしていた。

「しかし、君もなかなか凄い腕だね」とつくづく感心したように云ったが、急に舌打ちして、

「だが——、いまいま忌々しいなあ、俺は今まで人にやられた事は一度もなかったんだのに——」

「それや仕方がないわ。相手が私だもの」

「何だつて？」

「世界的のスリの名人を向へ廻しちや、いくら平松の若様だつて、かな敵いっこありやしない」

「フム、やつぱり君だったのか。多分、そんな事ぢやないかと思つていた。¹³しかし、観光団で豪いスリがやって来たつて事は大分評判らしいぜ。余り警察を甘く見ていると取つ掴るぞ」

「大丈夫だわよ。警察で躍起となつて捕えようとしていても、私はこの通り、平然と、大東京の真中を大手を振つて歩き、ダンスをやって遊んでるぢやないの。私

13 「そんな事ぢやないか」はママ

の好きな蛇のように、捕えようとしても、するすると這べり出て逃げつちまうんですからね。警察の網の目は私には少々大き過ぎるんですよ」

彼は氣を吞まれて、ちよつと返事が出来なかつた、女は急に今度は調子を変えて、「私のような世界中を股またにかけた、あばずれ者でも、生れ故郷の恋しさには変りがないんですよ。だから、こつそりと觀光団に交つて来ましたのよ。今度の帰朝は商売ばかりが目的ではなく、よそながら母や妹達を見ようと思つてやつて来たんです。——だつて、公然と会うことが出来ないんですもの、可哀想じゃない？ 父は非常に厳格な人ですから、私の姿を見たら容赦なく捕えて警察へ突出すでしょうよ。親の手を振りきつて逃げる勇氣はないから、最初から会うことは断念めて、遠くから、みんなの姿だけを眺めて喜んだり、悲しんだりしているんですわ」と云つて、少し打ち萎れた。春樹はその話を聞いているうちに、この女が何だか可哀想になつた、しかし、また考えると癪に触る、この俺の持物を掏つた奴だ、と思うと憎くて堪らない、何人よりも勝れていると信じていただけに、彼は非常な屈辱をさえ感じているのであつた。

「君の手腕には全く感心した。世界的の名人と云れるだけある、実際スゴイもんだ。が、俺だつて、そんなに馬鹿にしたもんじやないぞ。俺には親分もなければ、仲間もない。誰に教わつたのでもないんだが——」

「それやそうでしょう。私の仲間中で、平松子爵の若様ツて云つたら、知らない者は一人もありませんからね。どの程度の腕だかは知らないけれど、相当なもんだツて事は分つてゐるわ。でも——、現場を見ないんだからねえ」

「じゃ、見せてやろうか」

「オホホホ。そんなに己惚うぬぼれると失敗するわよ。耻を搔かせるといけないから、今日はおあずけにして、またこの次ぎ見せて頂きましょう」

「そんなことを云うなよ。是非、一つ見てもらいたいんだ」
女の手首を掴んで、起ち上つた。

現行犯

「まあ、手近かなところ、どこでもいい」

春樹は気が進まないらしい様子をしている女を、引立てて歩いた。

折柄ホテルの玄関は、舞踏会の客が帰るので大混雑だった。彼は興奮した顔をして、人を推し分けつつ、物色していた。

夜会服を着た一人の貴婦人が、自分の自動車を眼で探しながら、夢中になって延び上っているのを見た。春樹はその背後に近づき、ちよつと突当るや、目にも止まらぬ早さで、ダイヤのピンを抜き取り、しつかと握ったままその手を外套のポケットに突込んだ、それと同時に、彼の利腕はぐいと掴まれた。ハツとして振り返ろうとする耳許に、恐ろしく底力のある太い声で、

「君の名譽を思つて——、この場は穩かにしてやるが——」

いやに横柄な物云いだ。しかも声の主は薄墨色の女ではないか。春樹は狼狽した。「神妙にしろ！」

冷めたいものが彼の背筋を走つた。女はぐつと睨んで、鋭く、云い放つた。

「現行犯だ！」

「エツ！」

があんと頭をひとつ、玄翁げんろうで殴打なぐられたような気がした。彼はよろめきながら、女の顔を正面からジツと見据えた。

薄墨色の女は巧みな変装を解いた。

「あつ。鬼山梨！」

女装の人、それはスリ仲間が一番怖れられている、山梨刑事であつた。

魔性の女

会社を退出した時には桃子にも連れがあつたので、本庄とは別々の電車に乗ったが、S 駅を降りると、彼はもう先に着いて待っていた。

二人は腕を組んで夕闇の迫つた街を二三町も歩くと、焼け残つた屋敷街の大きな一つの門の前に立ち止つた。

桃子は眼を丸くして、門冠りの松の枝を見上げ、

「あんた、このおやしき？」

「うん。素晴らしいだろう？ 会社への行きかえりに毎日前を通つていてね、いい家だなあと想つていたんだ。今朝、出がけに寄つて、部屋を見せてもらった。離室の茶席、とても素的だぜ。没落した華族さんの内職にやつている御旅館兼お休息所さ。ここなら会社の人なんか絶対知れっこないからね」

「だって、私——」

桃子は尻り込みして、

「あなたのお宅といくらも離れていないんでしょう？ そんなお膝もとで——、会社の人よりも奥様に感付かれたらどうするのよ」

「燈台もと暗しき。遠征すると反つてばれる。これなら、奥様だつて、仏様だつて御存じあるまいさ」

構えが堂々としていたので桃子は気おくれして、入りそびれていると、客の気配を聞きつけて、奥から出て来た素人臭い女中に案内され、多摩川砂利を踏んで、右手の朱雀門から庭の茶席へ通された。

数寄を凝らした部屋を物珍しそうに眺めていると、庭下駄の音をわざと大きくたてながら、先刻の女中がお銚子とビールにちよつとしたつまみものを運んで来た。

「御用がございましたら、このベルをお押し下さいませ」

本庄の座っている壁際に、ベルが取りつけてあった。女中が出て行くと桃子はお銚子を取り上げて、本庄の盃についてから、自分はビールを呑んだ。

「まさか、奥様、あなたと私とのこと、御存じないんでしょう？」

「多分ねえ。君が僕の病氣見舞いに来た時、あとでいやに褒めてたから——、どうだかなあ」

「知れたら困る？」

と眼で笑つた。

「困るなあ。だが仕方がない。君とはどうしたつて別れられないもの」

「だって、奥様は絶対にやかない人でしょう？」

「うむ。だが――、嫉妬やれる方がいいな。黙ってただじいと眺めていられるのは辛い」

何を思い出したのか、本庄はちよつとベそを搔くような表情をした。酔いが出て、色の白い上品な顔にほんのりと赤味がさして、酒にうるんだ眼が美しく見えた。桃子はコップを唇に持って行きながら、惚れ惚れと彼の顔に見入っていたが、

「私はあなたが好きなんだから、奥様が怒つても、あなたに捨てられない限り絶対に別れないわよ」

「僕の奥さんだつて、君と僕との関係までは嗅ぎつけちゃいないさ。だが、彼奴は黙っていて常に僕の一挙一動を監視しているんだ。そして、僕の事なら一から十まで知りつくそうとしている。知らなきや満足出来ないんだ。いい事でも、悪いことでも。つまり、変態なんだろう」

「きつと、奥様、あなたをよつぽど愛しているんだわねえ。私なんか敵かわないかも知れない。そういう愛情の前には、私、頭が下がるわ」

「僕はいやだよ。つくづくいやだ。まあ考えてもみたまえ。何んでも、かんでも知っていて、知らん顔していようっていうんだからね。いやだよ」

煙草を灰皿に押しつぶした。

「ほんとに愛していれば、相手の全部を知りつくそうとするのは、当然だわ。でも、

私には離れている間のあなたが何をしているか分らないわよ。勿論分りたいけれど

——

「訊けばいいじゃないか」

「訊いたつて、かくされればそれまででしょう？　あなたにしたつて、私に云いたくない事もあるでしょうからね。それが嫉妬心をそそのかすものになるということも知つて居けれど、あなたの奥様のように、何もかも見透せたら、決して、嫉妬は起きないだろうと思うわ」

「そうかなあ」

「たとえばさ。あなたとこうしていても私にはあなたの愛情がどれほど深いものかつてことは分らない。あなたの言葉や態度で想像するだけのものでしょう。ところが奥様はあなたの心の奥の奥まで見透せるんだから、自分が優越な立ち場にある間は心配はないでしょう。あなたに女が出来たつて、平気でいられるかも知れない。つまり、自分の方が勝っているからよ。愛されているという確信があるから——」

「愛情をわけられるのは不愉快だろう、全部自分のものにしたいたいと思わないか知ら？」
「私はあなたの肉体も精神も独占している積りでいるんだけれど、ほんとはどうなのか知ら？　奥様が嫉妬しない処を見ると、怪しいもんだわ」

「うちの奥さんはね。僕をくさりでつないで置いて、適当に遊ばしてくれるんだよ。」

飼犬のつもりでいやがる。いやな奴さ」

と吐き出すように云う。

「だって、御新婚当時は随分、奥様が役に立ったって云うじゃないの？」

「それや役に立ったさ。彼奴の持つている第七感の神秘なんだよ。そのおかげで危険も救われたし、上役のお覚えも目出度くどんどん出世もするしさ。重宝だったのが、今じゃ、そのかんがうるさくなくなった。何んでも知ってやがるのは、つまりその第七感が発達しすぎるからだ。そして近頃はますます鋭どくなりやがった。このまま進んだら僕は苦しくって一緒にはいられない。気狂いになってしまうぜ」

「あなたを気狂いにさせるほどの情熱、私は羨しいわ。あなたの奥様が——」

「何云ってるんだ。君がいなかったら僕は生きちやいられない。奥さんぎりだったら僕はとうに自殺してしまつてらあ」

「私には第七感どころか第六感も働かない、平々凡々で何にもわからないから、そこがあなたには肩が凝らないし、気楽でいいんでしよう？」

「君とこうしている時だけが、僕には天国なんだよ」

本庄はついと起ち上つて、ちよつと次の間を覗いた。水色の覆いのかかった涼しそうなスタンドが枕許に点いていて、白麻の蚊帳越しに紅入友の蒲団がなまめいて見えた。彼は襖をしめきると、桃子のそばへにじりよつて肩へ手をかけて、引きよ

せ、

「ねえ、僕の全部は君のものなんだよ」

桃子のコップを持った手がぶるぶると震えた。

「駄目よ。ビールがこぼれるわ」

と、飲みかけのコップを彼の唇へ持つて行った。

一一

家を出る時、今日は宴会で少し遅くなるかも知れないと云っておいたので、十二時近くに帰ったが、妻の安子は別に怪しむ様子もないのに内心ほっとして、言わずもがなのことまで軽口にしやべりつづけた。

「会費の関係もあるだろうが、酒がまずくってねえ。やっぱりうまいのは家の晩酌に限るなあ」

安子はちらりと流し眼で彼の顔を見た。五つも年長の彼女はいつも厚化粧に派手なみなりをして、彼との釣り合いを気にしているようだった。

「そんなお世辞を云つて、お酒のあとねだりしたつて、もう駄目よ。随分召上つてるんですもの。毒ですわ」

と云いながらも彼のためにとつておいた配給のビールをぬくのだった。

安子は柱時計を見て、

「あら、もう一時よ。明日日曜だからゆつくり寝ていらして頂戴な。その間に、私、研究所へ心霊の修業に行つて来ますわ。あなたのお目覚めになるまでに帰りますから——」

本庄は苦い顔をして、

「いい加減にしろよ。修業、修業つて、どうするつもりなんだ。これ以上か、んが、達されちゃやりきれない」

「だつて、私には立派な霊能があるんですもの。修業して、磨かなくっちゃ損です。そして、あなたがもしか失業でもなすつたら、私霊媒になつて、うんとお金儲けて、あなたを左団扇で遊ばしておいて上げるわ」

「馬鹿ツ。縁起でもない。三十二の僕が今から失業してたまるかい。これからじゃないか」

「はい、はい。すみません。お疲れのところを余計なこと云つて、お気にさわつたらごめんなさい。では私はお先へ寝みますから、御宴会のつづきでも考えて、思い

出しながらお飲みになって下さい」

安子は襖をびしやりと閉めて出て行つた。宴会のつづきでも考えて——、と云われた言葉が頭に残つて氣になつた。

「お疲れのところ、と、云いやがった」

本庄は低声でつぶやきながら、襖越しに彼女の方を睨んだ。

二本しかないビールを奇麗に飲んでしまつて、床に就いたのは何時だかわからなかつたが、眼が覺めた時には安子はいなかつた。出かけてから大分時間がたつてたどみえて、朝飯の仕度は茶の卓上に出来て白いレースの覆いが被ぶせてあつたが、今朝焚いた御飯もすっかりさめて、味噌汁は水のようにだつた。朝飯を終つて、お茶を飲みながら、何気なしに、妻の机の上を見ると、いつもきちんと片づけてあるのに、今日に限つて、家計簿も出しっぱなしになつている、日記帳の上には万年筆もころがっている。

「ほう。女房の奴、日記なんかつけてやあがるのか、生意氣な——」

本庄は安子がどんな事を書いてあるか、こつそり見てやろうと思つた。

「女房の日記なんてものは、およそくだらない。家計不如意の愚痴か、亭主の不平と定つてらあ」

冷笑しながらばらばらと二三枚はぐり、最後のページに眼を落すとはつとした。

「九月十日 土曜日

近頃奥田子爵の家ではもぐりで旅館を開業したそうだ。今日の逢引きには持つてこいの家だから彼女もさぞ満足するだろうと思ひ、出がけにちよつとあたつてみたら、割に低廉だ。部屋も気に入つたし、妻には宴会と偽いつわつて出たので、帰りの時間の心配もない、万事都合だ。会社の帰途、彼女と同行する。

彼女は妻の凝視を恐れているので、僕は極力妻を罵倒して彼女を慰めてやる。二人は永遠に別れないという誓いをして、彼女を駅まで送つて家へ帰る、十二時十五分前である」

本庄は頭を掻きむしつた。女房の奴、何もかもまた知つてやがる。妻の日記ではない、これは妻が書いた本庄自身の日記ではないか。馬鹿にしてやがる。

しかし、昨夜のことをもう知つているとは全く驚く。そして素知らぬ顔をしてい
るのでから、悪どい奴だ。

「魔物、魔性の女！」

彼は日記を叩きつけた。

が、気になるのでまた拾い上げて、最初の方に眼を通した。

「八月六日 土曜日

年上の女の恐ろしい情熱にはさすがの僕も辟易へきえきする。もともと人妻だった彼女が、

良人を捨て、地位を捨てて僕の懐ろに飛び込んだのだ。それを今になって、僕が誘惑したかのように云われるのは甚だ迷惑千万である。

彼女の熾やきつくような恋情に僕が負かされて、遂いに結婚するようになつたのだが、安子の第六感、いや第七感だそうだが、最初のうちは全く重宝だったとえば、近日会社で人員淘汰がありますから、注意なさい、と云えば四五日内に必ず首をきられる奴が出てくる。

彼女はまた今日は出勤時間を少し遅らせないと、電車の事故があつて危ぶないですよと云う。馬鹿なことを、と、思つても少し遅れて出かけると、前の電車が脱線して怪我人があつたと騒いでいるなど、全くわれわれの六感と異つた第七感の神秘を持っている。

誰が云うのか、彼女には豊かな霊能があるから、それを磨けば何でも見透せるような豪えごい者になる。とおだてられ、せつせと心靈研究とやらを始めた。その実、内心では彼女を離れている間の僕の行動を見たいという野心から、研究を始めたものらしい。彼女の本心を忌憚きたんなく云えば、本庄俊なる僕を全部独占し、僕の行を一から十まで知りつくそうとするにある。近頃ではただ知るだけでは満足出来ない。僕の肉体は髪の毛から足の爪まで、いや、出来ることなら皮膚を破ぶつて内臓を引き出し、僕の心臓までしらべてやろうという欲望に燃えているらしい

のだ。しかし、僕を殺してしまつてはならない。死なせることは彼女自身をも殺す結果になるのだから、そこで、どうしても心霊の必要を感じる。霊の力によつて、僕の本心を探ろうとするのだ。そして、常に凝視の眼を怠らぬことである」

本庄はぱたりと日記帳をふせて起ち上つた。

「勝手にしやがれ。心霊がなんだ。霊の力がなんだ。たわけ者！」

ぺつと庭に唾を吐いた。

「只今」

いつ歸つて来たのか、安子が後ろに立っていた。

「日記お読みになつて怒つてらっしゃるの？」

と、にっこりした。

本庄はむうつとして横を向いた。

「あまりが悪るいんでしよう？ 何もかも知られちゃつて？ オホホホでも、あなたが外で何をなさろうと、私はちつとも怒りやしないのよ。あなたの傍には、あなたの眼には見えないけれど、いつでも私の霊が付き添つて見ているんですから、私、何んでも知ってるわ。そして、どんな女が出来ても、結局は私が一番好きで私の腕の中へ歸つていらつしやるつてことがわかつているから嫉妬も起らないのよ。オホホホ可愛いから、あなたの道楽を大目に見て上げてるんだわ」

「余計なお世話だ。僕の体は僕のものだ。君の許しを得なくたって、勝手に自由にする、一々ああだ、こうだと邪推されちややりきれない、第一不愉快だ、君は自分のでたらめな想像を信じているが、実際に僕が外でどんなことをやっているか常識で考えたつて、分るはずはないじゃないか、いいかげんな創作日記を書くなんて人を侮辱するにもほどがある。実に怪しからんよ。第一その量見が僕には気に喰わないんだ。一人の男を全部自由にしようなんて自惚れも大概にするがいい。とにかく、そこに書いてある日記は全部嘘と出鱈目で、でっち上げた僕の悪評なんだ、僕をそんな人間だと思つて軽蔑している奴とこの上一緒に暮らすのは真平だ」

「また別れようつて云うんですの？」

「当り前じゃないか。僕は人間は好きだが、君のような化け者は嫌いだ」

「ひどいことを仰しやる。あなたと別れるようなことになったら、私は死にますよ。死んだら、私の靈魂は直ぐあなたの肉体に入り、あなたの霊と合致して、永遠に離れませんかからね」

本庄は身ぶるいした。

「そんなに私が嫌いになつたんですか？ もう直きに取り次ぎ電話が酒屋さんからかかってきますから、辛棒していらつしやいよ。そして気晴らしに桃子さんに会つて、機嫌よく帰つていらつしやいね」

「何云つてやがるんだ。桃子なんて女、僕は知らない」

「お忘れになった？ 御病氣の時お見舞いに来てくれたタイプピストさんよ」

本庄はそっぽを向いていると、果して酒屋から電話を取り次いできた。

彼はそこにあつた庭下駄を突かけて、そわそわと出て行つたが、電話口の声は桃子であつた。

「奴、何もかも知つてやがつて」

と忌々しそうに云つたが、

「とにかく、行くよ。昨夜のあすこ、ね？」

三

本庄は一分の隙のない昨夜のスマートな服装に引きかえて、今日はふだん着のままで羽織も着ず庭下駄を穿いて、奥田子爵の御休息所へ行つた。近くから電話をかけたとみえて、茶席には桃子が先に来て待つていた。

彼女の青褪めた顔を見ると、本庄は胸がドキリとした。

「家の方に知れたんじやない?」

真先に胸に浮んだことを云った。

「いいえ、違うの。家の者じやない、あなたの奥様に知れちゃったじやないの。私、どうしよう」

彼女はおろおろ声で云った。

「それがどうして、君にわかったの?」

「奥様から今朝お迎えが来たのよ。そしてお目にかかりました」

「どこで?」

「心霊研究所とやらの応接室で、私、とても気味がわるかったわ。眼をすえて廊下を歩いている女の人や、私の顔を射るような凄惨な眼で見ている人達が、うようよいて、私、体がかたくなってしまったのよ。奥様もお宅でお会いした時は優しいお顔をしていたけれど、今朝は深刻な表情で、私の心を突き刺すようなお眼をなすつてね。本庄を迷わすようなことをなさると私はゆるしても私の守護の霊がゆるしません。あなたの身に禍いがふりかかるから再び昨夜のような過失をしてはなりませんよ。早く手をきつて、あなたは人の夫などを盗まず、正統な結婚をおしなさい。と、仰しやるの」

「余計なおせっかいだ。そんな言葉で、二人の仲を割さかれてたまるもんか」

「でもねえ、私、考えちゃったの」

「どう考えたの？」

彼は慌てて訊いた。

「恐いんですもの。昨夜のことをもう知っていらっしやるようじゃ、この先、あの方にはどんなことでも知れてしまうでしょう？ 私、興がさめちゃった、と、云つてはすまないけれど、監視つきで、お互いのおつきあいをする気にはなれなくなっちゃったんですもの」

それには本庄も同感だった。

「別れるよ、僕は断然安子と別れる」

と本庄はきっぱり云った。

いま、こういう話をしていながらも、安子は家において、ちゃんと知っているかも知れない。あるいは彼女の言葉をかりて云うならば、彼女の靈魂が彼女の肉体から遊離して、自由に飛び歩き、肉眼では見えないけれど、この部屋のどこかで覗き見しているのかも知れないのだ。

そんな馬鹿なことがあるはずはない。と打ち消すあとから、本庄は心が身に添わぬような不安に襲われるのだった。

「私、奥様のあの恐い眼が、この障子の穴からでも覗いてやしないかと思うと、落

ちついていられないのよ」

「あり得ないことだよ。君が、そんな非科学的な事を信じるとは思わなかった。みんな心の迷いだよ。安子のかんは鋭いが、出鱈目だ、それがたまたま当たったので、不審に思うのだが、僕だって、想像を逞しゆうすれば、ある程度までは当るからね」

「そんな気休めだけでは私安心出来ないの。奥様は逆もあなたを愛していらしやるのね。情炎に燃えた、火のようなあのお眼を見ても、あなたの心をやきつくさないではおかないのだと思えてよ。恐ろしい執念だわ」

「だから、別れる」

「ほんと？」

「ほんととも嘘もない。別れるより生きる道はないもの。絶えざる凝視に僕は苦しくなった。まあ、考えてもみたまえ。いつでも、いつでも、どこからか凝つと見ていられる、すべてを知られてしまう、それが妻だとあつては僕は休息することが出来ない。僕は疲れてしまったよ」

彼は両手で頭を抱えて、泣くような声でつぶけた。

「誰だつてある時間は自分ひとりの世界が欲しい、またそれが必要なんだ。自分だけしか知らない天地が要るんだよ。それがなくては生きては行かれない。それが心なんだ。心に思うことは口に出さない限り、何人にもわからないだろう？　僕はそ

の心を大切にしていたのに、その心の中にまで忍び入って、僕一人で思っていることを盗み知ろうとする者があつては堪ったものではない。四六時中休息なしに公衆の眼の前で踊らされている者より辛い。僕は氣狂いになりそうだよ。妻に別れることは一つしかない僕への救いの道だ」

「お別れになったら、それでもいいのかしら？」

「その上に何がある。僕は家屋敷も、財産も全部彼女に与えて、僕は裸一貫になつて安子から離れるんだ。僕がいなくなつても、あれだけの屋敷と財産があれば一生食うには困るまい。食えないようにして捨てたと云われては困るから、何もかも洗いざらいくれてやる。そしたら文句はあるまい」

「でも奥様は、あなたの全財産なんかより、あなたという人が欲しいんじゃないか知ら？」

「なら、どうすればいいって云うんだ？」

彼は焦ら焦らして怒つたような口調で云つた。

「どうすればつて、私には分らないけれど、きつと離婚を承知されまいと思ふのよ」「どこまでも従つて来ようつて云うんなら——、そして、いつまでも、この僕を金しばりにして苦しめようつて云うんなら——」

と彼は血の氣がさつと顔から退いて、鼻の頭に油汗がにじみ出た。

「どうしても離れないって云つたら、永久に僕から離れて、二度と付き纏えないようにしてやる」

「と、仰しやると？ どうなさるの？」

不穩の空気に、桃子はおびえながら青くなつて訊いた。

「うむ。その時は――、その時は殺しちまうばかりさ。殺せば完全に僕から離れる。いや、それは冗談だよ。アハハハハ」

桃子は彼の膝に顔を伏せた。

彼女の頭の上で、本庄の空虚な笑い声がつづいた。

四

安子は本庄の帰つて来る時間を知っているように、玄関のベルを鳴らそうとする
と、内から扉を開けてにこやかに彼を迎えた。

茶の間に入ると、お銚子がいいお加減についていた。彼女は盃を彼の手に渡しながら、

「今日は無事でしたね」

と云った。

「何が？」

「何がって、オホホホ桃子さんのことが」

本庄はむつつりと口を結んだ。

「ねえ。私と別れて、あのひとと結婚する御相談が纏ったの？ 随分酷い計画をなさる人達ね。でも、私、あなたが何と仰しやっても、別れるのはいや」

と云って、彼にすり寄り、手を握って彼の持っている盃に唇をつけて一口飲んだ。

「ねえ、あなたも飲んでよ」

「いやだ」

彼は音を立てて荒々しく盃を置いた。

「いやなはずね、もういい加減まわっているんですもの。桃子さんのお酌でなくっちゃやおいしくない？」

「何を云う？」

「ただ訊いてるのよ。私の愛情がうるさいんだって？ 罰あたりねえ、あなたって人は——、誰のおかげで、若いあなたが、特別にこんなに出世して、いい地位を得たのか、忘れたの？」

彼の膝に手を置いて、執拗な凝視をつづけながら、

「みんな、私の、いいえ、霊のおかげじゃありませんか。それがなかったら、重役候補はおろか、下っ葉の走り使いがせいぜいよ。その大切な私を裏切つて、桃子さんなんかと一緒にになりたいばかりに、別れるの、殺してやるのつて、大きな口もい加減になさらないと、世間の物笑いになりますわよ」

本庄は膝の手を払い退け、肩を聳かせながら、

「その恩があると思えばこそ、今日まで出来ない我慢をしつづけてきたんだ。が、もう辛棒が出来なくなつた、君のうるさい深情けは僕を気狂いにさせる。痒いところに手の届くような献身的なつとめぶりは全く有難迷惑で胸がむかむかする。君と一緒にいると僕は頭が変になつて、どうかなつちやいそうな気がする。君の毒針で刺すような凝視にはもう堪えられない。僕は君から完全に解放されて、自由の天地に大きな呼吸を吐きたいんだ。眼に見えない君の云う霊とかに縛られて、自由を失つているようないまの生活がつくづくいやになつた。別れよう。それよりほかに僕生きる道はないんだ」

「あなたと別れては、私は生きていかれないわ」

「生きてゆかれるだけの物を君にやる」

「全財産でしよう？ オホホホそんなもの、私はあなたが欲しいのよ。あなたの

体も、心も、全部を私に頂きたい」

本庄は手にしていた盃をぱつと彼女の顔に投げた。

「いい加減にしろ」

「私の希望をのべているのよ」

彼はカチカチと歯を鳴らしながら、

「悪女の深情けとは君のことだ。僕は普通の女が好きになった。掴まえどころのない霊だとか、心霊だとかにたぶらかされて、人の秘密を探ろう探ろうとしたりする女は大きらいだ」

彼女はねっとりした、まつわりつくような調子になって、

「そんなに嫌がられているのに、私の方じゃ好きで好きで堪らないとは何という情けない事でしょう。でも、逃げられるものなら逃げてごらんなさい。私の霊は私の肉体を離れて、あなたの後を追ひ、どこまでだつてついて行きますからね」

「ついて来るなら、来てみる」

「行きますとも、ほら、あなたの心の中に、私の霊が入って行く——」

安子はうつろな眼をして、彼の胸を指さした。

「えっ？」

彼はぱつと立ち上ると何者かを払いのけるように、心臓のあたりをばたばたと叩

いた。叩いているうちに、彼は次第に理性を失って行つた。

ただ、やたらに、眼の前にいる安子が憎くてたまらなくなつた。

「こいつさえいなければ——」

という念だけが頭の中で渦を巻いていた。

彼は彼女が火鉢に突きさしておいた裁縫用の鋺こてを手にとるや、力まかせに彼女の頭をなぐりつけた。

「あつ。あなたは——、ほんとに、私を殺す気だったのね？」

仰向けに倒れながら、なおも鋺を振り上げて、打ち下そうとする本庄を、いとしそうに見上げて、

「あなたに殺されることは、もうちゃんと前からわかつていたのよ。だけれど、ああ嬉しい。あれあれ私の霊はあなたの魂の中に溶け込んでゆくのが見えますよ。あなたの魂と私の魂は完全に、あなたの肉体の中で合致しました。永遠に離れない。私は死んでも私の魂はあなたの心の中に生きています」

「何を云いやがるんだ」

二度目に打ち下した鋺の下で、彼女はもう声を出すことも出来なかつた。

彼はやたらに鋺を振り廻わしながら、部屋中をくるくると廻わつた。

「この心臓の中に、彼女の魂が入っている、ええッ。出る、出てゆけ！」

彼は喚めきながら、自分の胸をなぐりつづけた。

「出ないか！ 出る、とつと出てうせろ！」

彼は身をもがき、何かを振り落そうとでもするように体をゆすつて、胸を叩きながら、家を飛び出し、あてどなく往来を走つた。

配給物を届けに来た隣家の奥さんが、安子の惨死体に胆をつぶして、附近の交番へ訴え出た恰度その時刻に、本庄は狂人として通行の警官に捕えられた。

耳香水

1

五六人の有閑夫人ゆうかんマダムからなりたつた『獵奇と戦慄を求むるの会』にS夫人が招かれた。

「世間に発表されていない、面白いお話を一つ願います」

幹事のA夫人の言葉につづいて、

「平凡でなく、奇抜なところをどうぞ——」

「息づまるようなお話がうかがいたいのだよ」

「偽りのない、ありのままのがいいのね」

「実際にあつたことでなくつちやあ刺戟がないわ」といろいろな注文が続出する。

S夫人は笑いながら卓上の紅茶に唇を潤し、奥様方の顔をひとわたり見廻してから、低い静かな声で話し始めた。

「私がある事件で支那に行っていた時のお話なんです——」。

ある大会社の支店長K氏の夫人が、自宅の玄関で、何者にか惨殺されていたという事件は、皆さんもまだ記憶していらつしやいませう。美人で、賢夫人で、熱心

なクリスト教信者で、まことに評判のよかつた奥様であつただけ、あちらではもう一時はその噂で持ちきりでございました。

その頃、鼠色の男と名づけられた殺人鬼が頻りに世間を騒がせて居りました。が、誰もその男の正体を見たものはないんです。恰度先年東京でも説教強盗が盛んに荒し廻っていたことがありましたね。そしてなかなか捕らず、段々大評判になつてくると方々に何々強盗というようなものが出現あらわれてきて、随分騒ぎましたね。人情はどことも同じだとみえて故意か偶然か、一時にあつちにもこつちにも殺人が行われて、市中はさながら戦慄の都と化してしまつていました。白昼カフェで女給が殺された。昨夜もダンスホールでダンサーが踊りながら、相手の男に心臓を突き刺されて絶命した。富豪の邸宅に強盗が入つて夫人がピストルで撃れた。殺される相手はいつでも定きまつて女です。

それがすべて鼠色の男の仕業だかどうか分らないのですが、彼も最初のうちは普通の強盗で、顔を見知られないために殺すのだということでしたが、中途から噂が變つて、金を奪うためのみではない。血を好むのだ。彼の目的は血を見るにある。女の血、美人の血。白い皮膚がパツと紅あけに染まる瞬間の美、それは彼に譬たとえ難い快感を与えるのだ。血の魅力に惹きずられて罪を重ねて行くのだと、まるで当人から聞いてきたような話をする人もありました。処がまた、新に妙な話が伝えられまし

た。彼はただ私慾を満足させるために殺人強盗をやるのではない、というのは殺人事件の行われた直後とも考えられる時間に、必ず貧しい人達を訪れて、若干の金を恵んで行く男があるというのです。貧民窟を潤して煙のように消え去るその人の感じが、いかにも鼠色というのに相応ふさわしかった。どうもあれが鼠色の男だろう。だろうというのがいつかそうだと成り、彼は義賊だと云い触ふす者も出来て、正体の分らない人に人氣が生まれてね、一方では恐怖こわれ、一方では慕あこまれるという矛盾ありさました状態にまでなつたんです。

K夫人を殺したのも無論その鼠色の男だということなのですが、しかしその犯人は一向捕まらないのですから、被害者の夫は憤慨して領事館を通じ、支那警察に対して嚴重に抗議をしたんです。

するとまた犯人は直ぐと捕つたんですよ。鼠色の男などと謳うたわれた義賊らしくもなく、から意気地のない、へなへなした苦力ククリのような男でした。多分狼狽うたした結果、金で買ってきた偽犯人なのでしょうねえ。

ただ不思議なのはその男が捕縛されて以来、鼠色の男はどこにも現れなくなり、彼から被害を受けるといふ事は全然なくなりました。捕つたのは真物ほんものの犯人だったのか、あるいは義賊と云われるほどの人ですから、自分の身代りに斬首される人間まで出て来ては申訳ないという考えから善心に立ち還つたものか、そこはよく分り

ません——。

私がこれからお話ししようというのは、その美しかったK夫人についてです。殺される二週間ほど前のある処で、偶然、彼女を見ましたのです。それも一度ではありません。それまで夫人と私は一面識もなかったのです。それがこの世を去る間際になって、つづげぎまに、二度も三度も見るなんて——、全く不思議じゃありませんか。どうも前置きが大変長くなって済みませんでした。

2

遅い食事をやつと終り、コーヒを一口喫んだ処へ、卓上電話のベルが慌しく鳴りました。私はコップを右手に持ったまま、急いで受話器を耳に当てますと、

『たつたいま、南京街のキールン・ホテルで、人殺しがありました』

助手の声でした。馳け付けてみたところで仕方がない。公の職務にあるわけじゃないんですから、現場に入れてくれるか、どうか、それさえ分りません。が、しかし、キールン・ホテルの主人夫妻を私は知っています。というのは、この夫婦

は以前私の親類の家に使われていたコックとアマなのです。忠実でよく働いたとい
うので、ホテルを開業した時は勿論、その後も引き続いて何かと世話を焼いてやっ
ているのです。そういう関係がありますので私から話してみたら、あるいは何かの
便宜を与えてくれないものでもありません。大して興味もなかったのですが、せつ
かく知らせてくれた助手の手前もあるので、とにかく行ってみようと思ひ、ハーフ・
コートを引き掛けて家を出ました。

まだ宵の口だというのに、住宅地附近はひっそりとして淋しゆうございました。
大きな屋敷ばかり並んでいて、外燈が処々にほつりほつりとあるだけで、薄暗いん
です。横町を曲ろうとしました時、反対の方向から、不意に一人の女が出て来て、
危く私に突き当るところでした。

すれ違いました時、『オオ、佳い匂だ！』と思わず心で叫んで、私は深い息を吸い
ました。ウビガンのケルクフルール！こんな香水を使っているのはよほどのお洒
落か、社交界の貴婦人かだろうと思ひましたので、どんな人か知らと振り向いて見
て、すっかり興を覚ましてしまいました。エプロンをかけた女給風の女じゃありま
せんか。貧弱な、小さな体に、飾りつけのない安つぽい洋服を着ています。特別大
きな帽子を被っているのです、容貌かおは分らないが、慥たしかに美人ではなさそうでした。
どこか体の工合でも悪いのか、屋敷の長い土塀に掴まりながら、ひよろりひよろり

と前屈みに歩いて行くんです。今にもものめりそうで危なツかしい、病人かも知れない、そう云えばすれ違った時、彼女の息づかいはまるで肺病患者のように苦しうでした。しかしそれにしても——。あんな女給が、ウビガンの香水を使用しているなんて——。

私は暫時しばらく立ち止つて、その後姿を見送つているうちに、ふと彼女の後を尾つけて見ようという好奇心がわいたんです。

踵を返すと、見えがくれに尾いて行きました。土塀の尽きた処で左へ曲り、五六軒目の家の前で、ふと女の姿を見失つてしまいました。多分その辺の横にでも入つたのでしようと思ひますが、生憎あいにく街燈が消えていて、いかにも暗いのです。でもよく見ると低い板囲いを廻らせたそれは一軒の家でした。しかし室内からは一つの灯ひの光も洩れていません。ひっそりとして人の住んでいるような気配もないのです。門内には雑草が生い茂つて、真黒くぼつりと見える建物も何となく荒れ果てています。空家ででもあるのでしょうか。

私の見違ひだったのか知らず。こんな家に入るはずがないがと不審に思ひながら佇んで居りました。随分長いように思ひましたが、それでも十五分か二十分位しか経つていなかったのかも知れませんが——。潜戸が音もなくすうツと開いて、先刻さつきの女が出て来ました。私は慌てて路傍樹の幹に姿をかくしました。

女は四辺^{あたり}を注意深く眺め廻してから、私のかくれている前を通つて、さつさと歩き始めました。

見るとまるで別人のような、その立派さにまず驚いてしまいました。頭の上から、足の先まで寸分の隙もない、流行ずくめの、金のかかった洋装です。ハイヒールを穿^はいているせいかわ丈までがずうっと高く見え、歩き方もうまい、街燈の灯でちらりと見た横顔はまた素晴らしく奇麗でした。

これが先刻の女と同一人なのでしょうか？

何のための変装でしょう？ 仮装舞踏会の帰途？ それには時間が合いません。余りに早過ぎます。

ある貴婦人は夫のかくれ遊びの場所を突き止めるために、変装して尾行したといえます。変装して刺戟を求め歩いたという女の話も聞きました。が、それ等は好奇心からの遊戯に過ぎません。変装と云つても、たかだか眼鏡をかけるとか、髪の手結い方でも違える程度で、直ぐ見破られてしまう、つまり素人芸ですね。

処がこの婦人の変装は余り巧妙で、しかも馴れきっています。道楽や遊びではこれほど上手にはなれません。しかし、これでやつと香水の謎は解けましたが――。

馳^{やぶ}て十分間も歩いたと思うと、ある角屋敷の立派な門構の家へ入つて行きました。出迎えの女中の態度で、この家の奥様であることを私はたしかめました。

表札を見て、始めて彼女が何人であるかを知りました。それはK夫人だったのです。

3

飛んだ道草をしてしまつて——、キールン・ホテルに着きました時は、もう何もかも片付いた後のように、しんとしていて帳場には誰も居りませんでした。時間が経ったせいもあるのでしょうが周囲の様子が実に落付いていて、今しがた人殺しがあつた後のような風はどこにもありませんでした。

帳場の横手の茶の間を覗くと、そこには主人の張氏夫婦が、額を突き合せるようにして、何かひそひそと語り合つていました。

『あ、よくいらした!』

張氏は愛想よく起ち上つて、私を迎えて呉れました。

『人殺しがあつたつていうじゃありませんか?』

妻君は夫と私の顔を等分に見て笑つています。張氏は面目なきやうににやにやし

ながら、

『間違いだつたんですよ。周章あわわて者が、人殺しだなんて云い出したもんで——。大騒ぎになつちやいましたんですが——。なあにね、急病で死んだんですよ。何んでもなかつたんです』

私はちよつと拍子抜けがしました。それだからこそ、家の中がこんなに静かだつたのです。

『病死だつたんですか』

『脳溢血で死んだんですつて、警察のお医者さんが云いました』と妻君も口を添えて云います。

『そう。でもまあよかつた。人殺しなんかあると他のお客さんが嫌がるでしょうからね。脳溢血なら、これや仕方がないわ。こちらはまあお仕合しあわせでしたね』

『始めつからそうと分つてれば何でもなかつたんですけれど——。一時は吃驚びつくりして、大騒ぎしたんですよ。巡查おまわりさんが来るやら——』

脳溢血と確定して、皆引き揚げてしまつた後だつたんです。しかしせっかく来たのですから、せめてその殺人嫌疑のあつた部屋だけでも見せてもらつて帰りましようと思つて、案内を頼みますと妻君は快く承知して、先に立つて階段を昇つて行き、一番端れの十三号と札の出ている室へやの扉を開けて入りました。

殺風景な、実に粗末な室です。西陽を除けるための日除けも汚点だらけで、壁にも処々地図のような雨漏りの跡があります。壁に寄った隅の方のベッドには死人が後向きに寝かせてありました。顔には白布が掛けられ、体にも小ざつぱりした布団が着せてありました。

『引取人が来てくれるまでは心配です。何しろ、このお客さんはお昼飯頃に着いて、夕方にはもう冷たくなっていたんでね。宿帳をつけてもらう間もなかつたんですの。身許がよく判明しないので困ってるんですよ』と妻君はこぼして居ました。

私は死人の方へ向いて一礼し、室を出ようとしました時、米松の粗末なベッドの脚のかけに小さい白いものが落ちていたのをチラと見ました。急いで拾上げて見ますと、象牙細工の人形です。小指の先ほどしかない、小さいものですが、よく見ると、シルクハットを被っているシユバリエの立像でした。警察の人も殺人でないことだったのでよく調べなかつたと見えます。

余り小さくて、可愛く出来ているので、指先で弄つていますと、シルクハットが螺旋のようになっていてくると廻ります。廻しているうちにぼつりと、とれてしまいました。帽子は蓋だったので。中には佳い香の煉香水が詰っていました。耳香水です。

私は小指の先につけて香を嗅ぎました。この匂は？ ウビガンのケルクフルール？

たった今謎が解けたはずのあの匂だったのです。私は妻君に耳香水を渡しながら申しました。

『こんなものが落ちてたんですよ。奥さん、あなたのですか？』

彼女は怪訝な顔をして見ていましたが、掌の中にしっかりと握りしめてしまいました。

茶の間に戻ってから、彼女はそれを夫の掌の上のせて云いました。

『あの人が一、慌てて落して行ったんですよ』

張氏は耳香水を指先でひねくり廻したり、香を嗅いだりして珍らしそうに眺めていましたが、

『帳場の前をすうツと通って行く時、いつもこの香がふんとするんだ。これやあの十三号のお客さんの匂だよ』

4

『お客さんツて？ 男？ 女？』

『女ですが——』と妻君は夫の顔色を見ながら、言葉尻を濁してしまいましたが、張氏はその後を引き取って、無造作に云つてのけるのでした。

『あの十三号はね、女給さんが逢いびきの場所に使つてたんですよ。金離れがよくつて、一ヶ月前納で、二年間も、ただの一度だつて滞らせた事はないんです。きちんと払つてくれるんですからね。ホテルじゃ大切なお客さんだったんですけれど——。とうとう失敗しくじつちやつた。惜しい事をしちやいましたよ。もう来ないかも知れないなあ』

張氏は半分独言ひひとりごとのように、いかにも残念そうに申します。妻君はいまいましたうに夫を見て、

『だから、云わない事ことつちやあないんだわ。また貸しなんか止せばいいのに——。貴方は余り慾張り過ぎるから、こんな事になつちまうんだわ』

『だつてお前、二年間もただの一度だつて二日続けてやつて来た例たれはなかつたんだもの。昨夜来たばかりだからなあ。よもや続けて今夜も来るたあ思わなかつた。運の悪い時あ何でも悪くいくんだ。あの女給さんが、真青になつて、人殺し！ 人殺し！ なんて云わなかつたら、こんな大騒ぎにもならなかつたんだし——』

『それや仕方がないわ。誰だつて吃驚しますよ。ねえ、先生。そうでしょう？ 自分の借り切つてる部屋に、知らない男が死んでいるんですからね。おまけにあの人ッ

たら、ぶよぶよ肥っていて、鼻血なんか出しているんですもの、気味が悪いわ。でもあの女給さんは氣丈者ですよ。私だったら氣絶しちまうわ』

『女給さんって、どんな人ですか？』と私は二人に尋ねてみました。

『染々顔を見たことはないんですが——。いつも夕方の忙しい、お客さんの立て込んだ時にやって来てね、自分で鍵を有もっていますから、帳場にも寄らないで、すうツと階段を昇ありつちまつて、またいつの間にか帰かりつちまつてるんですからね。泊とつて行くいくことはなし、食堂には出て来ないし、月つき定ぎめで室は借りていても、たまあにしか来ないんですよ。だから正直のところ、どんな顔だなんて訊かれるとちよつと返辞へんじが出来ないんです。だがあの女給さんなかなかの浮気者ですよ。相手変れど主しゅ変へんらずずつて奴やつでね。ちよいちよい男おとこがあるんです。いつも相手は毛唐けいとうだが——。その女給さんですか？ それや貧弱ひんじやくな女おんなで、装なりなんかあらない、粗末そまつな着物を着きてるんですよ』

『でも容ようす子のいい女ですよ』

『それじゃ何ですか、その女給さんが逢あひきにあらない来てみたら、自分の部屋に知らない男おとこがいた、しかもその人が死しんでいたつてあらないんですか？』と私が申ましますと、張ちやう氏は首くびを縮ちぢめて笑わらいながら云いいました。

『恰度おひる今日の正午頃まひるね。そのお客さんが着きいて、直ちぐ食堂じきやうに入いって行いって行いって昼飯ひるめしを注文ちゆうもん

したんですよ。大分飲ける人と見えて、葡萄酒だ、ウイスキーだ、とたらふく飲んだり喰ったりして、腹一杯になると今度は眠くなつたんでしよう。少し息ませろ、部屋はどこだ、案内しろっていうんです。処が生憎と空いた部屋は一つもなかったんですよ。仕方がないから女給さんの部屋を一時借りる積りで、そこへ案内してやりました。女給さんは昨夜来たばかりだし、まさか続けて今夜も来るたあ思わなかったもんですから。今までにだつて——。あの部屋が空てる時はまた貸しちやあ調法していたんですからね。それにそのお客さんは逗留する人じやないんです。夕方の五時には出発しなきやならん、起してくれつて云いました。が、迎も忙しかったんでね、起す事を頼まれていたのに、ついそれさえ忘れちゃつたのです。五時に起しに行つてたらこんな馬鹿な事にはならなかつたんでしようが——』

『それに女給さん、いつ来たんだか私達ちつとも知らなかつたわねえ』

妻君は何かその時の事を思い出したのでしよう。くすりと笑いました。すると張氏も可笑しさを耐えかねたというように笑い出しましたが、真面目な顔をして聞いている私を見ますと、照れかくしのように滑稽な身振りをしながら云い続けるのでした。

『女給さん、ベッドに寝ているのを、情人だと思つたんですよ。ちよいと、あなた、眠つてんの？ てな事を云つて、いきなりベッドの中に、這り込んで、死人を

抱きしめて、夢中で接吻したんでさア。ひやりとした、気味の悪い冷たさに吃驚して、よく見ると人が違ッてる。しかも白眼を薄く開けて、動かないんですからね。女給さん吃驚したの何のツて——。狂気のようになつて——。人殺し！ 人殺し！ ツて階段を転がり落ちたんですよ。私が抱き起して、どうしましたツて云うと、眼を吊り上げて、ペッペツと唾を吐きながら、やけに半帛で口を拭いてるんですよ」と云つて張氏はお腹を抱えて笑うので、それに釣り込まれて妻君も笑いながら申しました。

『嗚冷ッこかつたでしょう。死人の唇——、あのぶよぶよした男の——』

『でも——。余り急遽しいじゃないの？』

と私が云いますと、張氏はにやにやして答えるのです。

『なあに、男に夢中になつている間はそんなもんですよ』

『相手の男はどんな人なの？』

『西洋人ですよ。若い、好い男でさあ』

『その男、遂々来なかつたんですか？』

『来たんですよ。恰度その騒ぎの真最中、ふらりと入つて来ましたがね。——お巡査さんの姿を見ると慌てて、逃げ出しちゃつたんです。女給さんは女給さんでその男を見ると風のようにすりぬけて往来へ飛び出して行ッちゃつたんです。ほんとに

変な人達で可笑しくなッちまいます』

果してその女とK夫人とが同じ人であるかどうか、これだけの話を聞いて、直ちに彼女であると断定を下すわけにはまいりませんが、私が往來で見た女給風の女は、最初出逢った時、恐しく、苦しげな息遣いをしていました。重病人か、さもなければ、恐しい出来事にでも打ぶつかつてきた人か、とにかく普通の状態ではありませんでした。が、空家のような家から出て来た時の彼女は少しも病人らしい処はありませんでしたからね。

評判のよい賢夫人、死人を抱いた女給、耳香水、私には皆謎です。

この時以来、私はK夫人に対して大変に興味を有つようになったのです。

5

その翌々日、私はある人の告別式に列席するため、定刻より早めに教会へ往つていました。そこには必ずあの夫人が来るであろうと思いましたが。果して式の終る頃、喪服を着た姿を見せました。その優雅しとやかさと美しさとは、私の疑惑の眼を充分

に覆すだけの力を持っていました。やはり間違っていたのか知ら？ 人違いだったか知ら？ 私は迷いました。しかし、執念深いこの好奇心は、人違いだったとして直ぐに引き下つてしまうことを許しませんでした。その晩から、私は彼女を尾行する決心をいたしました。

翌日も、その次ぎの日も彼女は外出いたしませんでした。恰度三日目の午後、K夫人は盛装して自家用の車に乗り、祈祷会、レセプション、午後のお茶、答礼、といかにも真面目な社交夫人らしい多忙さに半日を暮らし、最後の家を訪問した時は自動車を帰して、時間の都合でもあるのか、少し悠然ゆうっくりと落付いて話込んでいましたが、その家を辞する頃は、もう人の顔が見分られないほどに、夕闇が迫つて居りました。K夫人は通りすがりの円タクを呼び止めて、低声に何やら命じていました。私も円タクを拾つて、彼女の後を追うように云いつけました。

真直に家へ帰るのではあるまいと思つていましたら、果して彼女は全然反対の方向に走らせ、ある大きな建物の前で車を止めて降りました。その辺には同じようなビルディングばかり立ち並んでいまして、昼間の賑さに引きかえ、夜はまことに静かで寂しい位でした。

K夫人は扉ドを押して中へ入るときさささと地下室の方へ降りて行きました。この地下室にある極東ダンスホールは非常に立派なもので、各国人が出入するというの

で有名でしたが、ひと頃のように繁昌しなくなり、少しさびれかけて人足が減じたのを、最近未亡人倶楽部という新趣向を思いついてから、また盛り返してきたという噂を聞いていましたが、私はまだ入ってみたことはありませんでした。今夜が初めてだったのです。K夫人は眩しいように明るい大ホールの中を抜けて、奥へ行きました。そこにはまた一つの扉がありまして、中硝子ガラスに未亡人倶楽部と大きく刷つてございました。入口の黒板にはまたこんな文字が書かれています。

一

二

未亡人倶楽部

○スピード時代の恋愛市場

○愛の内容絶対秘密

○本名用う可らず（仮名に限る）

○仮面用マスク使用のこと

○マスク販売（本日大割引）

○午後十二時限り（会員はこの限りに非ず）

三

私はマスクを一つ買いました。見るとK夫人もちやんとマスクを掛けていて、しかもその上に色眼鏡まで掛けているという御叮嚀さで、実に用意周到を極めているのには感心してしまいます。そのため彼女の顔の大半はかくされていましたが、なお頤おとがから首筋の真白で柔らかそうな、ふつくらとした美しさは、浮気な男心をそそるに充分な魅力を見せて居りました。

眩しい照明に輝く大広間は、壁も天井も全部鏡張りです。あらゆる物の際限なき反射は、部屋中を一種異様の色彩に浮かせて居ります。特にある場所などは床にも鏡を張つてある始末です。

椅子と食卓が適当にばらまかれ、一つの卓子テーブルは一人が占領することに定つていて、それには銘々キュピットの形をした可愛らしい木の立札が立ててあります。

立札には、北京、ロンドン、東京、パリ、南京、ベルリン、上海、京都、大阪、ニューヨーク、天津、マルセーユ、香港、横浜等々、世界中の名が書いてあります。中には余り人に知られていない地名などが、故意に書かれてあるのです。

ここは、良人おとを失った中年の婦人、未亡人でもない癖に、そんな顔をしてやって来る厚かましい女達、上流社会の有閑紳士、奇を好む男女ひとびとが、肉の取引、恋の市場

に惹き付けられて、集つて来る別天地なのです。

倶楽部の賑い出すのは夜の十時頃からです。支那人のボーイが各卓子の上にビールや洋酒を運ぶ間に、熱狂的な、胸を踊らす音楽が始まり、男女の恋心をそそりたて、悩みに火をつけるのです。世界の町々に陣取つたお客達は、思い思いに前後左右を見廻して、それと思う人へ無遠慮なエロを送る、気の小さい人もマスクの蔭にかくれてのウインクは、存外大胆にやれるものらしいうございます。

時計が十一時を打ちますと、いよいよ恋の遊戯、婚約、運だめしが始まります。テーブルにはあらかじめ手紙を書く設備があつて、ボーイはいつの間にか、メツセンチャアと早変わりして、お客さんの発信を待っています。

東京は先刻からニューヨークの横顔に流し目を送っている。桃色の紙に『私は貴女に……しかし、貴女は？』などと書いて封筒に入れ、ベルを鳴してメツセンチャアボーイに托しました。手紙は海を超えて、遙かかなたの大陸へ渡つて行くという趣向なのです。

顔に白粉おしろいを塗つたメツセンチャアボーイは、オペレッタの人のように、女客の手紙で一杯になつてゐる鞆を肩からぶら下げて、気軽に動いています。

今だに私の目に残っていますのは、もう小皺の沢山あるお婆さんが、真白に顔を

塗りつぶして、華美な服装で若やいでいたのでした。図々しい『男の獵師』だとい
うので、皆の嘲笑の的になっていましたが、当人は一向平気で、むしろ大得意らし
く振舞っていたのはほんとに浅間しいと思えました。でも有名な金持なので、若い
候補者が次ぎから次ぎと絶えないんです。そのために彼女の通信は一番数も多く、
かさばってしまいました。

K夫人はパリーの席に居りまして、京都と通信をしては居りましたが、何となく
気が進まないような素振をしていました。京都は三五六歳位、横顔の美しい西洋
人でした。少しポマードをつけ過ぎてはいるようでしたが、これがキールン・ホテ
ルへ出入する男ではないかと思つて、私は注意深く眺めて居りました。

その時ベルリンに腰かけていた四十過ぎの女も、頻りに京都に通信を宛てているの
を見ました。京都は如才なくその手紙を嬉しそうな身振りをしてざつと読み、故意
と手から離すに忍びないというようにかたく握りしめたりしていました。K夫人
から返事が来ると、そつちに夢中になり、熱心に読み返したり、考え込んだりして
いるので、ベルリンは自分を相手にしてくれないものと断念めて溜息を吐きながら
ベルを鳴らし、ボーイを招んで今度はロンドンの方へ向きを変えました。

京都は頻りに能弁な眼をK夫人に向けていましたが、どういう理由か彼女は彼に対
して非常に冷淡な態度を示しているのです。彼の視線をさけるように、故意と他の

人へ愛嬌を振りまいたり、彼からの通信を受取る時はいかにも面倒臭そうに、こと更溜息を吐いたり、眉を寄せたりします。そしてなるべく相手にならないようにして、頻りに上海と通信を交して居りました。可愛らしい（以下四十六字伏字）ちよつと唇を押し当てて媚びるような微笑を遠くの方から送ります。上海は京都よりもずっと若く、いかにも富豪の若様というような風采の人でした。勿論東洋人ではありません。K夫人の表情はこの男にすっかり心惹かれているように見えています。私の目には彼女が京都への当てつけに、故意と上海になれなれしくしていると思われませんでした。京都はそれをまた黙って見てはいられないものと見え、焦り焦りしながら、矢つぎ早やに手紙を書いてはメツセンチャアボーイに届けさせて居ります。しかし、夫人は表面上海に夢中になっていて彼の通信なんか、ろくすつぽ目も通しません。いやそうに受取ると直ぐ破いて床に捨てたりしていました。今夜の彼女はよほどどうかしています、大胆な態度といい、上ずつた調子といいまるで自暴（ヤハ）なんですからね。それをまた京都が執拗（しつこ）く追い廻しているんです。

十一時半までは皆離れて座っていました。ボーイが気を利かして勧めて歩きまですので、情意投合した男女は臆（おそ）て同じ食卓に向い合つて腰掛けました。ボーイは万事呑み込んでいましていつもの習慣通りに京都をK夫人の処へ導いて同席させました。すると彼女はぶいと起つて、離れた処に一人でいる上海の席へ行つてしまいま

した。京都は間の悪るような不快な顔をして唇を噛み、きつと後姿を睨んで居りましたが、その顔色は気味が悪いほど蒼白くなっていました。

馳て婚約を祝う奏楽につれて、コップになみなみと酒が注がれました。私は同時にマルセーユと天津、ブタペストとホノルルとの婚約の成立なりたつたのを見ました。

中には随分滑稽なシーンもありました。四十年輩の眼つかちのブイノス・アイレスに相手がない。彼は羞恥はにかみながら三十歳位の眼の美しいモスコーを納得させようと再三メツセンチャアボーイを煩わしている間に、遂々ベルが鳴って終りということになってしまいました。

ボーイ達にとつては、直ぐ靡なみくのも面白くないが、余り愚図々々しているのは興がさめるらしゅうございました。長崎のように南京を誘惑するのに紙やペンを止めて、いきなり唇にしたのは大喝采でした。

閉会のベルが鳴り、皆急にがやがやと起ち上つて、帰り仕度を始めました。地下室の階段を大勢の男女に押されながらK夫人を見失うまいと注意しつつ外へ出ようとした時、不意に早足になって夫人は馳け出して往来へ出ました。その後を背の高い男が追って行き、遂々追いつかれて、仕方なく、その人と肩を並べて歩き始めました。それは京都にいた男でした。

K夫人はいらいらしながら手を挙げて、通りがかりの円タクを止めようとしています

と、男はその手を押えて何か熱心に云っているのです。私は彼等の声の聞える辺まで近寄つて行き、暗い陰に身をひそめて耳を聳そばだてました。

『うるさいわ。今更、何のかのつて云い訳したつて——。私の気持はもとへもう戻りやしないわよ』

『たったあれだけの事で——？ そんなに気持が変つちまうもんかな。僕には解らない』

男は頭を振つて、少し強い語調で云います。すると女はその一言で急に興奮して、まるで喰つてかかるような態度になり、まくし立てて云い始めました。

『そうよ。貴方に私の気持が解らないと同じように、私にも貴方の気持は解りませんわ。しかし、何と弁解なすつたつて、あの晩の出来事は貴方に充分責任があると思うわ。八時につて約束しておきながら、三十分も遅刻おくれて来るなんて——。それだけだつて実に呆れ果てしまう。あの時貴方が先に行つていたら、ベッドの屍体を発見したのも貴方だつたでしょうし——。貴方がちゃんと始末をつけておいて下さつたら、私だつて、あんなところで醜体を演じなくつても済んだんですわ。無気味な、汚ない、ああ思つてもぞつとする。何という恐怖こわい事だつたでしょう。あんな非道ひどい恐しい目に会つたのも、巡査やホテルの人達の前で赤恥を搔いたのも、皆貴方の無責任から来たことです。おまけにあの騒ぎに驚いて、私の顔を見ると忽ち逃げ出

して行つちまったような薄情男、人間じゃないわ。こんな人にかかりあ関係つていたら、この先どんな恥を搔されるか知れやしない」

女の権幕に怖れたのでしょうか、男は吃るどもような口調で声まで少し震えを帯びて聞えました。

『だって——、僕の時計が遅れていて——』

『オホホホホ。また時計に罪をなすりつけるの？ 調法だわね。でも貴方の腕時計わち噛ちつていますよ。冤罪ですなあつて』

女はヒステリックな声で嘲笑するのです。

『逃げ出したつて云うけれど、あの場合、僕が顔を出しちや拙い。お互のため、殊に貴女のためによくはないと思つて——』

『オホホホ、うまい事を仰しやる。大層御親切様ね。でももう、その御親切の押売は買いませんよ。永い間の偽せ親切、私はそれに満腹しちやつてるわ』

『そう誤解されちや物が云えやしない。ねえ奥さん。もう少し気を落付けて、僕の云い分も聞いて下さい』

『もう沢山。詭弁を弄したつて、徒労よ！ 私の気持はすっかり貴方を離れちやつた。醒め切った女に未練を残さないで、貴方もさっさと転向をやつたらどう？ キー
ルン・ホテルで私に背中を向けて、逃げ出して行つた、あの調子でやる事ことつたわ』

彼女は憎々しそうに毒づいて居りました。男はむっとしたように黙り込んでしまいました。その荒々しい息づかいから推察して、どんなに彼が怒りに燃えているかを私は知りました。

恰度その時、彼等の傍を空車が二三台通りかかりました。と、見るや、突然彼女は一つの車を止めて、急いで扉を開けました。その敏捷さに男は面喰って彼女を止める暇がありませんでした。彼も慌ててそれに飛び乗ろうと試みましたが間に合いません。彼女は彼の顔の前で扉をパタンと閉じてしまつたんです。

チヨツ、男は忌々しそうに舌打ちして、直ぐ続いて来た後の車を止めました。自動車のヘッドライトに照し出された横顔は恐しく蒼褪めて、殺気を帯びた眼に私の心が寒くなりました。というのは、その美しい彼の顔に兇暴な影をみとめたからです。

次の瞬間、彼の自動車が疾風のように彼女の車を追つて、暗闇に消え去るのを見ました。

その夜、K夫人は玄関の敷石の上に冷たくなって横わっていたのでした。頭蓋骨は砕け、顔は血のかたまりのようで、目鼻の見境もつかず、着物も血に染んで肌になべりついていました。指輪はもぎ取られ、時計も、懐中物も、金目の物は悉く失くなっていました。その点だけでも強盗の仕業だということになったのです。

私はただ三度彼女を見たというだけです、彼女の死については誰も疑っていない、犯人は拳っているんですしね、せっかく皆から惜まれて、立派な夫人として死んで行った人の暗い半面を^{あは}発いてみたところで仕方がありませんから、K夫人の事はその儘にしておいて、未亡人倶楽部に出入する人達をちよつと調べてみましたところが、お客の中には前科者や、容疑者達の恋を漁りに来ている者が大分あつたのは驚かされました。昨年処刑されたという男もいましたし、身にピストルを用意し、贖札を持っていて、相手の女に真物の金にくずさせていた怪しからん男なども居りました。

秘密の遊びは非常な魅力を有つものなのでしょうが、それと同時に実に危険なものだどつくづく思いました。もしあの人達が自分の相手に選んでいた者が、どんな

人間だったかということを知りましたらば——。

東京へ帰ります前日、私はキールン・ホテルに張氏夫婦を訪ねました時、それとなくK夫人の噂を持ち出してみました。一向に手応がありませんでした。この人達はあの夫人が二階の部屋を借りていた女給さんだったとは、全然気が付かないようでした。

『あのお部屋その後どうなりました?』と訊いてみましたら、

『やはりね、あのまま塞つているんですよ』

私はちよつと妙な気がしました。

『じゃ、女の人も来るんですか?』

『否え。もう来られませんや。何んぼ何んでも——。まさかね』

『じゃあ——?』

『男がひとりで借りているんですよ』

『相手の男?』

『そうです』

『西洋人?』

『ええ』

私はふと耳香水を思い出しました。

『耳香水どうなすつて?』

張氏は妻君と顔を見合せて黙っていました。聴いて低く声でこんなことを云いました。

『盗まれちゃったんですよ。この机の上ののせて置いたんですが、いつの間にか消えちゃってね』

『いつ頃の事なの?』

『四五日前までは確かに机の上にありましたんですよ』

『不思議ですわね』

『全く変ですよ』

『女給さんの旦那さんが持って去ったんじゃないやありませんか?』

『なるほど、そうかも知れない』

二人は始めて合点が行ったというように声を合せて云うのです。

『でも無断で持って行くって法はないわね』

『それやそうです。一つ尋まいてみましょう』

私は妻君と一緒に二階へ昇って行きました。何とかしてその相手の男を見たいと思っていた処へ、恰度耳香水の紛失した話が出たので、うまく釣り出せた訳なのです。私は指先で静にノックしました。すると直ぐ扉が開いて、奇麗な顔をした西洋

人が首を出しました。ひよいと顔を見合せた瞬間、私は胸がドキリとしました。というのは彼の髪の毛、口髯、眉などの色合いがいかに鼠色という感じがしたからでした。まさか鼠色の男ではありませんまいが。

『何か御用事ですか？』

咄嗟に甘い言葉が出なかつたので、私は思い切つてありのままを云いました。

『帳場の机の上に置いてあつた耳香水が紛失したんです。御存じないのでしょうか？』

するとその男は懐中から見覚えのある象牙細工のシュバリエを掌にのせて、私達に示しながら少しの躊躇もせず云つてのけました。

『これでしよう？ これは私の妻のものです。帳場にありましたから取つて来ました』

彼は耳香水をさも大切そうに内ポケットに納しまい込んでしまいました。

それから半歳ばかり過ぎてのことですが、支那から帰つて来た人の話に、真物の鼠色の男が遂々捕つたということを聞きました。南京街の支那人のホテルに隠れていた若い西洋人だつたと申しました。しかしそれが果して私の見た男、K夫人の愛人であるかどうかは分りません。

K夫人も、鼠色の男も、耳香水もすべて謎として、解かないでおく方が何だか奥床しい気がするじゃございませんか」

後註

- 一 ここから23字詰め
- 二 ここから罫囲み
- 三 ここで罫囲み終わり
- 四 ここまで字詰め終わり

むかでの礎音

福知山から三田行に乗り換えた時には、もう汽車の中にまで夕闇が迫っていた。

園部の新生寺の住職——それは亡夫の伯父なのだ——が急死したという電報を受取るに直ぐ東京から馳けつけて来て、この三日間というもの、通夜だ、葬式だ、とおちおち眠る暇もなかった。亡夫側の親類や知人ばかり集っている中で、気兼ねしながら暮したので、日数は僅だが、すっかり疲労れてしまい、帰りの列車に乗り込んで、やっと自分一人きりになったと思うと気が弛んだせいだろうか、急に睡眠を催してきた。

小さい駅を通過した時、車体の動揺にふと目が覚めた。するといつの間にか向い合せの座席に、モーニングを着た長髪の紳士が腰かけている。居眠りしていたのを見られたかと思うとちよつと耻しい気がした。というのは全くの見ず知らずではなかったからだ。新生寺に滞在中この人と私は毎日のように顔を見合せていたので、別段改つて紹介はされなかったが、お互に黙礼位は仕合うようになっていた。彼は有名な天光教の総務で、また学者としても世間に知られていた。神主さんのような人と、坊さんの伯父との間に、生前どんな親交があったか知らないが、とにかくそ

の死が不自然な自殺であつたし、撰んだ最後の場所が天光教の奥書院だつたという、ただそれだけの理由で、伯父側の人々は彼に対して非常な反感を懐いていたのを見聞きしていたので、よくも知らない私までが、何となく快からず思うようになっていた。

「お住寺じゆうじさんを死なしたのは天光教だ」

「天光教なんかに足を踏み入れなければ、こんな不名誉な事にはならなかつたらうに——」

「否いえ、踏み入れたんじゃない。引き摺り込まれたのさ」

「魔術を使うんだつて話だから、本当は自殺だか何だか、まあ謎でしょう」

こうした蔭口を、時には故意わざと聞えよがしに云うのを耳にしながら、平然として告別式に列席し、納骨式かむつでに拍手うを拍うつて祝詞のりとを捧あげる彼だ。伯父の死も謎かも知れないが、私の目の前にいる彼もまた謎の人のように思われる。

私はいずまいを正して、挨拶しようとする。彼の方から先にお辞儀をして、ここにこしながら言葉ことばをかけた。

「お疲労つかれでしよう」

たった一言だが、その語調にはいかにも私の立場をよく呑み込んでいて、深い同情じやうけいを持っているというような、優しさが籠かこまっているのを嬉しく思った。よく見ると

その表情にも態度にもどこやら心の好きそうな処も窺われるので、私の彼に対する感情はすっかり和らいだ。

彼は読みかけていた新聞を広げたまま膝の上に置いた。何気なく見ると、それは、四五日前の地方新聞で、伯父の記事が大袈裟にでかでかと書かれてあった。

「飄然、姿を消した新生寺住職、天光教の奥書院にて割腹す」

私はそれを横眼で読んだ。

新生寺住職ともあろうものが、謂わば商売敵がたきも同然な天光教へ行つて死んだ、というのが問題になつてゐるらしいのだ。本堂で自殺したのなら、大目に見てくれたのだろうが何分にも死場所が悪るかつた。

「数珠じゆずを瓜つまぐ繰る手を株つまぐに染めて失敗し、百万円の借金を負い始末に困つて自殺した」と新聞は報導しているのだ。

「新生寺さんは、あなたの伯父様に当られるのですか」

突然彼が口を切つた。この人の事を皆が先生と称よんでいたから、私も先生とよぶことにする。

「いいえ。亡夫しゆじんの伯父なのでございます」

「突然のことです——、嘸さぞ吃驚びつくりなすつたでしょうな」

「平常余り音信もいたして居ませんでしたので——」

「しかし、新生寺さんは東京の親類が親類がと、よくご主人やあなたの噂をしていられましたよ」

私はちよつと恐縮した。

「病気で亡くなつたのでしたら仕方もございますが——。殊にああした死方をしましたものですから、世間様へも申訳ないし、と申して親類の者達も困つて居ます。何分にも一山さんを預かる身で——」

「自殺してはならぬと教えるはずの人が自殺したんですから、ちと困りますね」

「そういう血統はないはずなんですけれど——。やはり一時的発狂——、まあそんなんだろうと、皆も申して居ますが——」

「左様——、そうしておいた方がいいでしょう。殺されたなんて云うとうるさいですからな」

「え？ 殺されたんですって？」

「殺されたと云えば、殺されたとも云えましょう——」

「まあ！ 誰にですの？」と私は固唾を呑んだ。

彼は平然として云つた。

「人間じゃありません」

「人間じゃない。と仰しやいますと、一体、それは何でございますの？」

呆氣に取られてほかんとしている私の顔を彼は流し目に見やりながら、すまして答えるのだ。

「形があるものじゃありません。つまり見えざる影、——いや、幻とでも云いますかな」

「へえ、幻に——」

変な話だ、幻に殺された。そんな馬鹿な事があつて堪るものか。私は可笑しさが込み上げて来るのを耐えながら、相手の方を見ると、いかにも真面目な顔をしているので私は笑を忍んで、

「不思議なお話でございます。——でも私なんかにはどうもそういうことは信じられません——」と云つた。

先生はただ唇の辺りに意味あり気な微笑を浮べたぎり、口を噤んでいる。

車内の客と云えば先生と私と、その他四五人の男女があつち、こつちに散らばつて腰かけているだけで、何となく淋しかった。

2

雨が降り出したとみえて、窓硝子ガラスがすっかり曇っている。私は指先で曇りを除いて外を見た。汽車はどこを走っているのだろうか、ただ暗闇の中を霧地まつしぐらに進んで行くのだ。軌道が不完全なのだろうか、車が悪いのだろうか、がたがたと車体がよく揺れる。揺れる度に先生の肩に垂れた長髪もゆらゆらと波打って、それを凝じつと見詰めていると、髪の毛の一本一本が、あたかも心あつて動いてでもいるように思われる、そして彼の小さい鋭い眼、それがまた相手の心の奥底まで見通してもするかのようになり、キラキラと光っている。彼はきつと私の心をも見抜いている事だろう。内心嘲笑しながら話を聞いていたのも、疾とちくに知っていて故意と素知らぬ振りを装っているのかも知れない、と思うと少々氣まりが悪くもなるのだった。

暫時しばらくすると先生は底光りのする眼に微笑をたたえながら、軽い咳を一つして、徐ろに云った。

「あなたは新生寺さんの事については何も御存じないんですね。——表面に現われていること以外は」

「はい、余りよく存じませんが——。ただ伯父が若い頃に株で失敗して、親譲りの財

産をすっかり潰つぶつてしまい、その上親類中に大迷惑をかけ、長い間行方を晦ましていましたが、何十年目かで再び皆の前に姿を見せました時は、園部の新生寺住職となつていたという話だけは聞いて居ます。昔の事は知りませんが、私が始めて逢あひました時は、そんな山やま気のある人のようでもなく、至つて柔和な、人の好きそうな和尚わしやうさんでしたわ。でも、どういう理由わけか存じませんが、主人は伯父を好まなかつたので、音信もせず、噂も余りいたしませんでしたの」

「表面に現あらわれているのは、あなたのご存じの事だけです。それ以外は恐らく何人なんびとも知りませんまい。しかし、私は新生寺さんから直接打ち明け話も聞いていたし、いろいろ相談も受けていた、殊に彼の身みを亡ほろした原因とも想像し得る、ある深い悩み、それについては絶えず私に訴えていられたので、——何とかして救つて上げたい、と心配していたんです。お助けする事も出来ないうちに、遂々とうとうこんな事になつてしまつて——、実に残念で堪たまないんです」

「どうして株かぶなんか、また手を出したものでしょうか。一度ああいうものに手を出すとそれが病やみ付きとなつて、止められなくなるもんなんでしょうね。伯父も終いには命まで投げ出さなければならぬようになって——」

「しかし、あの方のはそればかりじゃないんですよ」

と云つて、彼は唇を真一文字に結び、顎髭あごひげをしごいてゐる。伯父の死に就いて、

彼のみが知る、何事かがあるに違いないのだ。

「話して下さいませんか？ 何かご存じのことがあるなら——、私共は自殺の原因を借財のためとばかり思い込んでいますから。もしも他に原因があるとすれば、是非承^{うかが}っておき度いと存じます」

「ですが——、新生寺さんはその秘密が人の耳に入る事を非常に恐れていたと思うんですから、どうぞ他^{ひと}にお漏しにならないようにして頂きたいのです」
と堅く口止めしてから、やっと話し始めた。

3

「私が東京を引揚げて園部の天光教総務となつて移つて行つてから、半年ばかり経つた後の事でした。新生寺さんがふらりと私を訪ねて来られたのは——。その前にも度々公会の席上などで逢つたことはあるんですが——、その晩のようにお互が、心の扉を開いて話合つたことはありませんでした。」

その頃私は、天光教を理想的な立派な宗教にしたい、という大望を有^もつていまし

たし、新生寺さんもまた、現在の空虚おしえな教に飽きたららないで、宗教の一大改革を心密かに考えていた矢先だったので、私達はすっかり共鳴してしまった訳なんです。将来お互いに助け合おう、と堅く手を握って誓ったのです、その時以来、二人は旧友のような親しい間柄になりました。

散々気焔を挙げて、いい気持になって別れましたが、それから間もなく、新生寺さんが株に手を出して、大分な負債に悩まされているというような噂を、ちよいちよい耳にするようになりました。

ある日の夕方、新生寺さんは白衣はんえに黒の半衣はんえという軽い装いで、私の住居うちに來られました。

ひと目見た瞬間、私は彼の心に非常な苦悶のあることを知りました。何か大事な相談でもあるのではないかと推察しましたので、故意と人の余り出入しない奥書院に通しました。彼は私の好意を謝しながら自ら立って銀襖を開け放ち、立聴きされない用心などをしていましたが、広い座敷に床の間を背にして、相對して座つてみると、急に彼は苦笑して、

『まるでお白洲に出たようすな。これでは固苦しくつて、お話がしにくい』と云うのです。仕方なく今度は縁先に褥しとねを持ち運んで、席を変えてみました。欄干おぼしまに凭れて、膝を崩してみると気持まで砕けて和やかになりました。欄干の下は池です。

時々鯉の跳ねる水音に驚かされる位で、静かでした。

そこで私は彼から妙な話を聞いたのです。

『実は夢に悩まされているんです。妙な夢に、——しかもそれが毎晩なんで、もう苦しくつて、やりきれなくなりました。何とか夢を封じる法はないでしょうか。貴方のお力で是非ともこの苦しみから、免れられるよう、救って頂きたいと思って、参上いたしました』

そういう彼を熟視するとその顔にはまるで生氣というものがなく、瞼の肉も落ち、小鼻から目尻へかけて深い皺が刻まれ、顔色も悪く憔悴しきっているのです。

新生寺さんが私の処へ救いを求めに来る、少し変にお思になるでしょうが、この前二人が話し合った時、心の悩みを癒すのが天光教の生命だというような事を私が云ったのを覚えています。その時彼はそれに耳傾けて、いろいろ質問を発しました。私は悩みの原因を取り除く方法を語ったんです。その記憶がありますので、いま彼が訴えに来て、別に不思議には思いませんでした。それにお互に他宗だからどうのこうのというような、狭い考えは全然有っていないのです。しかし、ただ夢に悩まされるから救ってくれと云うのでは困ります。余り漠然としていますからね。『夢を封じろつて云うと、つまり夢を見ないようにしてくれと云われるんですか』

『そうなんです』

『一体どんな夢を見るんです？』

『それが——。実に、厭な、不愉快な夢で、しかも毎晩同じものを見るんです。眼が覚めてからも少時しばらくはこう頭がぼうつとして、何とも云えない、いやあな、不気味な気持がいつまでもあとに残るんです。熟睡出来ない結果じゃあるまいかと思つて、昼間烈しい運動をして、くたくたに疲れて床に就いてみた事もあります、駄目です。幾晩も徹夜をして、疲れ切つて、ぐつぐつと眠つてみましたが、やはり依然として同じものを見るのです。酒を呷あおつて酔よいづぶれてしまったこともありましたが、いけません。故意と避けようと計画たくらむと、なおさらはつきり鮮かに見るのです。こんな事を云うと、貴方はきつとお笑いになるのでしょうか——、私の頭の中にいつの間にか一つの肉塊が出来ていて、しかもそれが独立して生きている。その肉塊は恰度活動のフィルムのようなもので、眠に陥るのを待つて、そろりそろりと絵巻物をひろげて私に見せ始めるのではないかと、少々薄気味悪く思つています。もし、実際にそういうものがあるなら、手術でもして、さっぱりと切り取つてしまいたいと思います。否え、ただ切り取つた位じゃ承知出来ませんよ。その肉塊を切りさいなんで、酷いめに会わしてやりたい。憎い敵です。だつてこんなにも苦しめられているんですもの——、もうこの頃では、日が暮れると落付いていられなくなるんです。夜が恐しいんです。まあ考えてもみて下さい。同じ夢を毎晩続けて見る、と

いう事だけだつて気が変になりますよ。それに私の見る夢！　それがまた——』

『ひとつその夢物語を聞かして下さいませんか、二三度位なら、同じものを見るということもないではないけれど——』

『お話します。どうぞこの夢の責苦から逃れられますように、助けて下さい。しかし、是非これだけは内密にお願ひいたしたいんですが——』

『大丈夫です。私の体は皆さんの秘密の捨て処、否え、秘密金庫ですから、あなたのお許しが必要なければ、容易に鍵は開けませんよ』

『ではお聞き下さい。何でもよほど山奥らしいのですが、疲れきつた男女の六部ろくぶが嶮しい崖縁やえで休息やすんでいる処から始まるんです。頭上には老樹が枝をかわしていて薄暗く、四辺あたりは妙にしいんとしている。さらさらというむかでの登音までがはつきり聞えました。遙か下の方に水の音が静かにしています。それがどうも能勢のせの妙見山みょうけんざんの景色らしいんですよ。二人は千手観音を背負っています。木の間がくれの新月が観音様を照らし、御光がさしているのです。女は男より大分年長としうえで、醜い器量の、しかもひどい斜視なんです、その眼がまた逆とども色つぼく、身のこなしもどこやら仇あだめいて、垢ぬけがしています。男は色白の美麗きれいな丸い顔をしています。

二人は起たち上りました、手をつながないばかりに、山路を仲好く歩いているかと思つと喧嘩をはじめます。喧嘩しているかと思つと、纏もつれるように巫山戯ふざけて歩いて

居ました。その内にどういふ事の動機からかよく分りませんが、女は急に狂氣のようになつて武者振りつき、怒鳴り散らしました、途断れ途断れに云う言葉をつぎ合せてみると、女は男の美貌に迷わされて、夫や可愛い子供を捨てて駈落したものです。自分の真心のありつたけを尽して愛情を送つても、美しい若い男は次から次へと女をこしらえては、彼女の心を蹂躪ふみにじつていたものと見えます。

千手観音の扉の内側に写真が供えてあります。その写真は赤坊がお宮参りの晴衣をつけているのです。ある家でお布施と一緒に渡されたもので、育ち難い弱い子を丈夫に育てたいという親心から、千手観音に頼んだものでしょうが、その赤坊の面差が、振り捨ててきた自分の子供に生き写しだというので、女は里を離れる時から憂鬱うれだつたらしいのです。

そこへ何か男が冗談まじりに他の女の話でもしたらしく、何分夢の事で辻褃つじまの合わないところもあるのですが、女はまるで夜叉やしやのように怒つて、いきなり男に組みつき、両手に力をこめて首を締めつけました。

不意を喰つて驚いた男と女との間には、一瞬間、怖い争闘がつづきました。

腕の中に、急に女の体が重たく、ぐつたりと感じたので男は我に返つたらしいのです。カツと見開いたその斜視の眼が、物凄く自分を睨にらんでいる彼女の醜い顔を、彼はしっかりと胸に抱きしめていたのです。はツと身慄しかばねいして、男は夢中で屍骸

を足の下の谷底へ投げ込みました。

千手観音に供えてあつた赤い頭巾、巾着、よだれかけ、などがばらばらになつて落ちて行きました。樹の枝に引ッ掛つた赤坊の写真が一番後から、ひらひらと舞いながら散つてまいりました。

男は両手に顔を埋めて、長い間、まるで失神したように、身動きもせず、石のようにかたくなつていましたが、自分も女の後を追うて死ぬ積りだったのでしよう。小枝に挿つて、下を覗き込むと目の真下に、恨みをふくんだ、それは恐しい斜視の眼がじつと見上げているのを見たのです。

あつと叫んで、男は宙を飛びました。細い峻しい路を馳け出して、どこへか行つてしまいました。毎夜見る夢はそこまで終るのです』

4

私は瞑目して新生寺さんの物語りを聞き、その終るのを待つて申しました。

『あなたはまず、その女の霊を慰めておやりなさい。見ず知らずの人であつたとし

ても、毎夜現れて来るところをみると、あなたから慰めて頂き度い希望を持つてゐるんでしようから——』

『それは——。あるいは私も、そうじゃないかと思つて、毎日お経を上げてやっています——。天光教ではそういう事をよくお取り扱いになると聞きましたし、また先日のお話では、当人に無関係の霊が悪戯したり、禍わざわいしたりする例も沢山あるとの事でしたし、目に見えない霊の力の恐しさというようなことも承わつたので、急にあなたにお継りしたくなりましたんです。何とかして、夢を見ないようにして頂けないものでしょうか』

『それは容易なことですが——、しかし——』

私はちよつと云い淀んで、彼の顔を見ました。すると新生寺さんは非常に熱心な面持をして救いの手を待つていられるようなのです。

『私としてすることと云えば、第一その霊を誰かの体に移して、つまり何人かの体を靈つかわに使用せて、イヤ口を使わせてです。その女の希望を伝えてもらうのです。その方法を取れば一番早く解決がつかえます。霊の希望に応じてやりさえすれば、あなたの悪夢も終りを告げることになるでしょう。しかし、それがです。私の臍おぼろげ氣に感ずる処によれば、多分貴方はその方法を欲しないだろうと思うのですが——。どうでしょうね？』

『欲するとしたら、果して、実際にそういう事が容易く出来るものでしょうか、夢を見ないようになれます事なら、何でもやってみたいんですが——』

『出来ますと。そしてついでに、その殺人罪を犯して逃げて去った、卑怯な若い男のその後の消息をも合せて調べてみてはどうでしょうか？ 能勢の妙見山は奥の院を出てから、道に迷って行方不明になる人が随分あると聞きますが、そういう事情で行方知れずになっている人もあると分つたら、妙見山のためにもよいではありませんか』と、申しますと、新生寺さんは両手を膝に置いて、暫時じいっと考え込んで居られましたが、聽やがて顔を上げるとちらりと私の方を盗み見て、また直ぐ眼を落し、沈んだ声で答えられました。

『有難うございました。よく考えてみましょう。こう申すとまことに姑息なやり方のようにですが、私共がお経を上げて迷っているものを成仏させるように、あなたの方にも何かそういう方法があたりではないでしょうか？ たえば有難い祝詞を上げてやるのか、そういうやりかたで何とかお願い出来ないものでしょうか』

私は新生寺さんの心持がよく分りました。彼は決して本心から祝詞なんかを望んでいるのではないのです。そんな生温い事で満足出来る位なら、何もわざわざ私の処へまでやって来やしません。が、今云うような方法をとることは彼には怖しかったのです。私が彼だったとしても、その場合、他人の体に霊を移して話を聞いてみ

る気にはなれなかったでしょう。新生寺さんの本当の希望は他人の手を借りずに、自分で始末をつけたかったのです。出来るものなら、直接霊と自分が談判したかったでしょう。だから私の力に縋り度いと云ってきたのです。つまりその方法を教えるという意味だったのです。

しかし特別に霊能を有っている人ならともかくもですが、誰の体にもおいそれと霊がかかつて来るものではありません。でも、彼の今の場合はもうどうにもこうにもならない、居ても起つてもいられないのですから、出来る出来ないは別問題として、私は彼に鎮魂という方法を教えることにしました。まあ精神統一なのですが——、それがまたなかなか出来ないものなのです。が、もし深い統一に入れば、自分の力で女の霊を招ぶことも出来ましょうし、誰にも知れずにその霊と談判も出来る、慰めてやり迷いを覚まさせてやることも不可能な事ではないのですが、そのようなまでが大変なのです。非常な努力と長い時日とを要する仕事なので、その辛棒が彼に出来るかどうかと、実は危ぶまれたのでした。が——。

その時から彼は私に縋って、熱心に鎮魂を始めました。しかし、雑念の多い彼はなかなか魂を鎮めるどころか、日に日に煩悶が加わって来るので、どうにも手のつけようがありませんでした。

『夢はいかがですか』

『やっぱり同じことです』

新生寺さんは瘦れた顔に、淋しい微笑を浮べて答えます。

霊笛と名づくる石笛を私が静かに吹いて、彼の魂を鎮めようとしていると、急に涙にむせび、泣きながら帰ってしまふことなどもありました。もうその頃は物事に感じ易く、何かという涙を零すようになって、すっかり人間が変ってしまいました。株に手を出して失敗し、百万円の借金を負い、その始末がつかなくなったからという事も彼を自殺させた大きな原因の一つではありますが、夢に悩まされたということは、より大きな原因だったと私は信じます。

本堂の改築にも金が要ります。宗教改革にだって、金がなくては思うように働けません。その資金を檀家に仰がず、自分自身の手でつくり出そうとした。それは彼の主義だったのですが、そのために株に手を出すことにもなったのです。

思わくをやって失敗する、高利貸から責められる、夢には苦しめられる、という日が長くつづいた後でした。ある日の新聞に、新生寺の住職が失踪したという記事が出ていました。

私は予期していたことに打つかったような気がして、痛しく思い、どうぞ無事でいてくれればよいがと、心に念じていました。

すると天光教の執事が、新聞を見たと言つて私の処へ参り、不審顔に申すのです。

『新聞には一昨日おとといから行方不明とありますが、新生寺様は奥書院に居られるのでございませう——』

『じゃあ二日もあすこに居られたのだろうか』
これには私も驚きました。

天光教では新生寺さんが出入する事を秘密にする必要はなかったのですが、彼が頻りに檀家の耳に入るとうるさいからと云わるるので、お互に面倒の起りそうな事は防ぐ方がいいし、また無益な饒舌おしゃべりは慎まねばならぬというわけで、好意から他言せぬようにと執事やその他の者にまで注意しておきました。それに新生寺さんは平常余り長居はせず、鎮魂が終ると直きに帰って行くようでした。私は彼がそこになお坐つていようと、いまいと、そんな事に構わず奥書院を出してしまうので、次の日になつて彼がその室に坐つていれば、先に来ていたのだから位に思っているのです。奥書院は建物の一番端れで、特別の用事でもなければ誰も行きませんので、そこに二日間も新生寺さんが留つていたのを誰も知らなかったのです。随分迂闊な話ですが、それが実際のことなのです。

新聞を手にして、急いで奥書院へまいり襖を開けて彼を見た瞬間、私は何かなしにはツと胸を打たれました。

新生寺さんは眼を閉じ、端然と坐っているんです。私が入つて来たのもまるで気

がつかないように——。

『早く帰られたらどうです。檀家中でも心配していられるようですから』

彼は新聞をちらりと横目で見たなり、眉も動かさないうで静かに申しました。

『日が暮れるまで——、どうぞ、——このままそつとしておいて下さい。新聞にまで出されちゃ気まりが悪くて、昼間は帰れません。夜分になったら帰山いたしましよ
う』

私は仕方なくその儘放つておいたのですが——。

それから一時間もすると、執事が青くなつて私の部屋へ飛び込んで来ました。

『先生、大変です。新生寺様が切腹されました』

『えッ？ 切腹？』

『早く、どうぞ、早く——』

吃驚して奥書院へ馳け付けました。

苦しげな呻き声は襖の外まで洩れ聞えています。執事の注意で廻らされた屏風の端から中を覗いて、私は思わず顔を反そむ向けました。

白衣を赤く染めて、左手を畳につき、右手に紐のようなものを掴んでいるのです。その手は真赤です。紐だと思つたのはよく見ると腸でした。血だらけの短刀が放り出してありました。

新生寺さんは私の顔を見ると、無言で口を曲がめ、笑おうとしたらしかったのですが、その表情はまるで泣いているようでした。眼の縁が薄黒くなり、石地藏のよくな皮膚の色をして、小鼻をピクピク動かしながら、呼吸をしていました。喰いしばった歯の間から洩れる呻吟り声が四辺を凄惨なものにしていきました。

彼の苦しい呻きは終日つづきました。

執事を始め男達はおろおろしながら、次の間に控えて居ました。

もうこうなつては秘かくしてもおけないので、早速お寺の方へも使を走らせましたので、主なる檀家の人々も追々集つてまいりました。

私は幾度も屏風の中へ入つて行きましたが、彼はただどんよりとした眼を僅かに動かす位で、物を云う力はありませんでした。

呻き声が次第に弱く、低くなり、力がなくなつてきて、果ては絶え絶えになつて行つたのは、もう灯がついて大分たつてからでした。

『ご臨終です』

医者の声に、私を始め、新生寺から馳けつけて来た者、檀家の主なる人々が皆奥書院に集りました。

屏風は取り除かれ、最後の別れをするために皆彼の周囲を取り巻きました。

新生寺さんは眼を閉つむつたまま、身動きもいたしません。啜泣きの声があちこつ

ちから聞えます。もう息を引き取ったのか知らと思つて、苦悶のあとのありありと残っている彼の顔を見詰めていました時、どこから出て来たのか、大きな百足むかでが畳の上をさらさらと音を立てて横ぎり、縁側の方へ逃げました。端近く座つていた一人の女が驚いて飛び上り、

『あら、百足が——』

と金切り声で叫びました。それが彼の耳に届いたのでしようか、新生寺さんは突然しゃんと体を起し、合掌しながら、それは朗らかな、清く澄んだ美しい声で、御詠歌ごえいかを唄い出したのです。

いままでは、おやとたのみし、おいづるを、ぬぎておさむるものたにくみ。皆はただ呆氣に取られていました。が、その奇麗な、銀のような美しい声には思わず聞き惚れてしまいました。しかし、聞き馴れた彼の太い底力のある声とは、全然違うものなのを、不思議に思いました。

唄い終ると新生寺さんは格天井を見詰めながら、疍高い透き通るような声で、さもさも嬉しそうに笑い出しましたが、妙なことにはその様子から声色まで、男ではなく、全く女でした。

『オホホ……。遂々敵を取つてやった！ オホホッ』

緊張した臨終の部屋の空気を揺り動して、彼は笑いながら、息を引取りました。

広い奥書院にその笑い声が物凄く響き渡って、思わず背筋に冷水をかけられたような寒さを感じたのでした」

5

話に夢中になっているうちに、乗客は一人残らず下車してしまい、がらんとした車室には先生と私とだけが相對しているのだった。

「その若い男の六部というのは——？」

「新生寺さんの前身でしょう」

「では——、伯父が——、その女を殺したと仰しやるんですか？」

「それは分りません」

「でも、——まさか、——あの伯父が殺人罪まで犯して、平気で坊さんなんかなっているとは思われないけれど——、して、その百足はどうして臨終の時に、出て来たものでしょう？」

「山の中ですもの、座敷の中に百足が入って来る位の事は珍らしくはありませんよ。」

殊に雨の前なんかには壁にはりついたようになってることなんか、しじゅうありますよ」

「じゃ、全く偶然ですね」

「そうです。——しかし、新生寺さんはどういう訳か百足を大変嫌っていましたよ」
「誰だって、先生、あんなもの好きな人はありませんよ。——ですがどうして、死際にそんな変な様子をしたんでしょう？ 女の真似なんかして、——笑いながら死んで行くなんて——。やはり発狂したんでしょうねえ？」

「さあ。そこですよ。私達が興味を有って研究しているのは——」
「興味を有ってですって？」

「そうです。誰がその女を殺したのか分らないとしても、新生寺さんが女の霊に殺されたという事だけは確実にしよう！」

先生は謎のような微笑を唇に漂わせて、それきり黙ってしまった。

やっぱり私には解らない、わからないが何となく不気味な気持がして、どこからか幻の囁ささいが聞えて来はしないかと、思わず周囲を見廻した。

妖影

一、暗号^{コード}

応接室に入った時、入れ違いに出て行った一人の紳士があつた。

「あれは私の従兄^{いとこ}なんですよ」

S夫人は手に持つていたノートを私に渡しながら、

「お暇があつたら読んでみて頂戴な。あの従兄が書いたんですの」

「文学でもなさる方ですか？」

「否^{いい}え、商売人なんです。最初の目的は別の方面にあつたのですが、若い時はちよつ

とした心の弛みから、飛んでもない過失^{あやまち}をやる事がありますからねえ。気の毒に従

兄も失職して長い間遊んでいましたが、やっと先頃ある会社へ入りましたんですよ」

私は早速そのノートを読んでみた。

——神戸を出て二日目の晩だった。船に弱い私も幾分馴れてきたので、そろそろ

食堂に出てみようかと思つた。

大切な任務を帯びているということが絶えず頭を離れないので、今度の旅行はど

うもいつものようにのんびりとした楽しい気分になれない。私は暗号を預つていた

のだった。

出発の際、S夫人から注意された言葉が耳の底に残っていて離れない。「暗号はあなたの生命いのちより大切だと思わなければいけない。トランクも危険よ。スーツケースはなお更だ。肌身につけていらっしやい」——その通り肌身につけている。恐らくこれより安全な方法はあるまい。しかし私がこの大切な暗号を持っている事を誰も知っているはずはないのだから、自分さえ用心していれば大丈夫だろう。余りそんな事ばかり考えていると神経衰弱になつてしまふからな。とにかくいま少し朗らかにやることだ。——と、こんなことを考えながら食堂へ入つて行つた。

私の席は事務長の傍にとつてあつた。少し遅れて出て来たので、もう食事は始まつていた。円まるい卓子テアブルを囲んだ五六人の客は事務長を相手に盛に談笑しながら、ホークやナイフを動かしていた。皆元氣な若い男ばかりだったので、この卓子が一番賑やかだ。そろそろデザートを運ぼうとしている頃になつて、二人連れの支那人が静かに入つて来て、私の隣りの空席せきへ坐つた。よほど身分のある人だろうということはその服装からでも一目で知れる。

多分お父さんとお嬢さんだろう、どこやら面おもざしが似ている。男の方は少し前屈みで背がひよる高かつた。顔はまだ若い、それなのに頭髪は真白だつた。

お嬢さんは二十四か五か、桃色の支那服がいかにも奇麗で可愛らしく見えた。しかしこれは病人らしく思えた。小柄で恐しく痩せて蒼白い顔をしているが、非常な

美婦人だ。惜しいことに余りにも全身衰弱しきつていて、歩くことさえ大儀そうで、見ていると痛々しく窶やつれ果てている。

席につく時軽く会釈しながら、ちらりと目を上げて私の方を見た。その眼の奇麗さにまず驚いてしまった。体は、疾とらくに死んでいなのに、目だけが生きている、といった感じだが、その寂しい美しさが私の心を掻き乱すのだった。今までにこれほど恐ろしい魅力のある眼に出会った事がなかった。私は彼女の一瞥にすっかり魂を奪われてしまったと云つてもよかつた。

食事がすんでから、一人で甲板の上をぶらぶら散歩していた。どうも今見た二人が気に懸つてならない。食事が済んだら必ず甲板に出て来るだろう。と心待ちにしていたがなかなかやつて来なかつた。病人だから室へやへ帰っているかも知れない。私は何となく物足りないような気がした。

蒸し暑い晩だ。

月もいいし、狭いキャビンに帰つてしまふのが惜しくつて、つい夜を更してしまつた。寝苦しいと見えて、一度寝に帰つて行つた人々までがまた甲板へ上つて来たりしていたがいつの間にか皆各自てんでの室へ引きとつてしまつて、残っているのは私一人きりだつた。

「そろそろ寝るかな」時計を出してみた。「ホウ、もう一時だ！」

私は立ち上って続けさまに欠伸あくびをしながら、両手を高く伸した。そのついでにチヨツキの上から自分の胴中をちよつと触つてみた。出発以来これが癖になつてしまつて、日に何度となくやる。大切な暗号を胴中に巻いているのだもの。任地に着いて無事にそれを手渡しするまでは安心がならない、従つて責任はなかなか重く少しの油断も出来ないのだ。我々の生活は旅行中だけが呑気のんきで極楽なのに、その旅行中さえこんなに緊張していなければならぬなんて、考えてみると情けなくなつちまう。好きなダンスもやれないし、バアへ行くのも差控えているのだ。三十歳の若さだのに、と私は急に詰らなくなつた。

私は舌打ちしながら階段を降りかけて、何気なく後を振り返ると、いつの間にか上つて来ていたのだらう。甲板の欄干にもたれて、先刻さつきのお嬢さんが連れもなくたつた一人で、月を眺めながら物思いに沈んでいる。この夜更よびぐに、あんな病人がとちよつと妙な気がしたが、そのまま立ち去るに忍びず、少時しばしその後姿を眺めていた。

翌日はいつになく早く眼が覚めた。昨夜は妙な夢を見た。キャビンの丸い窓の真中に、ぼつかり五十銭銀貨ほどの眼がたつた一つ現われた。と見る間にその目が大きくなつて丸窓一杯にひろがり、遂々とうとうその窓が一つの目になつてしまつた。瞬きもしないで、その大きな瞳が私の顔を見詰めている。それがまたあのお嬢さんの眼そっくりだつた。余り気にしているものだから、そんな夢を見たんだろうと可笑おかしくも

なる。ほんもののお嬢さんの眼が覗いてくれたらどんなに嬉しいことだろう。私はなつかしい気持ちで窓を見たが、そこにはあの弱々しいお嬢さんの影さえもなく、朝の空気を吸いながら活弁に散歩している西洋人の後姿が見えていた。

私も起きると直ぐ甲板を散歩した。段々顔馴染みの人が出来てきて、出会う度にお互いに声をかけるようになった。私は何となくかの二人を待もつような心持で、朝も昼も食堂に出たが、隣りはいつも空席で、花のような形に折り畳まれたナフキンが、淋しくお皿の上ののつていた。私は気に懸るので、それとなく事務長に彼等の事を訊いてみた。

「お嬢さんが御病気で故国へ帰られるんだそうです」

「どういう御身分の方なんでしょうか？」

「高貴の出なんです——、今は何もしてられないそうです。支那の大金持なんですよ」

「そうらしいですな。日本にもよほどながくいられたと見えて、まるで日本人ですね」

「そうです。言葉もうまいしね。しかしまあお気の毒ですよ。お嬢さんがあんなに体が弱っているのです、お父さんがお守りをしながら、氣候の好いところ、氣候の好いところと世界中を遊んで歩いていられるんだそうです」

「結構な御身分ですな」

「何しろ金があるから」

事務長は羨しそうに云うのだった。

夕食の時、少し遅れて食堂へ入ると、もう例の二人は卓子に着いていた。

お嬢さんは手を動かすのさえ苦しそうで、見ても痛々しい。極めて物静かに少しの音もたてずに食事をしていた。始終伏目になっていて殆んど顔を上げない。長い睫毛は頬の上にくっつきと影を落している。美しい女だな、と、心の中で感歎した。

私はお嬢さんの方ばかり気を付けて見ていたので、お父さんの方は一向注意をしなかったが、何かの拍子にふと見ると、どうも不思議な癖のあるのに驚いた。一種の神経痙攣とでもいうのだろうか、卓上の物を取ろうとして手を延ばす時、彼の手がその物を掴む前に空中に英字のようなものを描くのだ。最初は誰かに合図しているのかと思った。しかしそうではないらしい。何故なぜというのにソースの瓶を取ろうとしてはやる。食塩を取る時もやる。胡椒、果物、何の時でもやるからだ。余り目まぐるしく繰返すので、見ているだけで、こっちの神経がいらいらしてくる。厭な癖だなあと見て見ていると、自分まで伝染してひとりで手を動かすようになるのだ。どうもひどく気になる。顔を反そむ向けて、見まいとしても、やはり見ずにはい

られないのだ。私は急いで食事をすませるとさっさと食堂を出てしまった。それからもう一つ気になるのは、お嬢さんが食事中にも拘らず、左の手にだけ手袋をはめていることだ。純白で、それこそ少しの汚点もない、清らかなものなのだ。どうもこれがまた妙に気になる。

一、妖瞳ようどう

明朝あすは船が港へ入るといふ晩だった。

船が着く前夜はどういうものか眠られない、これは私の癖だった。新らしい任地というものは希望もあるが、また不安もある。赴任する前に長官やら同僚の事など大体調べて、予備知識を得ておくのだが、それでも失敗して随分辛い思いをする事がある。私は甲板の端に甲板用の椅子を持って来て、欄干に腕をのせてぼんやりしている、例のお嬢さんをお父さんがいた勞わりながら、二人でそろりそろり、と階段を上って甲板へ出て来た。私の傍を通りすがりながら先方から声をかけた。

「今晩は。いやに蒸しますね」

「まだ起きていらしたんですか？」

二人は立ち止った。

「少し涼もうと思つて出て来たんですが」

「ここはなかなか風がよく入りますよ」

「でも、お邪魔ではないでしょうか？」

遠慮深そうに欄干に倚りかかっているの、早速自分の椅子をお嬢さんにすすめ、なお二つの椅子を運んで来た。

「イヤ、どうもこれは恐縮です」

お父さんは私の好意を心から感謝するように幾度も頭を下げてから、お嬢さんの細い体を抱くようにしてそれに腰かけさせた。そしてさも云い訳らしく云うのだつた。

「どうも体が弱っているもんですから——。困つてしまいます」

二人の容子ようすを見てみると気の毒になった。こんな病人をかかえて旅行するということは何という危ぶなかしいことだろう。お父さん自身だつて神経痙攣けいれんに悩んでいるのだし、お嬢さんの方は半分死んでいるようなこの痛々しさじやないか。私は黙つて見ていられなくなつて、訊いてみる気になった。

「どこがお悪いんですか？」

「医者は心臓が悪いのだとか、肝臓だとか、いろんな事を申しませんが、結局どこが悪いんだかよく分らないらしいんです。まあ故国へでも帰って、暫時しばらく保養したらまた気も変つてよかろうかと思ひましてね。しかし私は病氣じゃないと独りで定めてきいるんです。つまり、その、まあ神経ですな。神経から来たものと考えているのです。何にしても厄介なことで、全く閉口してしまいます」

お嬢さんはお父さんの話を黙つて聞きながら、私の心を掻き乱すようなその美しい眼に、淋しい笑えみを見せて、私を凝じっと見詰めていた。私は身内からだが縮むすくように思った。「お困りでございましょうね」

これだけいうとやつと視線から逃れるように横を向いた。何という不思議な魔力をもつ眼だろう。私は何だか引きずられてしまふような気がする、ふとこんな事を思つた。このお嬢さんにこの眼で凝と見すえられたら、それがどんなに危険な恐しい命令であつたとしても、到底私には辞退いなめないかも知れない。考えてみるとちよつと恐しいような気もする。

「仕方がないと思つて居りますが、この神経というやつが一番困りものでね」お父さんは頻りに神経々々というが、しかし二人揃つて神経に悩まされるとは可笑しな話だ。殊にあの食卓で見たお父さんの空中に書く英字など何か意味がありそうにも思えるので、

「遺伝でいらつしやるのじやありませんか、貴方も神経質のようだし」

お父さんは微笑して云つた。

「私ですか？ 私は至つて呑気者ですよ。むしろ無神経に近いかも知れません」

何云つてるんだ。と私は心で笑つた。それを彼は直ぐ見て取つたものか、急に思ひ出したように云い直した。

「ああ。貴方は何んでしよう？ 私が何か物を取ろうとする時に変な手付きをやるもんだから、それを仰しやつてらしたんでしよう？ しかしあれは神経痙攣じやありません。ある恐しい感動の結果あなつたんです」

「恐しい感動？ どんなことなんでしよう？」

私は好奇心から思わず瞳を輝かせた。

三、ふ攣るえる手

彼は低い調子で語るのだった。

「娘は幼少の頃から心臓が弱かつたと見えて、時々発作を起しますので、いつかは

恐しい変事が突発的に起つて来るのじやないか、と絶えず不安に襲われて居りましたのです。

ところがある日、庭を散歩して捨石につまづき転んだ拍子に、娘は息が止つてしまいました。医者は無論死んだと云いますし、實際死んでしまったのに相違なかつたんです。私共は一日二晩、娘の傍を離れずお通夜をいたしました、私自身で娘を棺の中に納めました。そして墓場まで送つて家族累代の墓地に葬つてやりました。その墓場は田舎——私共は蘇州の者ですが——の淋しい畑の真中にありました。

棺に納めます時、私は娘が好んでいた純白の夜会服を着せてやりました。それは私がロンドンに居りました時、娘を始めて社交界に出すために、大金をかけてつくらせた記念の品でございました。それから娘に買つてやった寶石類、頸輪、腕輪、指輪、殊に指輪は全部の指にもはめきれないほど沢山有つたのを、私はみんな娘の身につけて葬つてやりました。親なんて実に馬鹿なものでございますね」

お父さんはちよつと歎息するように私の顔を見て言葉を断つた。私はお嬢さんの方を眼で指しながら訊いた。

「その方はこのお嬢さんのお姉さんなのですか？」

「まあどうぞ、終りまで聞いて下さい。——葬いを済ませてから家へ戻つて来た私が、その時どんな氣持だったか貴方にはお分りになりますか。妻は娘の小さい時に

死にました。私は母親の分までも娘を可愛がって育ててきたのです。そして母のない娘は私一人を頼りにしていましたし、私には彼女以外に親身なものも一人もないのでございます。それですから娘を自分の生命よりも大切にしてきた心持は十分にお察し下さると思います。その親一人娘一人が、別々の世界に住まなければならなくなつたという事は、どんなに深く悲しませたか、私も娘と一緒に棺の中に入つてしまおうかと思ひました。否え、私が死んで、娘を生かしておいてやりたかつたと悔んだのでした。私はほんとに一人ぼっちになつてしまつたんです。半分気が狂つたようになつて、疲れきつて自分の家へ歸つてまいりました。

肱掛椅子に倒れたなり、考える力もない動く力もない、見る力もない、うつろのようになつてしまいました。棺が置いてある間はまだようございました。その中には娘が寝ているのですから。しかし今はその棺さえもないのです。家の中は急に人氣がなくなつたようでした。

棺に娘を納めたり、最後の眠りを飾つてやるのに、何かと忠実に手伝つてくれました。黄亮こくりようという執事が、その時音もなく入つてまいりました。

『旦那様、何か召上られてはいかがでございます？』

私は返辞をしませんでした。食事どころではないじゃありませんか、私は無言で首を振つて見せました。

『旦那様、それではいけません。お体にさわりますから、じやお床をおのべいたしましよるか、少しお息やすみになりましては？』

黄の優しい心づかいを承知しながら、それがうるさいので、少し疝癩かんしゃくを起して大きい声で云いました。

『放ほうっちゃつといてくれ。この儘ままにしておいて——』

目を閉つぶつてしまいました。それでも忠実な黄は私の身を案じてなかなか退さがろうとはせず、躊躇ちゅうちゆして居りましたが、私はもう相手にもならず、くるりと横を向いてしましました。そこで黄も仕方なく部屋から出て行きました。

その後何時間経ったか分かりません。まあ何という夜でしょう。それはそれは寒い晩だのにストーヴの火はすっかり消えているし、氷を運んで来るような冬の凍った風が、気味悪く窓に打ぶつかつていました。

私は眠ってはいませんでした。失望と落胆とでぐったりして目だけは開けていましたが、神経は麻痺して、だらりと足を投げ出したまま、時間の経つのも知らなかったのです。

突然、玄関のベルがけたたましく鳴って、墓場のような寂しい、がらんとした空っぽの家の中にそれが鳴り響きました。私は吃驚びつくりして大時計を仰ぐとかつきり午前二時でした。——こんな真夜中に何人だれがやって来たのだらうと思つてむつくりと起た

ち上りました」

そこまで話してきた時、傍のお嬢さんが弱々しい声で何かお父さんの耳許で囁いた。

「ウン？ 部屋へ帰りたいたい？」

首を傾げてお嬢さんに云いながら、今度は私の方を向いて云い訳するように云うのだった。

「海気で体がしっとりしてきたから、もう部屋へ入りたいと申しますので——」

やっと話が面白くなりかけた処で、おしまいにしてしまうのも惜いが、それよりもせっかくお嬢さんの傍でいい気持ちになっているのに、心ない事をいう人だ。これで部屋へ帰られてしまったら、そして船が明朝港へ着けば別れ別れになってしまふのだ。二度ともう会う機会はないかも知れないのに、私は少しく感傷的になって寂しい別れ難い気持ちがあるのだった。何とかして引きとめようと心で焦りながら、ついこんな下手なことを云ってしまった。

「お休みになりますか？ もう大分遅いようですね」

私は自分で自分をはり倒してやりたかった。何云ってるんだ。まるで心と反対なことを喋舌っている。馬鹿奴！ 遅いから休むと云われてしまえばそれまでじゃないか。何という間拔けな拙いことを云ってしまったんだろう。私は心で悔みながら

下唇を噛んでいると、相手の方では話の途中でそんな勝手なことを云い出したので、
気持を悪くしたとでも誤解したものらしく、

「いいえ、休むものではありません。ただ娘が夜気を恐れますので——。どうも体が
弱いもんですから、とかく我意ばかり申して仕方がございません。何でしたら私共
の室へお遊びにいらっしやいませんか、続きのお話をいたしましょう」

彼等の部屋はどこにあるのだから知らないが、私の部屋の方が近いので私の方へ遊
びに来るように誘ってみた。

「お差支えなかったら私の方へおいでになりませんか、部屋はこの階段を降りると
直ぐ右手の角ですから」

最初お嬢さんの方は遠慮して来たがらない容子だったが、私が、頻りとすすめた
ので、遂々二人とも来ることになった。

お嬢さんには柔かいソファをすすめ、向い合つて椅子に腰かけた。何か御馳走
でもしようかと思つて時計を見るともう十二時を過ぎてゐる。ボーイを呼ぶのも余
り遅いし、それに一人でないとしても、こんな時間に女の訪問客はきまりが悪い。
どうしようかと思つていと私の心を察したらしいお父さんは、そそくさと部屋を
出て行つたが、直ぐ両手にウイスキーの瓶やチョコレート箱などを持って戻つて
来た。

お嬢さんはコップにウイスキーを注いでお父さんに毒味をさせてから、私にも注いでくれた。

「さあ、先刻のお話の続きを聞かして下さい」

私はウイスキーのコップをなめるようにしながら云った。

「お一ついかが？」

お嬢さんはチョコレートチョコレートの箱を差出して云った。私は手近の一つを取って口に入れた。

四、白い手袋

お父さんはウイスキーをぐつと呑み干してから、話のつづきを語り始めた。

「ベルがまた烈しく鳴りました。召使は誰も起きる容子がありません。仕方なく私は蝋燭に火をつけて、それを持ちながら階下したに降りてゆきました。そして玄関玄関に立つて、

『どなたですか？』と訊こうと思いましたが、何だか気味が悪いのです。自分の

意気地なしが腹立しく耻はずかしくもなつて、思い切つて静かにハンドルを廻しました。しかし私の心臓は烈しく鳴り、恐しくつて扉ドアを前にひけませんでした。

でも遂々思い切つて扉をさつと開けますと、ヴェランダの陰に白いものが立っているのです。私は体がこわばつて動けなくなつてしまいました。

『ど、ど、どなたですか?——』

『お父さま。私ですよ』

娘の声じゃありませんか、思わずぎよつとして一步後に退りました。

『私なのよ、お父さま』

私は自分が発狂したのだと思ひながら、すうつと入つて来た白いものに追われるように、少しずつ後退さを始めました。それを追い出そうとして、昨日きのう食事中にごらんになつたあの空中に文字を書くような、変てこなヂェスチュアをやつたのです。すると、白いものが云いました。

『恐がつてはいやよ。私は生きていたのよ。死にやしません。誰だか指輪を盗もうとして私の指を断つたのよ。血が流れて、その痛さで気がついたんですの』

血のしたたつている手を見ました。白い着物はもう血だらけでした。

私は息が吐つけなくなりました。夢なんだか、事ほん実なんだか分りません。化物にしろ、何にしるです、娘の形をしているのですから、嬉しくつて夢中でその手を取り

ました。その手は死人のように冷めとうございしました。

私は娘を抱くようにして自分の室へ連れて来ました。肱掛椅子に寄りかからせて早速傷の手当をいたしました。そして娘の真青な顔に凝と見入りました。お化けではありません。確かに娘です。私は何だか急に胸が一杯になって、狂気のようになり娘の膝に頭をのせ咽び泣きをいたしました。

臆おそて少し心が落ちつきますと、室内の余りに冷えきって寒いのに気がつきました。いそいでストローヴに火を焚きつけました。何か暖かいものでも食べさしてやりたいと思つて、烈しくベルを押し黄を呼びました。

黄はいそいで飛んで来ましたが、娘の姿を見て立ちすくんでしまいました。死んだと思つている人がそこにいるのですから、それは誰しも驚くのは当り前ですが、黄の驚き方はまた普通じゃありませんでした。恐しそうに呻き声を上げながら、急にわなわなと慄え出したと思うと、突然狂気のようになって外へ飛び出してしまいました」

私はお父さんの話を聞いているうちに少し眠気を催してきて、生欠伸を噛み殺しながら、それでも一生懸命になつて眼だけは開けていた。彼はまた言葉をつぶけて云うのだった。

「墓を開けたのは執事の黄の仕業でした。彼は娘の指を断つて指輪を盗み、素知ら

ぬ顔をして家へ帰つて来ていたのです。私が黄を信用しているので、大丈夫自分に疑いがかかるはずはないとたかをくくっていたのでしよう、が、天罰とでも申しましようか、黄は余り慌てていたので、掘り返した棺の蓋に釘を打つことを忘れたんです。オヤ、貴方はお眠りになつていらつしやるんですか？」

そう云う声を私は遠くの方で聞いたように思った。

それきり何も分らなくなつた。

五、失神

船が着いて、船客は一人残らず上陸してしまつたのに、まだ私が姿を見せない。部屋には鍵がかかっている。というのでまず第一に迎えに来てくれた同僚が心配をはじめた。事務長に頼んで合鍵で開けてみると、室内は少しも取り乱されていないが、肝心の私の姿はどこにもない。どうも不思議だ。そこで船員達は手分けして船中隈なく探すことになつたがやはり見つからない。勿論上陸していない証拠には荷物だつてそのままに残っている。事によつたら殺されたのじやあるまいか、殺さ

れて海中に投げ込まれたのかも知れない。などと云い出すものもあって、急に大騒ぎになった。

聽て水夫の一人が船底に近い物置部屋で私を発見したのだった。

私はそこで毛布くまふに包まれて、死んだようになって眠っていた。

揺り動かされてもなかなか眼を開けなかつた。が、聽て船員達や出迎えに来てくれた同僚の顔かほが段々判然はつきりと見えてきて意識を回復すると、急いで胴中に手をやった。そして愕然とした。

私は皆が止めるのもきかないで夢中で飛び起き、物置部屋を出たが、どこに自分の部屋があつたのか見当さえもつかなくなつた。

私はボーイに案内してもらつて、自分の室へ入ると急いで中から鍵をかけた。

洋服を脱ぎ胴巻をとつて改めて見たが、大切な暗号はどこにもない。大変だ！ かあツとして全身の血が一時に頭にのぼるように思つた。

眩暈めまいがして倒れそうになつたが、聽ていくらか落付きを取り戻し、冷静になると昨夜からのいろいろのことが頭に浮んできた。

ウイスキーを飲んだ。チョコレート14を食べた。お父さんの話を聞きながら眠くなつ

14 「チョコレートを」は底本では「テヨコレートを」

て——。それからあとはどうしても思い出せない。

しかしどうして私を物置部屋まで運び込んだのだろう。暗号を盗むだけが目的なら、そんな手数をかけないで殺してしまえばいいじゃないか。また殺さないでもあれほど意識を失なっているのだから、暗号を取り出す位何でもあるまい。わざわざ遠方の船底近くまで連れ込まないだって、と、ここまで考えてきた時、始めて彼等の用意周到な計画に気がついたのだった。

乗客が上陸してしまつてから、私の紛失に気がついて、船員達が発見するまでには相当の時間がかかる、彼等はその時間が欲しかったのだ。その間に充分ある目的を達し得られる、それには容易に発見出来ない物置部屋のような処を選ぶ必要があつたのだろうか、しかし私としてはむしろ殺された方がよかつた。この重大な過失をやつた私はまあどうしたらいいだろう？　そう思うと、全く生きているそらはなかつた。が、一刻も早く訴え出なければならぬ。愚図々している場合でないので、悲壮な決心をして立ち上り、ズボンに手を突込んで手中を出そうとした拍子に、ぱらりと落ちた紙片があつた。小さく折り畳んであつたが、ちよつと気にかかつたので拾い上げてひろげてみた。

『あなたは嘗て、トワンヌのなかにあるチツクという小説をお読みなつたことがありますか？』

あなたの興味をそそった物語は、勿論私達の身の上話ではありません。

夫はある人への暗号通信以外に空中に英文を書く必要もないし、従って妻の白い手袋の中にある五本の指もみな無事について居ります。

愛国心に燃ゆる吾々が、ある目的のため危険を冒す場合に演じる一幕は、役者が命がけでやっている芸なのですから、見物人が魂を奪われたって仕方がありません。しかもあなたの場合は薬まで吞まされているのですから——。多分罪にはなりません。またそうあることを希望してやみません。一時にせよお互はよいお友達であつたのですから。

無断で拝借した暗号はなるべく早くお返しするようにいたします。それまであなたが今のまま安らかに眠りつづけていて下さったら——、と念じつつ——」

そこまで読むと私はその紙片をびりびりに引裂いて床の上にたたきつけ、扉を開けて外へ出た。

「お待ちどおさまでした、さあお伴いたしましょう」

同僚と一緒に棧橋を降りると、そこに待たせてあつた自動車に乗った。

和製椿姫

私が玄関の格子を開けると、母が馳け出して来て、

「御殿山の東山さんからお使いが見えたよ、今朝っから、三度も」と急きこむように云った。

「どんな御用？」

「重大事件なんだって、至急、御相談したいから、日名子さんがお帰りになったら、直ぐお出で下さるようになって」

「事務所の方に電話くれればいいのに——東山さんなら事務所から直接行った方がずツと近いのにねえ」と、私は気が利かないじゃないかと云わないばかりの口吻で云った。

「度々かけたがお話中ばかりで通じなかったって云ってたよ。東山さん待つていられるだろうから、日名さん、あんた行って上げたらどう？」

「そうね。あの性急な東山さんの事だから、さぞ、焦り焦りして家の人達を叱り飛ばしていることでしょう。仕方がないわ、じゃこれからちよつと行って来ます」

私は脱いだ靴をまた履いて、東山邸にいそいだ。

品川の海を見晴した宏壯な邸も、主家の一部と離れの茶室だけが残つて、あとは全部戦災を受けていた。あの体面を気にかける彼が、まだ手入れもしないのはよくよくのことだろう。聞けば邸も内々売物に出ているという噂だから、懐は相当苦しいに違いない。何しろひと頃あんなに景氣のよかつた軍需会社も終戦と共に閉社してしまつて、第二封鎖と財産税とにいためつけられてしまつた上、十人近い家族を抱えての居食いだから、並大抵のことではあるまい。

東山春光の父と私の父親が親しかつた関係から、私は彼と友達だつた。彼は高等学校時代からの道楽者で、富豪の息子にあり勝な、我儘で見栄坊で、ひとりよがりの通人で、齒の浮くような男だつた。が、女にかけては相当なもので、新橋あたり の待合へ入り浸つて、そこから学校へ通つたなどという噂を聞いた。奥様運の悪い人で、器量望みで貰つた最初の妻ともいれて五人目のを失つてからは正妻を迎えず、外に困つてあつた第二夫人を家にいれていた。

第二夫人は有名な美人で、一時和製椿姫と云えば道楽者仲間では知らない人がないほどの女であつた。勿論芸者でも、女優でもない。お妾商売とでも云うようなもので、男から男へと飛石伝いに歩いているような類だつた。そして、東山春光の懐へ入つて、そこを最後の落付き場所とでも思つていたのか、その後ふつりと噂がなくなつてしまつた。

「東山はあの女を根びきしたために、決闘を申込みましたそうだ」なんて話があった。とにかく、それからの彼は花柳界にもあまり姿を見せず、家庭内に閉じ籠ってしまつたので、さだめし平和な幸福な生活をしているのだらうと、私はかげながら祝福していたものであつたが、さて、品川の邸へ来て、彼に会つと、今までの想像はすっかり覆がえされた。彼の変わり果てた様子にまず一驚を喫してしまつたのである。すつかり憔悴して、顔面神経痛でもあるように、絶えず眼と口を引きつらしている。

私は久々の挨拶もそつちのけにして、

「重大事件つて、どんな事が起つたんですの？」ときいた。

彼はいらいらして、椅子のふちを指先で叩いたり、脚を組んだり、ほどいたり少しも落ちつかかなかつたが、

「日名子さん、実は極秘裡に、至急、何とか始末をつけなければならぬ事件が出来たんです。どうでしょう？ あなた、絶対に他言しないと誓つてくれますか？」

「それはもう私の職業柄、他人の秘密をしゃべるような事はありませんよ」

彼は深くうなずいて、

「そうですね。医者が患者の秘密を語らないようにね。それに僕と日名子さんとは友達でもあるからね。特に便宜をはかつて下さるだらうし、と、まあ、自惚

れてお願いするんですが——、あなた僕の妻、勿論正妻ではありませんが、美耶子にお会いになったことがありますか？」

「ええ、二度ばかりお目にかかりましたわ。大層お美しい方ですのね」

春光は苦笑いして、「美耶子が、昨夜浚われてしまったんですよ」

「へえ、奥様が？」

「そうです、妻がです」

「浚われたということがどうしてお分かりになりますの」

「美耶子はあなた、重病で寝たつきりだったんですよ。独り歩きも出来ない大病人が消えて失くなったんですから、浚われたとしか考えられないじゃありませんか」

私は黙って彼の顔を見た。青い頬にいく分か興奮して血の気がのぼっているが、その眼は充血して昨夜来の苦悶をありありと現わしている。いつも奇麗にわけている頭髮も、話をする間に指でがりがり掻くので、もしやもしやになつていた。

美耶子の前身が前身だけに、彼の煩悶には複雑なものがあつた。嫉妬の交つた感情もあつただろうし、体面を重んじる彼としては、まるで顔に泥を塗られたような不愉快さもあつたろう。世間へ知れては面目ない、何とかして誰にも感付かれないうちに連れ戻さなければならぬ、と、彼は焦っていた。

「もっと委しく話して頂けないでしょうか。奥様は御重体でいらしたとすると、ど

ういう御病氣だったんですの?」

彼は鼻の先でふふんと笑つて、

「ああいう種類の女が、最後に生命を奪われるとしたら、結核か黴毒かに定つてい
るじゃありませんか。自業自得ですよ。散々男を悩ませた報いが来たんです」

私はこの冷めたい言葉に腹が立った。そうと分つているなら、何故もつと早く手
をつくしてやらなかったのか、生命を奪われるところまで追いつめて、それをじつ
と睨めていたとしたら、彼は絶対に彼女を愛していたのではない。むしろ何か心に
たくらむところがあつて、彼女へ復讐したのではないかとさえ疑えるのだった。

「それで、ですな」と彼は言葉をついで、「世間体もある事ですから、医者に頼んで
神経衰弱という事にしてあるんですよ。まさか、神経麻痺だの、痴呆症だのつて発
表出来ませんからな。気狂いなら失踪しても云いわけはたちますが、しかし、世間
の話題になるのは困りますからね。どうしても、一度は連れ戻して、ここから葬式
を出さないと困ります。それに美耶子は御承知の通り、大変虚栄心の強い、大の見
栄坊ですからね、東山夫人として死にたいのに定つています。また、そうしてやる
のが僕の慈悲ですよ。浚つた奴にしても、さて自分のところへ連れて来てみれば愛
想がつきるでしょう、あの我儘ではね、直ぐに棄てられてしまいますよ」
「浚つた人から何とか云つて来ましたか? お金をよこせとか何んとか」

「まだ何とも云つて来ませんよ」

「では何を目的で御病人を連れ出したりしたんでしょう？」

「まさか、あんな病人とは知らずにやったんでしょう。馬鹿な奴だ」と吐き出すように云つて、

「人の口さえうるさくなかったら、反つて有難い位なんだけれどね。世間つていう小姑があるから——、それだけを僕は恐れているんですよ」

私は彼と友達でなかつたら、一言で拒絶してしまうのだったが、こういう人を頼つていた美耶子の事を思うと、彼女がいままでにどんなに冷めたい待遇を受けていたかが想像されて、浚われたということが果して彼女にとって不幸なのか、幸福なのかわからなくなった。しかし、もし連れ戻すことが彼女にとって幸福ならば、彼の依頼のためではなく、私は彼女のために努力してみようと決心した。

「失踪前後の事や、何か手がかりになるお心あたりの事でもあつたら話して下さいね」と云うと、彼は天井を向いて考えていたが、

「まず、昨今の宅の経済状態からお話ししなくてはなりませんまい。美耶子はあの通り贅沢好きで、いまの時代にも昔と変らぬ生活をしないと機嫌が悪い人です。ところが、実はお恥しいがこの邸も持ちきれなくなつたような状態なので、彼女の希望するような生活は出来ない、それが第一不平だつたんですね。内緒で、昔馴染の男

へ訴えたらしいんですよ。不愉快な話じゃありませんか、たしかに二三度手紙の往復をしている」と唇を噛んだ。

「相手の男はわからないんでしょうね？」

「分っています。実に怪しからん奴で、僕はまだ会ったことはないのだが、美耶子を自分が引取って世話をしたいなんて、無体な生意気な手紙をよこしたんです」と云って、彼は次の間にたつて、抽斗を開けたり閉めたりしていたが、二三通の手紙を挿んで戻つて来た。彼は震える手で封筒から中味を引き出して読み上げた。

「美耶子さんの御近況を聞くにつけ、僕はお気の毒で黙つてみているに忍びないんです。是非、僕の手にお返し下さい。どのみち全快の希望がないものならばせめて最後の幾月なり数日かなりを、心ゆくまで楽しく送らせて上げたいのです——。などと、日名子さん、実に呆れた男ではありませんか。美耶子をまるで自分のものでもあるような事を、云つてるんですから、非常識にもほどがある、気狂いですよ、この男は——」と憤慨した。

「それに対して、何とお答えになりましたか？」

「捨てておきましたよ、無論」

「最後に来たのはいつですか？」

「数日前です。僕は放っておきました。すると、昨夜、美耶子がいなくなつたんで

す」

「美耶子さんはどのお部屋にねていられたのですか？ 重体と云われるからには看護婦もついていたんでしょね？」

「看護婦もあれの我ままに呆れて、三日といる者はないんです。余り度々かわるの
で近所の手前みつももないのでやめました」

「どなたかお世話していらしたんですの？」

「さあ、別段、誰と定めてはいませんでした。手のあいている者が気をつけることにしていたんですが、庭の離れの茶席を病室にあてておきました。昨夜は来客があつて、夜が更けたのにあの大雨でしょう？ 美耶子はもう眠っているだろうから、明朝早く行ったらよかろうということ、誰も行かなかつたんです。美耶子は昨夜はじめて茶席にひとりでいたことになるのです」

「美耶子さんの失踪は今朝発見されたんですね。お客様でござつたしていらつたとすると、宵の口やら、夜中やら、失踪された時間ははっきりしないわけでしょう？」

「そう、しかし、あの体で自分で失踪するわけではないから、手紙の男が連れ出しに来たことだけは確実です。素人の僕達がかけてみたところで、おいそれと返してよこすような奴ではありませんまい。どうせ目的は分つていますよ。見ていらつしやい。いまに莫大な身代金請求をよこすから——警察の手にかければ直ちに解決され

ましようが、それでは世間に知れる恐れがある、新聞にでも出ると困りますからね。そこであなたは女性でもあるし、私立探偵という職業を持つているからお願いするわけなんです。世間へ知れないように、上手に彼の手から奪い返して下さい。が、奴もなかなか凄いですからね、よくよく注意なさらないとしてやられますよ。アドレスはここに書いてあります」

と、彼は封筒をよこした。私は差出人の名を見てちよつとびっくりした。それはいま売り出しの流行歌手、しかも評判のいい青年であった。

2

翌日私は青年を訪問した。

彼は少しも悪びれず、私を応接室に通して、

「今日あたりは東山さんからお迎えにみえるだろうと思つていました」と云った。

青年は美しい男ではあつたが年よりはずつと老けて見えた。しかし、東山春光が想像しているような凄い男でも、悪漢でもなかった。むしろ温和な弱々しい感じで

あつた。

私は思い切つて最初からぎつくばらんに口をきつた。

「御察しの通りですよ。奥さんを頂きに上りました」と云つて、名刺を出した。彼はそれをちらりと見て、

「僕は始めから名乗りを上げて交渉していたんですが、東山さんが取り合つて下さらないからこんな事になつちやつたんです。浚つたというと穏やかではありませんし、場合によつては僕は犯罪人になるかも知れませんが、いまは一刻を争う時なので、やむを得ず荒療治をやつたんですが、別段強請がましい事を云つた覚えもなし、探偵の方までお頼みになるほどの必要はないのじゃないかと思ひますがね」

そこで私は自分と東山との關係を説明し、彼が私へ特に依頼した理由は世間へ知らさないということが第一で、万事穩に事を運ぶためであることを説明し、従つてはこのまま素直に夫人を返すならば、東山は好んで表沙汰にするような考えは毛頭持つていないからその点は安心されたがよかろうと云うと、

「東山さんの御好意は感謝いたしますが、御返しすることだけは、もう少時待つて頂きたいんです。結局はお返しすることにはなりますが——」

「それが困るんです。つまり東山さんのほうは世間の口へのぼることを極度に怖れているんです。今のうちなら誰にも知らさず、また誰にも疵がつかずにすむ。が、

これが長びくと自然世間へもれる、親類もうるさい、そうなると穏やかにとばかりは云つていられないから、徹底的にやらなければならぬ。警察の手で取り返すよ
うな事になれば、そこに自然罪人も出ようというもの、事を荒立てるのを好まない
東山さんとしてはそれは死ぬよりも辛いから、そこをよく理解して頂きたいと申さ
れるんですよ」

彼は、云いようのない悲痛な面持ちをして、じいと腕を組んで考え込んでいる。
「いかがでしょうかね」と私は彼の答えをうながした。

青年は石のようにだまりこくつている。

「お返しになった方が、あなたのためですよ」

すると、彼は居すまいを直し、きつとなつて、

「あなたから御らんになつたら、さぞ勝手な奴とお思ひになるでしょうし、また人
の夫人を浚うなんて非常識な大馬鹿者に思われるでしょうが、これには一つの物語
があるのです。どうぞお聞きになつて下さい。いや、その前に、美耶子さんが無事
であることを御目にかけて、御安心を願わなければなりませんでしたね」

「是非お目にかかせて下さい」

「ではどうぞ僕と一緒にいらして下さい。お会いになつて失望なさるといけないか
ら、あらかじめ申上げておきますが、彼女はもう自分自身を失っています。時には

魂の戻ることもあるのですが——、彼女は自分を東山夫人とも、美耶子とも思っていないんです」

「と、仰しやると?」

「あのひとは夢を見ています。自分をほんとの椿姫だと思い込んで——」
「椿姫ですって?」と私は呆れて彼の顔を見た。

青年は痛ましそうな表情をして、

「夢の世界にすることが、彼女にとつては最上の幸福なのですよ。和製椿姫などとうたわれた頃から、和製なんかと云われるのはいやだ、私はほんとの椿姫になりたいと云っていましたもの。それが病気になって、気が狂うと同時に、小説の中の人になってしまったらしいんですね、それはあのひとの長い間のあこがれだったんでしよう、その理想を実現しているいま、美耶子さんにとつてこれ以上のいい生活はないんです。実に無上の幸福に浸っている、そこなんです、僕がもうしばらくお連れ戻しになることを裕予して下さいと申上げたのは——。また冷めたい現実の世界に引き戻すのは可哀想です。どこまでも夢を見させて、夢のまんまでこの世を終らせて上げたい」

と云って青年は眼を拭い、

「いまの東山さんはもう美耶子さんにあきてしまっているんです。ただ世間体をつ

くろう事にばかりに狂奔しているだけです。彼女の心なんかを思いやっているのではないんですからね、そんな冷めたい人の手に返すなんて——」

私は青年の後ろに従いて、奥の部屋へ入った。入口には厚い天鷲絨のカーテンが下りていて、その隙間から見える部屋の中は実に眼の覚めるように美しかった。生花に囲まれたベッドの前には純白のレースの帳が半分ばかりしぼってあって、彼女の疲れた顔に直接光線があたらないように工夫してあった。小さい部屋ではあるが、それは善美をつくしたもので、美耶子はレースの覆いのかかった羽根枕に満足そうな横顔をつけていた。

青年の足音に、ぽっかり眼を開けた彼女は、彼の方へ向いて両手をひろげた。彼は走りよって膝まずき、その細い手をとって唇を押しあてた。

彼女は赤い羽根蒲団を押しやっつて半身を起しかけた、がまた崩れるように横になった。彼女の着物は美事に刺繍のある水色のガウンであった。胸には一輪の椿の花をさしていた。ベッドの裾の方に控えていた小女が走りよって、恐る恐る蒲団をかけた。彼は小女の事を美耶子附きの侍女であると云った。その侍女も古風な洋服を着て、取りすましていた。

「この部屋の中では二六時中椿姫の劇が演じられています。僕も一役をかつているんですが——」と真面目臭って云った。

浮世離れたこの一室は美耶子のあこがれの世界なのであろうか。彼女ばかりでなく、青年まで、いや侍女までが何となく精神病者でもあるような気がする、その空気全体が狂っているような感じで、私までいつかだんだんと引き込まれそうな気がしたので、いそいで部屋を飛び出してしまった。

3

応接室に戻ってほっとしていると、後を追って来た青年は私と差向いの椅子に腰かけて、静かに語り出した。

「話は二十年前に溯らなければなりません。みよりというものない美耶子は生きるために夜の女になったのです。それよりほかに道がなかった。毎夜往来に出て客を拾うのですが、ある雪の降る寒い晩、生憎と一人の客も掴まらない、恰度その頃彼女は誰の子とも分らない嬰兒を生んだばかりで、勿論嬰兒はそのまま産院に預けてしまったが、彼女はその夜一文の収入もないのと、無暗と乳の張るのに苦しまなければならなかったのです。

夜は段々に更けて来る。雪はますます降りしきる。もう商売も駄目だと見きりをつけて、帰ろうとする時、ふと行手の往来に人影を認めました。背の低い、一寸法師かと思われるような男がマントを着てとほとほと歩いて行くのです。こうなれば一寸法師であろうと、なんであろうと、男でありさえすりやいい。

彼女は追い縋って、うしろから声をかけました。

『ちよいと、雪の降るのにどこへ行くのよ、家へ来ない？ 温い紅茶を上げる、ウイスキーもあるわよ、遊んでいらっしやい、ねえ？』と云って、肩へ手をかけ、顔を覗き込んで、思わずあつと後退りました。

それはなんと十ばかりの少年でした。

寒さと飢えとで震えているその少年を彼女は自分のアパートに連れて帰りました。そこまではよかったです、さて、彼に与えるものは何もなかったのです。紅茶もウイスキーも口から出まかせの言葉だったので、ガス口に十銭銀貨をいれてお湯をわかして飲むだけだったのです。

二人は熱いお湯を呑み合いました。そして寒いので蒲団にもぐって抱き合っていました。その時ふと思いついて、

『私、苦しくってたまらないのよ。あんた私のお乳のんでくれない？』と云って、胸をはだけました。三日も飲まず食わずでさまよっていた彼は夢中で乳房を吸いま

した。彼女は楽々として眠りにつき、少年も久しぶりで満腹したのでいい気持ちになつて、ぐっすり眠りました。

彼はその夜から彼女のところに厄介になりました。陽が暮れると彼女は稼ぎに出る、帰る時にはきつと札を握っていました。その金で二人は食物を買つて暮したのです。

恰度十日目の晩でした。何んだか今日はお金がたんまり儲かりそうな気がする、お土産を沢山買つて来るから待つておいでよと云つて、いそいそと出かけて行きましたが、それぎり彼女は帰つて来ませんでした。その翌晩も、次ぎの晩も、少年はまたぞろ飢え始めたのです。

後でわかつた事ですが、折り悪しく闇の女の狩り込みに引つかかつて、病院へ送られてしまったのでした。

それは少年の十一の時のことだったのです。

病院から彼女の友達が金を届けに来てくれた時には、彼はもうアパートにはいませんでした。

それぎり彼と彼女とは別れ別れになつてしまいました。

数年後、和製椿姫の名で有名になつてゐる彼女を彼はかいまみました。一度は歌舞伎座の入口で、それはプリンスのような素晴らしさでした。もう一度は菅原好

美の歌劇椿姫を観に行った時彼は彼女を見ましたが、いつも金持ちらしい数人の紳士に取り巻かれていて、遠くの方から眺めるだけで、言葉をかけることは勿論、近づく事も出来ません。しかし彼は何とかして会いたい、会ってアパートでの好意を謝したいものと思っていました。どうにも機会がありませんでした。

彼女の隆盛はながかったが、やがて、東山春光第二夫人として家庭の人に納まったという噂を耳にして、彼は失望しました。椿姫であるうちならばともかく、家庭の奥深く入ってしまったわけては、めぐりあう機会は絶対にありますまい。そうして彼が一生涯忘れようとしても忘れられないアパートの十日間の恩をついに返すことも出来ないで終わらなければならないのです。それを思うと彼は腸を断つようでした。

一年は夢の間に過ぎ、翌年、それこそほんとに思いがけず、ある舞踊発表会の廊下ですれ違いました。この偶然のそれこそ天が与えた好機を逃がしてはと、勇気をふるって彼女の前に出ました。二人は手を取り合って喜んだのですが、その時彼女は悲しそうにいまの生活の大変不幸であることを打ち開けて、何とかして救ってくれと泣いて頼みました。

その頃から病は彼女の肉体を侵し始めていたらしいのですが、病床に倒れるまで東山は、一度も医者にかけなかったといひます。

病室を茶席に移してからの彼女の生活は世にも悲惨なものでした。体のいいそれ

は座敷牢でしたから。

いく度も彼女は逃亡を企てたかわかりません。そのうち次第に体の自由を失い、病気は本格的に肉体をむしばみ始めたので、どうにもなりませんでした。

思いあまつた彼女からの訴え手紙を貰ったのはその頃の事だったので。

彼は意を決して彼女を奪ったのです。その結果がどういう事になるかなどと考えてはいらなかった。余命いくばくもないと聞いたので――。せめて僅かの間でも、彼女を心から喜ばせ、満足させて死なせたい、ただそれだけだったのです」

と云い終つて、彼は大息を吐き、

「どうぞ、彼女を喜びのうちに息を引き取らせてやつては下さるまいか？」と面を反向けた。

私はそれでも連れ帰るとは云えなかった。全責任を負うから、彼女が小康を得るまで待つてくれと東山に頼んだ、美耶子はいま動かせないほどの重体であるからと云つて、無理やりに納得させてしまった。

東山は親類中へ彼女を入院させたと云いふらした。

私は青年の言葉を信じて、彼からの便りを待つていた。

半月ばかり過ぎたある小雨の降る日、私は彼から迎いの車を貰った。

「御約束通り、お返し申し上げます」と、彼は玄関に私を迎えると、いきなり口

をきつて彼女の部屋へ案内した。

見覚えのある美しい部屋へ一歩入ると、私はそのベッドに白い布を顔にかけた彼女を見た。

「今朝、八時に息を引きとりました」と彼は頭を下げた。

私は白い布を脱つてその顔を見た。安らかに、まるで眠つてでもいるような美しい顔に、微笑が浮んでいるのを見て、何だか胸が一杯になった。

彼女の胸には相も変わらず、椿の花が一輪さしてあった。私は病院から連れ戻ったかたちにして、亡軀を東山家に運んだのだった。

最初の印象

江戸川先生に始めてお目にかかったのはもう二十年近くも前のことです。

池袋のお宅のお座敷で、先生をお待ちする間、私の心は好奇心と不安が交錯していました。

と、いうのは、その頃。

「江戸川乱歩先生のお書斎にはドクロがつるしてある。お化けの人形がぶら下っている、その無気味な雰囲気の中で、先生は深夜人の寝鎮るのを待つて、蠟燭の灯で仕事をされる」等々の記事が雑誌に掲載されたり、人の噂にのぼっていたからです。

とにかく先生は普通の方ではない、だからああいう小説がお書けになるのだとは思っていました。が、それにまた異常な魅力を感じ、いつも驚異な眼で御作を拝見していたのです。エキセントリックな方だ、とは思っていました。作品全体に漂う、幻想、怪奇、猟奇から考えても、そういう御生活をしていられるのは当然なこと、これは事実だろうと思っていました。

それから大変気難しい方だとも聞いていました。私は怖れをなして一度尻込みしてお目にかかりたいという希望を捨てようかと思つたのです。

「そんなに心配することはありません。とても親切な方ですよ。僕は原稿を持つて行つては、教えて頂いているんですが——」

これはたった一人の先生のお弟子だと自称していたある青年が、私の心をはげま

してくれた言葉でした。

そういういろいろなことを、頭に浮べながら、軽卒にお訪ねしたことを、半分後悔しながら、ぼんやりとお庭を眺めていました。

ところが、お座敷に姿をお見せ下さった先生は、ゴシップや想像を裏切つて、気軽な明るい、いかにも社交的な朗らかな方なのにまずびっくりしてしまいました。

いい加減の噂はするものではない、また噂を信ずるものではない、と、つくづく思ったことでした。お目にかかった瞬間に私の不安は一っぺんに吹き飛んでしまいました。あの青年の云つた言葉がほんとだったのです。

そのことを後で青年に話したら、青年得意になつて、

「先生にはいろんな面があるから一口にこういふ方だと、云いきることは出来ませんよ。僕は一度浅草にお伴をした時、公園の砂利の上に座つて乞食の真似をされた。その時なんざ絶対にも明るい社交的な方とは見えませんでしたからね」

その後、いく度もお目にかかつてから、この青年のあとの話は、嘘だつたなど思いました。何んでも優れた方は常人でなく、変つた方にして、置きたいものなのでしょう。

しかし、彼の言葉をほんとはすれば、先生にはいろいろな面がありだそうですから、お書齋での御生活はあるいはあの円満な社交とはきり離されておられるのか

も知れませんが。それは外部のものの覗うことの出来ぬものでしょう。それからもつと、もつと面白い面も持つていらつしやるのかも知れません。

先生を心から尊敬しほんとうに御親切な方だと思つたのは終戦後です。私はお金をつかい果して困つた揚句、突然先生のところへ伺つて本の出版についてお願いしたのです。時期がおそい、もう少し早かつたら何んとかして上げられたのに、とおつしやいました。私はがっかりして帰ると二三日過ぎてから、先生の御頼みである書店の主人が訪ねてくれました。私は救われたのです。時期を失してしまつた私の出版について、先生がどんなにお骨折り下さつたかはその書店の主人の口ぶりでも想像がつきました。

印税も一度に渡してしまふと直ぐ使つてしまふから、毎月割つて渡してやつてくれとお言葉添えがあつたそうです。そこまで考えて下さる御親切な方があるものか、とつくづく思いました、そして私はこの時この御親切は一生忘れまいと心に誓つたことでした。

蘭郁二郎氏の処女作

「探偵文学」誌上で発表された時、非常な好評を博した蘭郁二郎氏の「夢鬼」がこの度上梓された。私は早速また繰返して読んだ。いくたび読んでも面白い。

妖魔の如き美少女葉子と、醜い憂鬱な少年黒吉との曲馬団の楽屋裏における生立ちから始まり、幼い二人はいつか互に愛しあうようになる。葉子にとっては戯れのようなこの恋も、黒吉にとっては実に命がけのものであったが、やがて移り気な彼女に捨てられる。恋に破れた彼は彼女を遂に殺し、その死体を抱いて飛行機から飛降り心中をするという終端まで一気に読んでしまった。そしてその後もなお妖しき興奮はなかなか冷めなかつた。黒吉少年が最も得意とするブランコからブランコに飛びうつる曲芸がある、その空を切つて懸命に影を描き得られたのではあるまいか。この点だけでも心靈学に造詣ふかい方だと想像される。「夢鬼」以下五つの短篇を添えてあるが、何れも興味ふかく読んだ。「歪んだ夢」もやはり心靈小説のような気がした。この五篇の中では「魔像」が一番面白かつた。

アンケート

ハガキ回答

I ☆読者、作家志望者に読ませたき本、一、二冊を御挙げて下さい。

II ☆最近の興味ある新聞三面記事中、どんな事件を興味深く思われましたか？

三

四

I フィルポツツの「赤毛のレドメイン一家」を井上良夫様の御訳で拝見して感動いたしました。バルナビー・ロスの「Yの悲劇」

II この春頃の新聞にあった「国際婦女誘拐魔」の記事を面白いと思いました。

(『ぶろふいる』第三卷第一二号、一九三五年一二月)

昭和十一年度の探偵文壇に

一、貴下が最も望まれる事

二、貴下が最も囑望される新人の名

七

八

(一) 探偵もの全盛を望む。

(二) 木々高太郎先生。

(『探偵文学』第一卷第一〇号、一九三六年一月)

お問合せ

一、シユピオ直木賞記念号の読後感

二、最近お読みになりました小説一篇につきての御感想

三

一、あまりにも複雑な感情で一杯でしたので、おハガキでお答えするほど簡単な気持にはなれません。

二、最近知ったある婦人から、嘗つてその人が満洲で馬賊を働いていた時の話を聞きました。それがいかにもグロテスクで怪奇味があり興味があつたので、急にもう一度支那小説を読んでみたくなり、支那文学大観の聊齋志異などをくりかえしてみて大変に面白く思いました。

後註

- 一 ここから38字詰め
- 二 ここから罫囲み
- 三 ここです罫囲み終わり
- 四 ここです字詰め終わり
- 五 ここから19字詰め
- 六 ここから罫囲み
- 七 ここです罫囲み終わり
- 八 ここです字詰め終わり
- 九 ここから27字詰め
- 一〇 ここから罫囲み

- 一一 ここでは罫囲み終わり
- 一二 ここでは字詰め終わり

今年の抱負

元旦の朝はその一年というものが非常に長いように思われる。三百六十五日あるのだから長いのはあたりまえだが、その一日を無駄なく、大切に暮らしたら相当何か出来るはずなのだ。

今年こそは大いに勉強して、自信のある作品とまではゆかなくとも、せめて、恥しくない、顔の赤くならないものを書きたい。

私は来る年毎に必ずそれを考えるのだが、まだ一度だって実行出来たためしがない。最初の意気込みが、二月、三月、ともなればそろそろ引込みかけ、四月頃にはすっかりしぼんでしまい、六月の声をきくともう半分は自暴自棄になって、また来年のことだ、と、あとの下半期は無茶苦茶に過してしまうのが常だったが、いつまで、そんなたわけたことを云ってはいられなくなつた。

×

私はまたこんな風に考える事もある。

お金があつて、生活の心配のない人は羨しい、さぞいいものが続々と書けるだろう、静かない書齋があつて、家人にわずらわされることになかったら、心のままに書けるのではないか、落ちつくことの出来ない、雑居のようなこのざわざわした

日常生活の中で、何が出来るだろう、出来ないのがあたりまえではないか、と、それは自分への弁解なのだが――。結局はなまけものだから、道具だてばかりにこだわっているのだ。何もかも理想的に揃ったら、私はこんどは何と云うのだろう。

×

ところが、最近になって、自分の考えの、間違っていたことをつくづく悟った。芸術と取っ組んで、その中に浸り切っていてこそそこに静けさもあり、心の落ちつきもあるはずなのだ。あたりの騒々しさにわずらわされているうちはまだまだ駄目だ。住居とか、食事とか、日常生活に文句を云っているようじゃいけない。それ等は単に生きて行くのに必要なだけのこととして、一切の贅沢は捨てて、すべてを犠牲にすることだ。私などの力で急に豊かになれるわけでもないのだから、貧しい中に仕事をするという、喜びをもたなくてはならない。

×

それで、一つの物を書くとしても、今年は身体をはって、体当りでやって行きた

いと思っっている。虚飾やヴェールにかくれていい加減にお茶を濁しておくような真似をしないで、裸になって真正直に打つかつてゆく、それがいいかわるいかは分らないが、思ったことをとにかく実行してみたい。たとえそれが失敗に終わっても悔ないつもりである。そこに今までわからなかった何物かを掴み得るのではないかとも思うからである。

今まで、自分で創作したものばかりを書いていて、自分を出したことのない私にとって、裸になって物を書くということは困難かも知れない。そして、出来上ったものは失敗であるかも知れない。自分ではいいつもりでいても、実際には馬鹿げた努力なのかも知れないのだから、出来たものが永久に匣底の奥深く秘められるのを覚悟の上でやらなければならぬが、とにかく、今年の一つ自分自身に満足するよきな作品を書きたいと思う。

×

これが年頭に考えた私の今年の抱負である。

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)
で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。